

第Ⅳ章 遺物

1 木簡

木簡は、6ABR区・6ACC区で、総計2032点（うち削屑1448点）出土した。木簡が出土した遺構は、西楼SB18500の柱抜取穴、西辺の溝5条（SD3825A・SD3825B・SD3825C、SD12965、SD18220）、西辺の土坑SK3833、池SG8190南岸堆積土、園池南堤SX18255A、および整地土（南面築地回廊SC7820下層の遷都当初の整地土と佐紀池南岸・西面築地回廊SC13400西辺の整地土下層茶褐色木屑層・炭層）である。

これらの木簡に共通する点は、第1に、衛府にかかわる木簡が多く含まれることであり、第2に、米・塩を中心とした荷札木簡が多く、いずれも第一次大極殿院地区の造営や解体などとの関連を推測させることである。木簡の年代は概ね奈良時代前半から半ばまでで、奈良時代末以降平安時代に属する紀年木簡は認められない。

以下、遺構ごとに出土状況と木簡個別の内容や所見を記す。これらの木簡は、『平城宮発掘調査出土木簡概報』（4）（10）（19）（36）（37）で略報告したものを含み、巻末にまとめて掲載する積文には、上記の略報告の読みを改めたものもある。さらに、第一次大極殿院地区および中央区朝堂院地区から出土した木簡4764点（うち削屑3299点）のうち、釈読可能な木簡1617点（うち削屑819点）は、『平城宮木簡七』に収録し正報告しているため、ここでは出土木簡のすべては取り上げず、記載内容の注目されるものや遺構の理解に必要なものを選んで報告する。なお、

表3 今回報告する木簡の次数別・遺構別出土点数

（ ）は削屑（内数）

大地区	出土遺構	調査次数	出土点数	本書報告点数
6ABR	第一次大極殿院整地土	337	14 (0)	6 (0)
6ABR	SB18500	337	1415 (1247)	61 (36)
6ACC	SG8190 南岸堆積土	92	37 (6)	14 (2)
6ACC	SX18255A	316	1 (1)	0 (0)
6ACC	第一次大極殿院西辺整地土 下層木屑層・炭層	177・316	271 (63)	27 (3)
6ACC	SD3825A	28・92・315・316	46 (10)	12 (0)
6ACC	SD3825B	315	95 (68)	10 (0)
6ACC	SD3825C	28・315・316	56 (21)	9 (1)
6ACC	SD3825B・C	28	36 (3)	7 (0)
6ACC	SD3825 不明	28・315	31 (25)	1 (0)
6ACC	SD12965	177・316	11 (0)	6 (0)
6ACC	SD18220	315	5 (4)	1 (0)
6ACC	SK3833	28	2 (0)	0 (0)
6ACC	出土遺構不明 (Z)	28・315	12 (0)	0 (0)
総 計			2032 (1448)	154 (42)

SK3833とSX18255Aとから出土した木簡は、出土点数も少なく、後者のものは積読できないため報告していない。以下、積文を掲げた154点（うち削屑42点）の木簡には、本書における通し番号を付した。その他の木簡の引用は、『平城宮木簡一』～『同七』の木簡番号で示し、正報告未刊行のものは、『平城木簡概報』（40）10頁上、『飛鳥藤原木簡概報』（22）10頁下の如く示したが、一部、奈文研『評制下荷札木簡集成』（2006年。以下、『荷札集成』）所収の最新の積文に拠ったものもある。

A 整地土出土の木簡（図版58）

第一次大極殿院南面築地回廊SC7820下層の遷都当初の整地土からは、木簡14点が出土した。いずれも腐食が著しい。木簡の年紀は、大宝3年（703）から和銅3年（710）3月までで、まさに平城遷都の月の荷札が含まれる点で、きわめて注目される。出土した木簡は、荷札ないし付札とそれらの断片と考えられるものが大半で、削屑は出土していない。墨書は、表記上も字形も、ともに古相を呈するのが特徴である。いずれも、平城宮造営のごく初期の段階に廃棄されたのであろう。

官人の履歴書

木簡1 上端・左右両辺削り、下端折れ。ヒノキ¹⁾*・板目。官人の履歴書風の文書木簡。干支と年号を併記する。「癸卯年」は大宝3年（703）、「丁未年」は慶雲4年（707）にあたる。「孝服」は父母の喪に服すること。職事官が父母の喪に遭った場合解官し、夫・祖父母・養父母・外祖父母の喪には休暇を給わる規定がある（仮寧令職事官条）。

和銅3年の荷札

木簡2 四周削り。ヒノキ科・柎目。伊勢国の白米の荷札であろう。「伊勢国安農郡阿刀里」は、『和名抄』の伊勢国安濃郡跡部郷にあたる。月は残画から「三」と判断したが、五の可能性も残る。和銅3年（710）3月は平城遷都がおこなわれた月であり（『続日本紀』同月辛酉条）、この月の年紀をもつ荷札木簡が第一次大極殿院南面築地回廊下の整地土下層から出土したことは、この段階には、少なくとも南面築地回廊が未完成であったことを示す。6ABE区（平城第91次調査）の内裏西南隅外郭でおこなわれた発掘調査において、平城宮造営当初の整地土から和銅2年（709）・同3年（710）を中心とする一括資料が出土したこととともに、宮の中核部分における造営状況がうかがわれる資料といえる（--三〇六--三〇八）。なお、西楼SB18500のハ六・ロ六・ニ四柱抜取穴から出土した**木簡94・木簡95・木簡100**は、里表記を用いるなど古相を呈し、整地土に由来する遺物の可能性は否定できない。伊勢国安濃郡の荷札が集中する点も注目される（--二七・木簡100）。

木簡3 上端・右辺削り、下端折れ、左辺二次的削りか。ヒノキ*・板目。参河国の荷札の断片であろう。

木簡4 上端・左右両辺削り、下端折れ。ヒノキ科・板目。遠江国の荷札の断片。「長田上郡」は、『和名抄』の遠江国長上郡にあたる。「長田上郡」の表記は、国・郡・里など行政地名の表記に嘉字を用いるよう命じた和銅6年（713）5月制²⁾以前のものである。長上郡は、和銅2年（709）2月に長田郡を上下二郡に分割して成立したので（『続日本紀』同月丁未条）、この木簡の年代は、和銅2年から和銅6年までに限定できる。『和名抄』によると、遠江国長下郡には、大（太）田郷・大楊郷がみえるものの、長上郡には該当する郷は認められず不詳。

木簡5 上端・左右両辺削り、下端折れ。ヒノキ科・板目。駿河国の荷札の断片。「五百原」

は、『和名抄』の駿河国廬原郡、ないし同国同郡廬原郷にあたるか。量目からみて米の荷札であろうが、駿河国の米の荷札は類例がない。

木簡6 四周削り。ヒノキ科・板目。某国大井里の米の荷札。「大井里」は、共伴する木簡から推定される整地土の年代から、郷里制下のコザトではなく里制下のものと考えられる。『和名抄』によると、「大井郷」は、駿河国廬原郡・富士郡、甲斐国巨麻郡、武蔵国久良郡・児玉郡、安房国安房郡、下総国相馬郡、常陸国那賀郡、近江国浅井郡、美濃国可兒郡、信濃国筑摩郡・佐久郡、下野国那須郡、陸奥国江刺郡、出羽国平鹿郡、美作国久米郡・真嶋郡、備中国賀夜郡、伊豫国濃満郡の15箇国19郡にみえる。さらに同書に掲載される郡のほか、隠岐国智夫郡大井郷の荷札（『平城木簡概報』(16) 7頁下）が出土していることから、都合16箇国20郡に確認でき、国郡名の比定は困難といわざるを得ない。ただし、米の荷札であることからすれば、近江国・美濃国・備前（美作）国・備中国のいずれかの可能性が高いといえる。一方、上記の20郡のうち、現存する古代史料から復原される委（倭）文部の分布と重なる郡は、『万葉集』にみえる常陸国那賀郡（巻20-4372番歌）のみであり、それにあたるとも理解される。しかし、常陸国那賀郡の荷札は、確実な例として6AAB区（平城第13次調査）で検出したSK820と、6AAF区（平城第22次調査南）で検出したSD3154から出土した「若海藻」（『平城木簡概報』(38) 23頁上・四〇二、二七四〇）、6ALS区（平城第39次調査）で検出したSD5100から出土した天平宝字4年（760）正月20日の年紀をもつ「養錢六百元」（E07a）のほか、二条大路濠状遺構（南）SD5100（平城第200次調査）から出土した「茜十斤」（『平城木簡概報』(22) 33頁上）が知られるのみであり、常陸国の米の荷札と理解するには問題も多い。

委 文 部

B SG8190南岸・大極殿院西辺整地土下層木屑層・炭層出土の木簡

（図版59～64）

佐紀池SG8190の南岸からは、木簡37点（うち削屑6点）が出土した。SG8190は、遷都当初には谷筋の自然流路の状態、I-2期の大極殿院改作の過程で大規模な改変をうけ、池として造成されたと理解されている。木簡は、SG8190の造成過程で南岸に投棄されたものと推測される。紀年木簡は出土していないものの、里制下の木簡である播磨国赤穂郡周勢里の荷札（木簡15）や、藤原郡と記した木簡（木簡16）など奈良時代初頭の様相が認められる。SG8190の造営時期の上限は、備前国藤原郡が置かれる養老5年（721）4月であり、その造営は、概ね、養老末年から神亀初年までの時期をさほど降らないと推測される。

SG8190の南方では、3時期の整地土を検出している。そのうち、2時期めの整地土下層には厚い木屑層・炭層が堆積しており、ここから木簡271点（うち削屑63点）が出土した。この木屑層・炭層は、平城第177次調査区の北から南にかけて堆積するほか、隣接する平城第316次調査区でも確認している。出土遺物は、和銅4年（711）4月から養老6年（722）までの紀年木簡、平城宮土器Ⅱに編年される土器、6313A型式の軒丸瓦などであり、他に新しい遺物を含まないことから、この整地の時期は、養老6年をさほど降らないと推測される。

木簡7 上端・左辺削り、下端折れ、右辺割れ。スギ*・板目。木簡の右側約3分の1を欠く。「御府」が発信した上申文書の断片であろうか。ただし自ら「御」を付すのは不審であり、あるいは宛所としての「御府に」の可能性もあるか。以下、木簡20までは、いずれも第92次調

御 府

査SG8190南岸出土の木簡。

膳部所

木簡8 上端・左辺削り、下端折れ、右辺割れ。ヒノキ科・板目。従七位下の位階をもつ官人の自署のある文書木簡を、天地逆に二次的に転用したものか。位階に続く文字は「守佑」の可能性はあるが、残画から確定できない。神亀5年(728)7月21日勅によると、膳部所は斎宮寮被管であり、長官1人(従六位官)、判官1人(正八位官)、主典1人(大初位官)が置かれた(狩野文庫本『類聚三代格』巻4、廃置諸司事所収)。また『延喜齋宮式』によると、「膳部所」は、酒部所・水部所とともに野宮別当の下に置かれた所であり、斎王の食膳を担った(年料供物条)。養老5年(721)9月11日、斎王井上女王が北池辺新造宮に遷り潔斎をはじめており(「官曹事類」逸文、『政事要略』巻24、年中行事9月11日奉幣伊勢太神宮事所引)、この史料の引く「神祇記文」によると「膳部四人」が認められる。あるいはこれと関連する可能性がある。

木簡9 四周削り。ヒノキ科・板目。宮の夜間の巡検をおこなう兵士の歴名。「長」は、十長ないし五十長のことか。「暁夜行」は、『宮衛令』の「行夜」を指すのであろう(開閉門条)。

木簡10 四周削り。ヒノキ科・板目。常陸国出身の兵士の勤務管理にかかわる木簡。「常陸」は他に比べてやや肉太で墨色も濃く、「那賀郡」以下と筆が異なる可能性もある。「大伴部弟末呂」は、常陸国那賀郡出身の兵衛ないし衛士と推測されるが、出身郡まで明記する理由は不詳。

木簡11 四周削り。四隅の角を削り落とす。ヒノキ科・板目。美作国出身の兵士の勤務管理にかかわる木簡。「坂合部大足」は、美作国出身の兵衛ないし衛士と推測される。

木簡12 上端折れ、下端削り、左右両辺二次的切断。ヒノキ科・柾目。横材。内容不詳の帳簿状木簡の断片。

木簡13 上端は切断の後粗い削り、下端・左右両辺削り。中央で二片に折れる。スギ?・柾目。伊勢国三重郡の黒鯛の荷札。これまで知られる三重郡(評)の荷札は、6AAD区(平城第154次調査)の内裏東大溝SD2700から出土した「三重郡河後郷白米五□」(『平城木簡概報』(17)13頁下)、飛鳥池遺跡南地区(飛鳥藤原第93次調査)から出土した「□□田五十戸飛鳥部身聞」(『飛鳥藤原京木簡一』二四)、酒船石遺跡から出土した「三重評青女五十戸人六人部□中春五斗」(『荷札集成』13号)など米の荷札のみであり、海産物の荷札はこれのみである。

木簡14 上端は調整粗いが削り、下端折れ、左辺削り、右辺割れ、あるいは割りのままか。スギ・柾目。越前国の荷札の断片。「越前国安」は、『和名抄』の越前国足羽郡にあたるか。足羽を「阿須波」と表記する例は知られるが(『平城京木簡一』一四)、「安須波」は、『和名抄』に足羽の訓を示す仮名表記があるのみで、木簡などにはみえない。

木簡15 四周削り。ヒノキ科?・板目。播磨国の里制下の米の荷札か。

木簡16 上端切断、下端折れ、左右両辺削り。ヒノキ科・柾目。備前国の荷札の断片であろう。「藤原郡」は、『和名抄』の備前国和気郡にあたる。藤原郡は、養老5年(721)4月、邑久・赤坂2郡の郷を割いて設置された(『続日本紀』同月丙申条)が、神亀3年(726)11月に藤野郡と改称され(『続日本紀』同月己亥条)、さらに神護景雲3年(769)6月、和気郡と改められた(『続日本紀』同月乙丑条)。したがって、この木簡の年代は、養老5年4月から神亀3年11月までに限定でき、廃棄の年代はそれ以降である。

御竈薪

木簡17 上端・右辺削り、下端折れ、左辺割れ。ヒノキ科・板目。御竈薪にかかわる内容不明木簡の断片。表裏は別筆の可能性が高い。「御竈」は、『延喜式』に散見する。『延喜臨時祭

式』によると、「御竈祭」・「中宮（東宮）御竈祭」が（御竈条・御井御竈条）、『延喜踐祚大嘗祭式』によると、「大嘗御竈祭」が規定され（大殿祭条）、これらに用いられる料物調達の細則は、『延喜民部式』下にみえる（忌火条）。また、『延喜齋宮式』によると「忌火・庭火・御竈・井神祭」のほか「新嘗祭廿八座」に「殿部御竈神一前・大炊竈神一前」がみえる（忌火等祭条・新嘗祭条）。「膳部所」と記す**木簡8**とともに、第一次大極殿院の西北方付近に神祇祭祀にかかわる官司ないしは、これらの供物などの調達にあたる官司が存在した可能性がうかがわれる。

木簡18 削屑。右辺は木簡の原形をとどめるか。

木簡19 削屑。位階と人名を記した木簡の削屑と考えられ、「日」は姓の1字目とみられる。

木簡20 上端刃物により切り込みを入れ折る、下端裏面より刃物によりそぎ落とす、左右両辺削り。ヒノキ科・板目。

木簡21 上端切断、下端二次的切断、左右両辺割れ。ヒノキ科・板目。釜の所在を列記した帳簿様の木簡。「□染司」は、宮内省被管の内染司か。「膳職」は大膳職か。大膳職は、宮内省被管官司で、朝廷の食膳の調理を担った。3行目2文字目は金偏の文字であろう。茶褐色木屑層出土。以下、**木簡46**までは、第177次調査で検出した整地土下層から出土した木簡で、出土層位の土層名を末尾に記す。

膳 職

木簡22 上端・左右両辺削り、下端折れ。ただし右断片の下端は、二次的切断の可能性はある。ヒノキ科・板目。宮城門（外門）の警備にかかわる木簡。「丹比門」は『弘仁式』にみえ、弘仁9年（818）4月の門号改定（『日本紀略』同月庚辰是日条）以後は、『延喜左衛門府式』にみえる達智門（衛門条）に相当することから宮北面東門と考えられるが、平城宮跡ではまだその位置は特定されていない。6AAY区（平城第122次調査）の平城宮南面東門にあたる壬生門東方で検出した二条大路北側溝SD1250から、「内侍高田丹比門出八日多治」と記した門の出入りにかわる木簡が出土しており（『平城木簡概報』（14）9頁上）、藤原宮跡東面大垣地区のSD170（飛鳥藤原第29次調査）からは「多治比山部門」と記した木簡が出土している（『飛鳥藤原木簡概報』（6）6頁下）。茶褐色木屑層出土。

丹 比 門

木簡23 上下両端切断、左辺削り、右辺割れ。ヒノキ科・柾目。忍勝が統率する集団の異動にかかわる木簡。「火」は、『軍防令』によると「凡兵士、十人為一火」とあり（兵士為火条）、兵士の生活・行動上の基本単位である。加えて、慶雲3年（706）2月16日勅によると、「若応役匠丁者、国司預点定匠丁、以十丁為一火」とみえ、役丁の単位でもあった（『類聚三代格』巻17、蠲免事所収）。したがって、「火」は兵士に限定されるものではなく、広く10人単位の集団の呼称と考えられる。この木簡は、忍勝が統率する「火」に属する兵士ないし丁25人のうち、1人が死亡したことを示すと解されるものの、その人数が10の倍数でないのはやや不審である。茶褐色木屑層出土。

木簡24 四周削り。左辺上端の一部を欠く。ヒノキ科・板目。歴名木簡。茶褐色木屑層出土。

木簡25 四周削り。スギ・板目。「五十上」「十上」は、それぞれ50人単位・10人単位の集団の統率者の意で、「列」はその集団を指す。「五十上子人列」は、「五十上」である「子人」が統率する50人の集団であろう。なお、「五十上」は、6ABE区（平城第91次調査）の内裏西南隅外郭整地土下層から出土した木簡（--二五）などにみえる他、「五十長」と記した木簡（『平城木簡概報』（24）6頁上）が、二条大路濠状遺構（北）SD5300（平城第204次調査）から出土している。

茶褐色木屑層出土。

木簡26 削屑。右辺は木簡の原形をとどめる。文書木簡の削屑であろう。茶褐色木屑層出土。

木簡27 上端・左右両辺削り、下端折れ。右辺は切り込みより上を欠く。ヒノキ科・板目。駿河国の荷札の断片。「駿河国廬原郡川名郷」は、『和名抄』の駿河国廬原郡河名郷にあたる。『賦役令』によると、調雑物として挙げられる堅魚製品は、堅魚卅五斤、煮堅魚廿五斤、堅魚煎汁四升であるが（調絹純条）、この木簡にみえる「八斤五両」は大斤で、小斤のおよそ25斤にあたることから、煮堅魚の荷札の断片と考えられ、おそらくは木簡表面の欠損部分末尾に「煮」の文字があったのであろう。「八斤五両」は重量で、その員（数）が「五烈六節」。1斤=16両で約675g。一烈ないし一連は、堅魚を10本束ねたもの。茶褐色木屑層出土。

木簡28 上端二次的切断、下端折れか、左右両辺削り。ヒノキ科・板目。養老2年（718）の年紀をもつ荷札の断片。品目は荒堅魚と推測され、「□郷三津里」は、郷里制下の伊豆国田方郡吉妾郷三津里にあたるか。二条大路濠状遺構（南）SD5100（平城第197次調査）から出土した木簡に、同里の戸主大伴部三国がみえ（『平城木簡概報』（22）25頁）、同一人物であろう。茶褐色木屑層出土。

木簡29 上端・左右両辺削り、下端折れ。ヒノキ属*・板目。美濃国の葉の付札。『延喜典薬寮式』によると、美濃国が進上する62種の薬の中に「麦門冬二斗七升」がみえる（美濃年料雑薬条）。奈良県教育委員会による藤原宮北辺地区の発掘調査でも、「麦門冬三合」と記された6032型式の木簡が出土している（『藤原宮』65号）。茶褐色木屑層出土。

麦門冬

木簡30 上端・左右両辺削り、下端切断。左上、下は切り込みより欠損。スギ・板目。和銅4年（711）4月の年紀をもつ若狭国の塩の荷札。茶褐色木屑層出土。

木簡31 四周削り。左辺は切り込みより上を欠く。スギ・板目。養老6年（722）の年紀をもつ若狭国の塩の荷札。「若狭国遠敷郡佐分郷」は、『和名抄』の若狭国遠敷郡佐文郷にあたる。「式多里」は、郷里制下のコザトで、6AAA区の内裏東大溝SD2700（平城第139次調査）から出土した木簡にもみえる（『平城木簡概報』（16）6頁下）。「五後」は不詳であるが、単位の五尻の意であろうか。炭層出土。

木簡32 上下両端切断の後粗い削り、左右両辺削り。スギ*・板目。但馬国の白米の荷札。「二方郡□斗郷」は、『和名抄』の但馬国二方郡久斗郷にあたるか。表面7文字目は「宮」の可能性はあるが、残画は下の口に相当する部分のみである。茶褐色木屑層出土。

木簡33 上下両端切断の後削り、左右両辺削り。針葉樹*・板目。但馬国の白米の荷札。「但馬国二方郡波太郷」は、『和名抄』の但馬国二方郡八太郷にあたる。炭層出土。なお、木屑層・炭層から、但馬国の白米の荷札が4点出土している（木簡32・木簡33・一六五〇・一六五三）。すべて6032型式で、うち3点は二方郡、1点は出石郡である。

木簡34 上端・左右両辺削り、下端折れ。切り込み部分に紐の痕跡が白く残る。スギ・板目。播磨国の庸米の荷札。「播磨国佐用郡佐用郷江川里」は、『和名抄』の播磨国佐用郡江川郷にあたるか。郷里制下のコザトが郷制下の郷に昇格する事例で、播磨国郡郷名の変遷がうかがわれる事例である。3斗ずつ2人合成の荷札である。茶褐色木屑層出土。

木簡35 上端・左右両辺削り、下端折れ。ヒノキ科・板目。阿波国の贅の荷札。品目は鹿角菜か。1文字目の墨痕は腐食により判然としないが、「阿」の残画とみて矛盾しない。阿波国

の贅木簡の中でも、同じ平城第177次調査区から出土した木簡（-ニホニ）や、長屋王邸の溝状土坑SD4750（平城第193次調査E区）から出土した猪薦纏の木簡（『平城木簡概報』（27）21頁上）と台形状の切り込みの形状がきわめて類似する。茶褐色木屑層出土。

木簡36 上下両端切断の後粗い削り、左右両辺削り。左右両辺の一部欠損。ヒノキ科・板目。讃岐国の白米の荷札。「讃岐国香川郡細郷」は、『和名抄』にみえず不詳。讃岐国香川郡細郷の木簡は、SD12965からも出土している（**木簡90**）。2点の木簡とも「細」はやや不安で、「田」の左に糸偏のごとき墨痕があるが、判然としない。あるいは「田」一文字を記したもので田部郷の意かとも思われる。「生王」はミブ。茶褐色木屑層出土。

木簡37 四周削り。ヒノキ科・板目。供御の耳糸の付札。「耳糸」は、織物の耳を織る時に、経（たていと）として使用する糸。普通、地糸より太い。⁴⁾「耳糸」の確実な類例は木簡には確認できないものの、浜松市・鳥居松遺跡（第5次調査）から、耳の残画で矛盾のない縦画が残る木簡が出土している。⁵⁾茶褐色木屑層出土。

耳 糸

木簡38 四周削り。切り込み部分の表裏両面に紐の痕跡が白く残る。ヒノキ科・柎目。西方を囲う帳の付札。「尋」は長さの単位。1尋は6尺で、約1.8m。茶褐色木屑層出土。

木簡39 四周削り。切り込み部分の表裏両面に紐の痕跡が白く残る。ヒノキ科・柎目。南方を囲う帳の付札。**木簡38**と対になるものでやや横長の区画を囲うための舗設であろう。茶褐色木屑層出土。

木簡40 四周削り。切り込み部分の裏面に紐の痕跡が残る。ヒノキ科・柎目。主水司の布の付札。「主水司」は、宮内省被管官司で供御の水を扱う小司。茶褐色粘質土出土。

木簡41 上端折れ、下端・左右両辺削り。ヒノキ科・柎目。布の割り当てにかかわる帳簿様木簡か。「孫王」は親王の子である二世王をさす。茶褐色木屑層出土。

孫 王

木簡42 四周削り。左辺は切り込みより上を欠く。針葉樹*・板目。薦の付札。「大林」は不詳。地名、人名などの可能性がある。人名とすれば、「秦宿奈万呂薦二枚」（**木簡64**）の類例となろう。茶褐色木屑層出土。

木簡43 四周二次的削り。裏面は割りのまま。ヒノキ科・柎目。文部若万呂の名を記した呪符。「爵」は「剛」の異体字であるが、あるいは「罌」を意図したものかもしれない。茶褐色木屑層出土。

呪 符

木簡44 四周削り。右辺の一部のみ原形を保ち、その他はすべて二次的に削り、馬形に加工したもの。ヒノキ科・板目。表面9文字目は「斗」であろう。養老4年（720）の年紀をもつ。灰褐色木屑層出土。

木簡45 上下両端折れ、左辺削り、右辺割れ。ヒノキ科・柎目。養老5年（721）7月の紀年木簡の断片。茶褐色木屑層出土。

木簡46 削屑。人名の下に年齢と年齢区分を割り書きする歴名様木簡の削屑。茶褐色木屑層出土。

木簡47 上端二次的切断か、下端・左辺削り、右辺は大部分割れであるが、ごく一部原形をとどめる。ヒノキ科・柎目。第316次調査整地土下層木屑層出土。

C SD3825出土の木簡（図版65～71）

SD3825は、第一次大極殿院地区の西辺を南へ流れる基幹排水路で、検出範囲は6ACC区であるが、さらに南へと延びると推定される。木簡は、264点（うち削屑127点）が出土した。SD3825は3時期の変遷があり、内訳は、表4に示したとおりである。また、木簡の出土位置を図52に示した。SD3825出土木簡は、点数がさほど多くないことともかわり、取り立てて内容的なまとまりはみられない。

木簡の時期は、層位的に古い溝A、溝Bが里制下・郷里制下などの木簡を含み、内容的にも

表4 SD3825出土木簡の地区別点数
()は削屑(内数)

次数	小地区	SD3825A	SD3825B	SD3825B・C	SD3825C	SD3825不明	小計
92	DP22	1 (0)					1 (0)
316	NK18	5 (2)			8 (7)		13 (9)
	NJ18	3 (2)			8 (0)		11 (2)
	NJ17				1 (0)		1 (0)
	NI18				7 (3)		7 (3)
	NI17				1 (0)		1 (0)
	NH18	4 (0)			2 (0)		6 (0)
	NG18	3 (1)			11 (1)		14 (2)
315	Z					21 (21)	21 (21)
	LT18		31 (28)		5 (5)	5 (4)	41 (37)
	LS18	1 (0)	23 (16)		3 (0)	2 (0)	29 (16)
	LR18	3 (0)	28 (19)		3 (0)		34 (19)
	LQ18	3 (1)	12 (4)		1 (0)		16 (5)
	LP18		1 (1)				1 (1)
28	FO22	3 (0)		3 (0)			6 (0)
	FN22	4 (0)		3 (0)			7 (0)
	FM22	2 (0)		13 (0)			15 (0)
	FL22	3 (2)		5 (1)			8 (3)
	FK22			2 (0)			2 (0)
	FJ22			1 (0)			1 (0)
	FI22			1 (1)			1 (1)
	FH22	1 (0)					1 (0)
	FG22	1 (0)		4 (0)		2 (0)	7 (0)
	FFZ				6 (5)		6 (5)
	FF22	6 (2)					6 (2)
	FE22			4 (1)		1 (0)	5 (1)
	FD22	1 (0)					1 (0)
	FC22	2 (0)					2 (0)
		46 (10)	95 (68)	36 (3)	56 (21)	31 (25)	264 (127)

古相を呈するが、溝Cから出土した木簡でも、もっとも新しい年紀は天平神護元年(765)4月(木簡76)であり、明らかに奈良時代末に降る木簡は出土していない。この点は、第一次大極殿院東辺の基幹排水路SD3715の出土木簡が、もっとも降るもので宝亀9年(778)の年紀をもつほか、奈良時代後半の考課木簡に特徴的な、「今」や「去」など前年との比較文言をもつものが目立つなど、奈良時代後半の時期のものが卓越する点と比して対照的ともいえる。

木簡48 上端・左右両辺削り、中央部分より下は二次的削り。ヒノキ科・板目。「某御前」に上申する書式の尾張国造宛の文書。表裏同筆とともに習書の可能性が高い。SD3825A出土。

木簡49 上端削り、下端折れ、左右両辺割れ。ヒノキ科・板目。歴名木簡の断片。立丁は、五十戸から2人徴発される仕丁のうち実際に労働に従事する者で、他の1人は薪水を準備する廝丁である。

前白木簡

SD3825 A出土。

木簡50 削屑。上端・左辺は削りの原形をとどめる。左辺上部には切り込みの痕跡が残る。人名を記した木簡の削屑。もと6031・6032・6033のいずれかの型式であろう。SD3825 A出土。

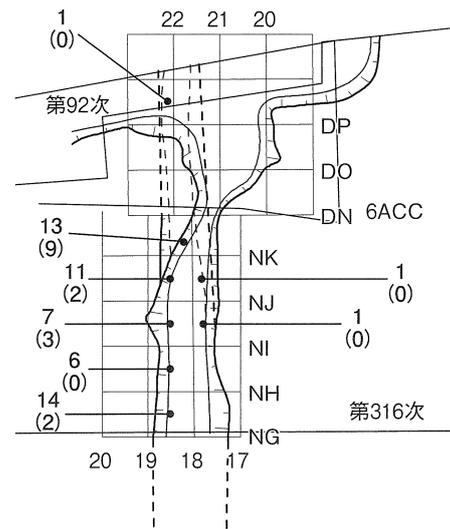
木簡51 上端切断、下端折れ、左右両辺削り。スギ・板目。尾張国の荷札。**木簡52**とともに、里制下のもので、遺構の知見とも矛盾しない。SD3825 A出土。

木簡52 上端・左右両辺削り、下端折れ。ヒノキ科・柾目。美濃国の庸米の荷札。「否間里」は『和名抄』にみえず不詳。字形は「杏問」に近いが、元慶2年(878)に正五位上の神階を授けられた「美濃国正五位下否間神」(『日本三代実録』同年9月16日条)との関係を推測する理解が妥当であろう。SD3825 A出土。

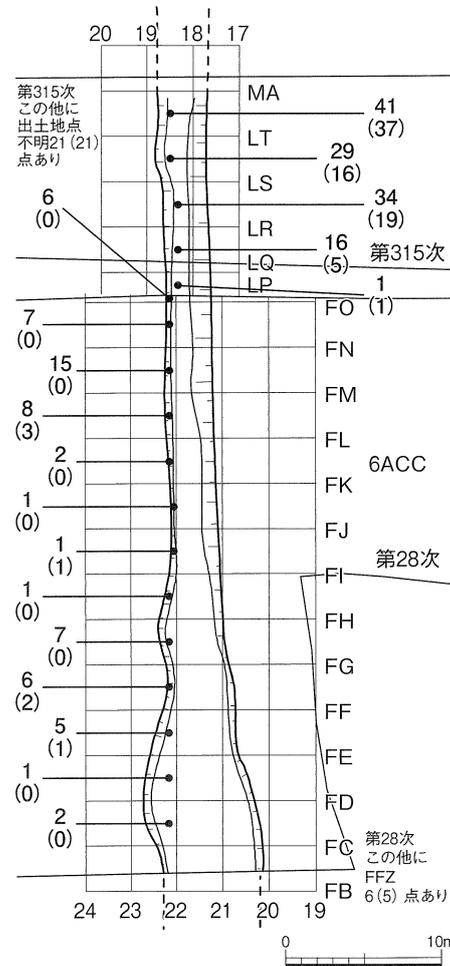
木簡53 上端・左右両辺削り、下端折れ。スギ・柾目。越前国の庸米の荷札。「越前国能登郡翼倚」(里)は、『和名抄』の能登国能登郡与木郷にあたる。「レ」は転倒符(倒置符)で、日本における早い用例の一つである。類例として長屋王邸のSE4770(平城第186次調査)から出土した養老元年(717)12月22日の年紀をもつ木簡(『平城京木簡一』㉙)や、年不詳6月27日の日付をもつ木簡(『平城京木簡一』㉚)に認められるほか、中国や韓国の木簡にも認められる⁸⁾。転倒符の形は、古くは「乙」形であるが、中国南北朝時代頃以降「レ」形が用いられるようになった。なお、『法華義疏』の転倒符も「乙」形である⁹⁾。現在のところ、木簡に記される転倒符はいずれも「レ」形ないし「レ」形で、「乙」形のものはない。SD3825 A出土。

木簡54 四周削り。スギ・板目。越前国の完形の荷札であるが、墨痕の遺存状況が悪い。SD3825 A出土。

木簡55 上端・左右両辺削り、下端折れ。ヒノキ科・柾目。衛府の官名を記した木簡。「大志」は衛府の第四等官。SD3825 A出土。



否 間 里



転 倒 符

図 52 SD3825 出土木簡の分布

- 内舎人** **木簡56** 上端・右辺削り、左辺は割りのままか。スギ・板目。内舎人とのみ記した6051型式の比較的大型の木簡。木簡のつくりも丁寧で、官職のみを記す異例の木簡である。「内舎人」は、中務省に属する舎人で、『養老令』によると、定員は90名である。なお、『延喜齋宮式』によると、伊勢齋宮が卜定後過ぐす宮内の潔齋所である初齋院の職員にも内舎人1名がみえる（別当以下員条）。**木簡8**にみえる「膳部」が、齋王井上女王の北池辺新造宮とかかわるものとするならば、**木簡17**にみえる「御竈」など、神祇祭祀にかかわる木簡が第一次大極殿院西辺の北方、佐紀池南岸付近に散見されることは注目される。あるいは、この木簡の内舎人も初齋院に属するものである可能性があろう。「官書事類」逸文に「北池辺新造宮」（『政事要略』巻24、年中行事9月11日奉幣伊勢太神宮事所引）とみえる平城宮の初齋院相当施設が、この辺りにあり、「北池」は佐紀池を指す可能性を示唆するとも推測される。SD3825A出土。
- 木簡57** 上端・左右両辺削り、下端折れ。ヒノキ科・板目。「弓」と記した木簡。一七六二は、同文同筆の木簡の断片である可能性がある。SD3825A出土。
- 難波津の歌** **木簡58** 上端二次的削り、下端・左右両辺削り。ヒノキ科・板目。難波津の歌を記した木簡。難波津の歌を記した可能性のある出土文字資料は、木簡の他に墨書土器やへら書瓦もあわせると30例余知られる。下の句まで記される事例は珍しく、藤原京跡左京七条一坊西南坪（飛鳥藤原第115次調査。『飛鳥藤原京木簡二』一六三）、兵庫県辻井遺跡¹⁰⁾、富山県東木津遺跡¹¹⁾などから出土したもの数例のみが知られる。表面10文字目は「母」の可能性がある。裏面4文字目の字体は「冊」で「も」とは読めない。「部」の異体字の字体は「ア」の如くである。仮名遣いは、「さこやこのはな」「ふるこもり」など、やや乱れが認められ、表面と裏面は、異筆の可能性もある。SD3825A出土。なお、SD3825Bからも、不完全ながら難波津の歌を記した可能性のある木簡の断片が出土している（一七六七）。
- 木簡59** 上端削り、下端折れ、左右両辺割れ。針葉樹*・板目。「奈」「本」などの文字を記した習書木簡の断片。SD3825A出土。
- 木簡60** 上端削り、下端折れ、左右両辺割れ、下端の一部に二次的切断の痕跡が残る。ヒノキ科・板目。表面1行目は解の一部であるが意味は不詳。以下は習書であろう。『古文孝経』は官人の必読書として重視された書物。裏面1文字目は「不」または「布」の可能性もある。SD3825B出土。
- 木簡61** 上端・左辺削り、下端折れ、右辺の下半は削りか。ヒノキ科・追板目。文書木簡の書き出し部分であろう。SD3825B出土。
- 木簡62** 上端削り、下端折れ、左辺割れ、右辺二次的削り。ヒノキ科・板目。飛驒工と記した木簡の断片。SD3825B出土。
- 木簡63** 四周削り。ヒノキ科・板目。丁寧に整形された材の上部に釘の数量を記す。「飛驒工」（木簡62）とともに造営にかかわるものか。SD3825B出土。
- 木簡64** 上端・左右両辺削り、下端は右端の一部のみ削りで、他は欠損。ヒノキ科・板目。薦の付札。人名+薦の可能性のある木簡は、「大林薦」（木簡42）の例がある。SD3825B出土。
- 木簡65** 上下両端二次的切断、左辺削り、右辺割れか。ヒノキ科・板目。人名を記した木簡の断片。6ABL区（平城第157次調査）で検出した第一次大極殿院東辺の基幹排水路SD3715から出土した「日奉乙麻呂」（一八三三）と同一人物の可能性もある。SD3825B出土。

木簡66 上端・右辺削り、左辺二次的割りか。ヒノキ科・板目。美濃国からの米の荷札か。SD3825B出土。

木簡67 四周削り。左辺の切り込みより上、右辺の下部は一部欠損。ヒノキ科・追柾目。備後国の庸米の荷札。SD3825B出土。

木簡68 上端二次的切断か、下端・左右両辺削り。スギ・柾目。某国「駒椅里」の雑腊の荷札の断片。『和名抄』によると、陸奥国柴田郡に駒橋郷がみえる。遺構の年代観からすれば、郷里制下の荷札である可能性もあり、その場合、駒椅里は郷里制下のコザトとなる。陸奥国の荷札は類例が少ないものの、近年、平城宮跡出土木簡の中に陸奥国の贅の荷札が確認されている(三〇五九)。SD3825B出土。

駒 椅 里

木簡69 上端・左辺削り、右辺割れ。ヒノキ科・板目。米の荷札の断片。SD3825B出土。

木簡70 上端・左右両辺削りか、下端折れ。スギ・板目。「禁弓矢」(不詳)の上申文書の断片か。3文字目は「兵」の可能性もあるが、字体は「矢」。右片はSD3825C灰褐色砂礫層出土、左片はSD12965褐色砂礫層出土である。遺構は異なるがその合流点付近で出土した。

禁 弓 矢

木簡71 上端折れ、下端・左右両辺削り。スギ・板目。僧の歴名木簡。「従」は従者で、これを含めて15名なのであろう。「光道」は、正倉院文書の納櫃本経検定并出入帳のうち天平15年(743)3月23日の文書(『大日本古文書』編年24-171頁)にみえ、あるいは、天平宝字6年(762)光覚知識経奥書(法隆寺蔵衆事分阿毘曇卷九、『寧楽遺文』中-636頁)にみえる光道菩薩と同一人物であろうか。「恵智」は、天平勝宝4年(752)4月9日東大寺廬舎那仏開眼供養供奉僧名帳断片(正倉院文書塵芥文書雑帳第2帖第3葉・第10葉)にみえる同名の僧2名のうち、いずれかと同一人物か。「川口馬長」は他にみえず不詳。SD3825C出土。

僧 の 歴 名

木簡72 上端折れ、下端切断、左辺二次的切断か、右辺は腐食が著しく整形の判定は困難。スギ・板目。役夫の割り振りに用いた木簡か。「大将」は、中衛府・授刀衛(天平宝字8年(764)9月頃から天平神護元年(765)2月まで)・近衛府・外衛府の長官で、中衛大将・授刀大将・近衛大将・外衛大将のいずれか。SD3825C出土。

木簡73 国郡郷名を記した削屑。同一木簡に由来すると思われる削屑が欠損箇所をはさんで復元できる。山背国葛野郡川辺郷であろう。荷札ではなく、官人などの本貫地などを記した木簡の削屑である可能性がある。SD3825C出土。

木簡74 上端・右辺削り、下端折れ、左辺割れ。ヒノキ科・板目。伊豆国の荷札の断片。「伊豆国賀茂郡稲」は、『和名抄』にみえないが、二条大路濠状遺構(南)SD5100(平城第197次調査、同第200次調査)から出土した木簡に稲梓郷が認められる(『平城木簡概報』(22)28頁上、『同』(31)26頁下)。調荒堅魚の荷札であろう。SD3825C出土。

木簡75 四周削り。廃棄の際に二次的に切断されており、下半の左半分は欠損する。スギ・板目。若狭国の塩の荷札。同じ土層(暗黒色粘土)から平城宮土器Ⅳに属する土器が出土していることから、郷制の郷を里と記した可能性がある。ただし、郷里制下の時期に属する同じ若狭国からの塩の荷札の断片(二七五)が出土していることも参考になる。この点を重視するならば、ともに奈良時代前半の荷札で、この木簡は里制下の荷札となる可能性も捨てきれない。その場合、若狭の塩が長期の保管に耐える素材であったことにより、貢納から廃棄までの間に長い時間が経過したと理解することもできる。SD3825C出土。

木簡76 四周削り。左辺は切り込みより下を欠く。スギ・板目。天平神護元年（765）4月の年紀をもつ但馬国の春米の荷札。SD3825でもっとも新しい年代を示す。SD3825C出土。

木簡77 上端・左右両辺削り、下端折れ。ヒノキ科・柾目。讃岐国の庸米の荷札。SD3825C出土。

木簡78 四周削り。上端は山形に整形する。左辺上部にわずかなへこみがみられ、紐の圧痕か。ヒノキ科・板目。フノリの付札。品目名のみのフノリの付札は、平城京左京七条一坊の東一坊大路西側溝SD6400（平城第252次・第253次調査）出土の類例がある（『平城木簡概報』（31）9頁下¹²⁾）。SD3825C出土。

木簡79 上端削り、下端折れ、左辺二次的削り、右辺割れ。ヒノキ科・板目。左衛士府が発した文書木簡の断片。衛士の「相替」のことは、養老5年（721）3月27日の兵部卿阿倍首名奏に「三周相替」（『続日本紀』養老6年（722）2月甲午条）、『延喜兵部省式』に「凡衛士相替、三年為限」（衛士相替条）とみえる。SD3825BまたはC出土。

参河国の
贄の荷札

木簡80 四周削り。ヒノキ科・板目。参河国の贄の荷札。「臚」以下の文字は、同筆にみえるが墨の濃淡が異なり、削りなおした後に書きなおしたものと思われる。類例からすれば、「佐米」の次にはもと「楚」の文字が記されていたと推測でき、削り残りの残画もそれと矛盾しない。『賦役令』によると、「臚」は「雜臚一百斤」（調絹絶条）とあり、アヘツクリと訓む（『和名抄』）。また、『令義解』同条によると、「謂、割乾魚也」とあり、臚物を取り出して干した乾魚で、「腊（キタヒ）」に比べて大型の魚が多い。魚肉を細長く割いて塩干にした楚割とは異なる。参河国の贄は、析嶋・篠嶋・比莫嶋（天平年間（729～749）までに、篠嶋郷に編入されたと解される）の海部集団を書式上の貢納主体とするもので、「月料」として隔月に佐米楚割・鯛楚割などの海産物加工品を納めていた。書式上の貢納主体は三嶋の海部であるが、二条大路濠状遺構出土木簡には析嶋郷・篠嶋郷と記すものが認められる（『平城木簡概報』（22）21頁下、『同』（24）24頁上など）。参河の贄は、特異な貢納の形態とともに、貢納年を記さないことが特徴とされるが、この木簡は、参河国幡豆郡の贄木簡で確実に年を記す唯一の事例であるとともに、「臚」の荷札としても唯一の事例である。年を記すのは、未納分を遡って貢進することと関係するか。また、通常の如く楚割と記したものの実際には臚であったため、木簡の文字を訂正したとも推測できる。SD3825BまたはC出土。

木簡81 上下両端二次的削り、左右両辺削り。上端部の切り込みより上を二次的に整形したものか。もと切り込みがある6033型式の木簡を二次的に整形した可能性もあるが、6033型式としてはやや異形で、下端も二次的整形と考えておく。ヒノキ科・追柾目。阿波国の荷札。阿波国名方郡は、寛平8年（896）9月、名東・名西の二郡に分かたれた（『類聚三代格』巻7、郡司事所収、昌泰元年（898）7月17日太政官符所引寛平8年9月5日太政官符）。名東・名西両郡は、高山寺本・名古屋市立博物館本『和名抄』によると「名西郡・名東郡」、神宮文庫本・大東急記念文庫本『和名抄』によると「名方西郡・名方東郡」とみえるが、諸本に石井郷はみえない。郡の分割にあたり郷名の改変がおこなわれた可能性もある。現在、徳島県名西郡に石井町があり、石井郷はあるいはこの付近に比定できるか。「山部」の右に墨付が認められるが、この荷札にともなうものか、文字か否かも判然としない。SD3825BまたはC出土。

木簡82 上端折れ、下端・左辺削り、右辺割れ。ヒノキ科・板目。養老7年（723）の年紀をもつ荒（籠）堅魚の荷札の断片。SD3825BまたはC出土。

木簡83 上端・右辺削り、左辺は上半は削りで下半を欠く。ヒノキ科・板目。近江国の荷札。「甘作郡雄諸郷」は、『和名抄』にはみえないが、近江国神埼郡雄諸郷にあたる。「甘作」の表記は、6ALS区（平城第43次調査）の平城宮跡東院地区で検出したSD4951から出土した「近江国甘作郡雄諸郷大津里大友行商」（E-1A）、二条大路濠状遺構（南）SD5100（平城第200次調査）から出土した「近江国甘作郡」（『平城木簡概報』（31）28頁上）にみえる。SD3825BまたはC出土。

木簡84 上端は左断片は二次的切断、右断片は二次的削り、下端・左辺削り、右辺二次的削りで一部二次的削り。ヒノキ科・板目。裏面の文字が欠けることからすれば、さらに幅の広い木簡であったらしい。長谷部内親王（泊瀬部皇女）は天武天皇の娘で、霊亀元年（715）正月に四品とみえ（『続日本紀』同月甲午条）、天平9年（737）2月に三品に昇り（『続日本紀』同月戊午条）、天平13年（741）3月没（『続日本紀』同月己酉条）。長谷部内親王にかかわる木簡は、6AAI区（平城第32次補足調査）で検出した平城宮東南隅の南面大垣北を流れるSD4100から、帳内の考選木簡の削屑と思われるものが2点（ME0・ME-）、二条大路濠状遺構（北）SD5300（平城第204次調査）から、性格は不詳であるが「長谷部内親王」と記した削屑が1点（『平城木簡概報』（30）19頁下）出土している。「長谷部内親王所」は、宛先か個人を示す。（内）親王+所と記された木簡の事例として、長岡京跡左京一条三坊六・十一町（左京203次調査）から出土した「酒人内親王所」と書かれたと思われる削屑がある（『長岡京左京出土木簡一』三六～三六、三七）。調査地は、遺跡の立地や木簡の記載内容から、長岡京の造営にともなう物資の陸揚げ地・集積地・加工場と解されており、「酒人内親王所」はここから材木の供給をうけたと理解される¹³⁾。SD3825BまたはC出土。

長谷部
内親王

木簡85 上端折れ、下端・右辺削り、左辺割れか。ヒノキ科・板目。天平勝宝4年（752）12月の年紀をもつ文書木簡の断片。「秦国万呂」は日下の署名であろう。SD3825BまたはC出土。

木簡86 上下両端・左辺削り、右辺割れ。ヒノキ科・板目。紀伊国の白米の荷札の断片。「紀伊国名草郡野里」は、『和名抄』の紀伊国名草郡野応郷にあたる。紀伊国名草郡にかかわる木簡は、藤原宮跡のSD2300（飛鳥藤原第29次調査）から出土した「名草郡」（『飛鳥藤原木簡概報』（6）21頁上）、6AAI区（平城第32次補足調査）で検出した平城宮東南隅の南面大垣北を流れるSD4100から出土した「国名草郡人」（六七九）、長屋王邸の溝状土坑SD4750（平城第193次調査E区）から出土した「名草郡大屋里」（『平城木簡概報』（23）14頁上）、平城京跡左京七条一坊十六坪の東一坊大路西側溝SD6400から出土した「名草郡上神郷戸主」（『平城木簡概報』（31）8頁下）が知られるが、いずれも断片である。SD3825出土、出土層位不明。

D SD12965・SD18220出土の木簡（図版72）

SD3825に注ぐ2条の東西溝から、木簡が出土している。SD12965からは、木簡11点が出土した。紀年木簡は神亀3年（726）10月の1点のみであるが、荷札に古相を呈するものがあり、奈良時代前半の木簡と推測される。SD18220からは、木簡5点（うち削屑4点）が出土した。木簡の時期は不詳。

木簡87 上端・左右両辺削り、下端折れか。ヒノキ科・板目。左弁官のかかわる行事にともなう布製品調達にかかわる木簡の断片。「左弁宣」は、左弁官宣または左大（中・少）弁宣を略したものか。「□」と「今五」は異筆であろう。SD12965出土。

左弁宣

木簡88 四周削り。ヒノキ科・板目。美濃国の酢年魚の荷札。「大野郡美和郷」は、『和名抄』

の美濃国大野郡大神郷にあたる。これまでに知られる美濃国大野郡の荷札は、藤原宮跡大極殿院地区のSD1901A（飛鳥藤原第20次調査）から出土した癸未年（天武12年（683））11月の年紀をもつ白米の荷札（『荷札集成』91号）、6ACU区（平城第133次調査）の平城宮跡南面西門南で検出した二条大路北側溝SD1250から出土した2点の庸米の荷札（ともに『平城木簡概報』（15）29頁上）など8点あり、いずれも庸米と推測される。この木簡に見える「酢年魚」は鮎ずしで、その税目は不詳。SD12965出土。

木簡89 上端・左右両辺削り、下端折れ。ヒノキ科・板目。備後国の2人合成の庸米の荷札の断片か。備後国の荷札で郡名から2行割書するものは珍しい。SD12965出土。

木簡90 上下両端折れ、左右両辺削り。左边上端一部欠。ヒノキ科・板目。讃岐国の荷札の断片。香川郡細郷の荷札は、**木簡36**にもみえる。SD12965出土。

木簡91 上端折れ、下端・左右両辺削り。上端は切り込みより上部を欠き、下端も右を欠く。ヒノキ科・板目。讃岐国の海藻の荷札。税目は不詳。「軍布」が「メ」であることからすれば、「和軍」は「ニギメ」のことであろう。SD12965出土。

木簡92 上下両端二次的切断、左右両辺二次的削りか。ヒノキ科・板目。習書木簡の断片。SD12965出土。

木簡93 上端折れ、下端・左右両辺削り。スギ・板目。習書木簡の断片であろうが出典は不詳。SD18220出土。

E SB18500出土の木簡（図版73～78）

西楼SB18500は、南面築地回廊SC7820に増築した楼閣建物である。その構造は、桁行5間梁行3間の総柱建物で、内側の8基の柱穴は礎石建ち、外側の16基は掘立柱からなる。そのうち、掘立柱は巨大な抜取穴を掘って抜き取られている。木簡は、検出面から0.5～1mの深さで厚さ5～15cm程度のレンズ状に堆積した木屑の堆積に含まれており、イ六とニ五を除く14基の柱抜取穴から出土した。木簡の出土点数は、1415点（うち削屑1247点）で、柱穴ごとの出土点数は、表5に示したとおりである。木簡は、抜取穴を埋める過程で木屑とともに投棄されたものと思われるが、穴ごとの出土点数には大きなばらつきがある。木簡の年紀は、天平19年（747）の題籤、天平勝宝4年（752）の東市司の進上状と淡路国の荷札、天平勝宝5年（753）11月の削屑などがみえる。東楼SB7802（平城第77次調査）の柱抜取穴からも天平勝宝5年の年紀をもつ木簡が出土しており（一四〇）、東西楼の解体年代の上限を示すものと思われる。衛府や宮の警護にかかわるものが目立つもののその内容は多岐にわたり、木簡を作成した官司を具体的に特定することは困難である。

木簡94 上端折れ、下端は削りで切り込みの先端を欠き、左右両辺を丸く面取り状に削る。サワラ*・板目。但馬国の白米の荷札。「三江里」は、『和名抄』の但馬国城崎（崎）郡三江郷にあたるか。柱抜取穴ハ六出土。

木簡95 上端折れか、下端・左右両辺削り。ヒノキ科・板目。尾張国の米の荷札。「栗郡」は、『和名抄』の尾張国葉栗郡にあたるか。但し、『和名抄』の尾張国葉栗郡に漆部郷はみえない。**木簡100**とともに、里制下の木簡で奈良時代初頭の様相を示す。調査時に生じた柱穴の壁の崩落にともなう遺物で、本来整地土に含まれていたものが混入した可能性もある。柱抜取穴口六出土。

木簡96 四周削り。右辺の切り込みより上は欠損。スギ・板目。材はごく薄い。衛門府からの鴨の進上状。「鴨」の字形は「鴨」の如くであるが、鴨を書き誤ったかあるいは文字そのものを誤解していたのであろう。「天平勝宝四月」は、天平勝宝4年(752)4月を書き誤ったものと考えられる。誤記のために廃棄されたものであろうか。柱抜取穴イ五出土。

木簡97 切り込みより上の上部と右辺削り、下端二次的切断、左辺割れ。ヒノキ科・柾目。天平勝宝4年(752)の年紀を記す東市司からの進上状もしくは荷札か。柱抜取穴イ五出土。

木簡98 上端・左右両辺削り、下端折れ。針葉樹*・柾目。梨の進上状か。「梨原」は、天平勝宝元年(749)12月にみえる「宮南梨原宮」との関連が推測され(『続日本紀』同月戊寅是日条)、王家の離宮に付属する施設か。その所在地は、平城京左京二条二坊とする説が有力である¹⁴⁾。一方、平安時代の内蔵寮領梨原荘・近衛府使宿所の梨原の比定地である、現在の奈良市内侍原町付近¹⁵⁾にあてる説もある。柱抜取穴イ五出土。

木簡99 四周削り。四周とも原形をとどめる部分が残るものの欠損部分が多い。ヒノキ科?・板目。備中国の白米の荷札の断片。『和名抄』によると、この木簡に該当する可能性のある郷として、「野馳(乃知)」「大東急記念文庫本」と「額部(乃倍)」「高山寺本」の両郷がみえるが、特定できない。柱抜取穴イ五出土。

木簡100 上端は二次的切断か、下端・左右両辺削り。右辺の一部は破損。針葉樹・板目。伊勢国の白米の荷札。「□□部里」は、阿止部里となる可能性があり、その場合『和名抄』の伊勢国安濃郡跡部郷にあたる。柱抜取穴ニ四出土。

木簡101 上端・左右両辺削り、下端折れ。左右両辺の一部欠損。スギ・板目。北門の警備にかかわる木簡。6AAB区(平城第13次調査)で検出したSK820から出土した西宮兵衛木簡(丸~三)と類似した記載内容をもつ。「北門」は、**木簡106**にもみえる。その位置の特定は困難といわざるを得ないが、第一次大極殿院地区でその候補となりうる門は、I期の大極殿院北面回廊に推定される門、もしくは、II期の宮殿遺構の北面回廊に推定される門であろうか。津・秦・大伴部・丈部は、兵衛もしくは中衛と推測される。裏面は大振りの文字で記されている。語順にやや乱れがみられるものの、「下せ。謹んで申し入る。給はざれば、・・・あり」とでも訓むか。柱抜取穴ニ一出土。

木簡102 四周削り。表面は、切り込み部分に白く紐の痕跡が残る。ヒノキ科・柾目。天平勝宝4年(752)の年紀をもつ隠岐国の鯨の荷札。「隠伎国役道郡」は、『和名抄』の隠岐国隠地郡にあたる。柱抜取穴ニ二出土。

木簡103 上下両端切断、左右両辺削り。表面の調整も雑で、裏面は大型の工具で割ったままである。ヒノキ科・板目。立ち小便禁止の看板。柱抜取穴ニ二出土。

木簡104 上下両端折れ、左右両辺削り。スギ?・板目。歴名木簡。柱抜取穴イ二出土。

木簡105 上端・左右両辺削り、下端折れ。スギ・板目。ウジ名だけを記した付札状木簡。柱

表5 SB18500
柱穴別木簡出土点数

()は削屑(内数)
番付は図32参照

柱 穴	出土点数
イ一	1 (0)
イ二	9 (6)
イ三	4 (3)
イ四	21 (21)
イ五	21 (8)
ロ一	1 (0)
ロ六	1 (0)
ハ一	69 (54)
ハ六	5 (0)
ニ一	1265 (1153)
ニ二	9 (2)
ニ三	5 (0)
ニ四	2 (0)
ニ六	2 (0)
合 計	1415 (1247)

梨 原

北 門

抜取穴イ二出土。

木簡106 上端切断、下端は廃棄の際の二次的切断、左右両辺削り。スギ・板目。北門の警備にかかわる木簡。「北門」は、**木簡101**にもみえる。西宮兵衛木簡(九~三四)と類似した記載内容をもつ。門の警備にかかわるものと推測されるが、食料支給にかかわるものではない。天平勝宝年間(749~757)の木簡を共伴することからすれば、「中嶋所」の記載は、正倉院文書などにみえる中嶋院との関連が推測される。正倉院文書によると、中嶋院(中嶋)は、天平9年(737)写経用紙注文に初見し(『大日本古文書』編年7-91頁)、天平宝字2年(758)9月の中嶋勘経所牒(『大日本古文書』編年4-315頁)までの史料に散見される施設で、ほぼ同時期にみえる嶋院・外嶋院とともにいずれも法華寺に所属するとする理解が有力である¹⁶⁾。ただし、それらの関係には異論も呈されている。また、奈良宮中中嶋院例得度注文(『大日本古文書』編年10-266頁)によると、天平20年(748)4月28日勅により、奈良宮中中嶋院において沙弥500人と沙弥尼10人に得度したとみえ、『扶桑略記』によると、天平21年(749)正月、平城中嶋宮において聖武太上天皇・中宮藤原宮子・光明皇后が行基を戒師として受戒したとみえ(同月14日条)、「中嶋院」が、平城宮中に置かれた嶋の一つである可能性も残る。ただし、この授戒を伝える『行基年譜』が、「平城京中嶋宮」(天平21年条)とするなど、その所在地はなお詳らかにし得ない。仮に平城宮またはその周辺とみる場合、水上池周辺、とくに北岸の中嶋の付近に比定することも可能であろう。兵士と嶋(庭園施設)の関わりを示す史料として、6ADC区(平城第63次調査)の馬寮東方地区の西池宮と推定される区画北西にある東西溝SD6499から出土した木簡(天平10年(738)6月9日付、天平11年(739)正月2日付、および年月日欠の断片)が嶋の清掃に関わる(いずれも『平城木簡概報』(8)3頁上)。柱抜取穴ニ一出土。

令史大夫 **木簡107** 上端切断、下端・左右両辺削り。左辺の上部は欠損。スギ*・板目。「令史大夫」の宣を伝える文書木簡の断片。「令史」は、司・監・署の第四等官で、「大夫」は敬称であろう。柱抜取穴ニ一出土。

薪の進上木簡 **木簡108** 上端切断、下端・左右両辺削り。スギ・板目。薪の進上木簡。『雑令』によると、毎年正月15日に、文武官人は薪を主殿寮に進上することとされていた(文武官人条、進薪条)。この木簡が後に年中行事として定着する御薪進上とかかわるかは不詳。「寺」は不詳だが、仮に仏事を意味するものならば、第一次大極殿院で催される仏事との関連が推測される。この木簡は、天平勝宝年間(749~757)頃の第一次大極殿院ないしⅡ期の宮殿施設において、仏事が催されていたことを示唆する資料となろう。柱抜取穴ニ一出土。

木簡109 上端・左辺削り、下端二次的切断、右辺切り込みの上と下端の一部のみ削り。切り込みより下の大部分割れ。切り込み部分に白く紐の痕跡が残る。スギ・柾目。隠岐国の荷札の断片。「隠岐国役道郡河内郷」は、『和名抄』の隠岐国隠地郡河内郷にあたる。柱抜取穴ニ一出土。

大嶋村 **木簡110** 四周削り。左辺の上部、右辺の上半、左右両辺の下端は欠損。ヒノキ科・板目。周防国の塩の荷札の断片。「大嶋村」は周防国大島郡の一部か。顆(果)塩は、袋入りもしくは布・紙・植物性編物などで包まれた堅塩を指すのであろう。正倉院文書によると、塩の助数詞は、顆・果・籠・坏・裹・連・尻などが用いられるが、この内、顆・果・尻は袋入りの堅塩を対象とするようであり、一顆=三升、二升三合、一升五合など不定量とも解される¹⁹⁾。柱抜取穴ニ一出土。

木簡111 上端削り、下端折れ、左右両辺削りで、切り込みの上を欠く。モミ属*・板目。天

平勝宝4年(752)の年紀をもつ淡路国の調塩の荷札。「淡路国津名郡□馬郷」は、『和名抄』の淡路国津名郡来馬郷にあたるか。柱抜取穴ニー出土。

木簡112 四周削り。ヒノキ科・柾目。天平19年(747)の文書に付された題籤軸。軸部のみ下端折れ。題籤部の長さは51mm。柱抜取穴ニー出土。

木簡113 上端・左右両辺削り、下端切断。ヒノキ科・板目。「右兵庫」という役所名を記した木簡。孔が穿たれていることから、紐を通したか。柱抜取穴ニー出土。

木簡114 上端折れ、下端・左右両辺削り。ヒノキ科・柾目。常食への苦情を記した文書木簡の断片。「常食」は、『令集解』によると日々朝夕に諸司に班給される食料(職員令大炊寮条朱説)。常食の語は、天平宝字6年(762)造石山寺所食物用帳(『大日本古文書』編年15-378頁)などにもみえ、米以外に塩・茄子・油・醬・小豆などについて常食料と注記する。上記の品目のほかに、二条大路濠状遺構(北)SD5300(平城第198次調査B区)から出土した木簡に鯖を常食として請求する例もある(『平城木簡概報』(24)7頁上)。柱抜取穴ニー出土。

木簡115～木簡148は、すべて柱抜取穴ニー出土の削屑。

木簡118 「監物」は、中務省に属する品官。西楼SB18500から出土した木簡には、解の断片や監物と記した削屑がほかに4点認められる(一五〇三・一五〇二～一五〇四)。

木簡119 「令史」は、司の第四等官。

木簡120 右辺は木簡の原形をとどめるか。**木簡121**とともに位階と人名を記した木簡の削屑。

木簡122 右辺は木簡の原形をとどめるか。「天平勝寶五年十一月」は、西楼SB18500・東楼SB7802から出土した木簡のうちもっとも時代の降る年紀である。天平勝宝5年(753)の紀年木簡は、「勝寶五年正月」「天平勝寶五年」が知られる(一四〇・木簡154)。

木簡123 宿衛にあたった者を列挙した木簡の削屑か。

木簡126～木簡148は、柾目の削屑。筆跡は細く端正。木目の状況や筆跡からみて同一木簡もしくは一連の木簡の削屑であろう。上部に3本の刻線を引き、何段かに文字を記せるようにその下にも刻線1本を引いたようで、現状では1～3本の刻線が残る削屑が確認できる(木簡127～129・131・133・134・139～141)。人名・配置先・勤務状況などが列挙される。大型の歴史名木簡と推測されるが、原形は不詳。**木簡139**の上端は木簡の原形をとどめるか。

木簡149 上下両端折れ、左右両辺は上端に向かって二次的に細く削り出す。ヒノキ科・柾目。解の断片。「馬司」は、兵部省所管の兵馬司か。以下、**木簡154**まで、柱抜取穴ハ一出土。

木簡150 上下両端折れ、左辺削り、右辺割れ。裏面は割ったまま。ヒノキ科・板目。2梱包の某荷物に付された付札ないし進上状木簡の断片か。

木簡151 上端は二次的切断か、下端・左右両辺削り。ヒノキ科・板目。糸君益人の名を記す6059型式の木簡。「糸君益人」は、天平宝字2年(758)に従八位上仁部省史生として写経所に出仕している(『大日本古文書』編年4-303頁・編年13-358頁・編年13-392頁・編年13-440頁・編年14-209頁・編年14-211頁)。この木簡の人物と同一人物であるとすれば、天平勝宝5年頃の式部位子少初位下から、5階級昇進しており異例の速さである。

木簡152 上端・左辺削り、下端折れ、右辺割れ。ヒノキ科・柾目。

木簡153 上端は木簡の原形をとどめる。左衛士府の発した文書木簡の削屑であろう。

木簡154 天平勝宝5年(753)の年紀をもつ木簡の削屑。

天平勝宝
5年11月

馬 司

糸君益人

F まとめ

今回報告する第一次大極殿院西半部出土の木簡は、大きく2つのグループに分類することができる。第1は、宮の造営・解体作業にともなう遺物であり、A・B・Eの木簡がこれに該当する。第2は、第一次大極殿院西の基幹排水路等の溝出土の木簡で、C・Dの木簡がこれに該当する。以下、木簡の内容と性格について、簡単にまとめておく。

整地土・ 抜取穴出 土の木簡

第1のグループ、整地土・抜取穴の木簡は、造営・解体工事により生じたものと考えられる。特定官衙に由来し、事務作業により廃棄された木簡群ではない可能性があり、木簡の廃棄の方法や契機を考えるうえで大きな意味をもつといえる。このグループの木簡の内容は、荷札・物品付札が多く、文書木簡は概して少ない。西楼では、削屑が非常に多く認められるが、これらは、造営ないし施設の警備に用いられた帳簿に由来する削屑であろうか。整地土の木簡には、南面築地回廊下の整地土から出土した伊勢国安濃郡の白米の荷札（木簡2・--ニ七）や、本報告書の対象外であるが、内裏西南隅外郭整地土下層黒色粘質土層から出土した丹波国氷上郡の白米の荷札（--三〇六～--三〇九）、西辺の整地土下層木屑層・炭層から出土した但馬国二方郡・出石郡の白米の荷札（木簡32・木簡33・--ニ六〇・--ニ六三）など、特定の国郡からもたらされた米の荷札が集中する事例が認められる。かかるまとまった木簡群は、宮の造営・改作工事にともなう食料米の集積・支給・消費のありかたがうかがわれる史料といえるのではないか。これらの荷札は、衛士・仕丁・采女・女丁の食料、あるいは役民の雇直および食料とされる庸の使途を考えるうえでも示唆的であろう。

溝出土 の木簡

第2のグループ、すなわち溝出土の木簡は、点数も比較的少なく、内容的なまとまりに乏しい。このことは、第一次大極殿院の東側の、ほぼ対称の位置を流下する基幹排水路SD3765およびSD3715から出土した木簡と比較するとより鮮明になる。SD3765とSD3715の木簡出土点数は、それぞれ47点（うち削屑39点）、1420点（うち削屑981点）であり、第一次大極殿院地区・中央区朝堂院地区の出土木簡のおよそ3分の1を占めている。その内容も多彩で、木簡・墨書土器などの出土文字資料は、官人の考選にかかわる木簡、食料の授受にかかわる木簡、勅旨省・内堅のほか、弾正台、刑部省などの存在を示唆するものと概括されている（『平城報告Ⅳ』）。ただし、SD3825の木簡の点数の少なさは、中央区朝堂院の西半および西辺が未発掘であり、その検出長は断続的に約80mに過ぎないことも考慮する必要があるだろう。さらに、SD3715の木簡が、宝亀9年（778）の紀年木簡を含み（--ニ三三）、奈良時代後半の特徴を有する考選木簡が認められる（--三九-など）のに対し、SD3825には、奈良時代末以降の木簡を含まない可能性があることも、注目される。とはいえ、大極殿院でおこなわれた行事・儀式にかかわる可能性が高いものが数点あるほか、西側の未発掘区に広がる官衙地域の性格や官司を推測する手がかりとなるものもわずかながら認められることも重要である。

次に、今回報告した木簡のうち特筆すべきものにつき、その内容を整理しておく。

第一次大極 殿院の造 営・改作・ 解体過程

第1は、第一次大極殿院の造営・改作・解体過程がうかがわれる木簡である。南面築地回廊の整地土から出土した和銅3年（710）3月の年紀をもつ木簡（木簡2）は、平城宮そのものの造営過程を再考させるほどの影響を与えた。大極殿院西辺整地土下層木屑層・炭層の木簡は、養老末年頃の第一次大極殿院西辺の整備の年代を考える手がかりとなる。さらに、西楼柱抜取

穴の出土木簡は、天平勝宝5年(753)11月を上限とする解体時期を明示したが、東楼(平城第77次調査)の出土木簡の年代、内容、出土状況がいずれも酷似することから、東西楼の解体が、ほぼ同時期であるとする理解はさらに確実となった。

「北門」(木簡101・106)は、東楼SB7802から出土した「殿守」「大殿守」(一三九・一三九)とともに、この時期に存在した建物そのものを指す可能性がある。すなわち、殿と称される中心建物とそれを警備する兵衛または中衛の存在である。北門の警備にあたる兵士の木簡は、明確な警備範囲としての区画が存在したことを想像させる。これらの建物・施設は、大極殿後殿SB8120および、解体前の北面回廊の門とみることも可能であるが、もう1つのより蓋然性の高い推定として、Ⅱ期宮殿施設を構成する中心建物と、それを取り囲む区画施設とみることもできる。Ⅱ期宮殿施設の、少なくともその大枠は、東西楼の解体がはじまる天平勝宝5年末頃に、すでに造営を終えていた可能性があり、中央区のⅡ期は、南面築地回廊の解体とともに開始する、との理解を提示したいと思う。

第2は、宮内の官衙等の配置がうかがわれる木簡である。SD3825A出土の木簡、あるいはSG8190南岸・大極殿院西辺整地土下層木屑層・炭層から出土した、奈良時代前半に属する木簡の中に、平城宮の初齋院相当施設に関連する可能性のある木簡が数点含まれていることは注目される(木簡8・17・56)。以上の木簡は、北池辺新造宮として史料にあらわれる平城宮の初齋院相当施設の有力な推定地が佐紀池近辺にもとめることができることを示しており、未発掘地の多い宮西半の官衙配置を考えるうえで、重要であろう。

第3は、宮中仏事にかかわる木簡である。天平勝宝5年頃の薪の進上木簡(木簡108)は、Ⅱ期の宮殿において、仏事が催されていたことがうかがわれる史料となる可能性がある。加えて、6ABY区(平城第140次調査)のSD10325から出土した木簡にみえる「西大宮正月仏」事(一四九)は、正月8日から7日間にわたりおこなわれる御齋会が時期的にふさわしく、奈良時代の正月仏事を考える貴重な資料といえよう。

最後に、上代語の検討資料を加えたことを挙げておく。出土層位からともに奈良時代前半に遡ると考えられる転倒符の付された木簡(木簡53)、難波津歌木簡(木簡58・一七七)は、注目を集めるであろう。

北 門 ・
(大)殿 守宮 内 の
官 衙 配 置
初 齋 院
相 当 施 設宮中仏事に
関わる木簡上 代 語 の
検 討 資 料

- 1) 以下、樹種および木取りの記述は、山本 崇・藤井裕之2010「木簡の樹種同定」(奈良文化財研究所『平城宮木簡七』奈良文化財研究所史料第85冊)を参照のこと。本稿でも、生物顕微鏡を用いた観察による樹種同定の結果は、ヒノキ*、スギ*のごとく*を付し、実体顕微鏡による表面観察によるものは、ヒノキ科、スギのごとく示し区別した。また、資料の劣化等により樹種の決め手にかけるものは、ヒノキ科?、スギ?のごとく?を付した。
- 2) 『続日本紀』和銅6年(713)5月甲子(2日)条。この命令は、『延喜式』民部式上11郡里名条の「凡諸国部内郡里等名、並用_二字_。必取_嘉名_」へと継承される。
- 3) 奈良県教育委員会1969『藤原宮一国道165号線バイパスに伴う宮域調査』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第25冊)。
- 4) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部2001『日本国語大辞典 第二版』第12巻(小学館)。
- 5) 浜松市教育委員会2009『鳥居松遺跡5次 伊場大溝編』。
- 6) 近藤大典2006「平城宮出土「美濃国方県郡杏間里」木簡について」(『美濃の考古学』第9号)。
- 7) 小林芳規1978「平城宮木簡の漢字用法と古事記の用字法」(『石井庄司博士喜寿記念論集 上代文学考究』塙書房)。確実な日本古代の

実例として最古となる可能性がある。

- 8) 館野和己2001「木簡の表記と記紀」(『国語と国文学』第78巻11号)。
- 9) 東野治之1984「寸言 抹消符と倒置符」(『文学』第52巻第9号。のち、東野「抹消符と倒置符」『書の古代史』岩波書店、1994年所収)。
- 10) 山本 崇2006「難波津の歌の新資料—姫路市辻井遺跡出土木簡の再積読—」(奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要2006』)。
- 11) 高岡市教育委員会2001『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告』。
- 12) 奈良国立文化財研究所1997『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』(奈良国立文化財研究所学報第56冊) 82号木簡。
- 13) 橋本義則1992「長岡宮内裏小考—内裏の構造と皇后宮・後宮の所在をめぐる—」(中山修一先生喜寿記念事業会編『長岡京古文化論叢』II、三星出版。のち、橋本「長岡宮内裏考」『平安宮成立史の研究』塙書房、1995年所収)。
- 14) 堀池春峰1983「梨原宮と梨原庄」(『奈良県観光』321号)。渡辺晃宏1995「二条大路木簡と皇后宮」(奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告—長屋王邸・藤原麻呂邸の調査』奈良国立文化財研究所学報第54冊) など。
- 15) 吉川真司2007「平城京の水田守」(大和を歩く会編『シリーズ歩く大和 I 古代中世史の探究』法蔵館)。
- 16) 佐久間竜1958「傍系写経所の一考察—中島院・嶋院・外島院について」(『続日本紀研究』第5巻第4号)。
- 17) 岸 俊男1979「“嶋”雑考」(奈良県立橿原考古学研究所編『創立四十周年記念 橿原考古学研究所論集』第五、吉川弘文館。のち、岸「[嶋]雑考」『日本古代文物の研究』塙書房、1988年所収)。宮崎健司1992「法華寺の三[嶋]院について」(『大谷学報』第71巻4号。のち、宮崎「法華寺の三[嶋]院」『日本古代の写経と社会』塙書房、2006年所収)。大平 聡1992「五月一日経の勘経と内裏・法華寺」(『宮城学院女子大学 キリスト教文化研究所研究年報』第26号)、など。
- 18) 山本 崇2004「御齋会とその舗設—大極殿院仏事考」(奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要2004』)。吉川真司2007「大極殿儀式と時期区分論」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第134集)。
- 19) 塩の単位については、廣山堯道・廣山謙介2003『古代日本の塩』(雄山閣)、助数詞一般については、三保忠夫2004『木簡と正倉院文書における助数詞の研究』(風間書房)、などを参照。
- 20) 北池辺新造宮は、水上池西南辺の丘陵上に推定する説がある(金子裕之1996「平城宮の後苑と北池辺の新造宮」『瑞垣』第175号)。

2 瓦磚類

平城宮の他の地点と同様、本報告の対象範囲からも多量の瓦磚類が出土した。もっとも多く出土したのは丸瓦と平瓦で、次いで軒丸瓦・軒平瓦、そして面戸瓦や熨斗瓦といった道具瓦の類も一定量出土している。これらはわずかな例外を除くと、いずれも奈良時代に属するものである。ここでは主に奈良時代の瓦について記述をおこなうが、一部、第一次大極殿院にかかわる奈良時代以外の瓦についても説明を加えることにする。

軒瓦に関しては、すでに『平城報告 I～VII』や『基準資料 I～IX 瓦編』などで報告がなされているものもあるが、再度文様や製作技法の諸特徴について略述する。その際、型式分類については『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』にもとづくものとする。なお、各型式の法量や出土比率などは別表 1・2 に掲げている。また、本文中の軒瓦拓本のうち、破片である場合には平城宮・京内出土軒瓦の標式拓本と合成したものを使用した。その縮尺はいずれも 4 分の 1 である。

A 軒丸瓦

軒丸瓦は 22 型式 51 種、計 646 点が出土した（型式が判明したものは 321 点）。これらは文様によって単弁蓮華文と複弁蓮華文に大別できる。以下では、この大別によって説明する。

製作技法には、大部分が瓦当部に丸瓦部を接合する接合式で、その接合部分にみられる接合線は半円形をなす。したがって以下では、このような接合部に関する記述を省略し、接合式および接合線が半円形でない場合に関してのみ、解説を加えることにする。

i 単弁蓮華文軒丸瓦（図版 79・80）

6130 型式 外縁に線鋸歯文を巡らす。蓮子は 1 + 8、独立した間弁をもつ。A・B の 2 種があり、6130 型式 B のみ出土した。

B（57 点、図 53） 間弁が弁全体を取り巻くように配されており、中房がやや突出する。瓦当側面に範端らしき圧痕があり、瓦範が側面におよぶタイプと考えられる。丸瓦部凸面には工具による縦方向のナデ調整、瓦当下半の側面部には工具による横方向のナデ調整（工具を用いないものもある）を施す。接合時に瓦当裏面に接合溝を設け、そこに先端未加工の丸瓦部を接合する。その際、丸瓦部先端が接合溝から若干ずれ、空隙となって残るものがある。その後、丸瓦部凹凸両面に接合粘土を充填する。丸瓦部凹面の接合粘土は瓦当裏面の広い範囲にまでおよび、丸瓦部にかけて縦方向のユビナデ調整を施す。瓦当裏面は不定方向のナデ調整により平坦に仕上げる。焼成はやや不良で、暗茶褐色を呈する。

6131 型式 外縁に凸鋸歯文が巡るが、珠文外周の圏線を欠く。蓮子は 1 + 8 である。A・B の 2 種があり、A のみ出土した。

A（4 点、図 54） Y 字形の独立した間弁をもつ。瓦当側面に範端痕は確認できない。丸瓦部凸面は丸瓦部の中程まで縦方向の

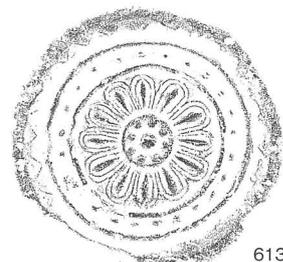


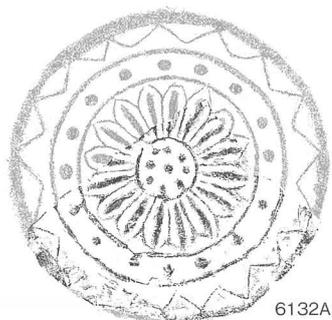
図 53 軒丸瓦 1

6131 型式

6132 型式

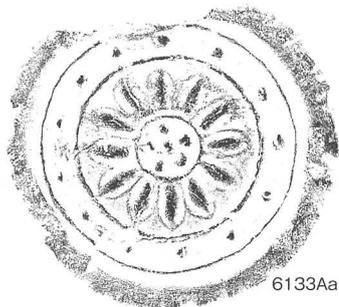


6131A

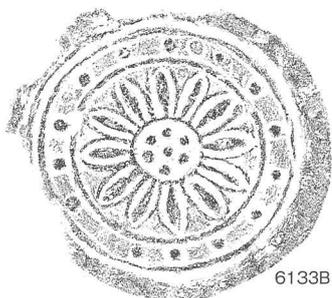


6132A

6133 型式



6133Aa



6133B

図54 軒丸瓦2

で、暗灰色～暗灰黒色を呈する。

B (4点、図54) 蓮子が1+6で、蓮弁は12弁、やや弁端が丸みを帯びる。丸瓦部凸面には縦方向のナデ調整、凹面の接合部付近に縦方向のナデ調整を施す。接合粘土は凹凸両面ともに厚い。瓦当裏面はややくぼみ、下半部に沿って側縁から続く一連のケズリ調整を施す。焼成は不良で、赤褐色を呈する。

C (9点、図55) 蓮子が1+6で、蓮弁は13弁で弁端が尖る。瓦当側面にわずかに範端痕が認

ナデ調整を施し、中程から玉縁部までは丸瓦部製作時の横方向のナデが残る。凹面の接合部では縦方向のユビナデ調整が丸瓦部の中程まで達し、そこから玉縁部までは布圧痕が残存する。瓦当裏面は大きく凹み、不定方向のナデ調整によって仕上げられているが、瓦当周縁に沿ってはケズリ調整で仕上げる。焼成は良好で硬質、灰褐色を呈する。

6132型式 外縁は線鋸歯文で、間弁をもたない。そのため、弁は互いに接している。蓮子は1+8である。A・Bの2種があり、Aのみが出土した。

A (3点、図54) 弁端が尖り、一部は弁端が閉じていない。丸瓦部が残存している個体は出土していないが、凸面に縦方向のナデ調整を施していたようである。瓦当下半の側面部は、縦方向ののちに横方向のナデ調整を施す。範詰めの際に中央部を薄く、周縁部を厚く盛り上げることから、丸瓦部を接合したのちに、瓦当裏面が大きくくぼんだような状況となっている。なお、丸瓦部の先端は未加工のまま接合している。瓦当裏面は不定方向のナデ調整で仕上げるが、顕著な指頭圧痕が明瞭に残っている。焼成は良好で堅緻、灰色を呈する。

6133型式 外縁は素文縁で、間弁をもたない。そのため、弁は互いに接している (Rのみ接せず)。珠文外周の圏線を欠くものもある。A～D、I～Sの15種があるが、そのうちA～Dの4種が出土した。

Aa (24点、図54) 蓮子が1+5で、蓮弁は12弁で弁端が尖る。ある段階で中房の圏線や弁を彫り直しており、彫り直す以前をAa、以後をAbとして区別するが、Abは出土していない。丸瓦部凸面は工具による縦方向のナデで調整し、瓦当下半の側面部は縦方向ののち横方向のナデ調整を加えている。凹面接合部と瓦当裏面も工具によるナデが施され、接合部は縦方向、瓦当裏面は不定方向の調整を施す。そのため、接合粘土と瓦当裏面とがなす角度は直角に近い。瓦当裏面は平坦に仕上げられている。焼成はおおむね良好

められ、瓦範が側面におよぶタイプであることがわかる。丸瓦部凸面は縦方向のナデ調整、凹面接合部も縦方向のナデ調整で仕上げる。やや瓦当裏面がくぼむものの、全体としては平滑に仕上げている。焼成はやや甘く、灰色を呈する。Db（1点、図55）蓮子が1+6で、蓮弁は16弁で弁端は丸い。珠文外周に圈線を欠く。中房が突出するように彫り直されたものがあり、彫り直し以前をDa、以後をDbとして区別するが、Daは出土していない。瓦当は比較的薄い。丸瓦部凸面は縦方向のケズリ調整で仕上げる。凹面は接合部から丸瓦部の中程辺りまで縦方向のナデ調整が認められ、それ以外の部分には布圧痕が残る。接合時の丸瓦部先端は未加工のままである。焼成は不良で、表面は黒色を呈するものの、内部は淡褐色を呈する。

6134型式 6130型式同様、外縁に線鋸齒文を巡らし、独立した間弁をもつが、6130型式に比して珠文の数が少ない。A～Dの4種があり、Aのみが出土した。

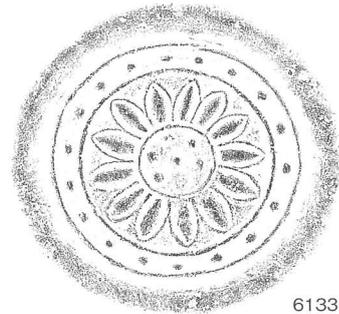
Ab（7点、図55）蓮子が1+8で、弁端が丸い。間弁はいわゆる人字形を呈する。蓮子と珠文が大きく彫り直されているものがあり、彫り直し以前のをAa、それ以後をAbとして区別するが、Aaは出土していない。摩滅しているものが多く、表面調整については不明な点が多い。個体によっては、薄く瓦範に範詰めした段階で丸瓦部（先端未加工か）を接合し、その後、凹面に接合粘土を充填するが、瓦当縁部にかけて厚く盛るため、結果的に瓦当裏面が大きくくぼむ形状をなす。瓦当裏面は不定方向のナデ調整で仕上げる。焼成は不良で軟質、暗灰色を呈する。

6135型式 外縁に線鋸齒文を巡らし、やや長い三角形の独立した間弁をもつ。全体の直径に比して中房径が小さいのも特徴である。A～C・Eの4種があり、Aのみが出土した。

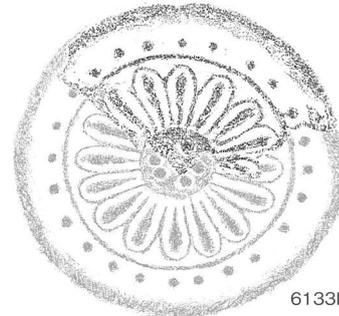
A（1点、図55）蓮子が1+6で、蓮弁は12弁、弁端は丸い。瓦当は比較的薄く、裏面に不定方向のナデ調整を施す。瓦当上半が大きく欠損しているため、丸瓦部との関係は不明である。焼成は不良で軟質、暗褐色を呈する。

6138型式 弁端が丸く、三角形あるいは水滴形の間弁をもつ。A～C・E～Lの11種があり、Bのみが出土した。

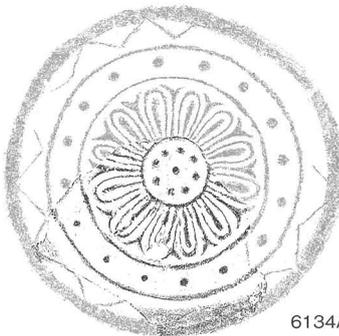
B（1点、図56）外縁に線鋸齒文を巡らし、内区を一段高くつくる。蓮子は1+5で、蓮弁は12弁である。外区部分のみ残存する個体が1点出土したのみである。かつ、摩滅も進行していることから製作技法等の詳細については不明である。焼成は不良で軟質、淡褐色を呈する。



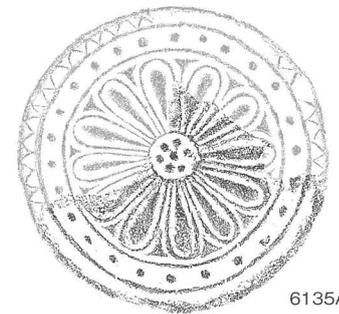
6133C



6133Db



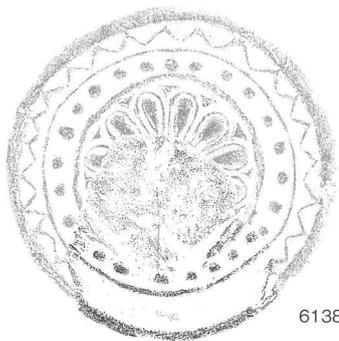
6134Ab



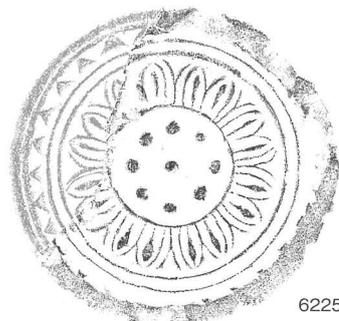
6135A

図55 軒丸瓦3

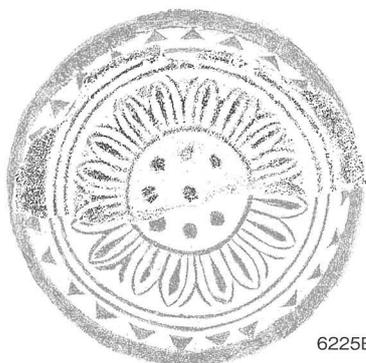
6225 型式



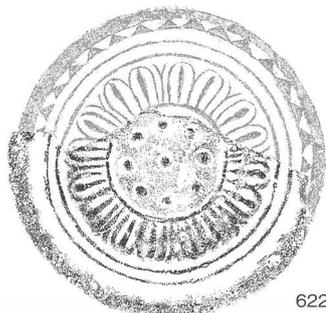
6138B



6225A



6225B



6225C

図 56 軒丸瓦 4

ii 複弁蓮華文軒丸瓦 (図版80~85)

6225型式 外縁に凸鋸齒文を巡らし、内縁には珠文ではなく2重の圈線を巡らす。中房の径は大きく、蓮子は1+8である。蓮弁は8弁で、Y字状の独立した間弁をもつ。A~F・Lの7種のうち、A~C・Lの4種が出土した。

A (5点、図56) 弁端が尖り、間弁の開きがやや大きい。丸瓦部凸面は縦方向のナデ調整を施す。瓦当下半の側面部は摩滅のため不明である。瓦当裏面にみられる横方向の粘土皺や、凹面接合粘土が存在しない点から、成形台による一本作りであることがわかる。瓦当裏面は大きくくぼんでおり、不定方向のナデ調整を施している。焼成は良好で、灰色を呈する。

B (1点、図56) この型式の中ではやや大型で、弁端や間弁の様相はAに近い。瓦当下半の欠損状況などから、成形台による一本作りであることがわかる。丸瓦部にも一部その痕跡が認められる。丸瓦部凸面は縦方向のナデ調整、内面も同様の調整による。布圧痕は確認できない。瓦当裏面から丸瓦部にかけては不定方向のナデ調整を施す。焼成は良好で、灰褐色を呈する。胎土には長石片を多量に含む。

C (7点、図56) 蓮子はやや小粒で、弁端は丸い。間弁の開きがやや小さい。丸瓦部凸面には縦方向の、瓦当下半の側面部には横方向のナデ調整を施す。接合式のものもあり、接合する際に瓦当裏面に接合溝を設け、そこに先端未加工の丸瓦部を接合するが、中には先端が接合溝の底に達せず、空隙が残るものがある。その後、凹凸両面に接合粘土を充填する。接合部内面は縦方向のユビナデ調整を施し、瓦当裏面は不定方向のナデ調整で平坦に仕上げる。このほか、接合式ではなく成形台による一本作りの個体も存在する。焼成は良好で、黒色~灰白色を呈する。

L (1点、図57) 大型品で、直径は25cmあまりに達する。弁端や弁間の状況はCによく似る。瓦当の一部のみが出土

した。粘土の剥落状況から瓦当上部にあたると考えられる。製作技法等に関しては不明である。焼成は不良で、外面は黒色を呈するが、内面は白色を呈する。

6235 型式

6235型式 外縁が素文で、蓮弁は8弁、独立した間弁をもつ。いわゆる東大寺式軒丸瓦である。A~K・M・O~Qの15種があり、Bのみが出土した。

B (1点、図57) 蓮子は1+5で、珠文外周の圈線を欠く。丸瓦部凸面は工具による縦方向のナデ調整を施す。接合の際、丸瓦部先端は未加工のままである。そして丸瓦部凹凸両面に接合

粘土を充填するが、内面には縦方向ののち、
工具による横方向のナデ調整が加えられて
いる。焼成はやや不良で、灰色を呈する。

6269型式 外縁に凸鋸齒文を巡らし、蓮弁は6弁、T字状の間弁が先端で蓮弁に接している。中房はわずかに突出し、蓮子は1+6である。Aのみが確認されている。

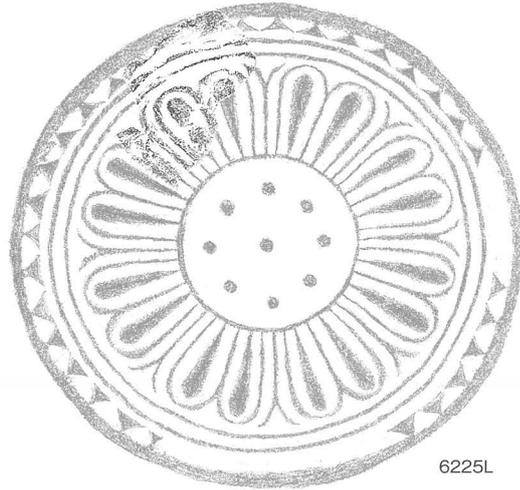
A(1点、図57) 瓦当側面に範端痕は確認できない。丸瓦部凸面には縦方向のナデ調整、凹面接合部にもナデ調整を施す。瓦当は比較的厚いが、接合粘土はさほど多くない。瓦当裏面は不定方向のナデ調整で平滑に仕上げる。焼成は良好で、暗褐色を呈する。

6273型式 外縁に凸鋸齒文を巡らし、蓮弁は8弁、独立した間弁をもつ。中房がわずかに突出し、蓮子は1+5+9である。いわゆる藤原宮式軒丸瓦である。A~Dの4種があり、A・Bが出土している。

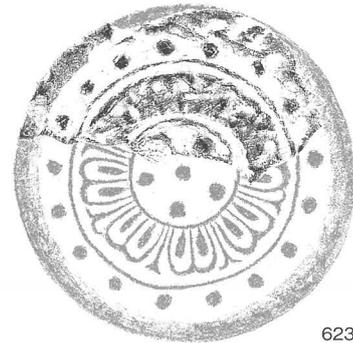
A(3点、図57) 複弁中央部の盛り上がりが大きく、間弁もやや太めである。瓦当側面に範端痕があり、瓦範が側面におよぶタイプであることがわかる。丸瓦部を接合する際には、まず範詰めしている段階で丸瓦部を立て、さらに瓦当裏面に厚く粘土を盛ったのち、凹凸両面に接合粘土を充填する。丸瓦部凹面の先端部には斜格子状の刻み目を施す(図版81)。凹面接合粘土には棒状の工具で押し当てたような痕跡が顕著に残る。瓦当下半の側縁部は、縦方向のケズリ調整ないし工具によるナデ調整を施したのちに、横方向のナデ調整を加える。焼成は良好で、表面は黒色、内面は淡褐色を呈する。

B(5点、図58) 弁の盛り上がりはやや小さく、外縁の凸鋸齒文が縦長である。瓦当側面に範端痕があり、瓦範が側面におよぶタイプであることがわかる。凹面接合粘土がやや薄く、指頭圧痕が多く残る。焼成はやや不良で、灰褐色を呈する。

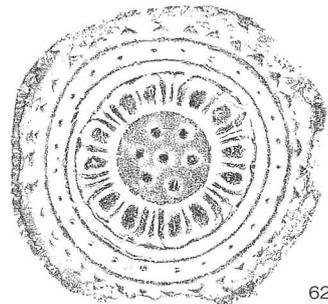
6275型式 やや広い外縁に線鋸齒文を巡らし、蓮弁は8弁、独立した間弁をもつ。蓮子は3重だが、その配置には種類ごとにヴァリエーションがみられる。いわゆる藤原宮式軒丸瓦である。A~E・G~K・Nの11種があり、C~Eが出土した。



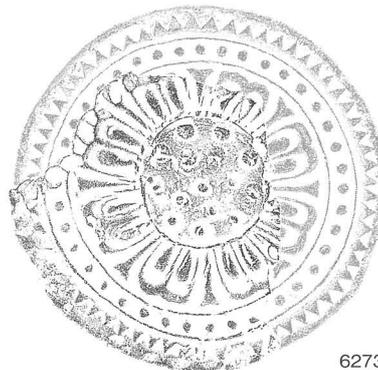
6269 型式



6273 型式



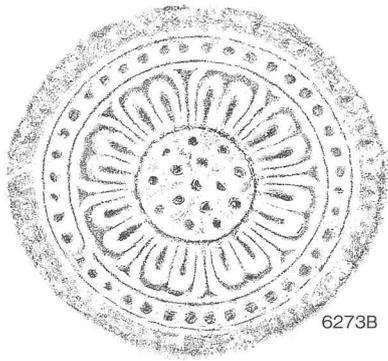
6269A



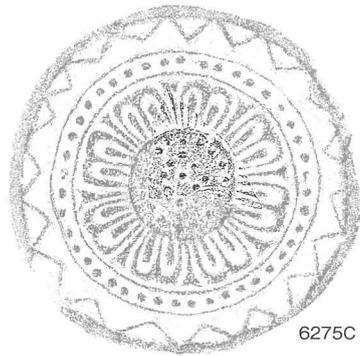
6275 型式

6273A

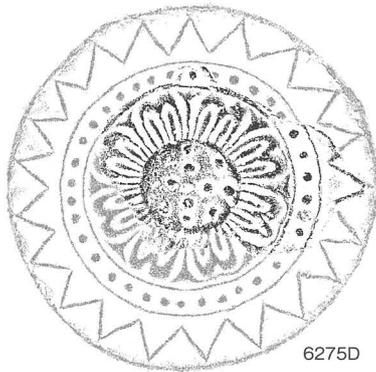
図57 軒丸瓦5



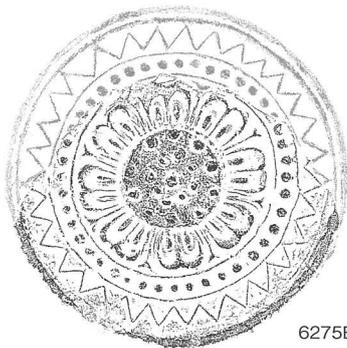
6273B



6275C



6275D



6275E

6281 型式

C (1点、図58) 中房は突出しており、蓮子は1 + 8 + 15である。出土した個体は中房部分の破片のみであるので、技法等に関しては詳細不明である。わずかに瓦当裏面に不定方向のナデ調整を施すことのみ指摘できる。焼成は良好で堅緻、色調は灰黒色を呈する。

D (1点、図58) 外縁が他種に比してやや広く、大ぶりの線鋸歯文を巡らせる。突出した中房に1 + 4 + 8の蓮子を配する。間弁の一部は先端で連結している。瓦当は比較的薄く、瓦範に粘土を詰める際に、周縁から中央へと順に詰めていく状況がわかる。丸瓦部凸面には縦方向のナデ調整を施す。丸瓦部を接合する際の接合溝(おそらく指による)が認められる。瓦当裏面は不定方向のナデ調整で平滑に仕上げられ、そこからケズリ調整によって垂直に立ち上がる。焼成はやや良好で、灰褐色を呈する。

E (1点、図58) 他種に比べてやや小型で、外縁端部には1条の沈線が巡る。わずかに突出した中房に1 + 8 + 10の蓮子を配する。瓦当側面に範端痕は確認できない。丸瓦部凸面には縦方向のナデ調整を施す。丸瓦部を接合する際、丸瓦部広端付近の凹凸の両面に縦ないし斜め方向の刻み目を施す。凹面接合粘土は比較的少ない。瓦当裏面は不定方向のナデ調整によって平滑に仕上げる。焼成は良好で堅緻、暗灰色を呈する。

6281型式 外縁に線鋸歯文を巡らし、蓮弁は8弁でやや短く、間弁が先端で連結する。蓮子はいずれも3重である。A・Baは藤原宮からの出土例がある。A～Cの3種があり、A・Bが出土した。

A (5点、図59) 中房は突出せず、蓮子は1 + 4 + 8である。全体的に平坦である。範傷が進行した結果、蓮弁と間弁、珠文同士がつながった個体がある。瓦当側面に範端痕が確認でき、瓦範が側面におよぶタイプと判断できる。丸瓦部凸面には縦方向のナデ調整を施す。瓦当裏面の丸瓦接合部はかろうじて接合溝が確認できる。凹面接合粘土は比較的多く、瓦当下半部から厚さを増しつつ丸瓦部に充填する。瓦当裏面は不定方向のナデ調整で平坦に仕上げる。焼成の状態はさまざま、良好なものは青灰色を呈し、良好でないものは黒色を呈する。

図58 軒丸瓦6

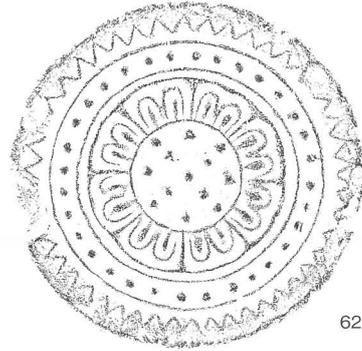
Ba (1点、図59) 突出した中房に1 + 8 + 8の蓮子を配する。出土例が瓦当下半部の破片1点のみなので詳細は不明だが、瓦当裏面には不定方向のナデ調整を施して平滑に仕上げ、瓦当の側縁部には横方向のナデ調整を施している。焼成はやや不良で、灰黒色～灰白色を呈する。

Bb (3点、図59) 線鋸齒文を巡らす外縁のさらに外側に、素文の外縁を付加したものをBbとして区別する。瓦当は厚く、側面に範端痕は確認できない。丸瓦部凸面に縦方向のナデ調整を施す。丸瓦部を接合する際、瓦当裏面に丸瓦部を立てたのち、凸面側から粘土をナデつけ、その上から接合粘土を付加する。凹面も同様の手法を用いた可能性があるが、接合粘土はやや少ない。瓦当裏面に不定方向のナデ調整を施すが、裏面中央がややくぼむ。焼成はあまり良好ではないが、表面は黒色を呈する。

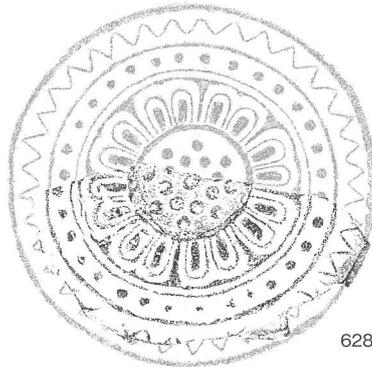
6282型式 外縁に線鋸齒文を巡らし、やや短い8弁の蓮弁をもつ。間弁は先端で連結する。蓮子中央の1顆のみが大きいのが特徴である(Aを除く)。A～E・G～I・Lの9種があり、A～E・Gの6種が出土した。

A (1点、図59) 中房径がやや大きい。蓮子は1 + 8で、すべての顆が同じ大きさである。他種に比して瓦当は厚くなく、丸瓦部の取り付け位置はやや高い。瓦当側面に範端痕は確認できない。丸瓦部凸面に工具による縦方向のナデ調整を施す。凹面は接合粘土が剥落し、状況が不明である。接合部に瓦当裏面にわずかに刻み目を入れ、丸瓦部を立て、瓦当裏面から凹面にかけてナデ調整を施す。その後、改めて丸瓦部凹面に接合粘土をあてる。瓦当裏面は工具による不定方向のナデ調整で平滑にする。焼成はやや甘く、灰色を呈する。

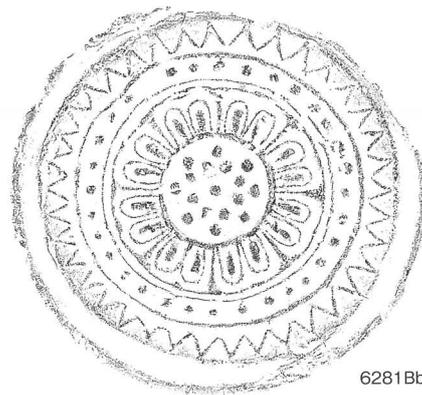
Ba (20点、図60) 短い弁同士が離れ、外区の珠文外周の圈線が太い。蓮子は1 + 6である。瓦当はきわめて厚く、側面に範端痕は確認できない。丸瓦部凸面は縦方向のナデ調整を施し、玉縁部の肩部まで達する。丸瓦部凹凸両面の接合粘土は厚く、凹面側は丸瓦部中程まで縦方向のユビナデ調整を施す。その



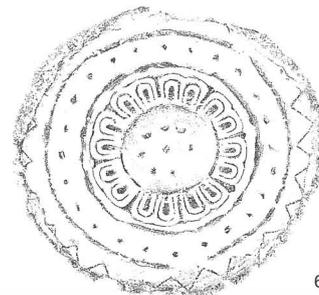
6281A



6281Ba

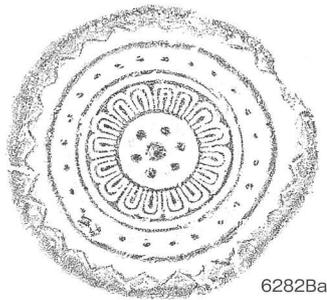


6281Bb

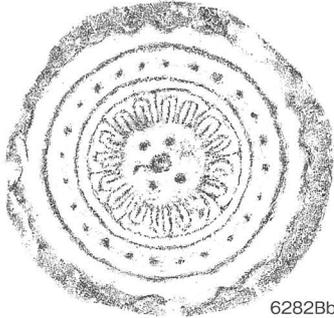


6282A

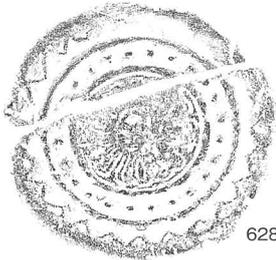
図59 軒丸瓦7



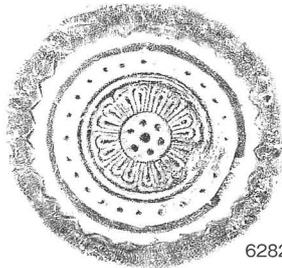
6282Ba



6282Bb



6282Ca



6282D

図60 軒丸瓦8

後、ケズリ調整により接合線を蒲鉾形に整える。丸瓦部側面もケズリ調整する。瓦当裏面はケズリ調整がおよばない箇所に不定方向のナデ調整を施す。焼成は良好で、淡灰色を呈する。Bb（5点、図60）中房の圏線を欠き、弁や間弁を細く、かつ蓮子と外区珠文を大きく彫り直したものをBbとして区別する。丸瓦部凸面は縦方向のナデ調整を施す。瓦当下半の側面部は摩滅が進み、調整は不明である。丸瓦部の凹凸両面ともに接合粘土が極端に厚く、接合部は工具によるナデ調整を施し、接合線は横長の台形をなす。瓦当もきわめて厚く、裏面は不定方向のナデ調整で平坦に仕上げる。焼成はやや不良で、灰色を呈する。

Ca（2点、図60）直径がやや小さく、1弁を除いて複弁が接する。蓮子は1+6である。中房圏線を彫り直したものをCbとして区別するが、Cbは出土していない。いずれの個体も摩滅が著しく、細かい調整などは明らかではない。丸瓦部が剥落した個体では、丸瓦部先端が未加工のまま接合されており、他種に比して凹凸両面の接合粘土が少ない。比較的小型のためである可能性があろう。瓦当裏面は不定方向のナデ調整で平坦に仕上げる。焼成は不良で軟質、暗褐色を呈する。D（2点、図60）Cによく似るが、弁端がやや角張り、内区外周の圏線が細い。瓦当が厚く、丸瓦部の凹凸両面の接合粘土も厚い。丸瓦部凸面は縦方向の工具によるナデ調整を施し、凹面接合部は縦方向のユビナデ調整ののち、ケズリ調整によって仕上げるため、接合線が蒲鉾形をなす。瓦当下半から丸瓦部側面にかけてもケズリ調整がみられる。焼成はやや甘く、灰褐色を呈する。

E（1点、図61）直径に比して中房径が小さく、中房の圏線を欠く。蓮弁は1弁を除いて複弁が接する。蓮子は1+6である。瓦当側面に範端痕があり、瓦範が側面におよぶタイプ

であることがわかる。瓦当はかなりの厚みをもつ。丸瓦部凸面では瓦当寄りから中程まで、縦方向のケズリ調整ののちに縦方向のナデ調整を施す。瓦当下半の側縁にも同様の調整を施す。丸瓦部中程から玉縁部までは、丸瓦部製作時の横方向のナデ調整が残る。丸瓦部凹面は接合部から丸瓦部中程まで縦方向のナデ調整を施し、それ以外の部分は布圧痕が残存する。接合粘土は凹凸両面ともに厚い。瓦当裏面は不定方向のナデ調整で比較的平坦に仕上げる。焼成は比較的良好で、灰褐色を呈する。

G（3点、図61）中房の径が比較的大きく、複弁は離れている。内区外周の圏線が細い。蓮子は1+6である。残存状況の良好な個体がなく、製作技法等の詳細は不明である。図や図版に取り上げた個体も瓦当中央部のみの破片である。焼成は不良で軟質、赤褐色を呈する。胎土に

長石片・石英片・チャート片などを多量に含んでいる。

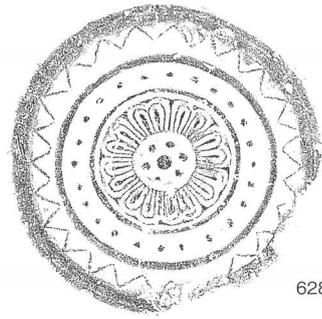
6284型式 外縁にやや大ぶりの線鋸歯文を巡らし、蓮弁は8弁(Lのみ7弁)、間弁は先端で連結する。蓮子は1+6である。A～F・Lの7種があり、Lを除く6種が出土した。A(50点、図61) 弁が大きく盛り上がる。瓦当側面に範端痕が認められ、瓦範が側面におよぶタイプであることがわかる。瓦範にある程度粘土を詰めてから丸瓦部を接合する。丸瓦部の先端は未加工のままである。その後、丸瓦部凹凸両面に接合粘土を充填し、瓦当裏面にも粘土を盛って厚く仕上げる。丸瓦部凸面に縦方向のナデ調整を施し、凹面は丸瓦部中程まで縦方向のユビナデ調整や細い工具によるナデ調整を施す。瓦当裏面は不定方向のナデ調整で平坦に仕上げる。なお、瓦当下半側面部は工具による縦方向のナデ調整を施すものと、その上から横方向のナデ調整を加えるものがある。全体的に焼成は良好で、黒色を呈する。

B(4点、図61) Aに似るが珠文がやや小粒で、弁の盛り上がりもやや低い。間弁と外区圏線の間に範傷がみられる。瓦当側面に範端痕は確認できない。丸瓦部凸面は縦方向のナデ調整で仕上げる。丸瓦部を接合する際には、まず一定量の粘土を瓦範に詰めたのち、接合溝を設けてから丸瓦部を接合し、そこから瓦当裏面全体に接合粘土を厚く盛る。その際、丸瓦部凹面の先端付近に刻み目をつけているものがある。瓦当裏面は不定方向のナデ調整で平滑に仕上げる。焼成は良好で堅緻、灰色を呈する。

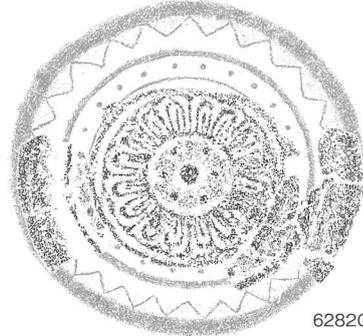
C(33点、図62) 弁の盛り上がりが高く、他種より平坦な印象を受ける。外縁の線鋸歯文もやや粗い。瓦当側面に範端痕があり、瓦範が側面におよぶタイプであることがわかる。瓦範に粘土を一定量詰め丸瓦部を接合する際、接合溝を設けるものと設けないものがあり、後者が多い。丸瓦部の先端は未加工である(図版83)。その後、凹凸両面に接合粘土を盛り、瓦当裏面にも粘土を盛って厚く仕上げる。凸

面には縦方向のナデ調整を施し、凹面の丸瓦部中程までに縦方向のユビナデ調整や細い工具によるナデ調整を施す。瓦当裏面は不定方向のナデ調整で平坦に仕上げる。なお、瓦当下半の側面部は工具による縦方向のナデ調整で仕上げるものと、さらにその上から横方向のナデ調整を加えるものの両者がある。全体的に焼成は良好で、黒色を呈するのが特徴である。

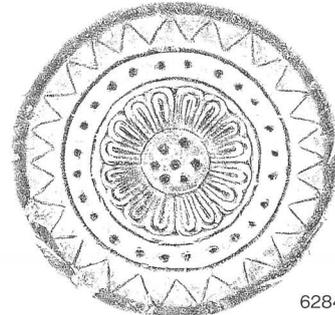
D(1点、図62) 弁が大きく盛り上がるとともに、中房もやや盛り上がる。外縁の線鋸歯文は粗い。丸瓦部は範詰め途中で接合し、その後さらに接合粘土を厚く盛り、瓦当自体を厚く仕上げていく。瓦当裏面は不定方向のナデ調整で平坦に仕上げる。瓦当下半の側面にはヨコナデ



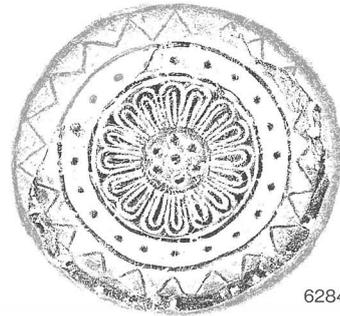
6282E



6282G



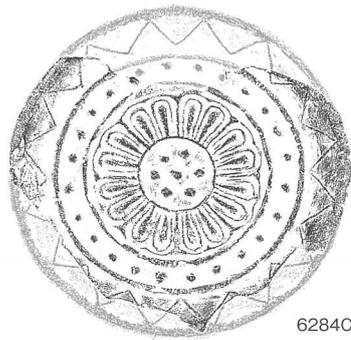
6284A



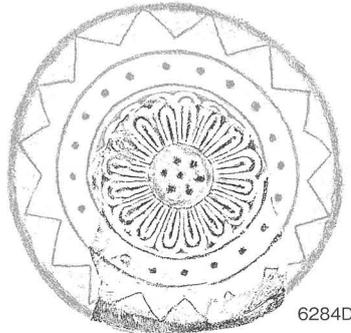
6284B

図61 軒丸瓦9

6284 型式

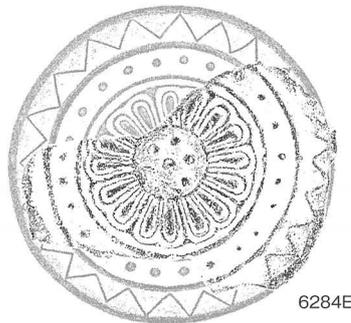


6284C

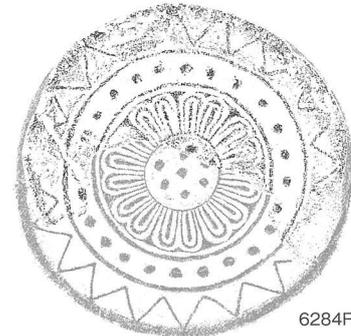


6284D

6304 型式



6284Ea



6284F

図62 軒丸瓦10

調整を施す。焼成は良好で堅緻、灰色を呈する。
Ea(4点、図62) 弁はやや平坦なつくりだが、子葉が太い。中房は一段高くつくられている。なお、中央の蓮子を大きく彫り直したものをEb、さらに線鋸歯文を太く、子葉を細く彫り直したものをEcとして区別するが、これらは出土していない。丸瓦部凸面には縦方向のナデ調整、瓦当下半の側面部にはヨコナデ調整を施す。丸瓦部先端は未加工のまま接合されている。瓦当裏面は不定方向のナデ調整によって平坦に仕上げる。焼成は不良で、淡褐色を呈する。
F(3点、図62) 他種に比して外区の珠文が大ぶりである。全体的に摩耗が進んだ個体が多く、調整不明な箇所が多い。丸瓦部凸面には縦方向の調整(ナデ調整か)がみられる。瓦当下半の側面部も同様である。接合粘土は凹凸両面ともにさほど厚くない。瓦当裏面は不定方向のナデ調整で平坦に仕上げる。焼成は不良で軟質、淡褐色を呈する。

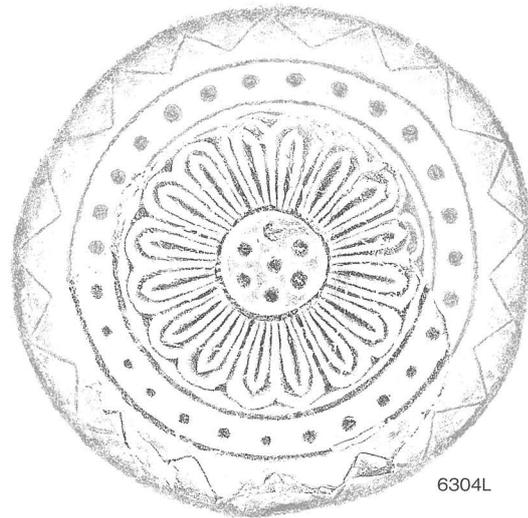
6304型式 外縁にやや大ぶりの線鋸歯文を巡らす。蓮弁は8弁でやや長く、先端は尖り気味である。間弁は先端でわずかに連結する。中房が突出しているのも特徴である。A~E・G・L・N・Oの9種があり、C・Lが出土した。
C(12点、図63) 他種に比して弁は短い、文様の凹凸が比較的明瞭である。丸瓦部凸面には縦方向のナデ調整、瓦当下半の側面部には斜めないし横方向のナデ調整を施す。丸瓦部を接合する際には瓦当裏面に接合溝を設け、丸瓦部先端を未加工のまま接合する。なかには接合溝の底まで丸瓦部先端が達せず、空隙を残している個体もある。その後、丸瓦部凹凸両面に接合粘土を充填する。瓦当裏面は不定方向のナデ調整によって平坦に仕上げる。焼成はやや良好で、表面は黒色、内面は灰白色を呈する。

L(4点、図63) 直径が約25cmに達する大型品である。丸瓦部が残存している個体は皆無であった。瓦当下半の側面部は縦方向のケズリ調整をしたのちに横方向のナデ調整を

6307 型式 **6307型式** 蓮弁が8弁で、間弁をもたないのが特徴である。A~J・Lの11種があるが、外縁

や弁、蓮子の状況にヴァリエーションがある。Aのみが出土した。

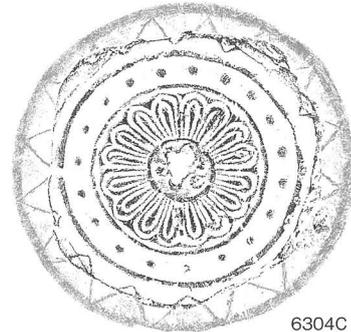
A（1点、図63） 間弁をもたない複弁であるが、箇所によっては3弁が連結していたり、単弁になっていたりと変化が認められる。瓦当の一部のみ出土した。範詰めが何回かに分かれておこなわれていたようで、範詰めの際の指頭圧痕が顕著に残る。そして範詰めの際の早い段階で丸瓦部を接合し、そののちに接合粘土を充填していたものと推定される。それ以外の諸特徴は不明である。焼成はやや不良で、灰色を呈する。



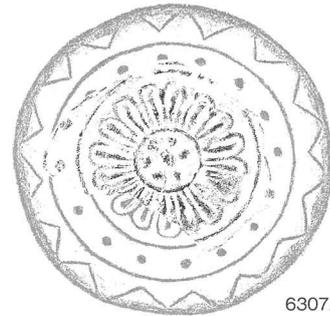
6304L

6308型式 外縁に粗い線鋸歯文を巡らし、やや長い8弁の蓮弁と独立した間弁をもつ。中房はやや小さく、わずかに突出する。A～D・H～N・Rの12種があり、A・B・Dが出土した。

Aa（3点、図64） 弁は盛り上がりを見せ、弁中央端に小さな三角文が配される。蓮子は1+6である。弁や間弁と、珠文や線鋸歯文の位置が整合している。線鋸歯文外周に細い凸線が巡る。なお、中房圏線を彫り直したものをAbとして区別するが、Abは出土していない。瓦当側面に範端痕は確認できない。丸瓦部凸面に縦方向のナデ調整、瓦当下半の側面部に横方向のナデ調整を施す。瓦当裏面は大きくくぼみ、丸瓦部凹面接合粘土は少なく、横方向のナデ調整を加える。焼成は不良で全体に摩滅しており、赤褐色を呈する。



6304C



6307A

B（3点、図64） 諸特徴はAとほぼ同様だが、わずかに弁が細い。図示した個体は中房の外側に範傷が認められる。

丸瓦部凸面に縦方向のナデ調整、瓦当下半の側面部に横方向のナデ調整を施す。瓦当裏面は不定方向のナデ調整で平坦に仕上げる。焼成はやや不良で、表面は黒色、内面は灰色を呈する。

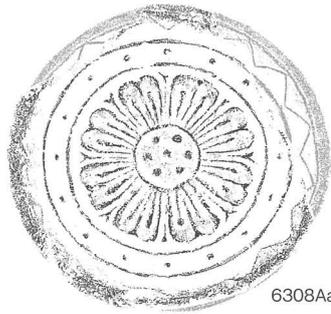
D（1点、図64） 弁中央端に三角文が認められず、線鋸歯文外周の凸線も認められない。Aに認められたような弁や珠文、線鋸歯文の対応関係は崩れている。中房周辺の破片が出土したのみである。範詰め状況を如実に示しており、粘土をまずは中房周辺にのみ詰め、それから周縁にかけて厚みを増しながら詰めている。ただし、中房付近に向けて厚みを減じていくので、瓦当裏面が大きくくぼむ可能性が高い。丸瓦部が剥落した痕跡も残っており、それによると未加工のまま接合されているようである。焼成は良好で堅緻、灰色を呈する。

6311型式 諸特徴は6308型式に類するが、中房が突出しないのが特徴である。蓮子は1+6

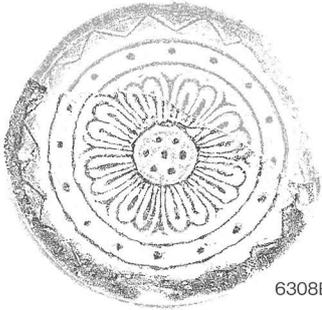
6308 型式

6311 型式

図63 軒丸瓦 11

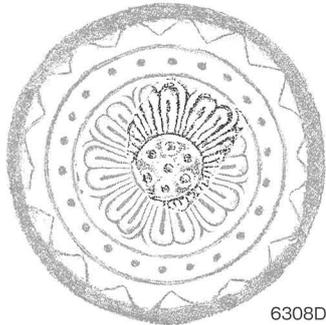


6308Aa

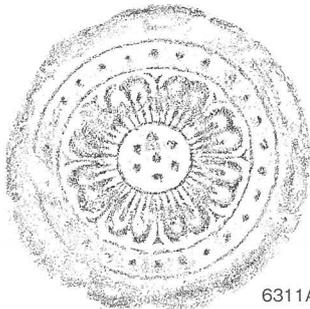


6308B

6313 型式



6308D



6311Aa



6311Ba

図 64 軒丸瓦 12

Aa (1点、図64) 弁が盛り上がり、弁端部が比較的高い。なお、弁の輪郭を彫り直したため、間弁が中房まで達しなくなったものをAbとして区別するが、Abは出土していない。出土した個体は比較的摩耗が進み、製作技法等の詳細がよくわからない。わずかに瓦当裏面をナデ調整で平坦に仕上げることが指摘できるのみである。焼成はやや不良で軟質、黒色を呈する。

Ba (2点、図64) 文様構成はほぼAと一致するが、弁の中央部が盛り上がるという特徴をもつ。なお、弁の輪郭を彫り直したため、間弁が中房まで達しなくなったものをBbとして区別するが、Bbは出土していない。残存状況の良好な個体がなく、図示した個体も摩滅が進み、詳細は不明である。わずかに内面接合粘土が極端に少ないことと、丸瓦部先端が未加工のままで接合されている点のみ触れておく。焼成は不良で軟質、灰褐色を呈する。

6313型式 小型の軒丸瓦で、外縁に線鋸歯文を巡らし、4弁の蓮弁をもつ。蓮子が1顆のみなのが特徴である。間弁は独立して配されるものと先端部で連結するものとの両者がある。A～Iの9種があり、A～Cが出土した。

Aa (1点、図65) 互いに接する複弁は盛り上がりを見せ、弁端が丸い。独立した間弁をもつ。弁や間弁と、珠文や線鋸歯文の位置が対応する。中房と弁を彫り直したために、全体的に中房が盛り上がるものをAbとして区別するが、Abは出土していない。外区の珠文の数箇所には範傷が認められる。瓦当側面に範端痕は確認できない。丸瓦部は剥落しているが、丸瓦部凹面に付着していた布圧痕が剥落部に残っている。瓦当裏面は不定方向のナデ調整で平坦に仕上げる(図版85)。焼成はやや不良で、灰褐色を呈する。

B (1点、図65) 文様構成はAとほぼ同じだが、弁の盛り上がりが高く、中房径もわずかに小さい。破損状況から、瓦当に粘土を詰める際に周縁から中央へと順に詰め込んだ状況がうかがえる。瓦当側面に範端痕は確認できない。丸瓦部凸面に縦方向のナデ調整を施し、凹面接合部も同様である。瓦当裏面は不定方向のナデ調整で平坦に仕上げる。焼成は良くなく、軟質で灰白色を呈する。

C (4点、図65) 6313型式の中でもっとも小型である。弁はやや盛り上がり、弁や珠文などの位置が対応している。瓦当側面に範端痕は確認できない。丸瓦部凸面には縦方向のナデ調整を施し、瓦当下半の側縁部には縦方向ののちに横方向の

ナデ調整を加える。丸瓦部接合時に細い接合溝を設けている。瓦当裏面は不定方向のナデ調整で平坦に仕上げる（図版85）。焼成は良好で堅緻、灰色を呈する。

6314型式 これも小型の軒丸瓦で、外縁に線鋸齒文を巡らし、4弁の蓮弁をもつ。間弁は先端で連結する。複弁が互いに離れていることと、蓮子が2重に巡ることも特徴である。A～Fの6種があり、Aのみが出土した。

A（2点、図65）出土した個体は摩耗が著しく、瓦当面も文様が判別しづらい。ただし本来であれば、外縁の線鋸齒文外周に凸線が巡る。また、内区外周に細い圈線をもつ。弁は盛り上がり、弁端は尖る。蓮子は1+6である。弁や間弁と、珠文や線鋸齒文の位置が対応する。製作技法についても詳細がよくわからないが、瓦当はかなり厚い。焼成は不良で軟質、淡褐色を呈する。

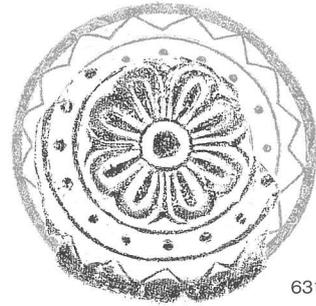
6320型式 蓮弁は24弁で、間弁をもたずに互いに接して配されている。弁端も閉じていない。現状ではAのみ確認されている。

Ab（4点、図66）外縁に凸鋸齒文を巡らせる。中房は突出し、蓮子は1+8である。珠文と鋸齒文の位置が対応する。外縁の凸鋸齒文と珠文をやや大きく彫り直す以前、外縁に線鋸齒文が巡るものをAaとして区別し、Abから中房と蓮子を彫り直したものをAcとして区別するが、Aa・Acは出土していない。瓦当側面に範端痕は確認できない。ほぼすべて破片であり、丸瓦部凸面の状況は不明である。丸瓦部を接合する際に、丸瓦部先端の凹面側を面取りしているものがある。瓦当裏面は不定方向のナデ調整で平坦に仕上げる（図版85）。焼成は良好なものとはそうでないものがあり、前者は灰色、後者は赤褐色を呈する。

7255型式 平安時代に降ると考えられる軒丸瓦である。外縁は素文の傾斜縁で、子葉をもたない8弁の複弁を配す。

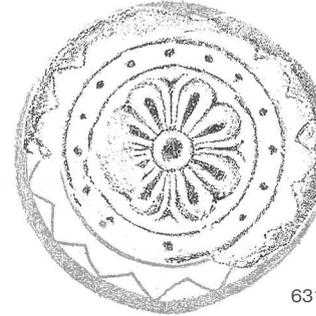
間弁は独立しているが、その形状は奈良時代のものと大きく異なる。蓮子は1+8だが中央の1顆は極端に小さい。現状Aのみが認められている。

A（6点、図66）瓦当側面に範端痕があり、瓦範が側面までおよぶタイプであることがわかる。瓦当裏面は不定方向のナデ調整で平坦に仕上げる。丸瓦部凸面側は工具による縦方向のナデ調整を施す。丸瓦部の取り付け位置はやや低い。胎土は長石片を多く含み、焼成がやや甘く暗褐色を呈する。



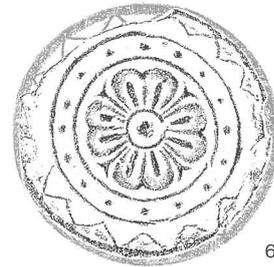
6313Aa

6314 型式

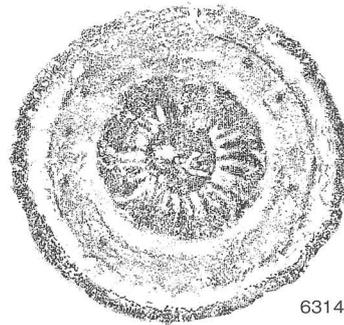


6313B

6320 型式



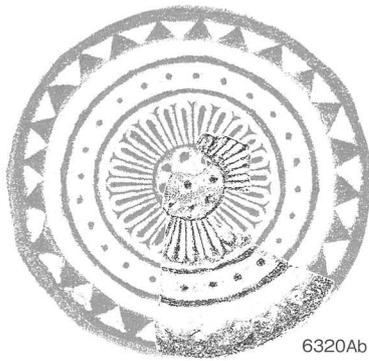
6313C



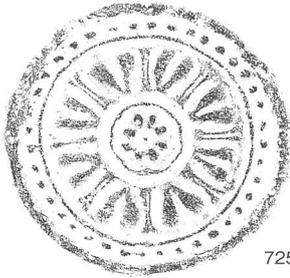
6314A

7255 型式

図 65 軒丸瓦 13



6320Ab



7255A

図66 軒丸瓦 14

B 軒平瓦

軒平瓦は28型式53種、計848点が出土した（型式が判明したものは613点）。これらは文様によって偏行唐草文と均整唐草文に大別できる。以下ではこの大別によって説明する。顎部の断面形態については、すでに『平城報告ⅩⅢ』でなされた分類にしたがって記述する。すなわち、大きくは段顎、直線顎、曲線顎に分類し、さらにそれらを細分する。段顎は瓦当面と顎部の幅の比率を基準とし、顎部幅の方が広いものをⅠLとし、両者が等しいものをⅠS、顎部幅の方が狭いものをⅠSSとする。曲線顎は凸面瓦当沿いの幅の狭い平坦面の有無によって、ない、あるいはあっても幅約1cm未満であるものをⅠ、幅約1cm以上の平坦面があるものをⅡとする。

i 偏行唐草文軒平瓦（図版86）

6641 型式 **6641型式** 右偏行唐草文で、上外区に珠文を配し、下外区と脇区には線鋸歯文が巡る。いわゆる藤原宮式軒平瓦である。A・C・E～Pの14種があり、C・E・Fが出土した。

C（5点、図67） 茎の起点（左端）は反転せずに2本の支葉を配するのみで、末端（右端）は小さく巻き込む。粘土紐桶巻き作りである。段顎ⅠLで、粘土帯を貼り付けたのちに削り出して成形し、のちに横方向のナデ調整を施す。指頭圧痕が部分的にみられる。平瓦部凸面は全面に横方向のナデ調整を施すが、縦方向の縄叩きの痕跡も残る。凹面は瓦当寄りに横方向のナデ調整を施し、それ以外の部分に縦方向のナデ調整を施す。ただし、一部に布圧痕が残存する。側縁は面取りする。焼成は概して良好で、おおむね灰黒色を呈する。

E（5点、図67） 茎の起点は1支葉を置いてから反転して始まり、末端は巻き込むことなく、2支葉を配して終わる。粘土紐桶巻き作りである。段顎ⅠLで、粘土帯を貼り付けたのちに削り出して成形し、その後横方向のナデ調整を施す。平瓦部凸面はナデ調整が認められる。凹面は横方向のナデ調整で布圧痕を擦り消してしまうものと、ナデ調整が瓦当寄りのごくわずかな部分にしか認められないものとの両者がある。後者は布圧痕と杵板痕が明瞭に残る。側面の凹面側に面取りを施す。焼成は良好なものから不良なものまでさまざまである。色調も暗褐色～灰黒色を呈する。

F（2点、図67） 茎の起点は1支葉を置いてから反転して始まり、末端は巻き込んで終わる。段顎ⅠLで、粘土帯を貼り付けたのちに削り出して成形し、のちに横方向のナデ調整を施す。平瓦部凸面には、確認できる範囲内では縦および斜め方向のナデ調整を施す。凹面も瓦当寄りのみ横方向にナデ調整を施し、それ以外の部分は縦および斜め方向のナデ調整を施す。側面の凹面側に面取りを施す。また、破損部分に粘土の合わせ目が確認できることから、粘土板桶巻き作りであることがわかる。焼成はやや不良で、表面は黒色、内面は白色を呈する。

6642 型式 **6642型式** 右偏行唐草文で、上外区、下外区、脇区いずれにも珠文を配するものである。い

いわゆる藤原宮式軒平瓦である。A～Dの4種があり、A・Cが出土した。

A（1点、図67） 茎の起点は反転して始まり、末端も巻き込んで終わる。粘土紐桶巻き作りである。段顎ISで、粘土帯を貼り付けたのちに削り出して成形する。顎部は横方向のナデ調整を施し、平瓦部凹面の瓦当寄りに横方向のナデ調整を施す。焼成は良好で堅緻、暗灰色を呈する。

C（1点、図67） 唐草文の構成はAとほぼ同様だが、やや大ぶりになる。珠文もわずかに密である。粘土紐桶巻き作りである。段顎ILで、粘土帯を貼り付けたのちに削り出して成形する。顎部は横方向のナデ調整を施し、平瓦部凸面は摩滅のため方向は不明だが、ナデ調整を施す。凹面は側縁部寄りと瓦当寄りにナデ調整を施し、これ以外には布圧痕が残存する。焼成は良好で堅緻、灰色を呈する。

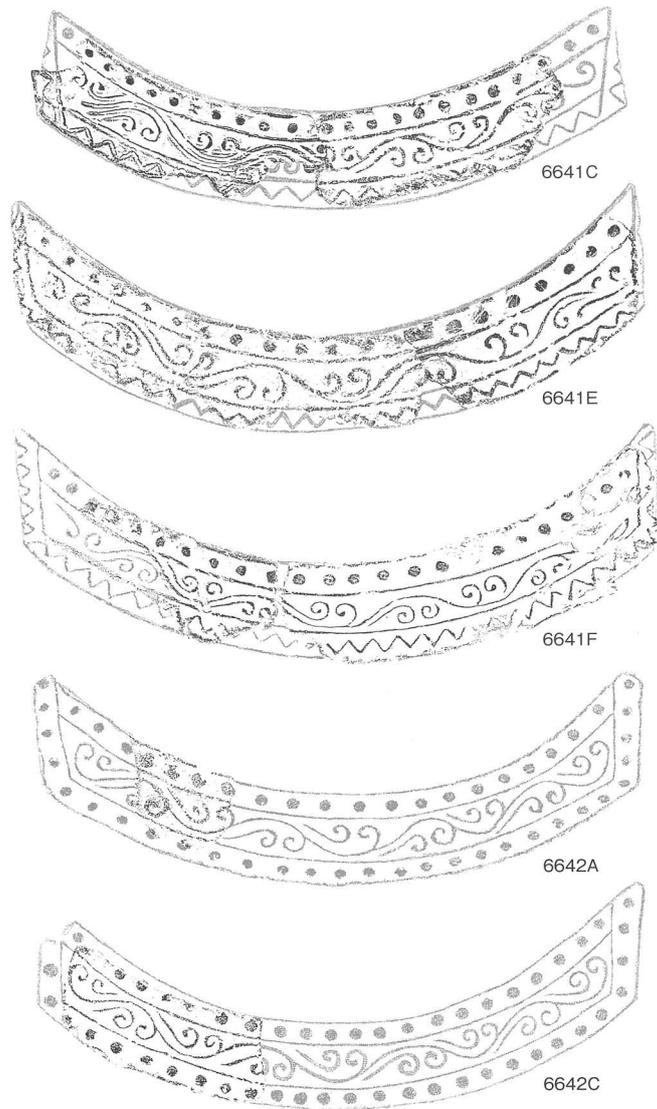


図67 軒平瓦 1

6646型式 右偏行変形忍冬唐草文で、上外区に珠文を、下外区に線鋸歯文を配する。これもいわゆる藤原宮式軒平瓦である。A～Jの10種があり、Aが出土した。

6646 型式

A（1点、図68） 蕾の表現を2重のV字形で表すとともに、内区の両端に珠文を配することを特徴とする。瓦当部の一部の破片のみが出土した。顎部はややくぼむものの段顎ILと推定される。横方向のナデ調整を施す。平瓦部凹面は横方向の工具によるナデ調整で仕上げる。ただし破片のため、それが全面におよんでいたかは不明である。粘土板桶巻き作りと推定される。焼成は良好で堅緻、灰褐色を呈する。

6647型式 上外区に珠文、下外区に線鋸歯文を配するのは6646型式と同じだが、こちらは左偏行変形忍冬唐草文である。いわゆる藤原宮式軒平瓦である。A～E・G～Iの8種があり、Aのみ出土した。

6647 型式

A（1点、図68） 比較的大ぶりの忍冬文が伸びやかに配される。粘土板桶巻き作りで、段顎ILである。顎部は粘土帯を貼り付けて成形する。顎部は横方向のナデ調整を施し、平瓦部凸面

6663 型式

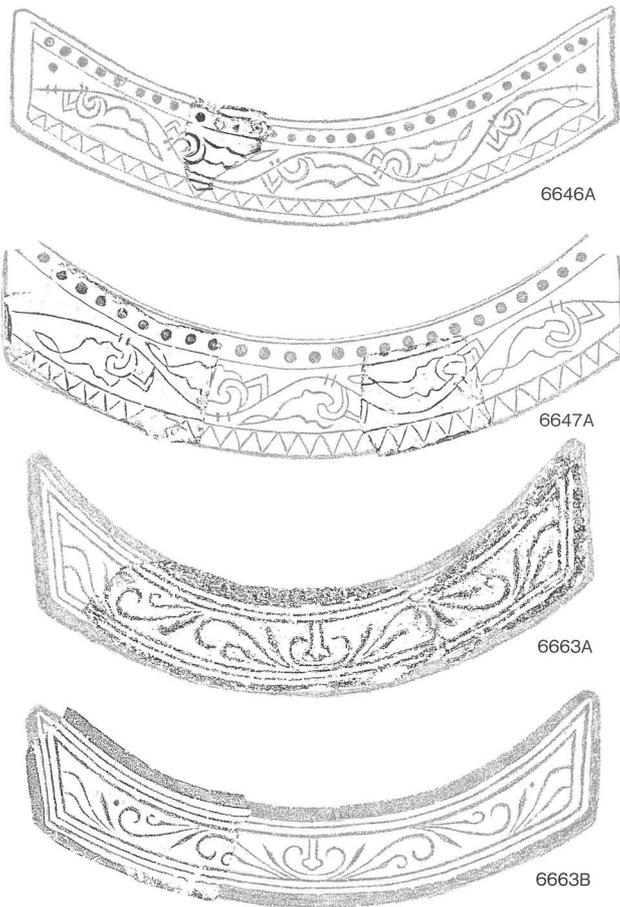


図 68 軒平瓦 2

横方向のナデ調整を施し、それ以外の部分は布圧痕が残存する。側面の凹面側に面取りを施す。焼成はやや不良で、暗褐色を呈する。

B (2点、図68) 唐草文の各単位の基部が界線につく。第3単位の主葉と第1支葉が界線につくのはAと同じだが、第2単位との間に珠文を置く。曲線顎Ⅱで、粘土を厚く貼り付けたのち、縦方向のヘラケズリ調整を施し、最後に縦方向のナデ調整を施す。平瓦部凹面は瓦当寄りに横方向のナデ調整を施し、それ以外の箇所では布圧痕が残存するが、わずかに横方向のナデ調整を施す個体もみられる。枠板痕が認められないことから一枚作りであろう。側面の凹面側に面取りを施す(図版87)。焼成は良好で堅緻、淡灰褐色を呈する。

C (5点、図69) 唐草文の基部が界線につかず、左右の第3単位主葉のみ界線につく。右第3単位の第1支葉はなく、左第2単位の第1支葉が下向きに巻く。この第1支葉を太く彫り直すものをCb、それ以前のをCaとして区分する。出土したもので、その区分が可能な個体は少ないが、曲線顎Ⅱのものがほとんどであるため、いずれもCbに属すると考えられる。顎部は横方向のナデ調整を施し、平瓦部凸面には縦方向の縄叩き痕が残る。凹面は瓦当寄り5cm程度を横方向のナデ調整を施し、それ以外の部分では平瓦部中央付近のみ横方向のナデ調整を加える。したがって、側縁寄りに布圧痕が残存する。側面の凹面側にわずかに面取りを施す。焼成はやや甘く、軟質で灰褐色を呈する。

H (1点、図69) 唐草文の基部は界線につき、各単位の主葉と第1支葉が強く巻く。そのた

も残存している範囲ではナデ調整を施す。凹面も残存している範囲内は全面ナデ調整である。側面の凹面側に面取りを施す。焼成は良好で堅緻、淡灰色を呈する。

ii 均整唐草文軒平瓦 (図版86~93)

6663型式 花頭形の中心飾りをもち、その基部は界線につく。左右3回反転の均整唐草文をもつ。外区は2重の界線のみで珠文を欠く。A~F・H~Mの12種があるが、そのうちA~C・Hが出土した。

A (13点、図68) 唐草文が伸びやかに配され、左右の第3単位主葉と第1支葉が界線につく。曲線顎Ⅰで、顎部に横方向のナデ調整を施す。平瓦部凸面には縦方向の縄叩き痕が残る。凹面の瓦当寄りに

め、左右の第3単位は界線にはつかない。瓦当部中央よりの破片のみ出土した。摩耗・破損が著しいため確定はできないが、段顎ⅠSSの可能性はある。平瓦部凹面瓦当寄りにナデ調整を施す。焼成は不良で、淡灰色を呈する。

6664型式 花頭形の中心飾りをもち、その基部は外区界線につくものとつかないものがある。左右3回反転の均整唐草文をもつ。左右第3単位の主葉は外区界線につく。外区には珠文を巡らす。A～D・F～Pの15種あり、このうちB～D・F・H・I・K～Mの9種が出土した。

B (31点、図69) 中心飾りの基部は界線につかず、基部先端が開く。左右第3単位は主葉だけでなく第1支葉も界線につく。外区の四隅は凸線で区画する。段顎ⅠLで、粘土帯を貼り付けたのちに削り出して成形する。その後、横方向のナデ調整を施す。平瓦部凹面

の瓦当寄りには横方向のケズリ調整を加える。部分的に布圧痕が残る。側面の凹面側に面取りが認められない。焼成はやや不良で軟質である。灰褐色を呈する。

C (232点、図69) 中心飾りの基部は界線につかず、基部先端がわずかに開く。外区の四隅は凸線で区画する。段顎ⅠLで、粘土帯を貼り付けたのちに削り出して成形する。その後、横方向のナデ調整を施す。平瓦部凸面には横方向の縄叩き痕が残るものが多い。一部に斜め方向の縄叩き痕を斜格子状に残すものがある(図版87)。ベンガラが顎部に付着した個体もある。凹面は瓦当から平瓦部中程まで、横方向のケズリ調整やナデ調整を施す。部分的に布圧痕が残る。側面の凹面側にわずかに面取りを施す。焼成はおおむね良好で、黒色を呈するのが特徴である。

D (4点、図70) 中心飾りの基部は界線につく。唐草文全体がやや太い。外区の四隅に紡錘形の珠文をおく。段顎ⅠLで、やや広めの粘土帯を貼り付けたのちに削り出して成形する。平瓦部凸面は全体的に摩耗が著しく詳細は不明だが、おそらく顎部は横方向のナデ調整を施し、それ以外は縄叩き痕が残る。凹面は瓦当寄りに横方向のナデ調整を施し、布圧痕を擦り消す。側面の凹面側に面取りが認められない。焼成はやや良好で暗褐色を呈する。

F (3点、図70) 中心飾りの基部は界線につく。外区の四隅に紡錘形の珠文をおく。瓦当外縁部上に範端痕があり、瓦範が外縁部にかぶらないタイプであることがわかる。段顎ⅠLで、横方向のナデ調整を施す。平瓦部凹面には縦方向のかなり太い縄叩き痕が残る。凹面瓦当寄りには横方向のナデ調整を施し、それ以外は縦方向のナデ調整によって布圧痕を擦り消す。側面の凹

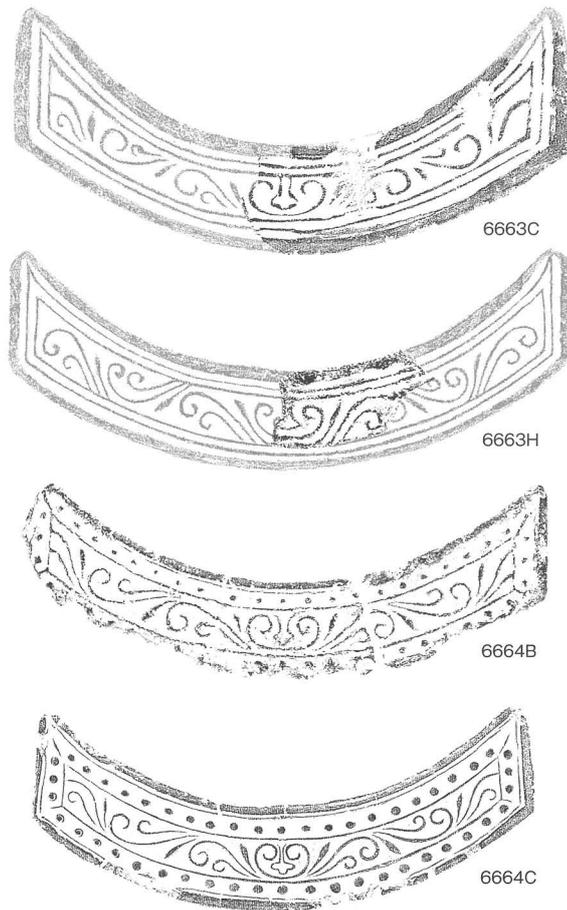


図69 軒平瓦3

6664 型式

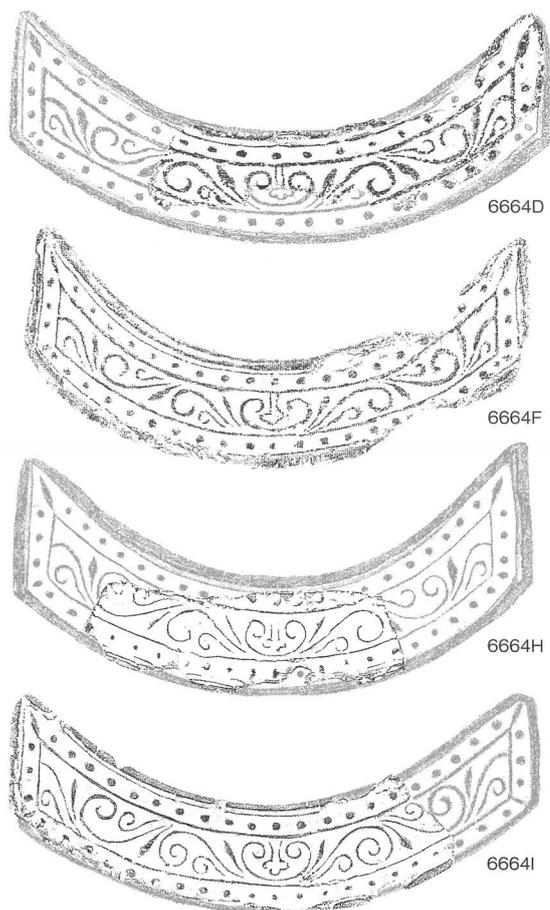


図70 軒平瓦 4

面側に面取りを施す。焼成はやや不良で、淡灰色を呈する。

H (3点、図70) 中心飾りの基部は界線につかない。外区の四隅に紡錘形の珠文をおく。段顎 I Lで、きわめて厚い粘土帯を貼り付けて成形し、横方向のナデ調整を施す。焼成は良好で堅緻、黒色を呈する。

I (3点、図70) 中心飾りの基部は界線につかず、基部先端が開く。全体に唐草文の卷きが強い。外区の四隅に紡錘形の珠文をおく。段顎 I Lで、粘土帯を貼り付けて成形し、横方向のナデ調整を施す。平瓦部凸面には横方向の縄叩き痕が残る。また、顎寄りの部分にベンガラが付着が認められる個体がある。凹面は平瓦部中程までを横方向のケズリ調整で仕上げ、それ以外の部分には布圧痕が残存する。側面の凹面に面取りを施す。図示した個体は、焼成前に瓦当中心部からやや右に寄った位置において、平瓦部凹面に縦方向の切り込みを入れ、焼成後に右半分を割り取っている(図版88)。使用された部位は不明だが、特異な例として掲げておく。

K (5点、図71) 中心飾りの基部は界線につかず、基部先端がわずかに開く。外区の四隅に紡錘形の珠文をおく。段顎 I Lで、粘土帯を貼り付けて成形し、横方向のナデ調整を施す。平瓦部凹面瓦当寄りには横方向のケズリ調整を施す。側面には糸切り痕が残る。このことから、一枚作りの可能性がある。焼成は良好で堅緻、灰黒色を呈する。

L (1点、図71) 中心飾りの基部は界線につかず、基部先端が開く。左右第1単位の主葉が比較的長い。四隅は紡錘形をなすが、上端は他種に比して小さい。瓦当部の破片が出土したのみで、製作技法等の詳細は不明である。焼成はあまり良くなく、灰色を呈する。

M (2点、図71) 他種に比して瓦当幅が広い。中心飾りの基部は界線につかず、基部先端が大きく開く。内区幅はやや狭く、唐草文の各単位が比較的長い。四隅のうち、上端の珠文は細い紡錘形をなし、下端は凸線で区画する。段顎 I Lで、粘土帯を貼り付けて成形し、横方向のナデ調整を施す。平瓦部凹面瓦当寄りにも同様の調整を施す。焼成は不良で軟質、表面は黒色を、内面は淡褐色を呈する。

6665 型式 **6665型式** 花頭形の中心飾りを持ち、その基部は外区界線につくものとならないものがある。左右3回反転の均整唐草文をもつ。左右第3単位の主葉は巻き込むため、外区界線につかない。外区には珠文を巡らす。A～Cの3種があり、Aが出土した。

A (8点、図71) 中心飾りはやや太く、その基部は界線につかない。基部先端がわずかに開く。唐草文の基部は界線につかない。外区四隅は凸線で区画する。段顎ⅠLで、粘土帯を貼り付けて成形し、横方向のナデ調整を施す。平瓦部凸面には横方向の縄叩き痕が残る。凹面は全体的に横方向のナデ調整で布圧痕を擦り消すが、瓦当寄りにわずかに工具による縦方向のナデ調整が認められる(図版89)。焼成は良好で灰褐色を呈する。

6666型式 花頭形の中心飾りを持ち、その基部は外区界線につく。左右3回反転の均整唐草文を持ち、各単位の基部が外区界線につく。また、左右第3単位の主葉も外区界線につく。外区には珠文を巡らす。Aのみ確認されている。

A (5点、図72) 顎は段顎ⅠLで、粘土帯を貼り付けて成形し、そ

のち横方向のナデ調整を施す。平瓦部凸面には縦方向の縄叩き痕が残るが、顎部の周辺に横方向の縄叩き痕が残るものもある。おそらくは顎部の接合にかかわるものであろう。凹面は瓦当寄りを横方向のナデ調整を施し、それ以外の箇所は部分的に縦方向のナデ調整を施すのみで、布圧痕も残存する。側面の凹面側にわずかに面取りを施す。焼成は良好で、灰褐色を呈する。

6667型式 花頭形の中心飾りを持ち、その基部は外区界線につかない。基部先端がわずかに開く。左右4回反転の均整唐草文を持ち、外区には珠文を巡らす。A～Dの4種があり、Cが出土した。

C (1点、図72) Aとよく似るが、Cの方が外区および脇区の幅が広い。左右第4単位の主葉が外区界線につく。段顎ⅠLで、比較的薄い平瓦部に厚い粘土帯を貼り付けて成形する。顎部は横方向のナデ調整を施す。平瓦部凹面も瓦当寄りに横方向のナデ調整を施す。焼成は良好で堅緻、暗灰色を呈する。

6668型式 花頭形の中心飾りは尖り気味で、その基部は外区界線につかない。左右3回反転の均整唐草文を持ち、外区には珠文を巡らす。A～Cの3種があり、Aと新種と思われる個体が出土した。

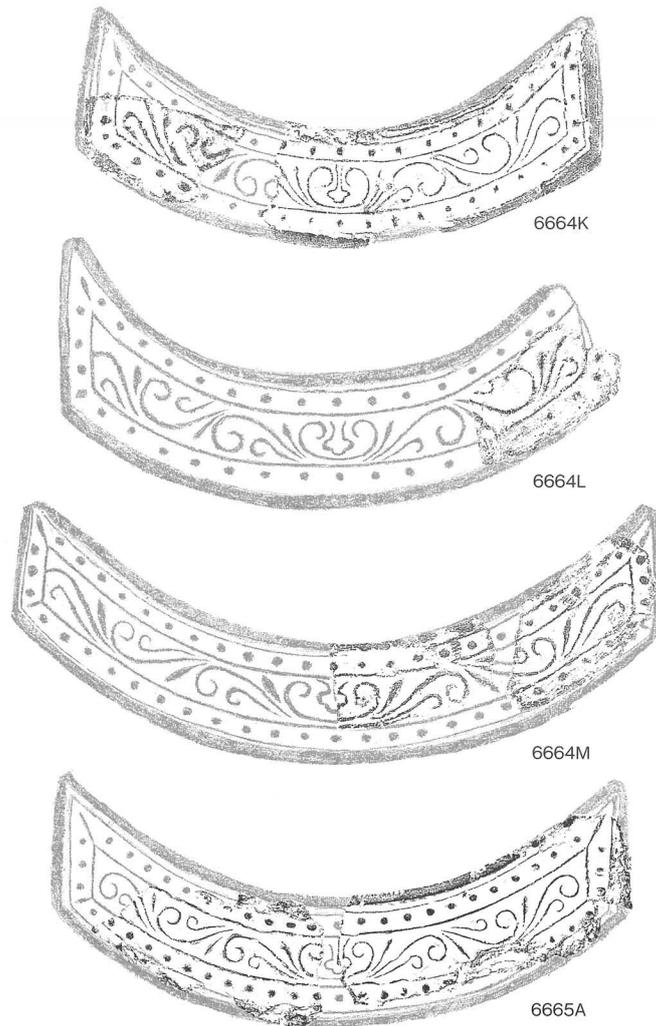


図71 軒平瓦5

6666 型式

6667 型式

6668 型式

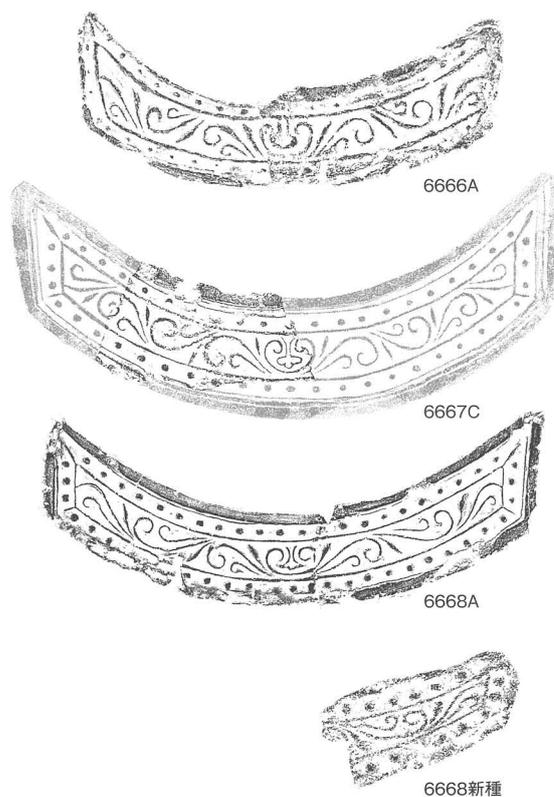


図72 軒平瓦6

6675 型式

A (36点、図72) 左右の第2単位の主葉が比較的長い。段顎ⅠLで、粘土帯を貼り付けて成形し、横方向のナデ調整を施す。顎部の段差は直角ではなく、ナデ調整によってやや曲面を呈する。平瓦部凸面には縦方向の縄叩き痕が残る。凹面瓦当寄りには横方向のナデ調整で仕上げる。側面の凹面側にわずかに面取りを施す。焼成は良好で堅緻、灰褐色を呈する。

新種(1点、図72) 他種に比して内区の幅が小さい。やや珠文も密である。瓦当右端部のみ出土であるため、6682型式である可能性も残る。段顎ⅠLで、粘土帯を貼り付けて成形する(削り出すかどうかは不明)。破片のため、詳細は不明である。焼成は不良で、淡褐色を呈する。

6675型式 菱形の珠文の上に八字状の唐草が置かれる構成の中心飾りを持ち、左右には4回反転の均整唐草文をもつ。

上外区に珠文を配し、下外区と脇区に線鋸歯文を置く。Aのみ確認されている。

A (1点、図73) 段顎ⅠLで、粘土帯を貼り付けたのちに削り出して成形する。その後、横方向のナデ調整を施す。平瓦部凹面も瓦当寄りにヨコナデ調整を施す。焼成は良好で堅緻、灰褐色を呈する。

6679 型式

6679型式 有軸三葉形の中心飾りを持ち、左右4回反転の均整唐草文をもつ。上外区から脇区にかけては凸線で連結する杏仁形の珠文を配し、下外区には線鋸歯文を置く。A～Cの3種があるが、Bのみが出土した。

B (1点、図73) Bはこれまで中心飾り周辺の破片のみ確認されていたが、初めて瓦当左半部が出土した。曲線顎Ⅰで、縦方向にヘラケズリ調整を施したのちに横方向のナデ調整を施す(図版90)。平瓦部凸面に縦方向の縄叩き痕が残り、縄目が比較的密である。凹面は瓦当寄りにヘラケズリ調整を施し、それ以外の部分には布圧痕が残る。枠板痕がないことから一枚作りと考えられる。焼成はあまり良くなく、表面は黒色を呈する部分と白色の部分が混じる。

6681 型式

6681型式 有軸三葉形の中心飾りを持ち、左右3回反転の均整唐草文をもつ。外区は2重の界線のみで珠文を欠く。A～G・Sの8種があるが、Bが出土した。

B (4点、図73) 左右第3単位の主葉と第1主葉が外区界線につく。唐草文の各単位の基部は外区界線につかない。曲線顎Ⅱで、縦方向ののちに横方向のナデ調整を施す。平瓦部凸面には横方向の縄叩き痕が確認できる(図版90)。凹面は瓦当寄りを横方向のナデ調整を施し、それ以外の部分には布圧痕が残る。側面の凹面側に面取りを施す。焼成は良好で堅緻、灰色～黒灰色を呈する。なお特筆すべき点として、第305次調査で検出されたSB18141の柱掘方から出土し

た個体と、第315次調査で検出された小土坑から出土した個体が接合した。両遺構の距離が比較的離れているにもかかわらず接合した事実は、瓦の廃棄パターンを考える際の好材料といえよう。

6682型式 有軸三葉形の中心飾りを持ち、左右3回反転の均整唐草文をもつ。外区には珠文を配する。A～Gの7種があり、Aのみが出土した。

A (3点、図73) 唐草文の各単位の基部は外区界線につかない。左右第3単位の主葉が外区界線につく。曲線顎Iで、粘土帯を貼り付けて成形し、横方向のナデ調整を施す。平瓦部凸面には縦方向の縄叩き痕が残り、縄がやや細い。凹面には摩滅が著しいものの、瓦当寄りにナデ調整が、それ以外の部分では布圧痕が残る。側面の凹面側に面取りを施す。焼成は不良で軟質、灰白色を呈する。

6685型式 小型の軒平瓦である。有軸三葉形の中心飾りを持ち、左右3回反転の均整唐草文をもつ。左右第3単位の主葉と第1主葉は外区界線につく。外区には珠文を配する。A～Fの6種があり、A・B・Dが出土した。

A (18点、図74) 唐草文がやや太く、珠文も大ぶりである。段顎ILで、粘土帯を貼り付けて成形し、横方向のナデ調整を施す。平瓦部凸面は顎部から中程までに縦方向のナデ調整を施し、それ以外では縦方向の縄叩き痕が残る。凹面は全面に横方向のヘラケズリ調整を施すが、部分的に布圧痕が確認できる。側縁部にはごくわずかな面取りを施す。なお、側面には糸切り痕が残ることから、一枚作りと考えられる(図版90)。焼成は良好で堅緻、暗灰色を呈する。

B (8点、図74) 脇区の珠文が1顆しかない。段顎ILで、顎部に横方向のナデ調整を施す。平瓦部凸面は横方向の縄叩き痕を残すが、顎部から5.5cmの範囲にはおよばない。凹面は横方向のナデ調整で、布圧痕を完全に擦り消す。側面はヘラケズリ調整で、わずかに凹面側に面取りを施す。焼成は良好で暗褐色を呈し、やや硬質である。

D (3点、図74) 上外区の珠文がやや疎である。瓦当面と凹面との角度が鋭角をなす個体がある。また、瓦当面の地文に範の木目の痕跡が残る。段顎ILで、粘土帯を貼り付けて成形し、その後横方向のナデ調整を施す。平瓦部凸面は横方向の縄叩き痕を残す。凹面は瓦当寄りを横方向のナデ調整を施す。焼成は良好で堅緻、暗灰褐色を呈する。

6688型式 中心飾りの有軸三葉形はやや華奢で、左右3回反転の均整唐草文ながら、右第1単位が逆転している。外区には珠文を配するが、両脇区の界線は2重である。A・Bの2種が

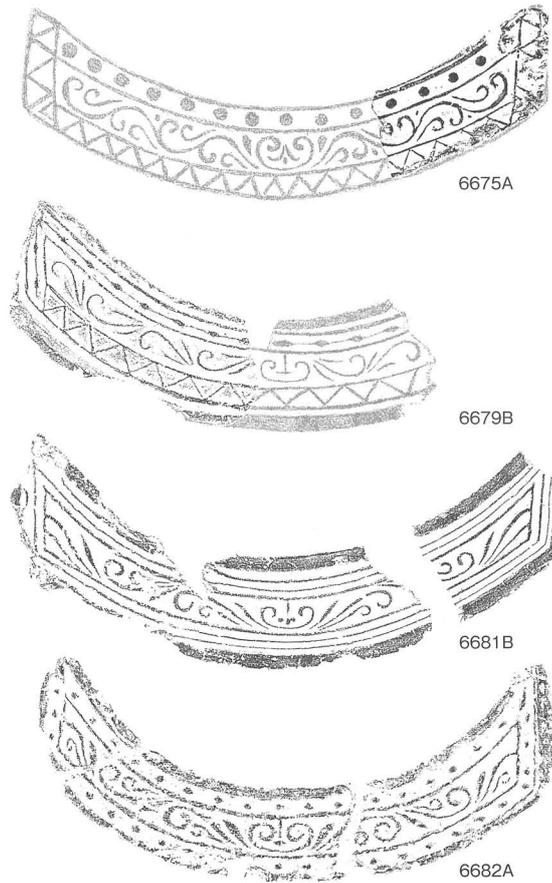


図73 軒平瓦7

6682 型式

6685 型式

6688 型式

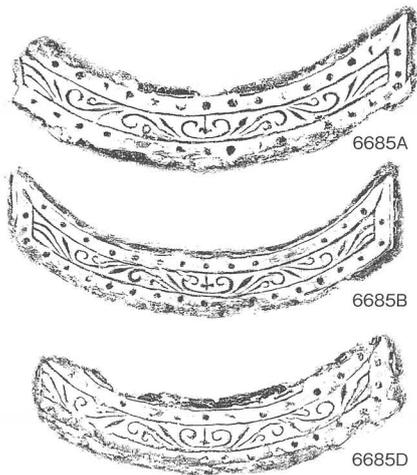


図74 軒平瓦8

あり、Aのみ出土した。

Ab (1点、図75) 中心飾りは逆T字状を呈する。唐草や界線、珠文を彫り直したものをAb、彫り直す前のものをAaとして区別するが、Aaは出土していない。段顎ILで、粘土帯を貼り付けたのちに削り出して成形する。削り出す際に顎部の範囲を定めるための截面が明瞭に残る。顎部はナデ調整を施す(方向は摩滅のため不明)。平瓦部凹面は瓦当寄りのみ横方向のナデ調整を施し、あとは布圧痕を残す。杵板痕が認められないことから一枚作りと考えられる。側面の凹面側に面取りを施す。焼成は良好で、灰褐色を呈する。

6691 型式 **6691型式** 中心飾りは花頭形で基部が軸状に変化している。左右4回反転の均整唐草文をもつ。唐草文はどの単位も外区界線にはつかない。外区には珠文が巡る。A・B・D・Fの4種があり、Aが出土した。

A (13点、図75) 中心飾りの基部は外区界線につかない。この型式の中でもっとも整った唐草文をもつ。曲線顎IIで、粘土帯を貼り付けて成形し、ナデ調整を施す(摩滅のため方向は不明)。凹面は瓦当寄りに横方向のナデ調整をわずかに施し、それ以外の部分には布圧痕が残る。杵板痕は認められず、一枚作りと考えられる。側面の凹面側に面取りを施す。焼成は不良で軟質、灰白色を呈する。

6694 型式 **6694型式** 有軸三葉形を挟むようにして2葉が配置された中心飾りをもつ。左右3回反転の均整唐草文をもち、各単位の基部は外区界線につく。左右第3単位は巻いており、外区界線にはつかない。外区には珠文を配する。現在はAのみが確認されている。

A (1点、図75) 瓦当中央部の破片のみが出土している。剥離痕跡などから、まず瓦範に薄く粘土を詰めてから、平瓦部および顎部を成形している(図版91)。顎部は破片のため断定は難しいが、曲線顎Iあるいは段顎ILの可能性はある。顎部は横方向のナデ調整を施す。平瓦部凹面は瓦当寄りに横方向のナデ調整がみられる。焼成は良好で灰白色を呈する。

6702 型式 **6702型式** 逆T字形の中心飾りをもつ。C以外は左右3回反転の均整唐草文をもつ(Cは4回反転)。唐草文の各単位の基部は外区界線につかない。外区は一重の界線のみで、珠文を欠く。A~Iの9種があるが、新種が出土した。

新種 (1点、図75) 出土したのは瓦当部左端部のみである。唐草文がほとんど巻かず、棒状に近いのが特徴である。曲線顎Iと推定される。顎部は横方向のナデ調整を施し、平瓦部凹面も横方向のナデ調整で布圧痕を消している。焼成は良好で堅緻、淡褐色を呈する。

6710 型式 **6710型式** 中心飾りは上巻きの唐草の上に三角文を置く。左右3回反転の均整唐草文をもつ。外区には珠文を配する。A・C・Dの3種があり、Cが出土した。

C (1点、図75) やや唐草文が太く、外区上端隅は珠文を置かず、無文とする。瓦当左端部を含む破片が出土したのみである。脇区の珠文には顕著な範傷が認められる。瓦当に近づくにつれ、厚みを増す直線顎と考えられる。側面の凹面側に面取りを施す。焼成は不良で軟質、黒灰

色を呈する。

6718型式 2つの円を弧線で連結したような中心飾りをもつ。左右5回反転の均整唐草文で、中心飾りと唐草文の各单位が連結している。左右第1単位以外は第2支葉を欠く。外区には珠文を配する。現在はAのみが確認されている。

A (117点、図76) 曲線顎Ⅱで、粘土帯を貼り付け、横方向のナデ調整を施す。ナデ調整は平瓦部凸面の4分の1程度までおよび、それ以外には縦方向の縄叩き痕が残る(図版91)。凹面側は瓦当寄りに横方向のナデ調整を施し、それ以外には布圧痕と糸切り痕が残る。枠板痕はなく、一枚作りの可能性が高い。側面の凹面側にわずかに面取りを施す。焼成はやや不良で、暗褐色を呈する。胎土に大きなチャート片や長石片が混じることがある。

6719型式 薄手のつくりの軒平瓦で、中心飾りは上巻きの唐草と無軸の三葉文の組み合わせからなる。左右5回反転の均整唐草文をもつ。外区は1重の圏線のみで珠文を欠く。A・Bの2種があり、Aが出土した。

A (1点、図76) 唐草文を伸びやかに配す。直線顎をもち、平瓦部凸面はほぼ全面に縦方向の縄叩き痕が認められる。ただし、瓦当寄りと側面寄りはヘラケズリ調整を施す(図版91)。凹面は布圧痕と糸切り痕が認められ、枠板痕が認められないことから一枚作りと判断できる。凹面も瓦当寄りと側面寄りにヘラケズリ調整を施す。側面の凹面側に面取りを施す。焼成は良好で堅緻、胎土は灰色を呈する。

6721型式 中心飾りは上巻きの唐草と無軸三葉文からなる。左右5回反転の均整唐草文をもち、外区に細かな珠文を配する。A・C～Kの10種があり、A・C・D・F～Hの6種が出土した。A (1点、図76) 三葉文の左右2葉がほぼ水平に配されている。脇区には珠文を欠く。瓦当付近の凹凸面に範端痕があり、瓦範が外縁部にかぶるタイプであることがわかる(図版91)。曲線顎Ⅱで、顎部の端面に横方向のナデ調整を施し、顎部から平瓦部凸面にかけて縦～斜め方向のヘラケズリ調整で仕上げる。凹面は瓦当寄りに横方向のナデ調整を施し、それ以外の部分には布圧痕が残る。枠板痕はないが、糸切り痕が明瞭に残り、一枚作りの可能性が高い。側面の凹



※新種の下地の拓本は6702Aを使用

図75 軒平瓦9

6718 型式

6719 型式

6721 型式

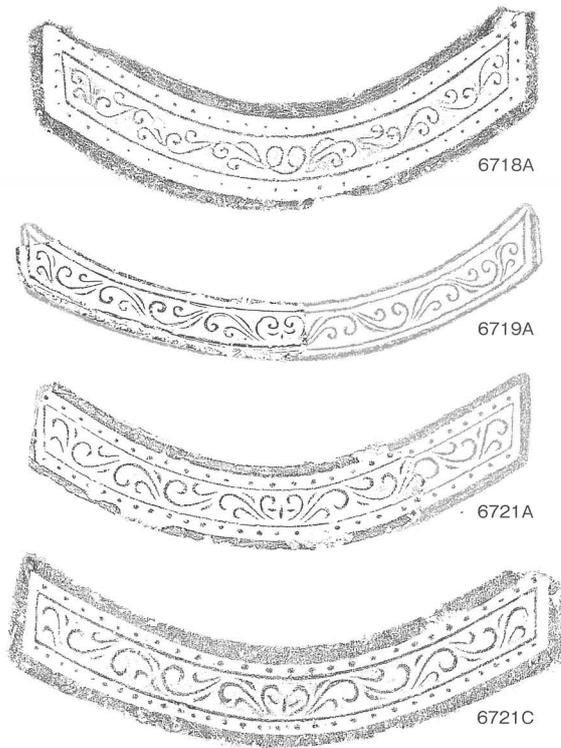


図76 軒平瓦 10

面側にわずかに面取りを施す。焼成は良好で、表面は黒色、内面は灰色を呈する。

C (15点、図76) 三葉文の左右2葉の中央寄りが低い。脇区には珠文を欠く。瓦当付近の凹凸面に範端痕があり、瓦範が外縁部にかぶるタイプであることがわかる。曲線顎Ⅱで、顎部の端面に横方向のナデ調整を施し、顎部から平瓦部にかけては縦方向のナデ調整を施す。ナデ調整がおよんでいない箇所には斜め方向の縄叩き痕が残る。凹面は瓦当寄りに横方向のナデ調整を施し、それ以外の部分には布圧痕が残存する。杵板痕はない。側面の凹面側に面取りを施す。焼成は良好で、灰黒色を呈する。

Da (1点、図77) 三葉文の左隅に凸線状の傷が入る。珠文や唐草文を彫り直したものをDbとして区別するが、Dbは出土

していない。図示した個体は摩滅が著しく、特徴としては曲線顎Ⅱであることを指摘できるのみである。焼成は不良で、淡褐色を呈する。

Fb (4点、図77) 左第5単位の唐草文が全体的に短い。脇区には珠文を欠く。珠文や唐草文などを彫り直したものをFb、それ以前をFaとして区別するが、Faは出土していない。瓦当付近の凹凸面に範端痕があり、瓦範が外縁部にかぶるタイプであることがわかる(図版92)。曲線顎Ⅱで、顎部の端面に横方向、顎部から平瓦部凸面にかけては縦方向のナデ調整を施す。凸面の大部分には斜め方向の縄叩き痕が認められる。凹面は瓦当寄りに横方向のナデ調整を施すが、部分的に縦方向のナデ調整が認められ、大部分に布圧痕が残存している。杵板痕は確認できない。側面の凹面側に面取りを施す。焼成は良好で堅緻、灰黒色を呈する。

Ga (1点、図77) 三葉文の左右2葉がやや湾曲する。唐草文の右5単位の第2支葉を欠く。外縁がなく2重に界線が巡る。脇区には珠文を欠く。出土した個体は摩滅が著しく、曲線顎だがⅠかⅡかは不明。平瓦部凸面も大きく摩滅しているが、斜め方向の縄叩き痕を縦方向のナデ調整で擦り消している。凹面は布圧痕が残存しており、杵板痕は確認できない。ただし、瓦当寄りに横方向、側縁部寄りに縦方向のナデ調整を施して布圧痕を擦り消す。側面の凹面側に面取りがあったかどうかは不明である。焼成は不良で、軟質で淡褐色を呈する。

Gb (4点、図77) Gaの範端を彫り直して外縁をつくるものである。曲線顎Ⅰで、縦方向のナデ調整を施す。平瓦部凸面には斜め方向の縄叩き痕が残る。凹面は瓦当寄りに横方向のナデ調整を施し、瓦当外縁にわずかに面取りを施す。それ以外の部分には布圧痕が残存する。杵板痕は確認できない。側面の凹面側にわずかに面取りを施す。焼成は良好で、灰色を呈する。

Hc (6点、図77) 脇区にも珠文を配する。外区の上端隅に珠文をもたないものをHa、彫り足

して珠文を付加したものをHb、さらに中心飾りの三葉文と唐草文を彫り直したものをHcとして区別するが、Ha・Hbは出土していない。瓦当付近の凹凸面に範端痕があり、瓦範が外縁部にかぶるタイプであることがわかる(図版92)。また、左第3単位の主葉から第2支葉にかけて顕著な範傷が認められる。曲線顎Ⅱで、顎部の端面に横方向のナデ調整を施し、顎部自体には縦～斜め方向のケズリ調整を施す。顎部の端面から10cm前後の位置に、ベンガラが付着が認められる。凹面は瓦当寄りを横～斜め方向のケズリ調整で仕上げる。焼成は良好で堅緻、灰黒色を呈する。

6727型式 下向きの矢印のような中心飾りをもつ。左右3回反転の均整唐草文をもつ。唐草文の各単位の主葉と第1支葉が外区界線につく(第2支葉はつくものとつかないものがある)。外区には珠文をやや疎に配する。A・Bの2種があり、Bが出土した。

B(1点、図78) 脇区の珠文が1顆の

みである。瓦当左端部の破片が出土したのみである。段顎ⅠLで、粘土帯を貼り付けたのちに削り出して成形する。その後、横方向のナデ調整を施す。平瓦部凸面には縦方向の縄叩き痕が残る。凹面は瓦当寄りに横方向のナデ調整を施したのち、側縁寄りに縦方向のナデ調整を施す。それ以外の部分には布圧痕が残存している。側面の凹面側にわずかに面取りを施す。焼成は良好で堅緻、暗赤褐色を呈する。

6732型式 中心飾りは上向きの三葉文を上へ巻く唐草文で囲み、その上に対葉花文を置く。左右3回反転の均整唐草文で、外区には大粒の珠文をやや疎に配する。A・C～O・Q～S・U～X・Zの22種があり、A・C・Oが出土した。

A(15点、図78) 曲線顎Ⅱで、粘土帯を貼り付けて成形し、横方向のナデ調整を施す(図版93)。平瓦部凸面は縦方向の縄叩き痕が残る。凹面は瓦当寄りにわずかに横方向のナデ調整を加え、大部分は布圧痕が残存する。側縁部の面取りはやや広く、凹面側に大きく傾いている。焼成はやや不良で、淡灰色～灰黒色を呈する。

C(21点、図78) 曲線顎Ⅱで、横方向のナデ調整を施す。平瓦部凸面は縦方向の縄叩き痕が残る(図版93)。凹面は瓦当から平瓦部中程までに横方向のナデ調整を施し、布圧痕を残す。枠板



図77 軒平瓦 11

痕がなく一枚作りと判断される。側面の凹面側に面取りが認められず、凹面側の一部にヘラケズリ調整を施す。焼成は不良で、淡褐色～黒褐色を呈する。

○(2点、図78) 曲線顎Ⅱで、顎部付近にナデ調整を施す(方向は不明)。平瓦部凸面には縦方向の縄叩き痕が残る。凹面は瓦当寄りに横方向のナデ調整を施し、あとは布圧痕が残存する。焼成は良好で、暗灰色を呈する。

6760 型式 **6760型式** 中心飾りとして唐草文の間に花文を置く。4回反転の均整唐草文で、各单位が連結して一連の文様をなす。外区には珠文を配する。A・Bの2種があり、Aが出土した。

A(1点、図79) Bに比して外区の珠文が小ぶりである。瓦当右端部を含むわずかな破片のみ出土した。瓦当面に近づくと厚さを増す直線顎と推定され、厚さを増すために粘土を貼り付けた痕跡が認められる。顎部には縦方向の縄叩き痕を横方向のナデ調整で擦り消した痕跡がある。焼成はやや不良でわずかに軟質、淡灰色を呈する。

6763 型式 **6763型式** 中心飾りは上向きの三葉文で、3回反転の均整唐草文である。第1単位の基部は中心の三葉文より派生し、下向きに巻く。外区には大粒の珠文をやや疎に配する。A～Cの3種があり、Aが出土した。

A(1点、図79) 第2単位第1支葉が1本である。曲線顎Ⅱであるが、形状は段顎ⅠSに近い(図版93)。粘土帯を貼り付けたのち、横方向のナデ調整を加える。平瓦部凸面は縦方向のナデ調整を施す。瓦当外縁と凹面の瓦当寄りには工具による横方向のナデ調整が顕著である。側面の凹面側に幅広い面取りを施す。それ以外には布圧痕が残存する。焼成は良好で堅緻、暗灰色を呈する。

調整を施す。瓦当外縁と凹面の瓦当寄りには工具による横方向のナデ調整が顕著である。側面の凹面側に幅広い面取りを施す。それ以外には布圧痕が残存する。焼成は良好で堅緻、暗灰色を呈する。

新 型 式

新型式(図79) 『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』には含まれない新型式と思われる軒平瓦が出土した。ただし、瓦当左端部を含むわずかな破片のため、全体像がわからず、型式番号等を設定することができなかった。今後、出土例が増加した際に改めて設定することにして、特徴のみを記述する。外区には珠文がなく、2重の圏線が巡る。唐草文は大きく変形しており、既存の型式では6710Daに近い。曲線顎Ⅱである。破片のため、それ以外は不明である。焼成は不良で軟質、赤褐色を呈する。

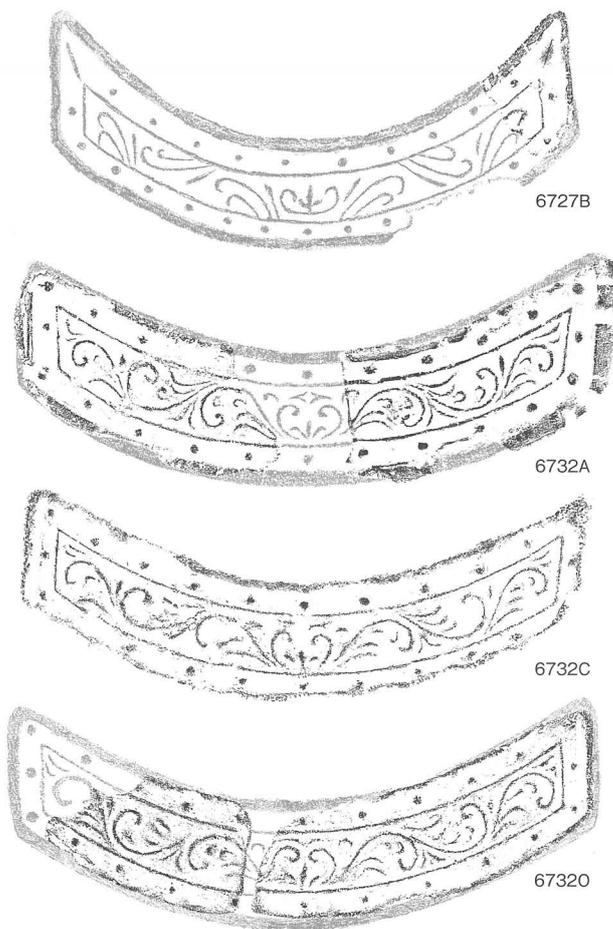


図78 軒平瓦12

C 丸瓦 (図版94～98)

第一次大極殿院地区で本報告の対象範囲から出土した丸瓦の総点数は39,066点であり、総重量は3,719.42kgである¹⁾。その出土分布は、図80に掲げたとおりである。これをみると、基本的には第一次大極殿院築地回廊に沿って分布していることから、出土した丸瓦を築地回廊所用のものとして判断して差し支えない。しかし、これらの丸瓦には、形式的にさほど差異が認められない。これは、奈良時代を通じた丸瓦の形式的変遷をうかがい知ることが難しいことも理由の一つであるが、基本的に出土した丸瓦の斉一性がきわめて高いことを示している。

丸瓦は、いずれも杵状の模骨に粘土板を巻き付けたのち、丸瓦の肩部に粘土を付加して成形する。そして、丸瓦部凸面に縄叩きを施すことによって叩き締め、最後に凸面にナデ調整やハケ調整を施す。凹面は未調整のままである。その後乾燥過程を経たうえで、二つに分割している。その際、分割面にヘラケズリ調整を施す場合もあるが、多くは分割破面を残したままである。玉縁部は凸面同様に、横方向のナデ調整を施している。以下、それぞれの個体ごとに説明を加える。

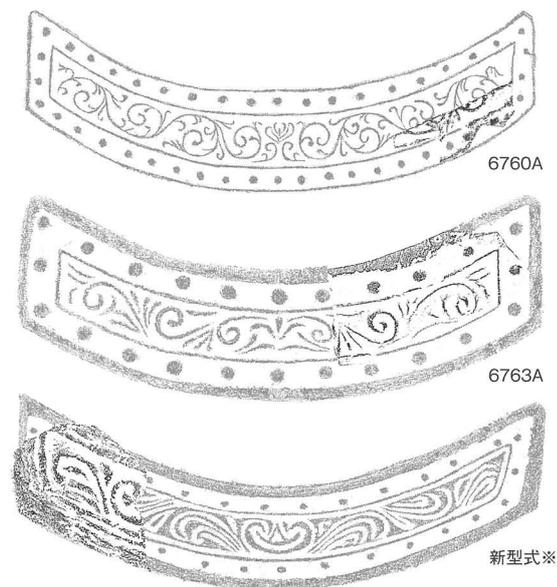
1～3は縦方向の縄叩きののちに、横方向または斜め方向のナデ調整を施すものである。

1は全長39.2cm、幅16.0cm、厚さ1.8cm、玉縁長5.6cmである。凸面端部寄りと肩部および玉縁部にヨコナデ調整を施すが、凸面中央部には縦方向の縄叩きの痕跡が認められる。凹面は未調整のため、布圧痕と糸切り痕が残存している。側面は分割ののち、一応はヘラケズリ調整を施しているが、両側面ともに外側部分に分割の際の破面がそのまま残されている。

2は残存長36.8cm、幅16.2cm、厚さ1.4cmであり、玉縁部を欠損している。凸面はかなり摩滅が激しいが、凸面は縦方向の縄叩きののちに、横方向のナデ調整を施している。凹面には布圧痕の他に、粘土板の合わせ目が明瞭に残る。側面は両側ともヘラケズリ調整を施し、分割破面の痕跡は認められない。また、側面のヘラケズリ調整は凹面の側面寄りにも一部およんでいる。

3は全長37.7cm、幅17.1cm、厚さ2.0cm、玉縁長5.1cmである。凸面は縦方向の縄叩きののち、狭端側より斜め方向のナデ調整を施す。玉縁部は横方向のナデ調整で仕上げるが、一部に指頭圧痕が残されている。凹面は布圧痕のほか、一部に糸切り痕が確認できる。側面はヘラケズリ調整を施すが、分割破面を残す部分がある。また、凹面の側面寄りと端部寄りの部分にもヘラケズリ調整がおよんでいる。

4～8は縦方向の縄叩きののちに、工具による縦方向のナデ調整を施すものである。4は



※新形式の下の拓本は6710Daを使用

図 79 軒平瓦 13

出土点数と
重量

製作技法

全長37.2cm、幅15.0cm、厚さ1.5cm、玉縁長5.0cmである。肩部は粘土が一部剥離しており、その剥離した面には糸切り痕が認められる。凹面には布圧痕や糸切り痕のほか、分割の際の目印となる分割界線や、布綴じの圧痕が残されている。側面にヘラケズリ調整を施し、分割破面は残さない。なお、凹面の端面寄りもヘラケズリ調整が認められる。

5は全長33.4cm、幅14.8cm、厚さ2.1cm、玉縁長4.8cmである。玉縁部から肩部にかけては横方向のナデ調整を施すが、それ以外の部分は縦方向の工具によるナデ調整を施す。一部、凸面の端部寄りに横方向のヘラケズリ調整が認められる。凹面は布圧痕以外に顕著な痕跡はない。側面はヘラケズリ調整を施し、わずかに分割破面の痕跡が残る程度である。

6は全長33.7cm、幅12.4cm、厚さ2.1cm、玉縁長4.4cmである。全体的に摩滅が進行しているが、玉縁部から肩部にかけては横方向のナデ調整を施し、それ以外の部分は工具による縦方向のナデ調整を施しているようである。凹面も布圧痕以外の顕著な痕跡は認められず、わずかに端部寄りに横方向のヘラケズリ調整が確認できるのみである。側面もヘラケズリ調整を施すが、一部に分割破面の痕跡が残されている。

大型の丸瓦

7・8はやや大型の個体である。7は全長39.7cm、幅19.2cm、厚さ3.3cm、玉縁長5.4cmの非常に厚手の個体である。凸面の調整は4～6と大差ないが、玉縁部の一部に縦方向のナデ調整が認められる。凹面には布圧痕が認められるとともに、端部寄りの3～6cmの範囲にかけて横方向のヘラケズリ調整がみられる。側面もヘラケズリ調整を施しているが、分割破面が大きく残されている。8は残存長39.5cm、幅20.4cm、厚さ2.3cmで、玉縁部は残存していない。この個体の最大の特徴は端部寄りに粘土紐を積み上げた痕跡が残っていることである。それによると、おおむね3.5cm幅の粘土紐を積み上げているようである。ただし、それ以外の特徴は4～7とほとんど変わらない。

玉縁が台形の丸瓦

9・10は凸面の調整は他のものと変わらないが、玉縁部が先端に向かって徐々にすぼまって典型的な台形を示すものである。これらの個体の特徴として、側面から玉縁部まで一連のヘラケズリ調整を施し、分割破面を残さない点が挙げられる。9は全長39.7cm、幅16.0cm、厚さ1.8cm、玉縁長5.9cmである。凸面は縦方向の縄叩きののちに工具による縦方向のナデ調整を施し、玉縁部に横方向のナデ調整を施す。凹面は布圧痕以外に顕著な痕跡はみあたらないが、端部寄りに横方向のヘラケズリ調整を施している。10は残存長32.8cm、幅15.8cm、厚さ1.5cmであり、端部を欠損している。調整技法は9と変わらないが、凹面には糸切り痕のほか、紐状の分割界線の圧痕が残っている。

11・12はやや細身の個体である。11は残存長35.6cm、幅14.4cm、厚さ1.4cmで、端部を欠損している。凸面には横方向から斜め方向にかけてのナデ調整を施している。一部、玉縁部と肩部に沈線がみられるが、これはおそらく意図的なものではなく、工具の傷などによるものと考えられる。凹面には布圧痕以外の顕著な痕跡はない。側面はヘラケズリ調整を施すが、両側面の外側に分割破面が残る。12は残存長35.5cm、幅14.2cm、厚さ1.2cmで、端部を欠損している。凸面は縦方向のナデ調整を施し、玉縁部に縦方向のナデ調整を施す。それ以外は11とほぼ同じ調整技法である。

凸面ハケ調整

13～16は凸面に横方向のハケ調整を施すものである。これらの個体の特徴として、いずれも粘土紐を積み上げた痕跡が認められる点が挙げられる。13は残存長24.2cm、幅17.4cm、厚さ

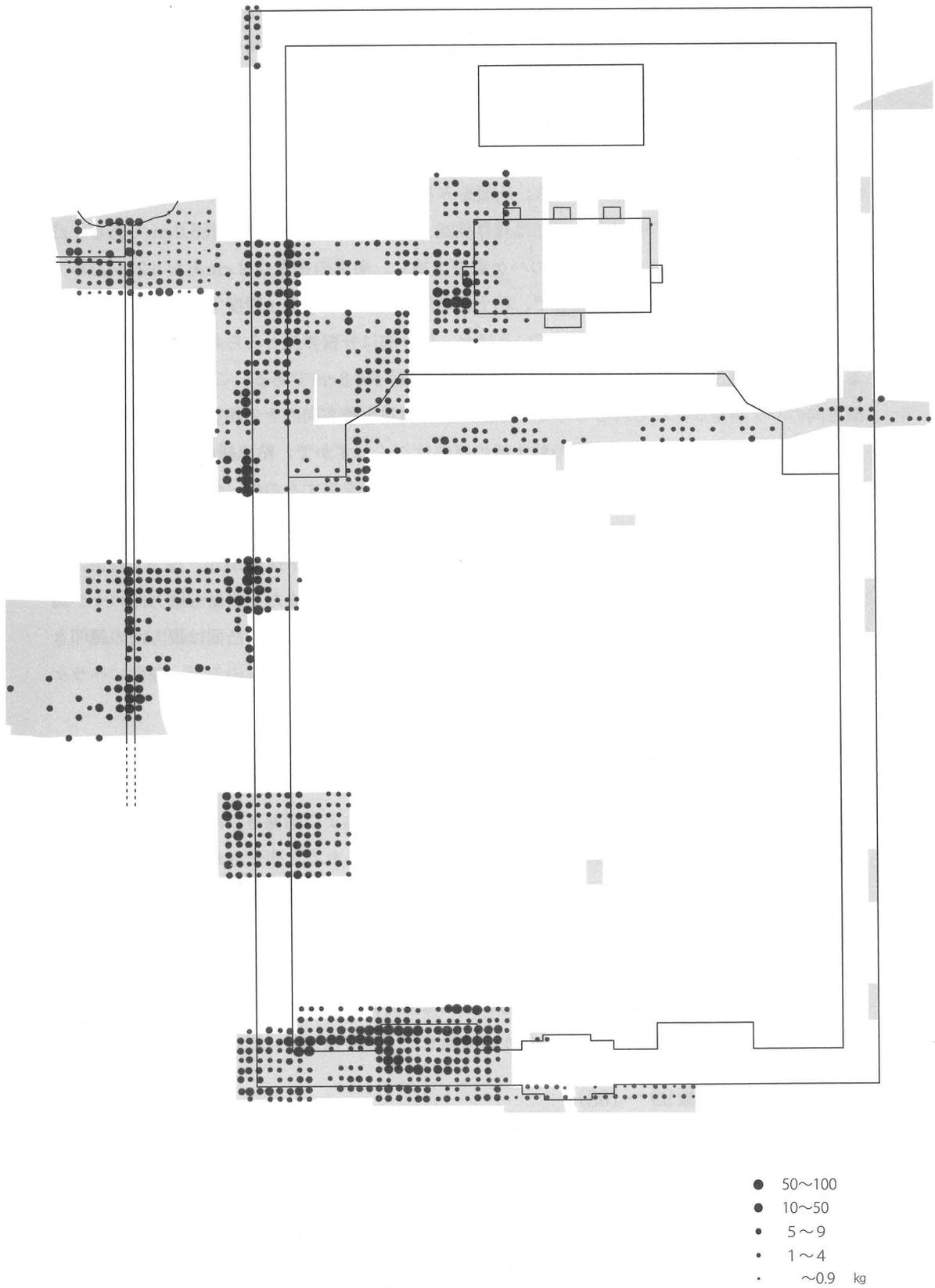


図 80 丸瓦の出土分布

1.9cm、玉縁長5.8cmで、体部を大きく欠損する。凸面は縦方向の縄叩きののちに横方向のハケ調整を施す。条痕の密度は2cmあたり11本である。玉縁部は横方向のナデ調整を施す。凹面には、おおむね3.3cm幅の粘土紐を積み上げた痕跡が認められる。側面はヘラケズリ調整を施し、分割破面は残っていない。14は残存長23.2cm、厚さ2.3cm、玉縁長5.4cmである。凸面は横方向のハケ調整を施し、条痕の密度は2cmあたり8～14本である。ただし、ハケ調整ののちに縦方向のナデ調整を加えている。凸面をみると、粘土紐の痕跡はごくわずかしが残っておらず、粘土紐の幅は不明である。15は残存長28.8cm、厚さ1.7cm、玉縁長6.0cmである。凸面は縦方向の縄叩きののちに横方向のハケ調整を施し、条痕の密度は2cmあたり21～23本である。凸面には粘土紐の痕跡が顕著で、粘土紐の幅はおおむね3.0cm程度である。また玉縁部の端面寄りにヘラケズリ調整を施しているほか、部分的に分割界線とみられる圧痕が残っている。16は残存長30.5cm、幅16.3cm、厚さ1.9cm、玉縁長6.8cmである。これは玉縁部にのみ横方向のハケ調整が認められるもので、体部は肩部周辺を横方向のナデ調整、それ以外は縦方向のナデ調整を施している。凹面の粘土紐の痕跡はごくわずかで、粘土紐の幅は不明である。なお、布綴じの圧痕が顕著に残る。側面にヘラケズリ調整を施すものの、分割破面が残存している。

玉縁突帯 17・19は玉縁部に水切りの突帯を設けるものである。17は残存長16.8cm、厚さ1.4cm、玉縁長5.2cmで、凸面は縦方向の粗い工具によるナデ調整を施す。また、凹面も縦方向のナデ調整を粗く施している。19は残存長31.8cm、幅7.0cm、玉縁長5.7cmで、凸面は縦方向の縄叩きののち、工具による横方向のナデ調整を施す。凹面は布圧痕が残存するのみで、側面にヘラケズリ調整をするものの、分割破面が明瞭に残っている。

短い丸瓦 18・20は極端に短い体部をもつ、特異な形状をした丸瓦である。18は全長12.7cm、幅13.8cm、厚さ1.4cm、玉縁長5.1cm。20は残存長18.2cm、厚さ2.2cmで、玉縁部を欠損している。いずれも凸面は横方向のナデ調整を施し、凹面の側面および端面寄りにヘラケズリ調整を施す。これらの丸瓦は、おそらくは降棟の長さ調整に用いられたと想定される。

21は残存長4.8cm、厚さ2.1cmの端部の破片である。焼成が非常に堅緻であり、かつ粘土紐の痕跡を残すのが特徴である。粘土紐の幅はおおむね3～5cm程度である。22は極端に玉縁部が長い個体で、残存長25.4cm、厚さ3.0cm、玉縁長8.8cmである。大半が欠損しているが、復原すると長大な丸瓦になると考えられる。凸面は横方向のナデ調整で、玉縁部には指頭圧痕が顕著に残っている。凹面は布圧痕のほか、布綴じの圧痕が残っているのみである。

D 平瓦 (図版99～103)

出土点数と重量 第一次大極殿院地区の発掘調査で本報告の対象範囲から出土した瓦磚類のうち、もっとも多いのが平瓦である。総出土点数は142,489点、その総重量は12,165.52kgに達する²⁾。その出土分布を図81に掲げた。これをみると、丸瓦と同様、第一次大極殿院築地回廊に沿って分布していることがわかる。したがって、出土した平瓦の多くは第一次大極殿院築地回廊に用いられていた可能性が高い。出土した平瓦の大半は破片であるが、その中で、比較的全形を復原できたものについて報告する。出土した平瓦の多くは、その凹面に杵板痕や糸切り痕が認められるので、粘土板桶巻き作りで製作されたことがわかる。いわゆる一枚作りの平瓦も存在するが、その数

は決して多くない。凸面には縦方向の縄叩きを施しており、部分的にナデ調整を施す。側縁部は桶から分割したのちに調整を加え、凹面と側面のなす角度が鋭角になるように調整する。これらの特徴を踏まえたうえで、以下ではそれぞれの個体について詳述する。

1・2はもっとも典型的な、平面形が台形をなす平瓦である。1は全長34.2cm、狭端幅21.7cm、広端幅26.3cm、厚さ2.0cmである。凹面には布圧痕や杵板痕のほか、狭端寄り4cm程度の範囲に横方向のナデ調整が、そして両側面寄りと凹面右側にかけて縦方向のナデ調整が施されている。杵板痕は幅2.5cm前後で、布目の密度は1cmあたり9本である。一部には縦方向に走る糸切り痕も確認できる。凸面は縦方向の縄叩きが残るが、狭端から4～6cm程度の範囲と、広端から8～9cmの範囲には横方向のナデ調整を加え、縄叩き痕を一部擦り消している。縄の密度は2cmあたり9本程度である。

台形の平瓦

2は全長34.5cm、狭端幅21.3cm、広端幅25.6cm、厚さ1.9cmである。凹面には布圧痕と模骨の杵板痕が良好に残っている。布目の密度は1cmあたり10本で、杵板痕の幅は2.9cmである。このほか、凹面の狭端・広端・両側縁に沿って、幅1～2cmの範囲にヘラケズリ調整が認められる。凸面には、他の個体に比してやや斜めに傾いた方向に縦方向の縄叩きを施している。縄の密度は2cmあたり9～10本である。狭端から5～6cmの範囲と広端から3～4cmの範囲に横方向のナデ調整を加え、一部縄叩き痕を擦り消している。

3は狭端幅と広端幅の差がほとんどなく、その平面形が長方形をなす平瓦である。その形状から、おそらくは径がほぼ一定の円筒形の桶を用いて製作したと考えられる。3は全長36.5cm、狭端幅26.4cm、広端幅27.7cm、厚さ2.1cmである。凹面は全体的に摩滅が進行しており、表面の状況を明確にうかがい知ることはできないが、布圧痕や杵板痕、糸切り痕などをわずかに判別することができる。杵板痕の幅は3.5cm前後である。凸面は縦方向の縄叩きを狭端から広端にいたるまで全面に施している。縄の密度は2cmあたり8本である。

長方形の平瓦

4は上原真人氏の分類による「恭仁宮B型式」の平瓦である³⁾。全長38.5cm、狭端幅26.2cm、広端幅28.8cm、厚さ1.8cmである。凹面は大部分に縦方向の、一部に横方向のナデ調整を施し、布圧痕はわずかに残存するのみである。一部、狭端寄りと広端寄りに横方向のヘラケズリ調整を加え、わずかに面取りをおこなう。また、広端右隅あたりには「国万呂」の刻印が狭端を下にした場合に文字が正位置となる方向で押され、それにとまなう棒状圧痕も認められる。凸面には縦方向の縄叩きを施すが、狭端から10～12cmの範囲には横方向の工具によるナデ調整を施している。縄の密度は2cmあたり8本である。なお、この恭仁宮B型式の平瓦は一枚作りと考えられている⁴⁾。

恭仁宮の平瓦

5～7も狭端幅と広端幅の差がほとんどないことから円筒形の桶を用いたと推定できるが、3に比してきわめて厚手である。5は全長35.2cm、狭端幅24.5cm、広端幅25.0cm、厚さ3.2cmである。凹面には布圧痕と杵板痕が明瞭に残っており、布目の密度は1cmあたり8本で、杵板痕の幅は2.5cm前後である。一部に、縦方向に走る糸切り痕も認められる。凸面には縦方向の縄叩きが施され、縄の密度は2cmあたり8本である。広端から7cm前後の範囲を横方向のナデ調整で擦り消している。なお、狭端縁には2箇所、指頭圧痕が認められる。

厚手の平瓦

6は全長34.8cm、狭端幅26.2cm、広端幅27.2cm、厚さ3.0～4.0cmである。凹面には布圧痕と杵板痕のほか、縦方向の円弧状に走る糸切り痕が明瞭に残る。布目の密度は1cmあたり10

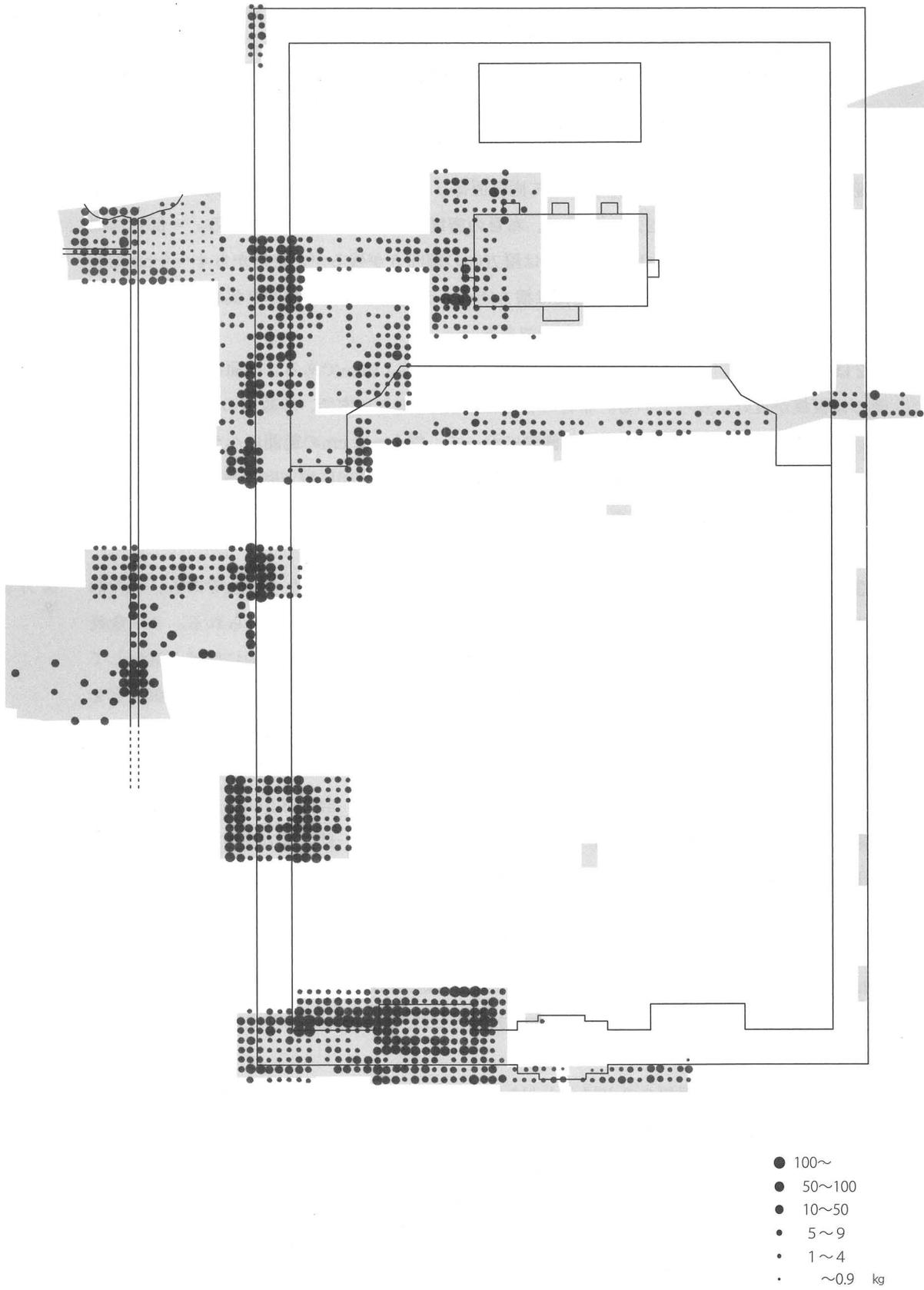


図 81 平瓦の出土分布

本で、杵板痕の幅は2.8cm前後である。また、片側の側縁については、凹面側にヘラケズリ調整による面取りをおこなっている。凸面には縦方向の縄叩きが施され、縄の密度は2 cmあたり8本である。広端から4～5 cm程度の範囲に横方向のナデ調整を加え、縄叩き痕を擦り消している。なお、この個体の凸面には側面と平行に大きく色調の異なる境界があり、この個体がかつてどのように使用されていたかについて、重要な手がかりとなる。

7は全長35.5cm、幅26.5cm（欠損のため狭端幅と広端幅は測定できず）、厚さ3.5cmである。この平瓦は凹凸両面ともに縦方向の縄叩きを全面に施す。縄の密度は凹凸両面ともに2 cmあたり7～8本である。おそらくは5・6のような平瓦を、凹形成形台のようなものに載せて凹面に縄叩きを施したものと推定される。

8は一枚作りの平瓦である。全長35.0cm、狭端幅22.8cm、広端幅25.0cm、厚さ2.1cmである。凹面に杵板痕はなく、全面に布圧痕が残る。布目の密度は1 cmあたり5本ときわめて粗い。両側縁寄りには幅1～2 cmにわたってヘラケズリ調整を施す。凸面には縦方向の縄叩きを施すが、広端から3～10cm程度の範囲には、横方向のナデ調整や縦方向に指でナデつけるような痕跡が認められる。なお、縄の密度は2 cmあたり6本と少なく、全体的に粗い印象を受ける。

9はやや小型の平瓦である。残存長31.0cm、狭端幅21.2cm、厚さ1.8cmである。凹面にはほぼ全面にわたって縦方向ないし横方向のナデ調整を施し、布圧痕と杵板痕はわずかに確認できるのみである。凸面には縦方向の縄叩きを施すが、狭端から7～8 cmの範囲は横方向の工具によるナデ調整で縄叩き痕を擦り消している。なお、縄の密度は2 cmあたり8本である。また、この平瓦の側面と凹面のなす角度は90°に近く、他の平瓦のように鋭角になるまで調整を加えていない点で、特徴的である。

10～13は隅切平瓦である。いずれも凹面には布圧痕と模骨の杵板痕が、凸面では縦方向の縄叩き痕が認められることから、1・2のような平瓦の広端部を切り落として成形しているものと考えられる。切り落としたのちは、ヘラケズリ調整によって面を整えている。10の凸面には側縁から2.5cm程度の範囲に変色が認められる。11の凸面の広端から3 cm程度の範囲にはヘラケズリ調整の痕跡が残る。12の凹面には粘土板の合わせ目とともに、布綴じの圧痕も認められる。13の凸面の広端から4 cm程度の範囲は横方向のナデ調整によって縄叩き痕を擦り消している。

E 鬼瓦 (図版104)

いずれも鬼の全身を表す、毛利光俊彦氏の分類による平城宮式鬼瓦 I 式 A である（『研究論集 VI 奈良国立文化財研究所学報第38冊』）。外縁は傾斜縁で、側面に1.5cm前後の幅で範端痕が確認できる。したがって、瓦範は側面におよぶタイプであることがわかる。製作に際しては、まず瓦範に1.0～1.5cm前後の厚みで粘土を詰めていき、そののちに粘土塊を詰めて成形する。厚手のものと薄手のものが存在する。裏面は不定方向のナデ調整を施し、側面は横方向のナデ調整を施す。焼成前に眉間の部分と腹部に、方形の釘孔を穿孔するが、眉間では一辺1.0cm、腹部では一辺1.4cmと若干大きさが異なる。残りの良い個体では眉間の釘孔の周囲に円圈が巡らされている。また、下端中央には半円形の削り方があるが、これはすでに瓦範の段階で範囲が決められており、瓦範から鬼瓦を取り外したのち、その範囲を削り抜くことによって削り方

両面タタキ

一枚作り

小型の平瓦

隅切平瓦

I 式 A

を作ったようである⁵⁾。

1～4は厚さ7cm程度の厚手の部類に属するものである。1は頭部右側周辺の破片で、側面には範端痕が明瞭に残る。2は頭部右側の巻毛状表現がよく残っている。外縁は破損して残っていない。3は下端部の右側周辺の破片で、文様の一部のみが残存する。南面築地回廊出土。4も同じく下端部右側の破片である。5は厚さ不明の細片である。文様の残存部から右手周辺破片であることがわかる。6は唯一の全形がわかる個体である。高さ39.4cm、幅43.0cm、厚さ6.3cmの薄手の部類に属するものである。範詰め当初に薄く粘土を貼った部分が大きく欠損しており、文様の残存状況はさほど良くない。外縁も破損して残存していない。削り方は幅13.7cm、高さ7.8cmのやや平たい半円形をなす。裏面は腹部の穿孔部分を中心に若干くぼんだ形状をなす。

F 隅木蓋瓦 (図版105)

西楼出土 4点の出土を確認できる。いずれも西楼SB18500柱抜取穴より出土した。これらの諸特徴は、千田剛道氏の分類による平城宮A型式⁶⁾に似るが、わずかに細部が異なる。しかも確認できた隅木蓋瓦片は最低でも2個体分あり、その両者に関しても細部に差がみられる。したがって、平城宮A型式を細分することにし、東楼SB7802出土品から復原したものをA1型式⁷⁾、報告する2個体分をそれぞれA2・A3型式とする。なお、A1型式の詳細についてはここでは触れず、既報告の文章を参照されたい(『平城報告XI』)。

A2型式 A2型式(3点) 瓦当右半部(3・4)と削り込み部の破片(1)が出土している。瓦当文様は左右4反転の花雲文と考えられるが、薬師寺出土品同様に瓦当文様の上下が逆転している。外区の珠文も、より密である。下面両側縁に幅1.5cm、高さ1.0cm程度の細い凸帯をもつ。そして上面中央部に背稜をもつのが最大の特徴である。後部には大きく削り込みが設けられ、その角度はほぼ80°である。また、背稜を挟み左右対称の位置に一辺1.5cm程度の方形の釘孔が一对設けられている。側面に平行する方向でナデ調整が丁寧に施され、きわめて平滑に仕上げられる。これらは型作りで成形され、その型は背稜が下を向き、上となる下面両側端の凸帯部までおよぶ構造と推定される。成形後、型から取り外した時点で背稜が上になるように据え、瓦範による施文と釘孔の設定がおこなわれ、最終的に全体をナデ調整で仕上げたようである。

A3型式 A3型式(1点) 瓦当右半部の破片(2)が出土したのみである。左右4反転の花雲文をもつと考えられるが、A1型式と同様に中央飾りが上を向くように配されている。ただし、A2型式の範が逆転して押捺されたものである可能性がある。下面側端の凸帯部はA2型式よりもやや幅が広い(2.0～2.5cm)。製作技法等はA2型式とほぼ同じであるが、背稜の有無は不明である。

G 面戸瓦 (図版106)

2種類の面戸瓦 焼成前に丸瓦を加工して成形した面戸瓦が115点出土した。奈良時代の面戸瓦には、大棟などに用いられるT字形ないし逆台形をなす蟹面戸と、降棟に用いられる平行四辺形の鯉面戸があるが、確認できた面戸瓦はほぼすべてが蟹面戸である。T字形をなす蟹面戸を蟹面戸I類とする。これはいわゆる「被せ面戸」で、丸瓦の間に納まる舌部と、丸瓦の上に被る袖部からなる。平面形が逆台形をなし、舌部のみからなるものを蟹面戸II類とする。

1・2は蟹面戸Ⅰ類である。1は幅28.5cm、径14.5cm、舌部の幅が13.5cmである。袖部は丸瓦の形状をほぼそのまま残しており、袖部の端部付近から舌部の左右両側縁部の凹面に、ヘラケズリ調整を連続して施し、面取りを施す。袖部の両端は一部欠損しているが、これは寸法を合わせるために意識的に打ち欠いたものかもしれない。舌部は比較的幅広に面取りを施しており、薄手に仕上げている。2は幅24.7cm、径14.6cm、舌部の幅が13.1cmである。1と同様、袖部は丸瓦の形状をそのまま残しているが、この個体は袖部の端部も丸瓦先端部の形状をそのまま残している。そして袖部の端部付近から舌部凹面にかけて一連の面取りを施しているが、1と比べて面取りの幅が狭く、さほど丹念でないため、全体として厚手である。

蟹面戸Ⅰ類

3・4・7は蟹面戸Ⅱ類である。3は幅24.3cm、径14.7cm、舌部の幅が10.5cmである。丸瓦の側面の形状が両端にそのまま残る。両側縁部はかなり破損しているが、凹面の一部に面取りが残る。4は残存幅11.1cm、残存径9.8cmの細片である。丸瓦の筒部だけでなく、玉縁部も利用しており、凸面側では筒部と玉縁部の間の段を斜めに削り落としている。凹面は、面取りを比較的幅広く施し、舌部の両側縁部をやや薄手に仕上げる。7は大型の蟹面戸Ⅱ類である。残存幅19.0cm、残存径17.0cm、舌部の幅が9.8cmである。厚さが3.0cmもあるため、非常に大型の印象を受ける。そしてこの厚みのため、側縁部から舌部にかけて、面取りを非常に幅広く施している。

蟹面戸Ⅱ類

5・6はやや特殊な面戸瓦である。5は残存幅12.7cm、残存径12.2cmで、丸瓦筒部の長軸に対して斜め方向に、2面の面取りが「V」字状に施される。全体形が判然としないために詳細は不明だが、やや特殊な鱈面戸となる可能性がある。6は残存幅19.8cm、残存径8.7cmのやや細長い面戸瓦であるが、これも全体形が判然としない。舌部凹面に幅広の面取りを施すが、他の面戸瓦に比べ舌部の幅がかなり広い。また、側縁部は丸く張り出した形状である。これも特殊な形状の鱈面戸となる可能性があるだろう。

特殊な
面戸瓦

H 熨斗瓦 (図版107)

焼成前に平瓦を分割するか、平瓦に切り込みを入れたうえで焼成後に分割する「切熨斗」が59点出土した。平瓦を焼成前に加工せず、焼成後に割って用いる「割熨斗」も存在したと考えられるが、それらと割れた平瓦片との区別は非常に困難であるため、切熨斗のみを報告の対象とする。これらの熨斗瓦はすべてが粘土板桶巻き技法によるもので、一枚作りの切熨斗は確認されなかった。これについては、一枚作りが導入された段階には切熨斗よりも割熨斗が多用されていたとの指摘がある⁹⁾。

切熨斗瓦

切熨斗は粘土板桶巻き技法によってつくられ、多くは焼成前に分割される。しかし、この分割方法にも2種類があることから、それぞれⅠ類・Ⅱ類として分類する。

Ⅰ類(1~3) 熨斗瓦の凹面と両側面のなす角度がほぼ90°となるものである。平瓦の項でも触れたように、通常、粘土板桶巻き技法によってつくられた平瓦は、分割されたのちに側面と凹面のなす角度が鋭角になるように調整される。ところが、このⅠ類の熨斗瓦は両側面ともに凹面との角度が90°のままであり、分割されたのち、破面にヘラケズリ調整を施すのみである。当初から熨斗瓦として平瓦と異なる手法で製作されたか、側面を鋭角に調整しない平瓦9のようなものを分割したか、あるいは平瓦を3つ以上に分割したうちの両端以外の部分と考えられ

Ⅰ類

る。1は幅10.0cmと比較的幅が狭いもので、厚さも2.9cmと他のものに比してやや厚めである。2は平均的な大きさで、幅16.3cm、厚みも1.6cmである。3は幅が18.7cmとやや大型で、凹面下端には杵板痕が良好に残っている。これらはいずれも凸面下端の縦方向の縄叩き痕をヨコナデ調整によって擦り消しており、平瓦1・2などを加工したものと考えられる。

II 類 II 類(4~7) 熨斗瓦の側面のいずれかと、凹面とのなす角度が鋭角となるものである。これは、平瓦の側面調整技法と同一であるため、平瓦を2分割したものと考えられる。いずれも粘土板桶巻き技法によるものである。4は幅16.6cm、厚さ1.9cmで、凸面の広端寄りの部分に縦方向の縄叩き痕を擦り消した痕跡が認められ、平瓦1・2を加工したものと考えられる。5は幅16.9cm、厚さ1.9cmで、凹面の狭端付近には1条の凹線が巡る。

6は熨斗瓦ではなく平瓦片であるが、凹面には長軸に沿った1条の沈線がある。焼成前に分割のための裁線を入れ、焼成後に分割して熨斗瓦として利用するはずが、何らかの事情でこの裁線に沿って分割されることがないまま残ったものと考えられる。凹凸両面ともにヨコナデ調整を施しており、側縁付近にはタテナデ調整も認められる。細片のため、詳細は明らかではないが、一枚作りの可能性もある。

7は焼成前の加工がない平瓦であるが、ほぼ2分されていることや破面が丁寧に打ち欠かれたような状況であることから、「割熨斗」の可能性はある。幅12.9cm、厚さ2.5cmで、凸面に平行方向の刻み目をもつ板による叩き痕が認められ、胎土も堅緻で焼成も非常に良好である。藤原宮所用の平瓦を分割した割熨斗と推定しておく。

I 文字瓦(図版108)

出土した文字瓦はヘラ書きが4点、刻印が4点のみである。うち、ヘラ書き2点(1・3)は判読できないため、単なる記号の可能性もあるが、ここであわせて報告する。

ヘラ書き瓦 1~4はヘラ書きが施されている。1は平瓦片で、矩形のヘラ書きが凹面広端右隅にある。平瓦にしては曲率が低く平坦であり、特殊な形状といえる。2は「卅五枚」とのヘラ書きがある熨斗瓦である。先に触れたように、側縁と凹面とのなす角が直角であるため、切熨斗瓦と判断できる。3は蟹面戸I類の凸面に弧線が描かれているものである。残存状況から判断すると、蟹面戸I類の左半分が右上から左上へと曲線を描くようにヘラ書きが施されている。丸瓦を切って面戸瓦を作る際の下描きである可能性もある。4は「□君奉」とのヘラ書きがある熨斗瓦である。幅13.6cm、厚さ1.4cmの切熨斗瓦であり、ヘラ書きは凹面に施されている。

刻印瓦 5~8は刻印瓦である。5は丸瓦の凸面の広端付近に「理」の刻印がある。文字の下半は欠損している。6は平瓦の端部(狭端部か)に「司」の刻印がある。平瓦の凸面には縦方向の縄叩きが施され、一部に離れ砂が確認できる。凹面は布圧痕と糸切り痕が残存し、端部付近は横方向のヘラケズリ調整が施される。一枚作りと推定できる。7は平瓦の狭端部に「十」の刻印がある。これも凸面には縦方向の縄叩きが施され、凹面には布圧痕が残存している。凹面の側縁部に近い部分にはタテナデ調整が施されている。これも一枚作りであろう。8は丸瓦の筒部の玉縁寄りに「理」の刻印がある。丸瓦筒部の長軸に対して文字が横位になるように押されている。丸瓦は残存長23.8cm、径14.6cm、厚さ1.8cm、玉縁長5.5cmであり、玉縁には1条の凸線が巡る。凸面は縦方向の縄叩きをタテナデ調整で丁寧に擦り消すが、そののちに横方向の

擦痕ないしは圧痕が認められる。それらの調整後に押印したようである。

J 磚 (図版109)

全部で451点出土した。出土した磚のうち、原位置をとどめて出土したものは磚積擁壁SX6600のものに限られ、それ以外はすべて柱抜取穴や包含層から出土している。ただし、磚積擁壁SX6600に用いられている磚は、他所で出土した磚と法量や製作技術がほぼ同じである。

磚はその形状から大きく2つに分類できる。1つは、平面形が長方形をなすもので、出土した磚の9割以上を占めている。もう1つは、全形を保っているものは確認できないものの、正方形に近い形状に復原できるものである。長方形をなす磚は、おおむね長さ29cm前後、幅15cm前後、厚さ8cm前後の法量をもつ。いずれも各面をナデ調整で仕上げている。

磚の分類

長方形をなす磚のなかには、剥離面に指頭圧痕を明瞭に残すものがある(図版109-7)。これは、磚が木枠あるいは箱のようなものに粘土を詰めることによってつくられたことを示しており、まず木枠あるいは箱の隅から詰め始め、そこから2~3回に分けて粘土を詰めたものと考えられる。

磚の断面形は、上下面の幅が2~3mm程度異なり、わずかに台形を呈する。これは、粘土を詰めた後取り出しやすいように木枠あるいは箱の側板をわずかに傾け、一方に開くような形状であったためと考えられる。

1~8は長方形の磚である。1は長さ29.8cm、幅16.5cm、厚さ8.0cmである。全面にナデ調整を施しているが、磚の下面、すなわち粘土を詰める際の上面には布圧痕や、指頭圧痕がわずかに残されている。2は長さ29.0cm、幅15.0cm、厚さ7.5cmである。この個体は上面と側面をナデ調整によって丹念に調整しているが、磚の下面、すなわち粘土を詰める際の上面についてはナデ調整が施されておらず、粘土を詰めた際の粘土皺などが明瞭に残されている。3は長さ29.0cm、幅15.0cm、厚さ8.4cmである。全面にナデ調整が施されているが、焼成が不良のため、やや摩滅が進んでいる。4は長さ26.0cm、幅14.5cm、厚さ8.1cmのわずかに小型の個体である。これも3と同様、焼成が良好でなく、軟質であるため、表面は摩滅・風化が進んでいるが、全面にナデ調整が施されていたようである。5は長さ29.5cm、幅11.5cm、厚さ8.3cmの細長い形状をした長方形の磚である。一方の短辺付近(図版109-5下側)は、一部が粘土を詰める際の作業面で剥離して欠損し、段差がついたような状態となっている。他の個体では粘土詰め作業面で層状に剥離することが多いが、この個体では側面が比較的垂直を保ったまま欠損している。したがって、磚の焼成後に何らかの要因で側面を削り取っている可能性が高い。なお、このような焼成後の加工は他の個体においてもいくつか認められる。6は長さ26.5cm、幅14.4cm、厚さ8.3cmである。法量が4とほぼ同じで、同じ型で作られている可能性が高い。この個体も表面の摩滅が著しいが、全面にナデ調整を施しており、一部には工具によるナデ調整が認められる。7は残存長15.2cm、幅15.0cm、厚さ8.1cmである。全面にナデ調整を施すが、この個体は粘土詰め作業面で層状に大きく剥離している。剥離面には一面に指頭圧痕が残る。剥離面が全体の厚さの中程で生じていることから、この個体では粘土詰めが大きく2回に分けておこなわれていたことがわかる。8は残存長14.2cm、残存幅10.0cm、厚さ8.0cmである。全面にナデ調整を施しているが、側面にはわずかに布圧痕が認められる。どの段階でつ

長方形の磚

いたかは不明である。

正方形の磚

9・10は正方形の磚と考えられる個体である。9は残存長19.5cm、幅26.0cm、厚さ8.0cmである。全面にナデ調整を施している点や、剥離部の状況から、木枠ないし箱に詰めたような痕跡も認められることから、基本的には長方形の磚と同様の特徴を有しているといえる。10は残存長19.2cm、幅25.5cm、厚さ8.0cmである。全面ナデ調整を施すなど、9と同様の特徴を有している。

-
- | | |
|---|--|
| 1) 第170次調査出土の丸・平瓦は、未整理のため、本報告から除外している。 | 技術から見た平城宮式鬼瓦と南都七大寺式鬼瓦の変遷」(『史林』第84巻第3号)。 |
| 2) 注1参照。 | 6) 千田剛道1991「平城宮の隅木蓋瓦」(『奈良国立文化財研究所紀要1991』)。 |
| 3) 上原真人1984「平・丸瓦」(『恭仁宮跡発掘調査報告 瓦編』京都府教育委員会)。 | 7) 注6参照。 |
| 4) 注3参照。 | 8) 清野孝之2004「平城宮の熨斗瓦」(『奈良文化財研究所紀要2004』)。 |
| 5) 岩戸晶子2001「奈良時代の鬼面文鬼瓦一瓦葺 | |

3 土 器

土器の器形や成形・調整手法や胎土による群別、および年代観（平城宮土器Ⅰ～Ⅶ）については、既刊の『平城宮発掘調査報告』に準じる。しかし頻出する用語については、下記のとおり再説しておこう。

土師器の食器類（杯・皿・碗など）は、その調整時に採用した手法・仕上がり時の状態から分類が可能である。ひとつめはa手法といい、口縁部の外面をヨコナデで整えるが、底部を不調整にとどめるか、不定方向の粗いナデを施して仕上げる場合である。この手法では底部外面に成形時の指頭圧痕を残し、ときに木葉痕をとどめる。この状態からさらに進み、底部外面をヘラケズリで整えるのがb手法で、ヘラケズリが底部にとどまらず口縁端部までおよぼc手法となる。これに対し、口縁部直下に幅の狭いヨコナデを施し、これより下位を不調整にとどめる手法をe手法という。e手法の土器は主として小形品であり、丸味を帯びる底部には指頭圧痕が残る。

土師器の食器には、杯・皿・碗など外面にヘラミガキを施すものがある。ヘラミガキの有無やこれを施す部位から4つの手法が区別される。ヘラミガキを施さない場合を0手法とし、口縁部のみにこれを施す場合を1手法、底部のみに施す場合を2手法、口縁部～底部にかけてヘラミガキを施す場合を3手法という。上にみたa～c手法と組み合わせることで、例えばa₀手法、a₁手法、a₂手法・・・が識別できる。

土師器の胎土は2種類に大別することが多く、この点は従来の記載と同じである。すなわち、器面が明灰色を呈し、砂粒をほとんど含まず精良な胎土のⅠ群と、器面が褐色系で砂粒が多くやや粗い胎土のⅡ群とを区別する。前者の食器は碗Aを除き、一貫してa・b手法を用いるが、後者は奈良時代後半からc手法を多用する。なお、『平城報告Ⅺ』では、平城宮土器Ⅶに属する土師器をⅠ群・Ⅱ群とし、それぞれ平城宮土器Ⅴ以前のⅠ群・Ⅱ群に近いとする観察がある（P.167）。このときⅡ群は「雲母・長石粒を多量に含み、茶褐色～赤褐色を呈する」と定義されたが、これは『平城報告Ⅺ』にいうⅡ群に近い。本書ではⅡ群をⅡ群に含めて記載することにしたい。

須恵器は土師器と異なり、食器類を成形・調整手法によって細別することが少ない。しかし、代わりに胎土および製作技術上の特徴が異なる以下のグループ（群）を識別している。

Ⅰ 群 主として青灰色を呈し、硬質に焼き上がるものが多い。胎土には長石・石英の粒子を含む。火襷をとどめた例がある。杯類の底部はヘラ切り痕を残すものと、ロクロケズリで整えたものがある。

Ⅱ 群 おもに明灰色を呈し、硬く焼き上がる。胎土はきわめて緻密で、ロクロナデやロクロケズリによって延びる黒色粒子が特徴的である。ロクロケズリは丁寧で、ヘラミガキを施して金属器の質感を表現したものもある。食器類のほかに鉢A・壺Aがある。

Ⅲ 群 灰白色を呈し、硬く磁器質に焼き上がる。胎土には砂粒を含む。器種は杯Bとその蓋、皿Bとヴァラエティが少ない。杯Bとその蓋では、同心円状の刻み目をもつ当板で粘土板を叩き出した痕跡を残す例が報告されている。

土師器の
調整手法

土師器の
群 別

須恵器の
群 別

IV 群 粗大な長石粒や白色の砂を含み、焼成温度が低く暗灰色に焼き上がる。

V 群 やや砂っぽい胎土で微細な黒色粒子を含む。高温の酸化焰焼成のため、器体は赤味を帯びる暗灰色を呈し、窯口付近で焼成された壺・甕の類には自然釉がかかる。食器のうち杯B蓋は笠形をなし、頂部にロクロメをとどめるものが多い。

VI 群 砂っぽい胎土で焼き締まりが悪く、表面がざらざらしている。高温焼成により明灰色～暗灰色を呈し、貯蔵器のほか食器にも自然釉がかかる。杯B蓋は笠形の頂部をもつ例が多い。

以上 I～VI 群は、現在のところ I・II 群が和泉国陶邑窯、III 群が播磨国（または備前国）、IV 群が生駒東麓窯、V 群が尾張国猿投窯、そして VI 群が美濃国の製品と推定している。

A 大極殿院西辺整地土下層木屑層・炭層出土の土器

整地土下層
の土器群
平城宮 II

佐紀池南辺では、第一次大極殿院西辺整地土（I-2期）の下位に「炭層」、「茶褐色木屑層」または「茶褐色粘質土」という土層が堆積している。第177次調査では、炭層・茶褐色木屑層から多くの土師器・須恵器（平城宮土器II）が出土したが、これらの土器群は和銅4年（711）～養老6年（722）の紀年木簡をともなっている。土師器は細片が多いものの器面の保存状態が良好で、須恵器には大破片が比較的多い。なお、茶褐色木屑層と炭層から出土した土器の間には同一個体の接合関係がある。本稿では、炭層および茶褐色木屑層の土器群をひとまず一括して記載し、層位ごとの検討は別におこなうことにしたい。

i 土師器（図版110・111）

杯 A（1～7） 杯Aは茶褐色木屑層・茶褐色粘質土で9個体、炭層で11個体ある。前者は口径19.0～20.0cm、器高4.5cm前後の杯A Iと、口径19.0cm前後、器高3.4～4.0cmの杯A II、口径15.6cm、器高3.1cmの杯A IIIがある。しかしながら、炭層出土の杯Aは小片のため図示できないものが多い。

1はb₁手法の杯A IIIで、内面に1段斜放射+連弧暗文および螺旋暗文を施し、外面のヘラミガキは比較的に粗い。底部外面には細い線刻で「×」印を刻んでいる。

2～4は杯A II。2は1段斜放射暗文+螺旋暗文で、a手法による。3・4は1段斜放射暗文+連弧暗文および螺旋暗文を施し、いずれもb手法による。4の斜放射暗文は左上がり、通則とは異なる。口縁部外面のヘラミガキは粗く、ヨコナデの屈曲部にはこのミガキがおよんでいない。

5・6は杯A I。内面に2段斜放射暗文+螺旋暗文を施すもので、器高が杯A IIに比しやや高い。5は胎土に砂粒を多く含み、器表面が赤褐色を呈する。6も杯A Iだが、器表面は明褐色を呈し、2段斜放射暗文が松葉状あるいは「V」字形単位の連なりからなる。暗文の重複関係からは下段→上段へと施文したことがわかる。外面のヘラミガキは稠密で、底部～口縁部にかけてのヘラケズリののち、ヘラミガキを施している（c₁手法）。口縁端部の巻き込みも小さく、これ以外の杯Aとは形状が異なる。

7は炭層出土の杯A Iで、口縁部の外傾度が大きい。調整手法はa手法で、内面には暗文を施さない。見込みには焼成後に刻んだ「×」印の線刻がある。炭層出土の杯Aは、これ以外に1段斜放射暗文+連弧暗文の破片が5個体、1段斜放射暗文のみの破片が3個体、無暗文（a

表6 木屑層・炭層出土土器の器種構成

土師器	器種	個体数	比率 (%)	
供膳具	杯A	20	22.0	
	杯B	身蓋	3	3.3
			8	8.8
	杯C	6	6.6	
	皿A	4	4.4	
	皿B	3	3.3	
	蓋X	1	1.1	
	椀C	5	5.5	
	椀X	5	5.5	
	高杯	1	1.1	
	鉢E	1	1.1	
	鉢X	4	4.4	
	盤A	2	2.2	
貯蔵具	壺A	身蓋	5	5.5
			0	0.0
煮炊具	甕A	13	14.3	
	甕B	4	4.4	
	甕C	6	6.6	
合計		91	100.0	
須恵器	器種	個体数	比率 (%)	
供膳具	杯A	13	17.3	
	杯B	身蓋	4	5.3
			17	22.7
	皿A	3	4.0	
	皿B	身蓋	2	2.7
			4	5.3
	皿D	4	5.3	
	盤A	3	4.0	
盤B	1	1.3		
貯蔵具	壺A	身蓋	0	0.0
			2	2.7
	壺B	1	1.3	
	壺D	1	1.3	
	鉢D	3	4.0	
	甕A	5	6.7	
甕C	12	16.0		
合計		75	100.0	

手法の杯AⅡ)が1個体ある。2段斜放射暗文を施した例は確認できない。

杯B蓋 (8・9) 杯B蓋は合計8個体出土している。8は口径21.4cmで、頂部外面のヘラミガキはつまみ部の周辺で4単位、頂部外周近くでは8単位とみられる。頂部の内面には螺旋状の暗文を大きく描き、つまみ部の上面にも螺旋状のヘラミガキを施す。器表面は褐色を呈する。9は口径21.8cmで、頂部外面のヘラミガキは4単位である。頂部内面にはやはり螺旋状のヘラミガキを施す。器表面は灰褐色を呈し、内面の一部には煤が付着する。

杯B (10・11) 杯Bは茶褐色粘質土と炭層とで3個体出土している。10は茶褐色粘質土からの出土で、口径16.0cm、器高3.5cm。内面には1段斜放射暗文+連弧暗文、螺旋暗文を施す。胎土はやや粗い。11は炭層出土で、口径17.8cm、器高3.7cm。内面には1段斜放射暗文+連弧暗文、螺旋暗文を施している。

杯C (12~16) 杯Cは炭層で6個体を数える。12は杯CⅠで、口径17.0cm、器高2.8cm。調整手法はa手法で、底部外面には木葉痕をとどめる。内面の1段斜放射暗文は短く、口縁端部までおよばない。内面見込みには螺旋暗文を施す。13は口径18.0cm、器高2.8cmで、内面に1段斜放射暗文+螺旋暗文を施す。底部外面には軽微なヘラケズリを施す(b₁手法)が、その合間には指頭圧痕が残り、細い線刻で「米」印を刻んでいる。

茶褐色粘質土より出土。14・15はa₁手法の杯CⅠ。内面には1段斜放射暗文+螺旋暗文を施し、底部外面は不調整のままとする。このうち、14は灯明器として用いたものである。16はb₁手法の杯CⅠ。内面には1段斜放射暗文+螺旋暗文を施すが、1段斜放射暗文は通例とは異なる左上がりである。胎土は砂粒分を含み、やや粗い。

皿A (17・18) 皿Aは炭層で4個体を数え、a手法のⅠ群土器とc手法のⅡ群土器とがある。17はc₃手法の皿AⅠで、外面には稠密なヘラミガキを施す。18は17と同様の特徴をもつが、復原口径は小さい。

椀 C (19・20) いずれも口縁部直下をヨコナデし、それ以下を不調整にとどめる。19には指頭圧痕の凹凸が残る。

椀 X (21~26) 椀Xは茶褐色木屑層から2個体、炭層から3個体が出土している。21~24は口縁端部の直下をヨコナデ、それ以下を不調整にとどめるもので、破片ながら器形にヴァラエティがある。25は小片だが、底部外面にヘラケズリを施す。

鉢E・鉢X (27~30) 茶褐色木屑層から5個体が出土している。復原口径は18~21cm、器高は5~6cm程度である。27~29は底部を欠くが、口縁部の上端付近にヨコナデを施し、これより下位は不調整である。胎土は径約3mmまでの砂粒を含み、やや粗い。28の内外面には煤が付着している。29は器表面が明橙色を呈し、内面には工具の接触痕跡とみられる直線状の条線が数条残る。外面の不調整部分には粘土紐の接合痕があり、乾燥時のひび割れも目立つ。30は26~29と同様の器形ながら、外面のヨコナデ以下を粗くヘラケズリしたもので、ヘラケズリによる砂礫の移動痕跡が目立つ(鉢E)。胎土は砂礫を多く含み粗い。

蓋 X (31) 頂部外面をヘラケズリした蓋で、つまみ部分を欠失している。ヘラケズリの方向は頂部中央付近で不定方向、頂部縁辺で横方向となり、端部付近および内面をナデで仕上げる。口径23.8cm。

高杯 (32) 高杯は1個体が出土。杯部の口径は23.0cmに復原でき、脚部の断面形は9角形をなす。杯部の内面には1段斜放射暗文+連弧暗文を、外面にはヘラミガキを施す。

盤 A (33・34) 茶褐色木屑層と炭層とで1個体ずつが出土。33は茶褐色木屑層で出土した個体で、口径34.0cmに復原でき、器高9.2cmである。内面には1段斜放射暗文+連弧暗文および螺旋暗文を、外面にはヘラミガキを施している。34は炭層からの出土で、口径41.4cm、器高11.0cmと33よりひと回り大きい。内面には2段斜放射暗文および螺旋暗文を施すうえ、連弧暗文を斜放射暗文の1段目と2段目との間付近に巡らせている。外面にはヘラミガキを施している。

壺 A (35~37) 胴部中位に把手をそなえた薬壺形の器形で、茶褐色木屑層と炭層とで30片近い破片が出土している。これらは胎土・色調や調整手法からみて、おそらくは5個体分であろう。口縁部(35)は破片のみだがヨコナデで仕上げ、肩部以下には丁寧なヘラミガキを施している。36は胴部中位~底部にかけての部位が残る。器壁は最大でも7mm程度と、後述の37よりは薄く、色調は赤褐色を呈する。胴部外面に施したヘラミガキは稠密で、下地の調整痕がほとんど残らない。胴部内面には横方向のハケメを残すが、指頭圧痕がハケメを潰す部分がある。高台は接合部で剥落している。37も胴部中位~底部にかけての部位で、茶褐色木屑層および炭層の両方から破片が出土している。35とは同一個体であろう。底部は最大で9mmと厚く、胴部内面には横方向のハケメを明瞭に残す。胴部の中位にはヘラミガキを施している。底部には外方へと開く高台を付しており、その最大径は18.6cm(復原値)である。

甕 A (38・41・42) 茶褐色木屑層で6個体、炭層で7個体が出土している。38は口縁部~胴部上半を残し、胴部外面には縦方向のハケメをとどめる。41は口縁部~胴部下半をとどめ、短く外方へと突出する口縁部と、ほぼ球形の胴部とをもつ。胴部外面には斜め方向のハケメを残す。42は口縁部内面に横方向のハケメを残している。

甕 B (43・44) 茶褐色木屑層で1個体、炭層で3個体を数える。43は茶褐色木屑層出土。口

縁部の内面には横方向のハケメをとどめ、胴部外面を縦方向のハケ、内面をほぼ横方向のハケで整える。44は炭層出土の甕Bの胴部。口縁部を欠くが、胴部外面を縦方向のハケ、内面を不定方向のナデで仕上げている。把手の接合部分には径2 mm程度の小孔を18箇所に通している。**甕 C** (40・41) 6個体が出土している。40は胴部下半を欠くが、短く外方へと突出する口縁部と、やや球形の胴部とをもち、胴部外面に縦方向のハケメ、同内面に縦方向のケズリを施している。41も40とはほぼ同形だが、内面に横方向のケズリを施す点が異なる。

ii 須恵器 (図版112・113)

杯 A (45~49) 茶褐色木屑層の出土 (47~49) と炭層出土 (45・46) とがある。45は平坦な底部とほぼ直角に立ちあがる口縁部とからなり、器形が特徴的である。口縁部の内面には火脹れが連なり、外面上半には重ね焼き痕が残る。底部はロクロケズリで平滑に整える。46は口縁部のみが残るが、底部外面はロクロケズリとみられ、口縁部には火襷がかかる。II群土器か。47は底部をナデで仕上げるもので、焼成がやや悪い。48は底部をロクロナデで整えるが、ヘラ切り痕が消えずに残る。胎土には粗大なチャート礫・石英を含む。49は器高がやや高く、口縁部下半にロクロケズリを施す。

杯 B (58・59・61) 58は炭層から出土した灯明器。底部外面はほぼ不調整で、回転ヘラ切りの痕跡が残る。61は杯B Iで、炭層からの出土。口縁部下半にロクロケズリ、上半にロクロナデを施す。器表面は灰色を呈するが、口縁部外面のみ暗灰色に発色する。

杯B蓋 (50~57) 50はつまみの形状が特徴的である。頂部には降灰を認め、胎土はやや粗い。51は笠形の頂部と、内傾する縁部とをもち、扁平なボタン状のつまみを付したものである。頂部外面にはロクロケズリを施したのち、ロクロナデを加える。胎土は砂粒を含み粗い。VI群 (美濃産) か。52の頂部内面には不定方向のナデが残る。53は杯BIV蓋で、口径12.0 cm。やや笠形の頂部に扁平なつまみを付す。54は頂部中央がややくぼみ、硯に転用したものである。頂部内面の中央部は硯として使用したため摩滅している。56は頂部への降灰が顕著だが、半円形の重ね焼き痕 (復原口径は約10 cm) がくっきりと残る。57はやや扁平な頂部をもち、つまみを欠く。胎土は砂質で粗大な石英粒を含み、軟質に焼きあがる。

皿 A (67) やや開き気味の口縁部と、ほぼ平坦な底部とをもつ大皿。口径は約30 cmである。口縁部はロクロナデ、底部外面はロクロケズリで整形している。

皿 B (66) 66は底部外面 (高台の内側) に墨が付着し、硯に転用されたことを思わせる。口縁部の外面には自然釉がかかる。茶褐色木屑層からの出土で、口径の復原値は約26 cm。

皿B蓋 (62~65) 笠形の頂部に宝珠形のつまみを付すもので、口径26~31 cm。茶褐色木屑層と炭層の双方で出土している。いずれも頂部外面をロクロケズリで整えている。62は頂部外面に降灰を認め、堅く焼きあがるもの。64は胎土が白色で、内面の縁部付近には墨が付着する。65は胎土に砂粒を多く含み、やや軟質に焼きあがる。

皿 D (60) 60は低平な皿の底部に低い高台を付したもので、内面の降灰が顕著である。

壺A蓋 (68・69) 茶褐色木屑層で1個体、炭層で1個体ある。68はやや膨らんだ頂部と、外方へと開き気味の縁部とからなり、頂部に扁平な宝珠形のつまみを付す。頂部にはロクロケズリの痕跡を残す。色調は灰白色で、胎土はやや砂質である。美濃産か。茶褐色木屑層出土。69は

平坦な頂部と、直線的な縁部とからなり、つまみを欠失する。胎土はやや粗く、白色の砂粒が多い。

壺 B (70) 茶褐色木屑層からの出土例で、短い口縁部と広い肩部、直線的な胴部からなる。内外面ともにロクロナデの痕跡が残る。その肩部には蓋を重ね焼きした痕跡があり、その外側には緑色の自然釉がかかる。

壺 D (71) 直立する短い口縁部をもつ広口・扁平な壺で、高台を付している。内外面ともに色調は暗灰色で、ロクロナデが残る。口縁端部および高台の接地面には使用時の磨耗を認める。

盤 A (72) 茶褐色木屑層から出土した盥状の器形で、口縁部はやや外方へ直線的に立ち上がり、側面には「U」字形の把手を付している。把手の接合部は器体の中位付近で、水平方向の沈線のうえに貼り付けている。口径は47.5cm。焼成はやや悪く、色調は灰色～暗灰色を呈する。同じ個体の破片が、炭層からも出土している。

甕 C (73~77) 茶褐色土からは広口短頸の甕Cが5個体分出土している。このうち、73および75は肩部に耳状の把手を一对備えるもので、胴部外面にはタタキメが残る。74は胴部外面のカキメが顕著である。76は口縁部をヨコナデで仕上げ、胴部内面に当具痕を明瞭にとどめている。77は口縁部～底部付近までをとどめ、胴部内面に当具痕、外面にタタキメを残す。

B SD12965 出土の土器

SD12965
上層と下層

第316次調査で検出したSD12965は東へと流れ、基幹排水路SD3825へと注ぐ東西溝である。溝埋土の下層（灰褐色・暗灰色砂層）からは神亀3年（726）銘の木簡とともに平城宮土器Ⅱの土師器杯Aが3個体出土しているが、上層（暗褐色・青灰色砂礫層）からは土師器杯A・皿A・椀A・椀Cなどを含む平城宮土器Ⅳ～Ⅴの土器が出土している。後者は、後述するSD3825C出土土器群と内容が一致する。

i 土師器（図82）

杯 A 上層から2個体、下層から3個体が出土している。78は内面に1段斜放射暗文+螺旋暗文を、79は1段斜放射暗文+連弧暗文+螺旋暗文を施すもので、ともにI群土器である。

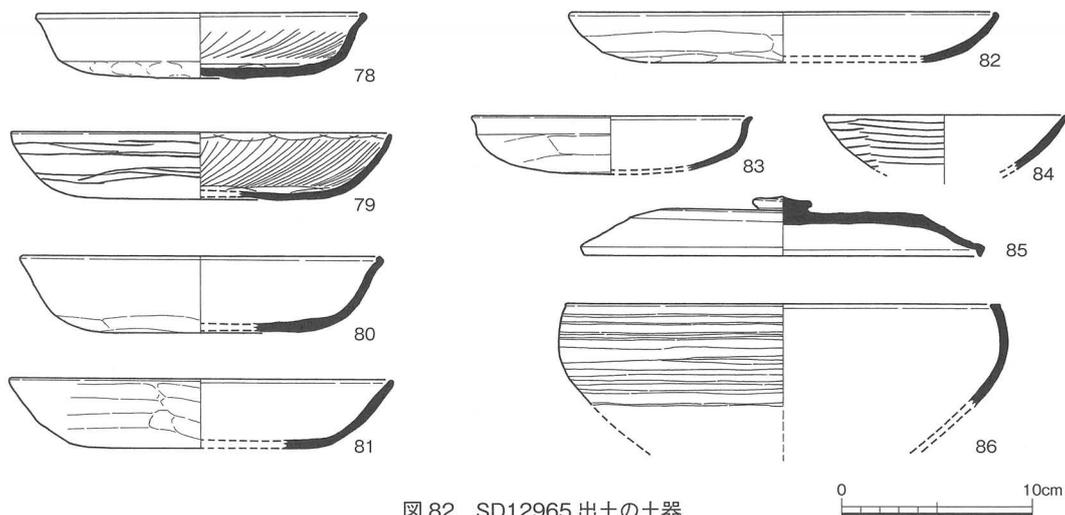


図 82 SD12965 出土の土器

SD12965下層の出土。80はb₀手法、81はc₀手法で、後者は口縁部の外傾度が高い。いずれもSD12965上層埋土からの出土。

皿 A 上層（砂礫層）から4個体が出土している。82は皿A I。底部～口縁部下半をヘラケズリするc₀手法である。

椀 A 上層（砂礫層）から6個体が出土。84は底部を欠くが、口縁部外面にはヘラミガキを施す。

椀 X 83は椀X。口縁部は強いヨコナデで外反する。底部外面には指頭圧痕およびナデの痕跡をとどめる。

ii 須恵器（図82）

杯B蓋 85は杯B蓋。平坦な頂部と内側へやや屈曲する縁部とをもち、扁平なつまみを頂部中央に付す。

鉢 A 下層から1個体が出土している。86は底部を欠くが、口縁部には幅の広いヘラミガキを施す。

C SB17870柱抜取穴出土の土器

掘立柱建物SB17870の柱抜取穴から出土した土器群は、多量の瓦や燃えた木片・炭とともに廃棄されていたもので、II期建物群の廃絶時期を示すものである。2箇所の柱抜取穴（IL52・IG49地区）から出土したものが多く、これ以外の柱抜取穴でも土器は出土している。土師器は保存状態がわるく、器面の剥落が進み細かい観察に耐えないものもある。土師器食器は杯A、皿A、杯C、杯B蓋、椀A、高杯、盤Aなどからなる。杯・皿や椀ではc手法が主体となるが、a手法・b手法のI群土器も認められる。須恵器は土師器に比し出土量が少なく、器種構成は杯A・同Bおよびその蓋にほぼ限られる。ほかに皿Cの小片や甕の胴部片がある。主として土師器食器の器形や調整手法から平城宮土器Vに属すると考える。なお、II期建物SB7150の柱抜取穴から出土した土器群（『平城報告XI』）はSB17870のそれと内容が似ており、SB17870と同時に解体されたものとみられる。

SB17870
出土土器

平城宮 V

表7 SB17870 出土土器の器種構成

土師器	器種	個体数	比率 (%)		
供膳具	杯A	4	9.3	74.4	
	杯B	身蓋	0		0.0
			3		7.0
	杯C	2	4.7		
	皿A	12	27.9		
	皿C	2	4.7		
	椀A	5	11.6		
	高杯	1	2.3		
盤A	3	7.0			
貯蔵具	壺	1	2.3	2.3	
煮炊具	甕	10	23.3	23.3	
合計		43	100.0		

i 土師器（図版114）

杯 A (87~89・103) 杯Aは4個体出土した。図示する3個体はいずれも杯A Iで、口径約19.0cm、器高約4.0cmである。87・89はC₀手法により、口縁部は少し内彎し、口縁端部がわずかに肥厚する。一方、88はやや外反する口縁部をもつ点が異なってい

須恵器	器種	個体数	比率 (%)		
供膳具	杯A	3	16.7	100.0	
	杯B	身蓋	5		27.8
			8		44.4
	皿C	1	5.6		
鉢D	1	5.6			
合計		18	100.0		

る。底部をヘラケズリで整えるが、口縁部はヨコナデで仕上げている (b₀手法)。

杯B蓋 (96~98) 杯B蓋は3個体出土した。96・97はやや扁平な笠形の頂部にヘラケズリを施し、その後ヘラミガキを加えたもので、つまみを欠失する。98は笠形の頂部に直径2.8cmのつまみを付す。頂部は黒色の付着物に覆われているが、おそらくヘラケズリののちにミガキを施している。

杯C (90・95) 杯Cは2個体を数える。90は付着物が多く器表面を観察しづらいが、底部はヘラケズリで整え、口縁部をヨコナデで仕上げたもの (b₀手法) で、口径15.2cm、器高2.5cm。95は口径17.0cm、器高2.9cmで、外底部に指頭圧痕をとどめ、口縁部はヨコナデで仕上げる (a₀手法)。いずれも明褐色のI群土器である。なお、次に述べる皿AⅡとは法量がほぼ等しいが、胎土および口縁部の形状、そして調整手法が異なっている。

皿A (91~94・99~102) 皿Aは12個体あり、大小2種に分かれる。c₀手法でつくられたものが主体となり、口縁部はやや内彎気味で、その端部を丸くおさめたものが多い。91~94は法量がほぼ等しく、口径15.0~16.6cm、器高2.3~2.8cm (皿AⅡ)。91は底部に指頭圧痕が残り、残る部分には口縁部上半までヘラケズリを施す (c₀手法)。94は口縁部に煤が付着し、灯明器として用いたことがわかる。99~102は口径18.0~22.0cm、器高2.7~2.9cm (皿AⅠ)。100は外底部に指頭圧痕を残すI群土器で、a手法による。101・102は底部ヘラケズリで口縁部はヨコナデで仕上げる。

椀A (105~108) 椀Aは5個体を数える。口径は12.4~13.0cm、器高は3.7~3.9cmと法量が等しい。105・106・108はc手法で、外面にヘラミガキを施さないもの。106の底部外面には「×」印の線刻を認める。一方、107はe手法によっており、外面に粗いヘラミガキを加える。ヘラミガキの間隔が広く、下地には指頭圧痕の凹凸が残っている。

甕A (114~120) 頸部~口縁部にかけての破片から10個体分とみたが、このうち半数はIL52区の柱抜取穴から出土した。114・115は球胴形の甕とみられ、内側へと屈曲する短い口縁部をもち、頸部と胴部とがはっきりと区画されたもの。胴部は大半を失うが、外面に縦方向のハケメを残す。また、口縁部内面にも横方向のハケメを認める。116~119は小形の甕。いずれも胴部には縦方向のハケメをとどめる。116は全体に器壁が薄い。頸部は強めのナデで屈曲するが、胴部との境界は不明瞭である。117は口縁部の巻き込みがなく、端部を丸くおさめるもの。胴部内面には指頭圧痕が残る。120はその全形をとどめるもので、短い口縁部の端が内方へ屈曲し、胴部はほぼ球形をなす。器表面の剥落が著しいが、縦方向のハケメをとどめる部分がある。胴部内面には煤が付着する。

ii 須恵器 (図版115)

杯A (121・122) 杯Aは3個体を数える。121は杯AⅤで、扁平な底部にヘラ切り痕を残す。122は口縁部に重ね焼きの痕跡をとどめるもの。

杯B (123~126) 杯Bは5個体が出土した。123は高台を底部のもっとも外側に貼り付け、口縁部と高台との間で段差がつかない。高台の内側にはナデを施すが、ヘラ切り痕が残存する。124~126も高台を底部のもっとも外側に貼り付けており、125は高台の内側をナデで整える。一方、124は口径21.0cmの杯BⅠで、器高は8.7cmと大きい。断面がほぼ四角形をなす高台の

内側をロクロケズリで仕上げる。

杯B蓋 (127~132) 小片を含めて8個体ある。127・128は中央がつぶれた扁平な頂部をもち、前者は端部付近に重ね焼き痕がある。130は軟質で焼成がわるく、笠形をなす頂部の中央にはヘラ切り痕が消えずに残る。130はつまみが剥落したもので、やはりヘラ切り痕が残存する。131も扁平な頂部をもつが、ヘラ切りののちロクロナデで仕上げたもの。132は黄灰色を呈し、砂分が多く焼成がわるい。頂部はヘラ切り後ロクロナデとみられるが、風化が進んでいる。

鉢D (133) 鉢Dは1個体を数える。上半部を欠失した鉢で、体部にはロクロナデをとどめ、灰がかかっている。高台は四角形で外方に踏ん張るかたちをみせる。

平瓶 (134) 小形品でミニチュアとみられる。内部には土が詰まるが、頂部には緑色の自然釉が付着する。把手の外れた痕跡が2箇所にある。

D SB17871 柱抜取穴出土の土器

SB17871の柱抜取穴では土器があまり出土せず、図示できるのは須恵器の甕(135)のみである。胴部外面には降灰をみとめ、平行タタキメを残す。胴部内面には同心円状の当具痕が残る。

SB17871
出土土器

E SB17874 柱抜取穴出土の土器

Ⅱ期掘立柱建物SB17874では、2箇所の柱抜取穴から数個体の土師器が出土している。Ⅱ期建物の抜取穴から出土した点は前述したSB17870の土器群と同じだが、こちらは埋土に炭を含まず、出土した抜取穴が一部に限られる点が異なる。しかも、多くはIJ64区(第295次)の1基(ト四)から出土したもので、出土状況はやや特異である。土師器食器は個体数が少ないが、SB17870出土の土師器に比し器高がやや小さく、外傾度が大きい。これらの特徴から、土器群は平城宮土器Ⅶに属すると考え、SB7152およびSB6663・6666の出土土器と同時期のものとみる。なお、IJ64区の柱抜取穴は、7間×3間の掘立柱建物(南北棟)の、北から2つ目の西側柱にあたる。

平城宮Ⅶ

i 土師器 (図版114)

杯A (109) 杯Aは1個体のみ。109は赤褐色のⅡ群土器で、胎土には金雲母を含む。直線的に開く口縁部と上方へと折れる端部とをもつ。c₀手法だが、底部外面には指頭圧痕のくぼみが残る。

皿A (110~113) 皿Aは4個体を数える。褐色~明褐色を呈し、Ⅱ群土器とみられる。110~112は口径16.2~17.2cm、器高2.0~3.1cmで、いずれもc₀手法による。111は口縁部のヨコナデを削り残しており、113の底部外面にはヘラケズリ時の工具痕がある。

F SB18140 柱抜取穴出土の土器 (図83)

SB18140は、対称位置の東脇殿SB6660と同じく桁行7間×梁行4間の東西棟とみられるが、土器が出土したのは1箇所の柱穴(HS55区)に限られる。HS55区の柱穴は、身舎の南西隅から数えて東へ2つ目の柱位置(ロ七)にあたり、この柱抜取穴からは土師器食器(杯A・皿A)4個体と、須恵器杯B1個体が出土している。これらの土器はⅡ期建物の解体時を示し、土師器の調整手法や器形から平城宮土器Ⅶとみられる。なお、先にみたSB17874とは土器の出土状態

SB18140
出土土器

平城宮Ⅶ

(1箇所の柱抜取穴から出土)と器種構成が類似している。

杯 A 杯Aは1個体のみが出土している。155は黄褐色を呈し、 c_0 手法による。口縁部は外

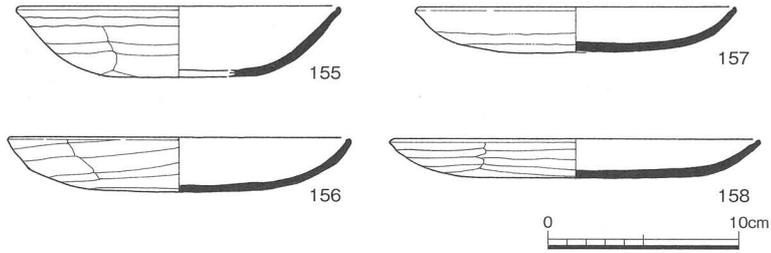


図83 SB18140 柱抜取穴出土の土器

傾度が大きく、口縁端部直下にはヨコナデの削り残しがある。

皿 A 皿Aは3個体を数える。156~158はいずれも c_0 手法で、156の外面にはヘラケズリの条痕と、これにほぼ直交する工具の「当たり」が明らかである。内面の見込みは1方向ナデで仕上げている。157・158は外面のヘラケズリ単位がよく残っている。口縁端部を削り残すので、この部分が上方へと小さく突出する。

G SX18160 出土の土器

II期の暗渠SX18160では、凝灰岩切石の抜取痕跡から奈良時代後半の土器群が出土した。個体数は少ないものの、II期建物群とそれに付随する施設の解体にともない廃棄されたものとみられ、この点で上にみた土器群と性格を同じくしている。ただし、土師器は保存状態がわるく、細片化が進んでいる。

i 土師器 (図版115)

椀 A (136) 136は椀A II (口径13.0cm)。橙褐色のII群土器で、 c_3 手法である。やや粗いヘラミガキの間に、ヘラケズリで整えた下地がみえる。ヘラミガキは4単位にわかれ、狭い底部は1方向である。口縁端部を失うが、外傾度は小さい。

椀 C (137) 137は椀Cで、口径は12.4cm。淡褐色を呈し、指頭圧痕の凹凸が残る半球形に近い底部と、強いヨコナデで作りに出した口縁部とからなる (e手法)。

皿 A (138) 138は皿A Iで、口径23.0cm。平滑な底部外面はヘラケズリによるが、短い口縁部はヨコナデで仕上げる (b_0 手法)。口縁端部を内側に肥厚させている。

ii 須恵器 (図版115)

杯 A (144) 144は焼成がよく堅い。やや深い器形で、底部をロクロナデで平坦に仕上げる。

杯B蓋 (139・140) 139は杯B Vの蓋。扁平な頂部は中央がほぼ平坦で、ヘラ切り痕が深く残る。

杯 B (141~143) 141~143は杯B。いずれも断面四角形の高台を底部外縁近くに貼り付け、高台の内側をロクロナデで整える。

H SK17910 出土の土器

廃棄土坑の土器群

SK17910は、西面築地回廊SC14280の東雨落溝SD14290にかかる土坑で、埋土からは土師器を主体とする土器群が出土している。土師器は細片が多く、保存状態がわるい。杯A 2個体、皿A 7個体、杯C 2個体、杯B蓋 1個体で、ほかに杯B小片・椀A小片と甕の破片がある。全体

に褐色～赤褐色を呈するⅡ群土器が多く、Ⅰ群土器は一部にかざられる。後者では皿AⅡが欠落し、代わりに杯CⅡが現れる。土師器食器の構成やc手法の多用、また一部にⅠ群土器を含む点は先にみたSB17870柱抜取穴出土の土器群（平城宮土器Ⅴ）に似る。よって、この土器群もⅡ期の終焉とともに廃棄されたものと考えたい。一方、須恵器はきわめて少なく、杯A小片、杯C小片、杯B蓋の小片（4個体）のみである。

平城宮Ⅴ

i 土師器（図版115）

杯 A (145) 杯Aは2個体が出土している。145は杯AⅠで、橙褐色のⅡ群土器。c₀手法によるが、口縁端部の直下にはヘラケズリがおよばない。底部外面の中央部には指頭圧痕のくぼみを残している。全体にやや厚手である。

皿 A (146～148・150・153・154) 146・147は皿AⅠで、口径21～22cm前後のもの。胎土からⅠ群土器とみる。146は底部外面に指頭圧痕を残し、a₀手法による。口縁部は外反し、端部が丸く肥厚する。147は保存状態がわるいが、底部をヘラケズリで整えたもの。148・150は褐色～赤褐色のⅡ群で、ともに皿AⅠに属する。口縁部は内彎気味で、端部が内方へと肥厚する。148は表面の剥落が進んでいるが、おそらくc₀手法による。150もc₀手法によるが、器壁がやや厚い。153・154は皿AⅡ（口径15.4～17.0cm）。いずれも口縁部が内彎気味で、口縁端部を丸くおさめる。154は赤褐色のⅡ群土器で、c₀手法による。

杯 C (151・152) 151・152は杯Cで、胎土や色調からともにⅠ群土器とみる。151はb₀手法による。口縁部の上半はやや外湾し、口縁端部は内傾する。152は底部外面に指頭圧痕のくぼみを残す（a₀手法）。

杯B蓋 (149) 149は杯BⅠの蓋で、赤褐色のⅡ群土器。復原径は約25cmである。頂部外面はヘラケズリののちヘラミガキを施すが、口縁部付近にはヘラミガキがおよばない。

I SK17905出土の土器

SK17905出土土器は土師器片が多く、須恵器は少ない。細片化した土師器は保存状態がわるく、器表面の剥落が著しいが、大多数は褐色～赤褐色を呈するⅡ群土器である。杯A・B、皿A、高杯、壺E、甕類がある。一方、須恵器には杯B・杯B蓋などがあるが、全体に小片が多く図化に耐えないものが多い。土師器食器の成形手法や器形から、平城宮土器Ⅶに属する。

廃棄土坑の
土器群

平城宮Ⅶ

i 土師器（図版116）

杯 A (159・160) どちらも赤褐色を呈するⅡ群土器で、159は器表面の剥落が進むがC₀手法とみられる。160もc₀手法によるが指頭圧痕の凹凸が消え残っており、口縁端部を小さく内側へと巻き込む。

皿 A (161～166・168・169) 褐色～赤褐色を呈するⅡ群で、c₀手法による。口径約15.5～17.0cmのもの（161～165；皿AⅡ）と18.0～20.0cmのもの（166・168・169；皿AⅠ）とがある。161～164は大きさが揃い、わずかに内湾する口縁部と平坦な底部とをもつ。同形でひと周り大きいのが168だが、その底部外面には指頭圧痕が残り、底部がやや厚い。165・166・169はヘラケズリで器壁を薄く仕上げしており、口縁部の外傾度が大きい。なお166・169の口縁部にはヨコ

ナデ時のくぼみが残りに、ヘラケズリが不徹底である。

杯 B (170) 器表面が剥落しているが、口縁部外面をヘラケズリで整える。底部には断面三角形の高台を付している。ほぼ真直ぐに開く口縁部をもち、底部外面には高台貼り付け時に生じたとみられる段差が残る。褐色のⅡ群土器である。

杯B蓋 (167) 赤褐色のⅡ群で、器表面の剥落が進むが頂部にヘラミガキをとどめる。復原口径は約28cm。

高杯 (171) 171は高杯の脚部。縦方向のヘラケズリで整えた脚部は断面7角形をなし、心棒に粘土を巻き付けて成形したものである。

壺 E (172) 172は壺Eで、口縁部付近の小片である。

甕 A (173・174) 173は器表面の剥落が著しいが、胴部内面に指頭圧痕が残る。174は短い口縁部と球形の胴部とからなり、内面および外面の胴部上半は黒色を呈する。内面には指頭圧痕をとどめている。

J SK17907出土の土器

廃棄土坑の
土器群

SK17907出土土器も土師器片が多く、須恵器は少ない。土師器は全体に風化し細片が多く、保存状態は概してわるい。先にみたSK17905出土の土器と同様に、大多数は褐色～赤褐色を呈するⅡ群土器である。杯A・B、皿A・椀A・C、高杯の脚部のほか、甕、壺がある。一方、須恵器には杯Bとその蓋、皿C小片、鉢A小片、壺がある。土師器食器類の器形および成形手法からみて、平城宮土器Ⅶに属すると考えられ、上にみた土坑SK17905の土器群とは同時期のものであろう。

平城宮Ⅶ

i 土師器 (図版116)

杯 A (175～177) 4個体を数えるが、ほかに小片も出土している。175・176は赤褐色のⅡ群で、 c_0 手法による。175はヘラケズリで外面を整えるが、口縁端部の直下に削り残しがある。口縁端部は内側に小さく巻き込む。176の表面は剥落しているが、おそらく c_0 手法であろう。177は黄褐色を呈し、底部を欠くが c_0 手法によるとみられる。

椀 C (178) 178は椀C。器表面が剥落しているが、口縁端部下に強いヨコナデ痕を残す。底部外面は不調整とみられる。

皿 A (179～185・187～191) 20個体を数え、ほかに細片多数がある。179～183は口径16.7～17.4cmとほぼ同寸で等法量のものだが、口縁部の外傾度に違いがある。179・180は c_0 手法で、内湾気味の口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。一方、181・182は器壁が薄く器高も低い。184・185および188～191は口径20.0cm前後で、これらも c_0 手法による。このうち、190・191は器壁が薄く浅い器形をなし、先にみた181・182とはほぼ同形のものである。

杯B蓋 (186) 2個体を数える。186は杯B蓋で、笠形の頂部に直径2.0cmのつまみを付し、頂部にはわずかだが交叉状のヘラミガキをとどめる。

ii 須恵器 (図版116)

杯 B (193・196) 完形に復原できるものが2個体ある。193・196はいずれも断面がほぼ四角

形の高台を底部外縁部近くに貼り付けたもので、196については口縁部下半と高台との間に明らかな段差がつかない箇所もある。193は高台の内側にヘラ切り痕を、196はロクロケズリの痕跡を明瞭にとどめている。

杯B蓋 (192・195) 7個体を数え、うち2個体は完形に復原できる。192は平坦な頂部にボタン状のつまみを付したもの。口径19.0cm。195は笠形の頂部をもち、頂部の外面はロクロケズリを施したのちロクロナデで整える。口径12.1cm。

壺 (197) 1個体が出土している。197は全体に赤黒く発色し、頸部～胴部にかけて降灰を認める。焼成は堅緻。胴部外面には斜めのタタキメが残り、内面の頸部付近には粘土接合痕がある。色調などから猿投窯産とみられる。

壺A蓋 (194) 194は壺の蓋で、頂部にはロクロケズリ痕を残す。

K SD18155出土の土器 (図84)

この溝はⅢ期築地基壇の東裾にあり、土師器杯A 1個体、同皿A 2個体が出土した。資料が少なく土器群としての様相は明らかでないが、器形や調整手法から平城宮土器Ⅶに属する。なお、この溝をおおう「灰色炭混土」からは、器表面が剥落した淡赤色の土師器皿Aと、c手法の杯類や黒色土器片、須恵器平瓶などが出土している。この土層には瓦器片も混入するが、出土した土器の多くは平城宮土器Ⅶとみられる。

Ⅲ期溝の
土器群

平城宮Ⅶ

杯 A (198) 褐色のⅡ群土器で、c₀手法による。口縁部にはヨコナデの削り残しがある。

皿 A (199・200) 外傾度が大きく、器高が小さい。199は器表面が摩滅しているが、200はヘラケズリ痕を残す。口縁部のヨコナデは削りきれずに残る。

L SD18143出土の土器 (図84)

Ⅲ期の東西溝SD18143からは土師器を主体とする土器が出土したが、個体数はごく少ない。土師器は杯Aが2個体、皿Aが5個体、椀Aが3個体と食器が中心で、これ以外に高杯や盤の小片、黒色土器片がある。須恵器は杯A・Bが各1個体、甕小片が出土しており、これに灰釉陶器片が加わる。土師器食器の器形や調整手法(c₀手法)から、これらの土器は平城宮土器Ⅶに属するとみられる。

平城宮Ⅶ

i 土師器

杯 A 残存部が少なく図化できないが、c₀手法のものと、口縁部をヨコナデで仕上げるものが各1個体ある。前者は褐色のⅡ群土器であるのに対し、後者は橙褐色を呈し胎土の粒子が細かい。

皿 A (204~208) すべてc₀手法により、口径は14.2~16.6cm、器高は2.3cm前後である。204の口縁端部が内側へと肥厚するほかは、口縁端部を上方へと小さくつまみ上げたものである。口縁部にはヨコナデ時のくぼみが消えずに残ったものが多い。204が明るい褐色である以外は橙褐色を呈し、Ⅱ群土器とみられる。

椀 A (201~203) 201はc₀手法で外面を整えるが、指頭圧痕のくぼみが消えずに残る。灯明器として使用しており、口縁部に煤が付着する。202もc₀手法によるもので、口縁端部はやはり

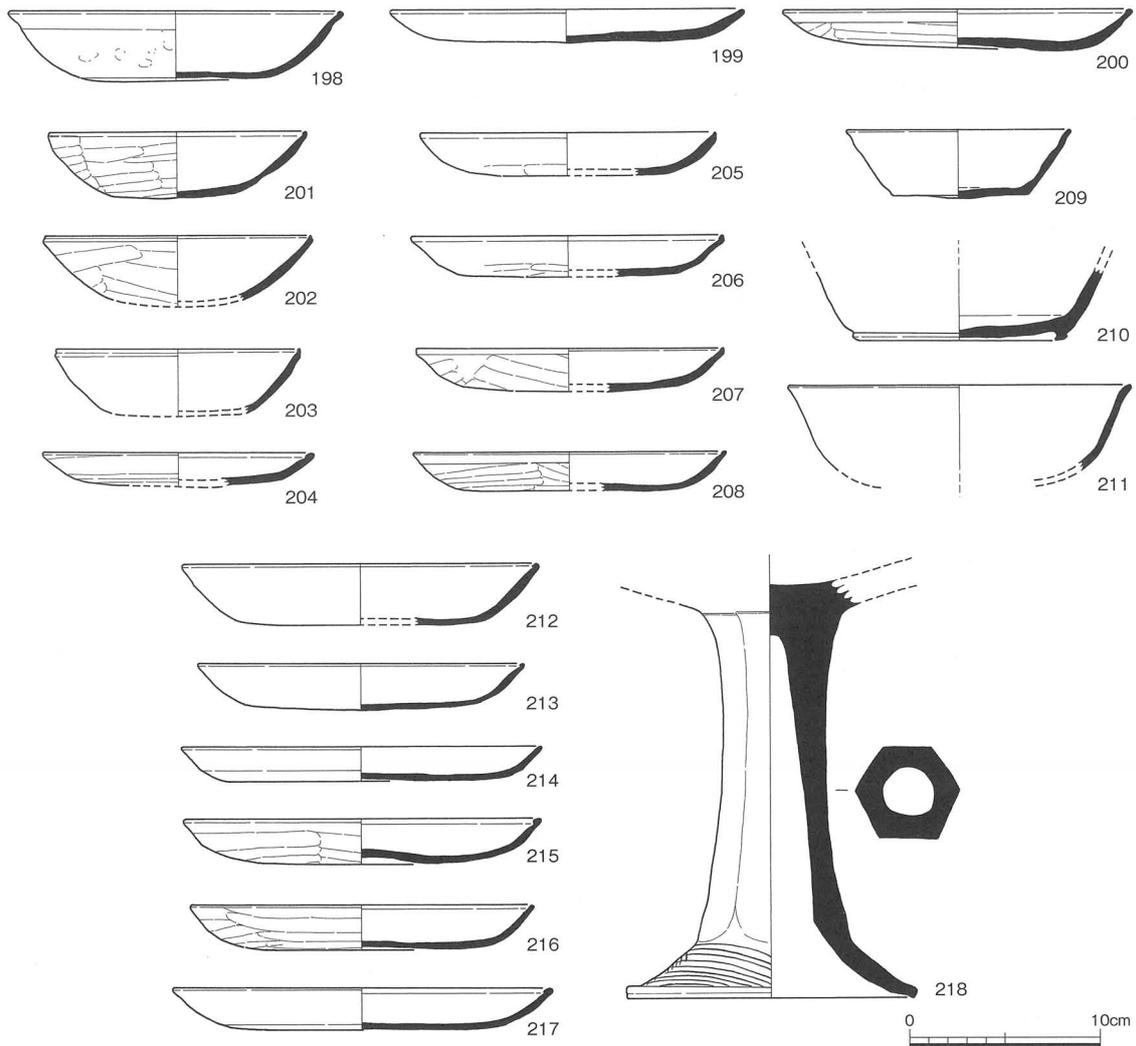


図84 SD18155・SD18143・SB14200 柱抜取穴出土の土器

上方へと小さくつまみ上げている。203は口縁部にヨコナデ痕をとどめている。

ii 須恵器

杯 A (209) 灰白色を呈し、焼成はよくない。ほぼ平坦な底部外面には回転ヘラ切り痕を残している。口縁部には煤が付着し、灯明器として用いたものである。口縁部外面には「井」の線刻がある。

杯 B (210) やや暗い灰色で、軟質に焼きあがる。高台は断面がやや潰れたかたちをみせ、口縁部と底部との境目に貼り付けている。

灰釉陶器 (211) 灰釉陶器の椀。口縁部が内彎気味に立ち上がり、口縁端部が外反する。

M SB14200 柱抜取穴出土の土器 (図84)

SB14200 出土土器

Ⅲ期掘立柱建物SB14200の柱抜取穴からは、土師器を主体とする土器群が出土した。多くは北側柱の抜取穴から出土しており、土師器の同一個体が異なる抜取穴から出土した場合もある。

HJ64地区の柱抜取穴(二六)から出土したものが多。須恵器は小片がわずかに出土したのみで、土師器には杯Aが5個体、皿Aが10個体、高杯1個体(脚部)がある。土師器食器の器形や調整手法から、平城宮土器VIIに属する。

杯 A (212) 212は底部を欠くがc₀手法によるもので、口縁部にはヨコナデの削り残しがある。口縁端部はやや上方につまみ上げている。口径15.0cm。

皿 A (213~217) 口径約17~20cm、器高1.8~2.5cmの皿A Iで、口縁部の外傾度が大きい。器表面が剥落したものもあるが、器壁が薄いことからいずれもc₀手法によるとみられる。214の口縁端部は丸くおさめている。215・216は口縁部にヨコナデの削り残しをとどめる。217は口縁端部を内側に肥厚させたもので、口径20.1cmである。

高 杯 (218) 218は高杯の脚部。断面円形の心棒に粘土を巻きつけて成形したもので、台脚の裾にあたる部分にはヘラミガキを施しているが、粘土接合時の段差が解消されずに残る。脚部は残高約22cmと長脚で、ヘラケズリによる面取りのため断面形は六角形を呈す。赤褐色のII群土器である。

N SD3825C 出土の土器

SD3825は大極殿院の西側を南へと流れる基幹排水路で、今回の報告範囲では北から第316次・第315次・第28次で調査をおこなっている。第316次と第315次・第28次とは調査地が約80m離れている。第316次では下位からSD3825A・同B・同Cを確認しているが、SD3825Aからは土器が出土していない。遺物はSD3825Cに多い。一方、第315次では上位から白色砂層(①)、灰

SD3825C
の堆積土

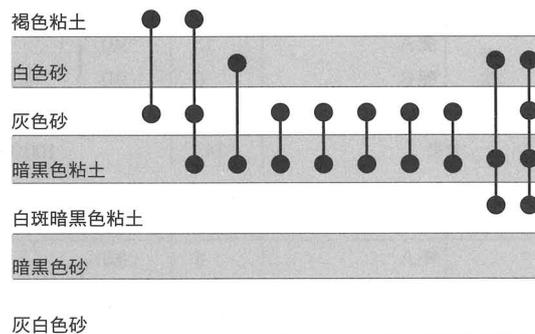


図 85 SD3825C の層位と接合関係 (第 315 次)

色砂層(②)、暗黒色粘土(③)、白斑暗黒色粘土(④)、暗黒色砂層(⑤)、灰白色砂層(⑥)と続く。このうち、土器は②~④に多いが、この間で③+④あるいは①+③+④など、層位をこえて接合する個体がある(図85)。⑤・⑥は遺物が少なく小片が多い。一方、第315次の南側(第28次)では、SD3825Cの埋土を上位から「溝1砂」、「溝2黒」と細分しており、それぞれ第315次の①・②および

③に対比できるとみられる。

SD3825C出土の土器群には、第316次の出土分と第315次以南のものがあるが、土器群としての様相はほぼ同じである。また、上のように層をこえて接合するものがあることから、ここでは一括して記載することにしたい。

i 土師器 (図版117・図版118)

土師器は杯A・杯C・皿A・碗Aが主体をなし、これに盤Aなどが加わる。杯Cを別にすれば、褐色で胎土に砂粒分を含みいわゆるII群土器が多い。杯Aには外面をヘラケズリで整えたのちヘラミガキしたものが含まれるが、内面に暗文をもつものは皆無である。碗Aは破片数が多く、

土師器食器の主体をなしている。いずれも半球形で、外面にヘラミガキを施すもの。杯C (I群) と皿A (II群) とは法量がほぼ等しく、「うつわ」としては同一種であろうか。以上の特徴から、平城宮 V SD3825Cの土器群は主として平城宮土器 V に属すると考える。ただし、溝埋土の最上層には平城宮土器 VII に属する土師器が含まれるほか、溝の中層には10世紀代の土師器杯が少量混入している。

杯 A (219~222) 16個体を数える。219は溝の下層埋土(暗黒色砂層)から出土した杯A IIIで、口径13.8cm、器高3.8cm。褐色を呈するII群土器である。底部はヘラケズリで整え、口縁部にはヨコナデののちヘラミガキを加える (b₁手法)。口縁部の外傾度が小さく、口縁端部はほぼ丸くおさめる。220・221はc₃手法の杯A。

褐色のII群で、器形が相似している。222は黄灰色のI群で、器表面の剥落が進むがb₀手法によるとみられるもの。

杯 B (223・224) 3個体を数える。223は褐色を呈するII群土器で、ヘラケズリののち口縁部にヘラミガキを加えるが、高台の内側はヘラケズリのままとしている。224は高台の内側をナデて仕上げたもので、ヘラミガキの間隔は223に比してやや粗い。

杯B蓋 (225・226) 4個体が出土している。225は器面の剥落が進むが、頂部には径2.5cmのつまみを付し、4単位のヘラミガキを施している。灰褐色のI群土器。226は笠形の頂部をもち、やはり4単位のヘラミガキで器表を整える。

杯 C (227~231・237~246) 23個体が出土している。胎土は緻密で淡褐色~黄灰色を呈し、すべてI群土器とみられる。227は杯C I。口径21.5cm、器高3.0cm程度で、a手法による。237~241は口径15.0~17.2cm、器高2.3~2.8cmの杯C IIで、やはりa₀手法による。いずれも底部外面に指頭圧痕をとどめ、241には完存しないが「×」とみられる線刻がある。239は口縁部に煤が付着し、灯明器として用いたことがわかる。

228~231・242~246は、同じI群に属するがb₀手法による。口径は17.0~19.0cmで、17cm台が多い。底部のヘラケズリが

表8 SD3825C 出土土器の器種構成

土師器	器種	個体数	比率 (%)
供膳具	杯A	16	11.0
	杯B { 身 蓋	3	2.1
		4	2.8
	杯C	23	15.9
	皿A	38	26.2
	椀A	31	21.4
	椀C	4	2.8
	椀X	1	0.7
	高杯	7	4.8
	盤A	3	2.1
把手付大型蓋	1	0.7	
貯蔵具	壺B { 身 蓋	1	0.7
		0	0.0
煮炊具	甕A	13	9.0
	甕B	0	0.0
	甕C	0	0.0
合計		145	100.0

須恵器	器種	個体数	比率 (%)
供膳具	杯A	4	9.5
	杯B { 身 蓋	11	26.2
		8	19.0
	皿C	1	2.4
	高杯	1	2.4
鉢A	1	2.4	
貯蔵具	壺A { 身 蓋	3	7.1
		1	2.4
	壺E	1	2.4
	壺H	1	2.4
	壺K	1	2.4
	壺L	2	4.8
	壺M	4	9.5
	鉢F	1	2.4
甕A	1	2.4	
甕C	1	2.4	
合計		42	100.0

不徹底なため、指頭圧痕が残存したものが目立つ。229の底部にはヘラケズリ時の工具痕が残り、243は灯明器としての使用痕跡をとどめている。

皿 A (232~236・247~252) 38個体が出土している。すべて褐色系のⅡ群土器で、胎土はやや粗く砂分が多い。232~236は皿AⅠで、口径21.0cm以上、器高2.6~3.3cm。内彎気味の口縁部と丸くおさめる口縁端部とをもつ。いずれもc₀手法によるが、ヘラケズリは口縁部の上部を削り残す。248~252は皿AⅡ。口径約15~19cm、器高2.5~3.4cmで、調整手法は皿AⅠと同じである。248・252の口縁部には煤が付着し、灯明器とわかる。

249は器形が異なっており、褐色系だが金雲母を多く含む。口縁部は外傾し器高は小さい。外面は4度の持ちかえでヘラケズリしているが、口縁端部直下にヨコナデのくぼみを削り残す。狭い底部は1方向のケズリで整える。その器形および調整手法からみて、平城宮土器Ⅶに属するとみられる。

椀 A (253~262) 31個体が出土している。SD3825出土の土師器では高い割合を占めるが、残存率が約6分の1未満の破片が多い。253は椀AⅡで、復原口径9.5cm、器高2.9cm。c₃手法だが、ヘラミガキの間隔が粗く下地のヘラケズリ痕がみえる。口縁部外面に赤彩あり。254~258・260~262は椀AⅠで、口径12.7~14.4cm、器高4.0~5.0cm。淡褐色~黄灰色系のⅠ群(257・258)と、褐色系のⅡ群(254~256・260~262)との両者がある。どちらもほとんどがc₃手法によるが、前者は口縁部にヨコナデ時の屈曲がわずかに残り、口縁端部がやや内傾気味である。これに対し、後者はヘラケズリが徹底しており、器壁が前者に比してやや薄い。258は外面に黒斑があり、260・261は灯明器に用いたもの。259も椀AⅠとするが、口縁部をヨコナデで仕上げ、ヘラミガキを施さない。端部が内側へとわずかに屈曲している。

椀 C (263・264) 4個体が出土している。椀Aに比して個体数は少ない。口径は13cm台で、器高3.8~4.7cm。263は胎土に砂粒を多く含み、外面に指頭圧痕を残す。口縁部のヨコナデは幅が狭く、屈曲も弱い。264は椀Cの典型で、口縁部を強いヨコナデで仕上げ、口縁端部が内傾している。

盤 A (265・266) 3個体が出土。265は黄灰色を呈するⅠ群土器で、強く外反する口縁部をもつ。外面にはヨコナデののち粗いヘラミガキを施す。高台の内側はヘラケズリで仕上げる。一方、266は橙褐色を呈するⅡ群土器で、口縁端部の形状が265とは異なる。縦方向のヘラケズリで口縁部外面をととのえ、ヘラミガキを施している。

甕 A (267~269) 破片が多く把手の有無がわからないが、ここでは甕Aとして記載する。いずれも球形の胴部と強く屈曲する頸部をもつ。267は灰褐色のⅠ群土器に属し、復原口径は17.5cmと小形のものである。胴部外面には縦方向のハケメを残すが、上半と下半とではハケメの方向がやや異なる。一方、内面の胴部下半には指頭圧痕が残り、胴部上半~口縁部にかけではヨコナデを施している。268は胴部外面に左下がりのハケメを残し、頸部はヨコナデで強く屈曲する。内面の胴部下半には指頭圧痕が残る。269は器面の剥落が進むが、胴部のない外面にハケメをとどめる。

ii 須恵器 (図版118)

須恵器は杯A・杯Bとその蓋が主体をなし、これに椀A・皿Cなどの食器類や壺E・甕などが

加わる。杯A・Bはどちらも最小の規格(杯AV・杯BV)のものが多い。

杯 A (270~272) 4個体が出土している。270は杯AIで、口径21.4cm。口縁部上半に重ね焼き痕を、底部付近に火襷をとどめる。271は灰白色軟質のもので、口径13.8cm、器高3.6cmである。

272は杯AVで、復原口径10.8cm、器高3.1cm。白色で軟質に焼きあがる。口縁部の上半には重ね焼き痕をとどめ、外底部はヘラ切りのままとする。

杯 B (273~276・281~286) 11個体が出土。すでに述べたように杯BVが多い。273・274は杯BIIで、口径17.2~17.8cm、器高5.6~5.8cm。273には降灰を認め、一部が火脹れを起こしている。274は口縁部の下部をヘラケズリしたもので、幅狭く細い高台をもつ。275・276は杯BIVで、口径13.0~14.1cm、器高4.0~4.5cm。どちらも右回転のヘラ切り痕を底部外面にとどめている。高台は断面形がほぼ四角形をなし、底部の外縁に貼り付けている。281~286は杯BV。口径は9.0~10.4cm、器高は3.1~3.7cmである。図示したものはいずれも灰色を呈する。高台は断面形が逆台形~四角形をなし、底部の外縁近くに貼り付けるものが目立つ。283・286は口縁部と高台との間に明確な段差がない部分もある。282は高台の内側にヘラ切り痕を残すが、281・285はロクロナデを施している。

杯B蓋 (277~280) 8個体を数える。277~280は杯BIIIの蓋。口径は15.0~16.2cmとほぼ同じだが、頂部が笠形のもの(277・279)と扁平なもの(278・280)とに分かれる。277は宝珠形をつまみを付しており、頂部に残るヘラ切り痕はロクロが右回転であったことを示している。278は頂部をロクロケズリで整え、279はつまみの周囲に回転ヘラ切り痕をとどめている。

皿 C (287) 1個体を数える。287は灰白色で軟質に焼きあがったもので、平滑な底部をロクロケズリで整える。

壺 E (290) 器表面は灰色を呈し、短い口縁部と直線的な胴部とをもつ。口径9.7cm、器高5.8cm。

壺A蓋 (288) 扁平な頂部の中央部に宝珠形をつまみを付したもので、全体に降灰を認め、一部が火脹れを起こしている。口径18.6cm。

壺 L (291) 2個体が出土。291は卵形の体部と外反する頸部とをもつ。頸部はやや傾き、口縁部の内面には降灰を認める。胴部下半はロクロケズリで整え、底部には断面台形の高台を付している。

甕 A (289) 1個体が出土。289は短く外方へとひらく口縁部と、胴部上半とを残す。胴部内面には当具痕を、同外面にはタタキメをとどめる。

O SK3831~3833・SK3835出土の土器

SK3831~3833・SK3835は基幹排水路SD3825の西側にある浅く不定形な土坑群である。出土土器には土坑間で接合するものがある。例えば、SK3831・SK3832・SK3833・SK3835間では須恵器甕や須恵器杯B蓋が、同じくSK3833・SK3835間では土師器高杯が接合している。土器群の様相からもほぼ同時期のものとみられるので、本書ではこれらを一括して記載することにした。土器群は平城宮土器V~VIIに属し、これらの土坑群が平城宮廃絶時以降に属することを示している。

i 土師器 (図86)

杯A、杯B、杯C、皿A、皿C、椀A、椀C、盤A、高杯、甕A、甕C、甕X (計107個体) があるが、全体に細片が多く保存状態はわるい。また、杯Aには9世紀代のもの (e-c手法およびe手法などによる) が含まれている。

杯 A (292~296) 292は杯A II (口径16.8~17.6cm) に属し、器表面の剥落が進むものの器形からc₀手法によるとみられる。平城宮土器Vに属する。

293~296は口径17.6~18.0cm、器高3.1~3.6cmで、杯A I (平城宮土器VII) に属する。上に示した杯A I (平城宮土器V) に比して口縁部の外傾度が大きい。このうち、293・294および

296は褐色を呈するII群土器でc₀手法によるのに対し、295は淡灰褐色のI群系土器である。293はほぼ完形で、口縁部のヘラケズリが5単位からなり、底部は1方向のヘラケズリで整えている。口縁部にはヨコナデのくぼみが残る (e-c手法)。295は底部を不調整にとどめ、口縁部をヨコナデで仕上げている。

皿 A (297~304) 皿A I (口径18.5~21.0cm: 297~299) と皿A II (口径16.0~18.0cm: 300~304) とがある。a₀手法 (298・299)、b₀手法 (297・304)、c₀手法 (300~303) がある。このうち、301は口縁部の外傾度が大きく、平城宮土器VIIに属すると考える。

椀 A (307~311) 307は口径10.8cm、器高3.4cmで、I群土器である。e手法で成形ののち口縁部にヘラミガキを施すが、ヘラミガキの間隔が粗い。308は口径12.1cm、器高3.9cmで、c₃手法による。4単位のヘラミガキを外面に施している。一部に煤が付着し、灯明器に用いたことを示す。

309~311は椀A (平城宮土器VII) で、すべて椀A II (口径13.8cm、器高3.1~3.3cm: 309~311) である。すべて褐色を呈するII群土器で、c₀手法による。外面のヘラケズリは309・310が5単位、311が6単位である。309・311の口縁部にはヨコナデ痕が削り切れずに残る。

椀 X (305) 手捏ねで器形をつくり、内面

表9 SK3831 等出土土器の器種構成

土師器	器種	個体数	比率 (%)	
供膳具	杯A	20	18.7	
	杯B	身	4	3.7
			0	0.0
	杯C	2	1.9	
	皿A	21	19.6	
	皿C	2	1.9	
	椀A	15	14.0	
	椀C	1	0.9	
	高杯	4	3.7	
盤A	3	2.8		
煮炊具	甕A	30	28.0	
	甕B	0	0.0	
	甕C	4	3.7	
	甕X	1	0.9	
合計		107	100.0	

須恵器	器種	個体数	比率 (%)	
供膳具	杯A	9	14.1	
	杯B	身	15	23.4
			11	17.2
	杯C	1	1.6	
	皿A	2	3.1	
	皿B	1	1.6	
	皿C	3	4.7	
	高杯	2	3.1	
	鉢D	1	1.6	
鉢F	1	1.6		
貯蔵具	壺A	身	2	3.1
			5	7.8
	壺G	2	3.1	
	壺L	1	1.6	
	壺M	1	1.6	
	横瓶	1	1.6	
甕	6	9.4		
合計		64	100.0	

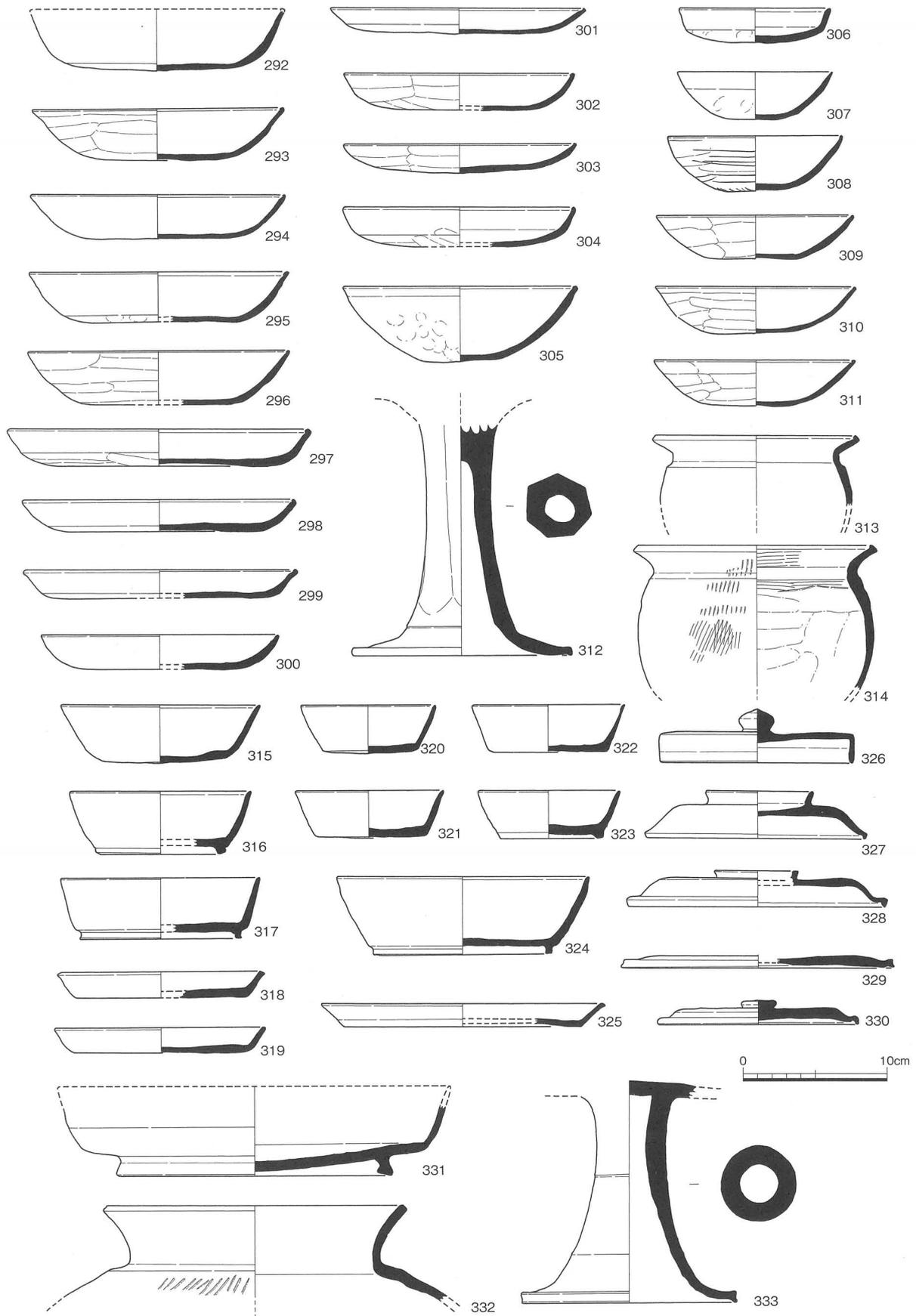


図 86 SK3831・SK3832・SK3835 出土の土器

と外面の口縁部付近とをヨコナデで仕上げたもの。外面には指頭圧痕が明瞭に残っている。器表面は淡灰褐色を呈するが、2次的に火を受けた痕跡をとどめ、被熱による表面の剥落も認められる。口径は16.3cm、器高5.3cmである。

高 杯 (312) 312は高杯の脚部。残存高は16.6cmで、底部径は15.4cmである。橙褐色のⅡ群土器で砂粒分が多い。脚部は心棒成形で、外面のヘラケズリは7面である。台脚の内外面はナデで仕上げている。

甕 A (313・314) 甕Aは30個体を数えるが、細片化が進んでいる。314は器表面がほぼ剥落しているが、胴部外面に縦方向のハケメ、内面に横方向のヨコナデが残る。口縁部の内側には横方向のハケメをとどめている。

ii 須恵器 (図86)

杯A、杯Bおよびその蓋、杯C、皿A、皿B、皿C、鉢D、鉢F、高杯、壺A、壺G、壺L、壺M、壺の蓋、横瓶、甕(計64個体)がある。このうち、主体を占めているのは食器類(71.9%)で、これ以外が壺・甕などの貯蔵具である。甕類は破片が多いものの接合しない。

杯 A (315・320~322) 320~322は杯AV(口径9.4~10.6cm、器高3.3cm)に属する。320はやや軟質の焼き上がりで、底部外面にヘラ切り痕を残している。口縁部には煤が付着し、灯明器として用いたものである。321・322の底部はほぼ平坦で、時計回りのロクロ回転を利用したヘラ切り痕を残す。315は杯AIV(口径13.9cm、器高4.1cm)。暗灰褐色で焼成がわるく、底部にはヘラ切り痕をとどめる。

杯 B (316・317・323・324) 15個体が出土している。324は杯BII(口径17.5cm、器高5.5cm)で、断面四角形の高台を付し、高台の内側に墨が付着する。転用硯であろう。317は杯BIIIで、ほぼ垂直に立ち上がる口縁部が特徴的である。316は杯BIV。323は杯BIVで、断面逆台形の高台を付し、高台の内側には時計回りのロクロ回転を利用したヘラ切り痕を残す。

杯B蓋 (327~330) 11個体が出土。327・328は平らな頂部と屈曲する縁部からなり、環状のつまみを付している。いずれも金属器模倣の蓋付椀と一具をなすものである。327は口径15.2cmで、環状つまみの高さは1.0cmである。重ね焼きの痕跡を縁部外面にとどめている。328は口径18.0cmである。

329は杯B Iの蓋で、口径19.0cm。頂部は扁平で中央部がややくぼみ、ヘラ切り痕はロクロナデで消去している。330は口径13.9cmで、全体に厚手である。頂部は平坦で、ヘラ切り痕をわずかに残す。内面には重ね焼き痕がある。

皿 B (331) 1個体が出土。口径は復原値で約27cmである。器表面は灰色を呈するが、口縁部外面には緑色の自然釉がかかり、内面および高台の内側にはこれが付着しない。内面および外面はロクロナデで整形している。高台の内側にはロクロケズリの痕跡が残る。高台は断面台形に近く、口縁部より2cmほど内側に付している。

皿 C (318・319・325) 3個体が出土。325は皿CI(口径19.6cm)に属し、底部をほぼ欠くがヘラ切り痕を一部に残している。318は皿CII(口径14.0cm)で、灰白色を呈し、底部外面のみが橙色に発色する。焼成はややわるい。

高 杯 (333) 2個体が出土している。333は高杯の脚部。残存高は15.6cmで、器壁が厚い。断

面形は正円で、脚部を粘土紐巻上げで成形し、ロクロナデで仕上げたのち杯部に貼り付けている。背部の底部内面には1方向のナデが残る。

壺A蓋 (326) 破片を含め5個体が出土している。326は平坦な頂部に宝珠形のつまみを付したもので、頂部からつまみ部にかけて緑色の自然釉がかかる。猿投窯の産品であろう。SK3831からの出土。

甕 (332) 6個体が出土している。332は胴部中部から下半を失うが、頸部付近の胴部にタタキメを残している。頸部には降灰が認められる。頸部接着時の段差およびロクロメが内面に残っている。

P SB18500柱抜取穴出土の土器

西楼SB18500の柱抜取穴から出土した土器は整理箱15箱を数える。同時期に解体されたとみられる東楼SB7802の柱抜取穴からは土師器234個体以上、須恵器242個体以上におよぶ多量の土器が出土している（『平城報告XI』）が、SB18500の土器はこれに比べると量が少ない。SB7802出土の土器と同様に平城宮土器IVに属し、西楼の解体時期に廃棄された土器群である。

平城宮 IV

i 土師器 (図版119)

土師器には杯A、杯C、皿A、椀A、椀C、鉢B、甕Aなどがあるが、細片が多い。須恵器には杯A、杯B、杯B蓋、杯C、皿A、短頸壺の蓋、甕Cがある。甕Cは3個体あり、うち2個体には内面に煤が付着するなど使用の痕跡がある。土師器食器（杯A・皿A）には内面に1段斜放射暗文や螺旋暗文をもつ個体もある。

杯 A (334~336) 7個体が出土している。いずれも淡灰褐色を呈するI群土器で、口径は19.2~21.0cm、器高は4.0~4.4cmである。334は底部を欠くがb₀手法とみられる。335はb₀手法で、底部外面には指頭圧痕が削りきれずに残っている。内面には1段斜放射暗文+螺旋暗文を施す。336はa₀手法で、暗文をもたない。

皿 A (337~339) 3個体を数える。いずれも淡灰褐色のI群土器であるが、338は皿A I（口径20.4cm）、339は皿A II（口径15.6cm）に属する。338はb₁手法で、内面には1段斜放射暗文+螺旋暗文を、口縁部の外面には粗いヘラミガキを施している。

表 10 SB18500 柱抜取穴出土土器の器種構成

土師器	器種	個体数		
杯A		7	26.9	
杯B	身蓋	0	0.0	
		1	3.8	
杯C		5	19.2	
皿A		3	11.5	
皿C		1	3.8	
椀A		2	7.7	
椀C		1	3.8	
鉢B		1	3.8	
煮炊具 甕		5	19.2	
合計		26	100.0	
須恵器	器種	個体数		
供膳具	杯A	6	17.6	
	杯B	身蓋	4	11.8
			10	29.4
	杯C	1	2.9	
	皿C	2	5.9	
鉢A	1	2.9		
貯蔵具	壺A		0.0	
	壺A蓋	3	8.8	
	壺K	1	2.9	
	壺M	1	2.9	
	平瓶	1	2.9	
	甕A	1	2.9	
甕C	3	8.8		
合計		34	100.0	

339はb₀手法で、内面に1段斜放射暗文を施している。口縁端部には煤が付着し、灯明器として使用したものである。

杯 C (340) 5個体を数える。淡灰褐色を呈するI群土器で、口径17.0cmである。器表面の剥落が進んでいるが、b手法によるとみられる。

椀 A (341) 2個体が出土。341は椀A I。褐色・砂質のII群土器で、c手法による。口径は15.4cmで、SK820やSK219出土の椀A Iにはほぼ等しい。口縁部にはヘラミガキを施している。

鉢 B (342) 1個体が出土している。342は口径約19cm、残存高6.2cmである。口縁部直下をヨコナデし、それ以下にはヘラケズリを施している。粗いヘラミガキは底部までおよばない。口縁端部を内側に小さく巻き込んでいる。

甕 A (343) 甕類は胴部の細片が多く、このため個体数は5点と少なく見積もらざるをえない。胴部片のうちでは、内面をナデ、外面をハケメで整える球胴形のものが多いが、これ以外に内外面をハケメで整えた破片も少なくない。343は胴部下半を欠くが、ほぼ球胴形であったとみられる。胴部上半にナメハケ、頸部に縦方向のハケメをとどめ、内面はナデで仕上げる。口縁部内面には横方向のハケメを残している。

ii 須恵器 (図版119)

須恵器には、杯A、杯B、杯B蓋、杯C、皿A、壺A蓋、甕Cなどがある。これらの器種はSB7802の出土土器の組成に含まれるものだが、出土量は概して少ない。しかし墨書土器は5個体を数える。なお、SB18500の甕Cは3個体を数えるが、SB7802でも同じ器種が8個体出土しているのが興味深い。

杯 A (344) 6個体を数える。344は杯A V。口縁端部の大部分を欠失するが、重ね焼き痕をとどめている。底部外面には回転ヘラ切り痕が完全には消えずに残る。

杯B蓋 (350~352) 10個体を数える。350・351は口径が12.5~13.0cmで、杯BIVの蓋である。350はやや笠形の頂部をロクロケズリで整形したものだが、焼成がわるく白色に焼きあがる。内面に黒色の付着物がある。351は平坦で中央がややくぼむ頂部をもち、重ね焼き痕が明瞭である。重ね焼き痕の直径は11.4cmである。頂部内面は不定方向にナデで整える。352は杯BIIIの蓋で、ほぼ平坦な頂部をもち、中央部にはヘラ切り痕を残す。頂部外面に墨書「香」、同内面には墨書「印香醜」がある。

杯 B (345~348) 4個体が出土。345は杯B I、346・347は杯B III、348は杯BIVである。348は高台を底部外縁近くに貼り付けたもので、底部外面をナデでヘラ切り痕を消去している。347は外面に降灰を認める。

杯 C (349) 1個体のみ出土。349は口縁部のみの破片資料であるが、口縁部が土師器杯Aのように屈曲し、口縁端部を上方へつまみ上げている。

壺A蓋 (353・354) 3個体を数える。ともに扁平な頂部と直立する縁部とをもち、頂部の中央部には宝珠形をつまみを付す。縁端部はいずれも内端を下方へ突出させるもので、縁部の外側が段をなす。

甕 C (355~357) 接合して本来の形状を確認できるものが3個体ある。355は西楼SB18500の柱抜取穴イ三の東南部から出土したもので、接合してほぼ完形に復する。口径35.4cm、胴部

の最大径40.0cm、器高は31.1cmである。内面は胴部下半を左上がりのナデ、同上半を水平方向のナデで整え、口縁部はロクロナデで仕上げている。外面にはロクロケズリの痕跡が明瞭に残る。焼成はやや甘く器表面は白色を呈するが、胴部内面には煤が付着している。口縁部の内面は半周にわたり器表面が剥落するが、被熱によるものかはわからない。

356は口径27.4cm、胴部の最大径29.1cm、器高19.6cmで、口縁部外面をヨコナデ、内面を右上がり優勢のナデで仕上げている。胴部外面には格子目状のタタキメを残しているが、ナデによりやや不明瞭である。色調は灰色を呈する。22とは異なり、内外面への煤の付着は軽微である。

357は356とほぼ同寸・同形で、口径34.8cm、胴部の最大径38.2cm、器高29.8cmである。口縁部をヨコナデ、胴部内面をほぼ水平方向のナデで仕上げ、胴部外面には左上がりのタタキメを残している。高台は周囲から打ち欠いた形跡があり、全形をとどめない。器表面は灰白色で、胎土には微細な黑色粒子を含んでいる。355と同様、内面と外面の一部には煤が斑状に付着している。

壺 M (358) 1個体のみ出土。頸部を失っているが、やや潰れた球形の胴部をもち、断面四角形の高台を付している。胴部上半には降灰が認められる。

Q 陶 硯

今回報告する範囲では、第一次大極殿院西辺整地土下位の茶褐色木屑層（第177次）や第一次大極殿院の西南隅（第296次）、西面築地回廊付近（第305次）、基幹排水路SD3825（第315次）から陶硯の破片がごく少量出土している。『平城報告XI』で報告された陶硯は20点にすぎず、第一次大極殿院出土の陶硯がわずかであることを示している。以下、既報告資料（『平城京出土陶硯集成I』）ではあるが、あらためて紹介する。

茶褐色木屑層（第177次） 圈足円面硯の脚部が出土している（図87-3）。残存部位は脚部2本分で、この間は長方形の透孔となる。内面には降灰を認める。

SD3825（第315次） 圈足円面硯が2個体分出土している（図87-1・2）。1は圈足円面硯の硯面を残し、2本の脚とその間の透孔の上部をとどめる。外堤の側面には、櫛描きの波状文を施している。2は圈足硯の脚部で、3本の脚が部分的に残存し、その間に十字形の透孔が残っている。

このほか、赤褐色バラス層（第296次）から蹄脚円面硯Bの脚部1本が、灰色粘土（第305次）から圈足円面硯の脚部が出土している。

R 墨書土器・墨画土器

今回報告する範囲では、第一次大極殿院西辺整地土下位の木屑層・炭層や、基幹排水路SD3825、西樓SB18500柱抜取穴（第337次）などの遺構で墨書土器・墨画土器が出土している。その総数は45点と決して多くはなく、『平城報告XI』に掲載の墨書土器・墨画土器（26点）と合わせてみても、第一次大極殿院地区の墨書土器は、なお100点に満たない。その中でも最も出土量が多いのはSD3825で、基幹排水路からの出土例が多いという、これまでの平城宮内での出土傾向に一致する。以下、既報告の資料（『平城宮出土墨書土器集成』I～III所載）が多いが、

遺構別にあらためて紹介する(表11、図版120)。

木屑層・炭層(第177次) 土師器杯Cの底部片外面に「酒坏」と記したものがあがるが、これ以外に墨書土器は皆無である。

SD3825(第28・315・316次) 14点を数える。内訳は須恵器10点、土師器4点で、前者が多いのは平城宮で出土する墨書土器の一般的な傾向といえるが、一文字が多く判読できるものは少ない。判読できる文字には「大」、「水」、「厨」がある。

SD3839(第28次) 4点を数え、すべて須恵器である。墨書には「大炊所」・「丹波坊」・「厨」・「伊佐」などがある。

SK3823・SK3831・SK3832(第28次) SK3831では須恵器の壺底部外面に「□〔福カ〕来」と記した墨書土器が出土している。このほか、SK3832ではつまみ部に「吉」と墨書した須恵器杯B蓋が出土している。

SB18500柱抜取穴(第337次) 4点を数え、すべて須恵器である。杯B蓋で、頂部外面のつまみ右側に「香」、内面には「印香醜」の墨書をもつものがあるが、その他の墨書土器はいずれも1文字分の墨書をとどめ、文字の判読が難しい。

その他の遺構 上記以外の遺構では、SX18160(第305次)から「近衛府一」と記した須恵器杯Bが、また底部外面に「右兵ノ粥埵」、内面に「兵部粥」との墨書を記した須恵器杯Bが出土している。

墨画土器 第316次の包含層から、口縁部外面に鳥の絵を描いた須恵器皿B片(図版120)が出土している。鳥の絵は翼を広げたかたちで描かれたものである。このほか、蓮の花弁とみられる模様を外面に描いた須恵器片(図版120)も出土しているが、小片であるため器形は明らかでない。

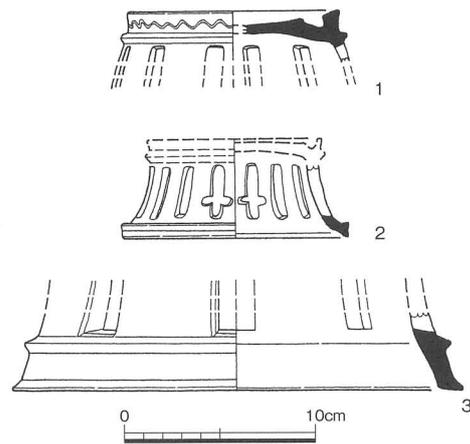


図87 第一次大極殿院地区出土の陶硯

表 11 第一次大極殿院地区出土の墨書土器

次数	遺構／土層名	積文	土器の種類	器種	墨書部位
316	SD3825C	大	土師器	杯A	底部外面
316	SD12965	厨	須恵器	杯B	底部外面
316	暗灰褐色粘質土	福	須恵器	杯B	底部外面
316	SD3825C	大	須恵器	杯B蓋	つまみ部
316	SD3825C	大	須恵器	杯B	底部外面
316	SD3825C	□	須恵器	杯A	内面
316	SD3825C	坏／□〔盛力〕	土師器	皿A	内面／外面
316	SD3825C	厨	須恵器	杯B	底部外面
316	東西溝1／南北溝	右兵／粥境 兵衛粥	須恵器	杯B	底部外面 内面
316	SD3825C	□	須恵器	杯B蓋	頂部
316	SD3825C	□	須恵器	甕	胴部
316	SX18256	水	土師器	杯または皿	口縁部
316	褐灰色砂質土	□	須恵器		
316	暗灰褐色粘質土	去	須恵器	杯A	底部外面
315	SD18219	□〔佐力〕／〔 〕(文字数不明)	須恵器	杯B蓋	頂部内外面
315	暗黒色粘土	〔 〕(文字数不明)	土師器	杯または皿	
315	SD3825	□	須恵器	杯A	底部外面
315	SD16040	□	土師器	杯または皿	
315	SD3825	□	須恵器	壺	体部
315	SD3825	〔万呂力〕	須恵器	杯A	
315	SD3825	〔絵力〕	土師器	杯または皿	
28	SD3825	水	土師器	皿A	
28	SK3823	□	須恵器	杯B蓋	頂部外面
28	SD3839	大炊所	須恵器	杯B	底部外面
28	SD3839	丹波坊	須恵器	杯	底部外面
28	SD3839	厨	須恵器	杯	底部外面
28	SD3839	葛□	須恵器	杯B	頂部外面
28	SD3839	伊佐	須恵器		
28	SD3825	□／□	須恵器	杯B蓋	
28	SK3831	□〔福力〕末	須恵器	壺	底部外面
28	SK3832	吉	須恵器	杯B蓋	つまみ部
28	SK3832	□□	土師器	皿A	底部外面
28	黒色粘土	○(記号)	須恵器	杯B蓋	頂部外面(転用硯)
305	SX18160	迹衛府一	須恵器	杯B	底部外面
337	SB18500抜取穴	香(外面) 印香臈(内面)	須恵器	杯B蓋	内外面
337	SB18500抜取穴	□	須恵器		
337	SB18500抜取穴	□□〔地力〕□	須恵器	杯B蓋	
337	SB18500抜取穴	□〔長力〕□／□	須恵器	甕	内面
337	SB18500抜取穴	□□	須恵器	杯	底部外面
177		□	土師器	杯または皿	底部内面
177		酒坏	土師器	杯C	底部外面
177		間	須恵器	甕	
177		□足□	須恵器	杯A	口縁部
192	SD13402	□	土師器	杯A	底部外面
192	SD13402	五	須恵器	杯A	口縁部

表 12 出土土器一覽

番号	遺物名	遺構・層位	次数	大地区	小地区	備考
1	(土) 杯 A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
2	(土) 杯 A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
3	(土) 杯 A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
4	(土) 杯 A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐色粘質土
5	(土) 杯 A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
6	(土) 杯 A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐色粘質土・茶褐色木屑層
7	(土) 杯 A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	炭層
8	(土) 杯 B 蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
9	(土) 杯 B 蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27・DN27	茶褐色木屑層
10	(土) 杯 B	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐色粘質土
11	(土) 杯 B	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	炭層
12	(土) 杯 C	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	炭層
13	(土) 杯 C	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐色粘質土
14	(土) 杯 C	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	炭層
15	(土) 杯 C	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	炭層
16	(土) 杯 C	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	炭層
17	(土) 皿 A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	炭層
18	(土) 皿 A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	炭層
19	(土) 碗 C	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	炭層
20	(土) 碗 C	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐色粘質土
21	(土) 碗 X	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐色木屑層
22	(土) 碗 X	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
23	(土) 碗 X	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	炭層
24	(土) 碗 X	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
25	(土) 碗 X	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	炭層
26	(土) 碗 X	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
27	(土) 鉢 X	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
28	(土) 鉢 X	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
29	(土) 鉢 X	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐色木屑層
30	(土) 鉢 X	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
31	(土) 蓋 X	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色砂土
32	(土) 高杯	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
33	(土) 盤 A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
34	(土) 盤 A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	炭層
35	(土) 壺 A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
36	(土) 壺 A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
37	(土) 壺 A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	炭層
38	(土) 甕 A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
39	(土) 甕 C	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	
40	(土) 甕 C	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	黒褐色土・炭層
41	(土) 甕 A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐色木屑層
42	(土) 甕 A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	炭層
43	(土) 甕 B	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
44	(土) 甕 B	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	炭層
45	(須) 杯 A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	炭層
46	(須) 杯 A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28/DM28	炭層

第四章 遺物

番号	遺物名	遺構・層位	次数	大地区	小地区	備考
47	(須) 杯A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐色木屑層・炭層
48	(須) 杯A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
49	(須) 杯A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐色木屑層
50	(須) 杯B蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐色粘質土
51	(須) 杯B蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	炭層
52	(須) 杯B蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	炭層
53	(須) 杯B蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	-	
54	(須) 杯B蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐色木屑層
55	(須) 杯B蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28・DN27	茶褐色木屑層・茶褐色粘質土
56	(須) 杯B蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐色木屑層
57	(須) 杯B蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	炭層
58	(須) 杯B	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	炭層
59	(須) 杯B	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐色木屑層
60	(須) 杯B	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	炭層
61	(須) 皿D	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	炭層
62	(須) 皿B蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐色木屑層
63	(須) 皿B蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	炭層
64	(須) 皿B蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27・DM28	炭層・茶褐色粘質土
65	(須) 皿B蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27・DM28	茶褐色木屑層・茶褐色粘質土
66	(須) 皿B	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐色粘質土
67	(須) 皿A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
68	(須) 壺A蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
69	(須) 壺A蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	炭層
70	(須) 壺B	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色木屑層
71	(須) 壺D	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	東西溝最下層木屑層
72	(須) 盤A	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27・DN28	茶褐色木屑層
73	(須) 甕C	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27・DN29	茶褐色木屑層
74	(須) 甕C	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐色木屑層
75	(須) 甕C	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐色木屑層
76	(須) 甕C	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27・DM28	茶褐色粘質土・炭層
77	(須) 甕C	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐色木屑層
78	(土) 杯A	SD12965	316	6ACC	NJ21	
79	(土) 杯A	SD12965	316	6ACC	NI20	
80	(土) 杯A	SD12965	316	6ACC	NJ20	
81	(土) 杯A	SD12965	316	6ACC	NJ21	
82	(土) 皿A	SD12965	316	6ACC	NJ18	
83	(土) 碗X	SD12965	316	6ACC	NI22	
84	(土) 碗A	SD12965	316	6ACC	NJ18	
85	(須) 杯B蓋	SD12965	316	6ACC	NI20/NJ20	
86	(須) 鉢A	SD12965	316	6ACC	NJ20	
87	(土) 杯A	SB17870	295	6ABP	IL50	
88	(土) 杯A	SB17870	295	6ABP	IL49	
89	(土) 杯A	SB17870	295	6ABP	IL50	
90	(土) 杯C	SB17870	295	6ABP	IL52	
91	(土) 皿A	SB17870	295	6ABP	IL52	
92	(土) 皿A	SB17870	295	6ABP	IG49	

番号	遺物名	遺構・層位	次数	大地区	小地区	備考
93	(土) 皿A	SB17870	295	6ABP	IL50	
94	(土) 皿A	SB17870	295	6ABP	IG49	
95	(土) 杯C	SB17870	295	6ABP	IJ64	
96	(土) 杯B蓋	SB17870	295	6ABP	IL49	
97	(土) 杯B蓋	SB17870	295	6ABP	IL52	
98	(土) 杯B蓋	SB17870	295	6ABP	IH50	
99	(土) 皿A	SB17870	295	6ABP	IG49	
100	(土) 皿A	SB17870	295	6ABP	IH52	
101	(土) 皿A	SB17870	295	6ABP	IL52	
102	(土) 皿A	SB17870	295	6ABP	IG49	
103	(土) 杯A	SB17870	295	6ABP	Ik55	
104	(土) 壺B	SB17870	295	6ABP	IL49	
105	(土) 椀A	SB17870	295	6ABP	IL50	
106	(土) 椀A	SB17870	295	6ABP	IL50	
107	(土) 椀A	SB17870	295	6ABP	IL52	
108	(土) 椀A	SB17870	295	6ABP	IL52	
109	(土) 杯A	SB17874	295	6ABP	IJ64	
110	(土) 皿A	SB17874	295	6ABP	IJ64	
111	(土) 皿A	SB17874	295	6ABP	IJ64	
112	(土) 皿A	SB17874	295	6ABP	IJ64	
113	(土) 皿A	SB17874	295	6ABP	IJ64	
114	(土) 甕A	SB17870	295	6ABP	IL52	
115	(土) 甕A	SB17870	295	6ABP	IL52	
116	(土) 甕A	SB17870	295	6ABP	IK56	
117	(土) 甕A	SB17870	295	6ABP	IL52	
118	(土) 甕A	SB17870	295	6ABP	IG49	
119	(土) 甕A	SB17870	295	6ABP	IG49	
120	(土) 甕A	SB17870	295	6ABP	IG49	
121	(須) 杯A	SB17870	295	6ABP	IH43	
122	(須) 杯A	SB17870	295	6ABP	IL49	
123	(須) 杯B	SB17870	295	6ABP	IG50	
124	(須) 杯B	SB17870	295	6ABP	IL52	
125	(須) 杯B	SB17870	295	6ABP	IG50	
126	(須) 杯B	SB17870	295	6ABP	IL52	
127	(須) 杯B蓋	SB17870	295	6ABP	IG47	
128	(須) 杯B蓋	SB17870	295	6ABP	IG49	
129	(須) 杯B蓋	SB17870	295	6ABP	IG49	
130	(須) 杯B蓋	SB17870	295	6ABP	IG47	
131	(須) 杯B蓋	SB17870	295	6ABP	IL52	
132	(須) 杯B蓋	SB17870	295	6ABP	IL52	
133	(須) 鉢D	SB17870	295	6ABP	IH50	
134	(須) 平瓶	SB17870	295	6ABP	IG49	ミニチュア
135	(須) 甕	SB17871	295	6ABP	IF51	
136	(土) 椀A	SX18160	295	6ABP	IC69	
137	(土) 椀C	SX18160	305	6ABP	IC69	
138	(土) 皿A	SX18160	305	6ABP	IC67	

第IV章 遺物

番号	遺物名	遺構・層位	次数	大地区	小地区	備考
139	(須) 杯B蓋	SX18160	305	6ABP	IC71	
140	(須) 杯B蓋	SX18160	305	6ABP	IC70	
141	(須) 杯B	SX18160	305	6ABP	IC69	
142	(須) 杯B	SX18160	305	6ABP	IC69	
143	(須) 杯B	SX18160	305	6ABP	IC70	
144	(須) 杯A	SX18160	305	6ABP	IC69	
145	(土) 杯A	SK17910	305	6ABP	IM67	
146	(土) 皿A	SK17910	305	6ABP	IM67	
147	(土) 皿A	SK17910	305	6ABP	IM67	
148	(土) 皿A	SK17910	305	6ABP	IM67	
149	(土) 杯B蓋	SK17910	305	6ABP	IM67	
150	(土) 皿A	SK17910	305	6ABP	IM67	
151	(土) 杯C	SK17910	305	6ABP	IM67	
152	(土) 杯C	SK17910	305	6ABP	IM67	
153	(土) 皿A	SK17910	305	6ABP	IM67	
154	(土) 皿A	SK17910	305	6ABP	IM67	
155	(土) 杯A	SB18140	305	6ABP	HS55	
156	(土) 皿A	SB18140	305	6ABP	HS55	
157	(土) 皿A	SB18140	305	6ABP	HS55	
158	(土) 皿A	SB18140	305	6ABP	HS55	
159	(土) 杯A	SK17905	295	6ABP	IM56	
160	(土) 杯A	SK17905	295	6ABP	IM56	
161	(土) 皿A	SK17905	295	6ABP	IM56	
162	(土) 皿A	SK17905	295	6ABP	IM56	
163	(土) 皿A	SK17905	295	6ABP	IM56	
164	(土) 皿A	SK17905	295	6ABP	IM56	
165	(土) 皿A	SK17905	295	6ABP	IM56	
166	(土) 皿A	SK17905	295	6ABP	IM56	
167	(土) 杯B蓋	SK17905	295	6ABP	IM56	
168	(土) 皿A	SK17905	295	6ABP	IM56	
169	(土) 皿A	SK17905	295	6ABP	IM56	
170	(土) 杯B	SK17905	295	6ABP	IM56	
171	(土) 高杯	SK17905	295	6ABP	IM56	
172	(土) 壺E	SK17905	295	6ABP	IM56	
173	(土) 甕A	SK17905	295	6ABP	IM56	
174	(土) 甕A	SK17905	295	6ABP	IM56	
175	(土) 杯A	SK17907	295	6ABP	IL57	
176	(土) 杯A	SK17907	295	6ABP	IL57	
177	(土) 杯A	SK17907	295	6ABP	IL57	
178	(土) 碗C	SK17907	295	6ABP	IL57	
179	(土) 皿A	SK17907	295	6ABP	IL57	
180	(土) 皿A	SK17907	295	6ABP	IL57	
181	(土) 皿A	SK17907	295	6ABP	IL57	
182	(土) 皿A	SK17907	295	6ABP	IL57	
183	(土) 皿A	SK17907	295	6ABP	IL57	
184	(土) 皿A	SK17907	295	6ABP	IL57	

番号	遺物名	遺構・層位	次数	大地区	小地区	備考
185	(土) 皿A	SK17907	295	6ABP	IL57	
186	(土) 杯B蓋	SK17907	295	6ABP	IL57	
187	(土) 皿A	SK17907	295	6ABP	IL57	
188	(土) 皿A	SK17907	295	6ABP	IL57	
189	(土) 皿A	SK17907	295	6ABP	IL57	
190	(土) 皿A	SK17907	295	6ABP	IL57	
191	(土) 皿A	SK17907	295	6ABP	IL57	
192	(須) 杯B蓋	SK17907	295	6ABP	IL57	
193	(須) 杯B	SK17907	295	6ABP	IL57	
194	(須) 壺A蓋	SK17907	295	6ABP	IL57	
195	(須) 杯B蓋	SK17907	295	6ABP	IL57	
196	(須) 杯B	SK17907	295	6ABP	IL57	
197	(須) 壺	SK17907	295	6ABP	IL57	
198	(土) 杯A	SD18155	305	6ABP	67列	
199	(土) 皿A	SD18155	305	6ABP	67列	
200	(土) 皿A	SD18155	305	6ABP	67列	
201	(土) 椀A	SD18143	305	6ABP	IA56	
202	(土) 椀A	SD18143	305	6ABP	IA56	
203	(土) 椀A	SD18143	305	6ABP	IA55	
204	(土) 皿A	SD18143	305	6ABP	IA56	
205	(土) 皿A	SD18143	305	6ABP	IA55	
206	(土) 皿A	SD18143	305	6ABP	IA55	
207	(土) 皿A	SD18143	305	6ABP	IA56	
208	(土) 皿A	SD18143	305	6ABP	IA55	
209	(須) 杯A	SD18143	305	6ABP	IA56	
210	(須) 杯B	SD18143	305	6ABP	IA56	
211	(灰釉) 椀	SD18143	305	6ABP	IA56	
212	(土) 杯A	SB14200	305	6ABP	HJ63	
213	(土) 皿A	SB14200	305	6ABP	HJ64	
214	(土) 皿A	SB14200	305	6ABP	HJ64	
215	(土) 皿A	SB14200	305	6ABP	HJ64	
216	(土) 皿A	SB14200	305	6ABP	HJ60	
217	(土) 皿A	SB14200	305	6ABP	HJ64	
218	(土) 高杯	SB14200	305	6ABP	HJ62	
219	(土) 杯A	SD3825	315	6ACC	LT18-5	
220	(土) 杯A	SD3825	316	6ACC	NG18	
221	(土) 杯A	SD3825	315	6ACC	LR18-1	
222	(土) 杯A	SD3825	316	6ACC	NG18	
223	(土) 杯B	SD3825	315	6ACC	LQ18	
224	(土) 杯B	SD3825	316	6ACC	NG18	
225	(土) 杯B蓋	SD3825	316	6ACC	NH18	
226	(土) 杯B蓋	SD3825	315	6ACC		
227	(土) 杯C	SD3825	316	6ACC	NI18	
228	(土) 杯C	SD3825	316	6ACC	NI18	
229	(土) 杯C	SD3825	316	6ACC	NH18	
230	(土) 杯C	SD3825	316	6ACC	NI18	

第IV章 遺物

番号	遺物名	遺構・層位	次数	大地区	小地区	備考
231	(土) 杯C	SD3825	316	6ACC	NI18	
232	(土) 皿A	SD3825	316	6ACC	NI18	
233	(土) 皿A	SD3825	316	6ACC	NG18	
234	(土) 皿A	SD3825	316	6ACC	NI18	
235	(土) 皿A	SD3825	316	6ACC	NI18	
236	(土) 皿A	SD3825	316	6ACC	NH18	
237	(土) 杯C	SD3825	316	6ACC	NI18	
238	(土) 杯C	SD3825	316	6ACC	NG18	
239	(土) 杯C	SD3825	315	6ACC	LR18-6	
240	(土) 杯C	SD3825	316	6ACC	NI18	
241	(土) 杯C	SD3825	315	6ACC	LR16/LR18	
242	(土) 杯C	SD3825	316	6ACC	NG18	
243	(土) 杯C	SD3825	316	6ACC	NG18	
244	(土) 杯C	SD3825	316	6ACC	NJ18	
245	(土) 杯C	SD3825	316	6ACC	NG18	
246	(土) 杯C	SD3825	316	6ACC	NG18	
247	(土) 皿A	SD3825	316	6ACC	NJ18	
248	(土) 皿A	SD3825	316	6ACC	NG18	
249	(土) 皿A	SD3825	316	6ACC	NH18	
250	(土) 皿A	SD3825	316	6ACC	NI18	
251	(土) 皿A	SD3825	316	6ACC	NG18	
252	(土) 皿A	SD3825	316	6ACC	NG18	
253	(土) 椀A	SD3825	315	6ACC	LQ18	
254	(土) 椀A	SD3825	316	6ACC	NH18	
255	(土) 椀A	SD3825	315	6ACC	LR18	
256	(土) 椀A	SD3825	316	6ACC	NG18	
257	(土) 椀A	SD3825	315	6ACC	LR18-1/LQ18	
258	(土) 椀A	SD3825	315	6ACC	LQ18	
259	(土) 椀A	SD3825	316	6ACC	NI18	
260	(土) 椀A	SD3825	316	6ACC	NG18	
261	(土) 椀A	SD3825	315	6ACC	LQ18	
262	(土) 椀A	SD3825	316	6ACC	NG18	
263	(土) 椀C	SD3825	316	6ACC	NI18	
264	(土) 椀C	SD3825	315	6ACC	LS18-3	
265	(土) 盤A	SD3825	316	6ACC	NG18	
266	(土) 盤A	SD3825	315	6ACC	LR17/LR18	
267	(土) 甕A	SD3825	316	6ACC	NG18	
268	(土) 甕A	SD3825	316	6ACC	NG18	
269	(土) 甕A	SD3825	316	6ACC	NG18	
270	(須) 杯A	SD3825	316	6ACC	LQ17-9	
271	(須) 杯A	SD3825	315	6ACC	NG18	
272	(須) 杯A	SD3825	316	6ACC	NG18	
273	(須) 杯B	SD3825	316	6ACC	NH18	
274	(須) 杯B	SD3825	316	6ACC	NG18	
275	(須) 杯B	SD3825	316	6ACC	NG18	
276	(須) 杯B	SD3825	315	6ACC	LT17-8	

番号	遺物名	遺構・層位	次数	大地区	小地区	備考
277	(須) 杯B蓋	SD3825	316	6ACC	NG18	
278	(須) 杯B蓋	SD3825	315	6ACC	LS18-5/LT18	
279	(須) 杯B蓋	SD3825	316	6ACC	NI18	
280	(須) 杯B蓋	SD3825	316	6ACC	NG18	
281	(須) 杯B	SD3825	315	6ACC	LR18-1	
282	(須) 杯B	SD3825	316	6ACC	LR17-7	
283	(須) 杯B	SD3825	315	6ACC	LT18-3	
284	(須) 杯B	SD3825	316	6ACC	NH18	
285	(須) 杯B	SD3825	316	6ACC	NG18	
286	(須) 杯B	SD3825	316	6ACC	NI18	
287	(須) 皿C	SD3825	315	6ACC	NG18	
288	(須) 壺A蓋	SD3825	316	6ACC	NG18	
289	(須) 甕A	SD3825	316	6ACC	NG18	
290	(須) 壺E	SD3825	316	6ACC	NG18	
291	(須) 壺L	SD3825	316	6ACC	NG18	
292	(土) 杯A	SK3831	28	6ACC	FB28	
293	(土) 杯A	SK3831	28	6ACC	FB28	
294	(土) 杯A	SK3831	28	6ACC	FB28	
295	(土) 杯A	SK3831	28	6ACC	FB28	
296	(土) 杯A	SK3833	28	6ACC	FD27	
297	(土) 皿A	SK3831	28	6ACC	FB27	
298	(土) 皿A	SK3823	28	6ACC	FJ19	
299	(土) 皿A	SK3832	28	6ACC	FC30	
300	(土) 皿A	SK3831	28	6ACC	FB27	
301	(土) 皿A	SK3831	28	6ACC	FJ17	
302	(土) 皿A	SK3831	28	6ACC	FB27	
303	(土) 皿A	SK3831	28	6ACC	FC30	
304	(土) 皿A	SK3831	28	6ACC	FC30	
305	(土) 椀X	SK3827	28	6ACC	FG37	
306	(土) 皿C	SK3827	28	6ACC	FG37	
307	(土) 椀A	SK3833	28	6ACC	FD27	
308	(土) 椀A	SK3835	28	6ACC	FD33	
309	(土) 椀A	SK3832	28	6ACC	FJ19	
310	(土) 椀A	SK3831	28	6ACC	FB28	
311	(土) 椀A	SK3823	28	6ACC	FJ17	
312	(土) 高杯	SK3833	28	6ACC	FD27	
313	(土) 甕A	SK3831	28	6ACC	FB28	
314	(土) 甕A	SK3835	28	6ACC	FD33	
315	(須) 杯A	SK3835	28	6ACC	FD33	
316	(須) 杯B	SK3833	28	6ACC	FD27	
317	(須) 杯B	SK3831	28	6ACC	FB27	
318	(須) 皿C	SK3831	28	6ACC	FB27	
319	(須) 皿C	SK3831	28	6ACC	FB27	
320	(須) 杯A	SK3831	28	6ACC	FC30	
321	(須) 杯A	SK3831	28	6ACC	FB28	
322	(須) 杯A	SK3831	28	6ACC	FC30	

第IV章 遺物

番号	遺物名	遺構・層位	次数	大地区	小地区	備考
323	(須) 杯B	SK3833	28	6ACC	FH27	
324	(須) 杯B	SK3833	28	6ACC	FH27	
325	(須) 皿C	SK3831	28	6ACC	FB27	
326	(須) 壺A蓋	SK3831	28	6ACC	FB27・28	
327	(須) 杯B蓋	SK3831	28	6ACC	FB29	
328	(須) 杯B蓋	SK3831	28	6ACC	FB27	
329	(須) 杯B蓋	SK3831	28	6ACC	FB27	
330	(須) 杯B蓋	SK3835	28	6ACC	FD33	
331	(須) 皿B	SK3833	28	6ACC	FG27	
332	(須) 甕	SK3832	28	6ACC	FC30/FD27	
333	(須) 高杯	SK3835	28	6ACC	FD33	
334	(土) 杯A	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
335	(土) 杯A	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
336	(土) 杯A	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED48/ED49	
337	(土) 皿A	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
338	(土) 皿A	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
339	(土) 皿A	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE48	
340	(土) 杯C	SB18500・イ四抜取	337	6ABR	EB54	
341	(土) 碗A	SB18500・ロ五抜取	337	6ABR	EB57	
342	(土) 鉢B	SB18500・ニ四抜取	337	6ABR	EE53	
343	(土) 甕A	SB18500・イ五抜取	337	6ABR	EB55	
344	(須) 杯A	SB18500・ハ六抜取	337	6ABR	ED57	
345	(須) 杯B	SB18500・イ三抜取	337	6ABR	EA52	
346	(須) 杯B	SB18500・イ一抜取	337	6ABR	EB48	
347	(須) 杯B	SB18500・ハ六抜取	337	6ABR	ED57	
348	(須) 杯B	SB18500・イ一抜取	337	6ABR	EB49	
349	(須) 杯C	SB18500	337	6ABR	EB40	
350	(須) 杯B蓋	SB18500	337	6ABR		
351	(須) 杯B蓋	SB18500	337	6ABR		
352	(須) 杯B蓋	SB18500	337	6ABR		
353	(須) 壺A蓋	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
354	(須) 壺A蓋	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
355	(須) 甕C	SB18500・イ三他	337	6ABR	EA48/EB52	イ三・ニ一・イ一間で接合
356	(須) 甕C	SB18500・イ三	337	6ABR	EA51	
357	(須) 甕C	SB18500・イ四・五	337	6ABR	EA54	イ四・イ五間で接合
358	(須) 壺M	SB18500・ニ三	337	6ABR	EE52	

4 木 製 品

第一次大極殿院地区の西半分においては、これまでの発掘調査で多数の木製品が出土している。ここでは、すべての遺構ごとに記述を進めることは避け、とりわけ木製品の出土量が多い主要な遺構および土層、すなわち西楼SB18500、基幹排水路SD3825、第一次大極殿院西辺整地土（木屑層および炭層）については個別に詳述する。これら以外の遺構および包含層から出土した木製品については、その他の遺構・包含層の出土品としてまとめて記述する。

なお、木製品の出土遺構および出土層位については表14にまとめている。

A SB18500出土の木製品（図版121～132）

西楼SB18500は5間×3間の総柱建物で、外側の16本の柱を掘立柱、内側の8本の柱を礎石建とする。木製品は約2,400点出土しており、そのすべてが外側の掘立柱穴からの出土品である。掘方からの出土量はごく少数で、大多数が抜取穴からの出土である。

木製品を個別に記述していく前に、全体の出土傾向をみておきたい。最大の特徴は、単一型式の齋串（齋串A2）が集中的に出土していることである（1～52）。50点あまり出土した齋串のほぼすべてが柱抜取穴からの出土であることは、西楼SB18500を解体した際に祭祀行為がおこなわれたことを示唆しているようである。しかしながら、これらの齋串以外では祭祀遺物の出土はごく限られており、また用途不明品136・143～145や杭177・178・180のように、意図的に破碎された痕跡をとどめる遺物も認められる。こうしたことを考え合わせると、これらの木製品は、祭祀具と西楼廃絶時の廃棄物という二つの側面をもっているといえる。

さて、本来ならば、すべての資料を報告することが望ましいが、加工されている個体だけでも膨大な量となるため、やむなく割愛し、ここでは製品として認識できる主要な資料に限定して報告する。その結果、提示する資料は182点となるが、おおむね製品は網羅されている。以下、種類ごとにわけて個別に詳述する。

i 祭祀具（図版121～124・128）

齋 串（1～52） 破片資料も少なくないため、厳密に個体数を把握することは難しいが、各柱穴から出土した齋串は50点あまりにおよぶ。これほど多くの齋串が一建物跡から出土することには、注目してよからう。さらに、興味深いことに、形態の判明するものはすべて黒崎直氏による分類の齋串A¹⁾2に属している。すなわち、下端を鋭く尖らせ、上端は一方向から斜めに切り落とす形態の齋串だけが、なぜか集中して出土しているのである。さて、齋串の法量について傾向をみてみると、全長26.2～29.9cmで平均27.5cm、最大幅2.1～6.5cmで平均すると3.3cmとなる。奈良時代の齋串のなかでは、大きい部類に入る。

齋 串 A2

これらの資料を観察していくと、厳密に形態が統一されているわけではなく、さらにいくつかに細分できることに気がつく（図88）。まず、全体の形状に影響する下端の形態をもとに三つに大別する。a群は、1のように、左右からほぼ均等に切り落とすことで先端を尖らす一群とする。b群は一方向から斜めに切り落とすもので、15が好例である。c群はb群と同じく一方

向からの切り落としとしてであるが、それが著しく大きいものとする。17がこれに該当する。つぎに、上端の形態を二つに細別する。1のように、一方向から大きく斜めに切り落とす一群を i 群とする。ii 群は、19のように、一方向から切り落としたのちに、さらにその先端を切断する一群である。これらの分類を組み合わせると、a i ~ c ii 群までの6分類とする。

具体的に良好な資料でみていくと、1~6が a i 群である。全長25~30cm、最大幅3~4 cm程度におさまる。27・29・31は a ii 群である。14・15は b i 群。16は一部欠損しているが、おそらく b i 群と思われる。最大幅が3 cmに満たないような細い個体も含まれる。30・33が b ii 群に該当する。17は c i 群。18・19は c ii 群。欠損しているが、20も c 群に属するだろう。c 群には17・18のように非常に幅が広い個体が含まれる。このようにみてみると、a i 群の資料数をもっとも多く、単純に考えるならば、a i 群が基本となる形態と考えられよう。このことは

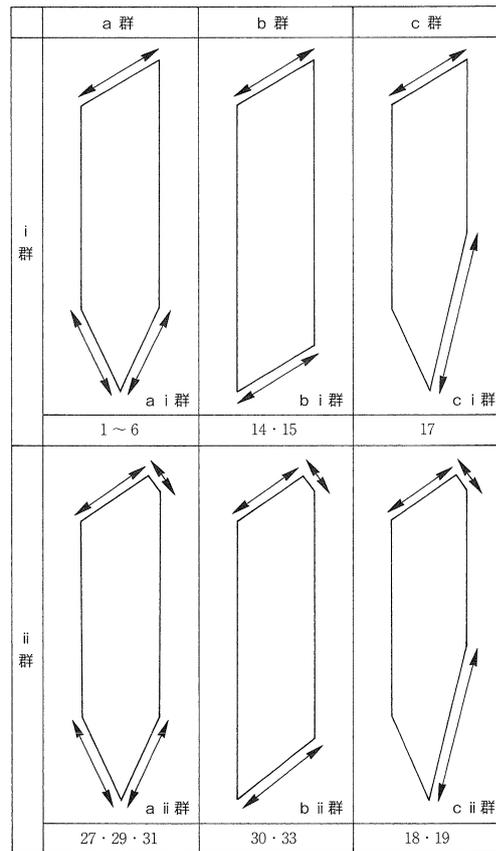


図 88 斎串 A2 の分類

平城宮から出土している斎串 A2 のうち、その多くがここでの a i 群にあたることから傍証されよう。

刀子形 (125・126) 125は全長21.1cm、厚さ0.5cm。上端を斜めに切り落とし、なおかつ表面を削って薄くすることで、切先を表現する。下端は斜めに切り落とす。裏面は割り裂きのまま未調整であるが、それ以外の面にはケズリを施す。126は上下端ともに斜めに切り落とし、上端は表面にケズリを施して切先とする。全長15.9cm、厚さ0.6cmである。

刀形 (127) 全長14.5cm、厚さ0.2cm。下半部に弧状の袂りを入れており、関の表現とみられる。刃の表現はない。

ii 食事具 (図版124・125)

箸 (53~77) 多数出土しているが、細片も多いため個体数の把握は困難である。いずれも木材を小割りにしたのち、棒状に整形する。断面の形態には方形と円形の2種類が認められる。断面方形あるいは多角形の箸は53・56~59・61・65・66・68~75・77であり、断面円形の資料は54・55・60・62~64・67・76である。完形品の全長は、もっとも短い個体が73で16.2cm、もっとも長い個体が64で20.9cmである。この数値は全体的な傾向(『平城報告Ⅶ』)とも一致する。また、64や68のように元末の区別が難しい個体もあるが、いっぽうで63のように上端の加工を丁寧に施す、あるいは66のように下端のみわずかに細く仕上げるなどして、元末の区別をしている個体も認められる。

杓子 (78・79) 78は中ほどが腐食しているものの、完形である。身部の先端はややいびつながらも半円形につくり、その先端部は焼け焦げている。柄の先端は丁寧に加工する。柄と身部との境界は漸移的に幅が変わるため、明確ではない。縁には面取りを施すなど、加工は丁寧である。全長26.6cm、身部の最大幅は3.9cmである。79は完形品。身部は細長い形状を呈し、先端部を丸く加工する。断面形は台形に近い。柄は上端を尖らせ、断面形は円形を呈する。身部と柄との間には明確な境目がない。全長28.7cmで、身部の最大幅は2.7cmである。

iii 容器 (図版126)

円形曲物 (80~82・84) 曲物は底板3点 (80・81・84) と蓋板1点 (82) を図化した。80は直径16.9cm。側面に木釘孔を5箇所確認できる。木釘は断面が方形である。内面には多数の刃物傷が認められる (図89)。81はやや楕円に近い形状で、長径14.5cm、短径14.0cmである。釘孔が側面に3箇所認められる。84は、木釘孔が側面に2箇所確認できる。外面には外形に沿うような刻線があり、製作時の痕跡と判断される。

刃物傷

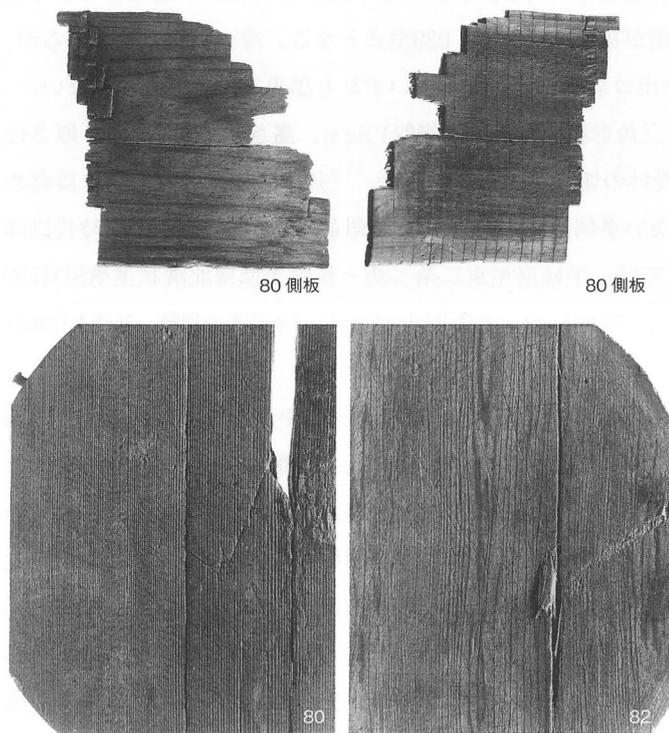


図89 曲物の細部

82は完形の蓋板で、直径17.8cmである。側面には6箇所の木釘孔が認められる。木釘孔の断面形は方形で、1箇所のみ木釘が完全なかたちで遺存している。表面、すなわち容器の内面には一面に柿渋が塗布されており、黒色を呈する。防水および防腐効果のためであろう。この個体には側板がともなっており、その内面にも同様に柿渋が塗布されている。側板は高さ8.8cmで、樺皮紐で綴じ合わせた部分が確認できる (図89)。側板の内面には垂直方向にケビキ線が認められ、その間隔は5mmである。なお、蓋板には、表面はわずかだが、裏面

柿渋

には多数の刃物傷が確認できる (図89)。

折敷 (83・85) 折敷の底板である。いずれにも側板と底板とを綴じ合わせるための樺皮紐が残存している。

iv その他 (図版127・128)

籌木 (86~100) いずれも平たい棒状を呈する。幅が1.0cm前後で、長さは16.0~22.0cmである。同様の資料は、破片資料も合わせると、多数確認できる。割り裂いたままで無調整の個体

が多いが、いずれも平坦な面をもつ。なかには、100のように、丁寧に削って平滑に仕上げる個体もある。また、端部は真一文字に切断する個体が多いなかで、片面あるいは両面から斜めに切断する個体(91・92・100)や、88・94・95のように片方の端部を丁寧に加工するものも認められる。

籌木の認定

これらの資料は、その平面形態から籌木の可能性が考えられる。奈良県藤原京の便所遺構SX7420(奈文研1992)や京都府長岡京の便所遺構SX248からは多量の籌木が出土している。それらの中には当該資料に類似する籌木がたしかに認められるものの、籌木の型式は一様ではなく、角棒状製品や断面三角形の製品なども確認されている。いずれも単純な形態をしているため、便所遺構にともなわない場合、籌木と断定するにはやや躊躇する資料である。

遺構あるいは遺跡ごとに個別の検討はあるものの、総体として型式学的な検討がおこなわれていない現状では、当該例のような便所遺構にともなわない資料については、籌木の可能性を指摘するにとどめておくほかないであろう。

付札(101~109) 両側辺に切り込みを入れた付札で、9点が出土している。108が唯一全形をうかがえる資料である。上端付近に左右から「U」字状の切り込みを入れ、下端はまっすぐ切断する。その他の資料はすべて下端が折損しており、039型式となる。薄い板状を主とするが、102・109は分厚く、109は断面カマボコ形をなす。なお、いずれも墨書文字は認められない。

琴柱

琴柱(110) 緩やかに裾が広がる三角形を呈し、下端幅1.8cm、高さ1.9cmである。厚さは0.7cmと肉厚である。頂部には弦受けの切り込みを入れるが、下辺中央には通有の挟りは認められない。このような挟りをもたない事例は弥生時代から古墳時代には多いが、奈良時代以降には少ない⁴⁾。奈良時代の類例としては、平城京左京二条二坊・長屋王邸南北溝状遺構SD4750(『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』)や、大阪府古池遺跡(『木器集成図録 近畿古代篇』)などからの出土例が挙げられる。

糸杵(111) 組み合せ式糸杵の横木である。全長7.3cmで、板材の中央部を幅広に残して両端を棒状に削り出す。この棒状部は他例と比較してやや短く、また断面形も扁平で円形をなさない。中央には一辺2.4cmの四角形の仕口をもつ。仕口の中央には軸棒を通す孔があけられていないことから、未成品と考えられる。同様に軸孔をもたない事例は、平城京二条大路の濠状遺構SD5100(『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』)や静岡県御子ヶ谷遺跡⁵⁾で出土している。

算木

算木(113) 残存長4.6cm、断面1.4cm四方の角柱状を呈する。両小口以外の4面には、それぞれ1~4本の刻線を施す。内山昭氏によると、これは算木と考えられる。この種の算木には1~4本の刻線をもつものと、1・2・3・6本の刻線をもつものがある。本例と同じ刻線のパターンをもつ事例は秋田県多賀城跡(『木器集成図録 近畿古代篇』)、平城宮内裏地区(『平城報告VII』)、平城京左京二条二坊・長屋王邸(『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』)、福岡県大宰府(『木器集成図録 近畿古代篇』)などで出土している。

木錘(122・123) 122は全長5.3cm、最大の厚さ1.0cmの棒状品。中央部を細くつくる。123は全長7.3cm、厚さ0.5cmの板状を呈し、同じく、中央部を細くつくる。いずれもその平面形が木錘に類似しているが、その大きさは一般の木錘と比較して著しく小さい。

樺巻き棒(124) 直径約0.3cmの丸棒を樺皮で束ねたもの。丸棒は3本遺存するが、樺皮との間に隙間があいているため、本来は5本程度をひと束としていたのだろう。樺皮は幅0.5cmで、

一端を結び合わせて留めており、他端は先端を尖らせていることから、他例を参考にするならば丸棒に切れ目を入れて刺し留めていた可能性がある。残存長10.3cm。木製容器の把手や棒と考えられることもあるが、詳細は不明である。なお、平城京東三坊大路東側溝SD650（『平城報告VI』）、同西一坊々間大路西側溝SD920（『平城京右京一坊八条十一坪発掘調査報告書』）、同東一坊大路西側溝SD6400（『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告書』）などで類例が出土している。

燃えさし 西樓の掘立柱抜

表 13 西樓から出土した燃えさしの数量

	六	五	四	三	二	一	
取穴から約700点が出土している（表13）。柱穴によって出土量に多寡があり、抜取穴ニ一と抜取穴ハ一から	ニ	14点	9点	9点	36点	59点	208点
	ハ	5点	—	—	—	—	103点
	ロ	1点	—	—	—	—	2点
	イ	5点	49点	49点	69点	25点	46点

燃えさし
多 量

多くが出土している。もっ

とも大きいものは全長45.4cmの棒状品で、割り裂いたままである。一端あるいは両端が燃えたものが多く、全体が燃えているものはほとんどない。棒状や板状などさまざまな形態のものがあることから、ツケ木として専用につくられたものではなく、廃材などを利用していたのであろう。

v 用途不明品（図版128～131）

114は厚さ0.2cmの薄い板状を呈し、下端を尖らす。上端は丁寧に面取りしている。116は下半部を緩やかに尖らし、上端は左右から削って先端をつくる。119は全長4.3cmで、上半部を細くつくり、下端を尖らす。これら114・116・119は形代の可能性もある。115は三角形の板で、厚さは0.8cmである。琴柱の未成品の可能性もあるが、やや大きすぎるか。121は全長5.1cmの丸棒状を呈する。上半部を太くつくり、下半部は細く軸状をなす。基幹排水路SD3825Cからも類似品が出土している（図版138-258）。130・131は断面楕円形の棒製品で、上下端ともに比較的丁寧にケズリを加える。

棒 製 品

132～136・138～144は縦方向に細かく削って断面多角形にした棒製品である。132は完形品で、上端は真一文字に切断し、下端は丁寧に削ってやや尖らす。133は下端に削って尖らせようとした痕跡が認められるが、同時に折り取ったような痕跡もみられる。135・136・138～143は上端が細く、下端が太くつくられている。140～142・144は下端小口面が残っており、平坦につくられていることがわかる。135・143・144は中ほどに、手斧で斜めに折り取られた痕跡を残す。145も類似品ではあるが、下端を方形につくりだしている点が異なる。下端小口面は同じく平坦である。また、中ほどには手斧で斜めに折り取られた痕跡が確認できる。

146～161は断面方形あるいは円形の棒製品である。146は全形は不明だが、直径0.4cmの孔をあける。155は全長36cmで、左側辺の上下端に切り込みをもつ。上端の切り込みは方形で、下端のそれは小さく半円形をなす。また、下半部には直径0.2cmの小さな円孔が貫通する。159は断面長方形の棒製品で、下面を平らにする。上端を細く削り込み、残存部下端には円形の凹みをもつ。

163は上面にケズリの痕跡を残し、下面は割り裂かれた状態である。手斧屑であろうか。164

は上下端ともに圭頭状を呈する板材である。165・166・170は方形あるいは長方形の角材である。167は角材で、下端には仕口のような斜めの加工痕をもつ。168は直径6.0cm、全長11.6cmの円柱状である。小口面はまっすぐ切断している。容器の栓の可能性はあるが、かなり大きい。169は大型の角材で、下面は平坦に仕上げ、上面は弧状をなす。小口面には多数の加工痕を残す。上面および上端小口面にはベンガラが付着している。なお、抜取穴四からも類似品が出土している。

vi 大型木製品 (図版132)

杭 (175~182) 8点を図示した。全長150cm前後に揃えて製作されているようである。加工の仕方はすべてよく似ており、先端部を尖らせ、頭部は面取りするように角を落とす。その他の部分はまったく加工しておらず、樹皮が残る部分も少なくない。なお、177・178・180には大きな刃物傷があり、杭はそこで折れている。意図的に杭を短く折って、柱穴の中に廃棄した様子がうかがえる。

その他 (171~174) 171は断面方形の部材。172・173はともに薄く割れており、詳細は不明。174は現存長60.4cm。先端部には手斧による加工痕があり、尖る。その他の部分をみると、表面に樹皮が残る部分もあり、加工痕はない。裏面には一部加工痕が残るが、大部分が割れているため詳細は不明である。杭の可能性もあるが、先述のそれらとは明らかに異なる。

B SD3825出土の木製品 (図版133~139)

基幹排水路
SD3825

第一次大極殿院地区の西側を南北に流れる基幹排水路SD3825は、2度にわたって掘り直されている。古い順にA、B、Cとして、それぞれI-1期、I-2期、II期に比定される。木製品は約3,000点出土しており、遺構別の出土点数はSD3825BとSD3825Cが約1,250点と多く、これらに比べSD3825Aからの出土点数は350点あまりと極端に少ない。ただし、この3期区分は最終的な見解であり、古くに遡る発掘調査ではこれに対応して遺物を採り上げていない場合もある。そこで、ここでは一括して遺物を検討する。なお、出土層などの情報の詳細は表14を参照されたい。

注目すべき遺物としては、百万塔の未成品(191)、琴形(193)、物差(199)、方頭大刀(220)などが挙げられ、いずれも全国的にみても出土事例の少ないものである。平城宮を縦貫する基幹排水路という遺構の性格のためか、特定の遺物が集中的に出土するといった傾向は認められない。

以下、種類ごとにわけて具体的に遺物を見る。

i 祭祀具・楽器 (図版133)

形代 人形 (185) 残存長12.8cm、厚さ0.3cmである。圭頭形の頭部をもち、切り込みを入れることで腕と脚を表現する。頭部には針状工具による刺突痕が認められ、その位置関係から目、鼻、口を表現したものと考えられる。

馬形 (183) 残存長4.4cm、厚さ0.2cmの板状を呈し、下辺の左端に大きな「V」字状の切り込みを入れることで頭部を表現する。下辺中央には小さな「V」字状の切り込みを複数もつが、

何を表現したものかは不明である。従来確認されている馬形よりも著しく小さく、馬形とする明確な根拠はない。

鳥形 (184) 頭部はややいびつな六角形を呈する。胴部および尾部は欠損しており、詳細は不明である。残存長9.0cm、幅3.1cm、厚さ0.3cm。

鏃形 (186) 長三角形の鏃身をもつ長頸鏃を模した形代。全体を丁寧に削る。全長8.3cmで、鏃身部の長さは3.8cmである。鏃身および茎部ともに厚さは0.4cmで均一である。本例は「様」の可能性もあるが、刃部が肉厚で刃の表現がないことから形代と判断した。

刀形 (187・188) 刀を模倣した形代で、柄の表現はない。187は上端を斜めに切り落として切先を表現し、下半部を細く仕上げることで茎をあらわすが、明確な関の表現は認められない。刀身部には明確な稜線もち、刃は尖っておらず面をもつ。残存長20.0cm。188は残存長14.7cm、厚さ0.4cmの板状を呈する。左側辺には段差をつけて関の表現とし、それより上側が刀身部であり、下側が茎部となる。刃の表現はなく、峰と刃の厚さは均一である。茎尻はやや斜めに切り落とす。187は刃部が肉厚で刃の表現がないこと、188は刃の表現が認められないこと、またどちらも茎部に柄を装着するための孔をもたないことから、実際に刀を製作するとき忠実な見本となる「様」ではなく、祭祀に用いられる形代であると判断できる。

刀子形 (189) 全長14.1cmの刀子の形代。上端を斜めに切り落とすことで、切先を表現する。切先以外は、割り裂いたまま未調整である。このように、切先は表現するものの関の表現がないことから、鞘からぬいた抜き身の状態を模倣したと考えられる。ただし、柄と刀身との段差といった細かな表現はみられない。なお、峰の背には点々と墨が付着している。

琴形 (193) 琴尾は残存しているものの、琴頭が欠損している。平面形は長方形を呈し、琴尾の部分が幅広くなっている。琴尾には突起が4箇所認められ、中央2箇所の突起は幅が広い。両面に墨書が認められ、文字が切れていることから琴形への転用以前に書かれたものであることがわかる。残存長20.1cm。本例は著しく小型であること、琴尾の突起が4突起であり通有の6突起ではないことなどから、これは琴の「様」ではなく形代と考えられる。なお、琴形の類例として、平城京東一坊大路西側溝SD6400（『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』）から出土している2点と長岡京東西溝SD1301⁷⁾から出土した1点が挙げられる⁸⁾。いずれも共鳴槽をもつ槽作りの琴であり、後者は所謂「甲作り」である。本例は前者と同様の槽作りの琴と考えられよう。

琴柱 (192) 三角形状を呈し、下辺中央に三角形の切り込みを入れて双脚をつくる。頂部に弦承けはない。片面にはケズリを施すが、反対の面は割り面のまま未調整である。最大幅3.9cm、高さ1.3cm、厚さ0.5cmである。

斎串 (190) 上端は圭頭状を呈し、下端は左右から斜めに切り落とすことによって先端を尖らす。下端に近づくほど厚さを増しており、斎串であるならばやや特異である。黒崎分類の斎串A1⁹⁾に相当しようか。

百万塔 (191) 三重の小塔で、いわゆる百万塔である。底部の直径10.5cm、残存高は14.3cmである。相輪を嵌める孔と経典を入れる孔があげられていないため、未成品と判断できる。頂部上面や側面には轆轤の旋削痕が認められる。底面には3箇所の轆轤爪痕が確認され、そのうち2箇所には鉄製の轆轤の爪が遺存している。

百万塔
未成品

なお、伝世品を除いた百万塔の出土例は、平城宮内裏東方の基幹排水路SD2700から出土した塔身部の破片と、西大寺食堂院井戸SE950から出土した相輪部の破片資料が知られるのみである。

箆子 (194) 幅3.3cmの板状を呈し、片側縁に鋸歯状の刻み目をもつ。下部にはこの刻み目が認められないので、持ち手となる基部にあたと判断できる。横断面形は方形を呈するが、刻み目をもつ側の方がわずかに分厚い。残存長9.7cm。なお、刻み目には擦れたような明確な使用痕は確認できない。

ii 調度品・文房具ほか (図版133・134)

糸梓 (195) 組み合せ式糸梓の横木で、全長9.3cm。中央部を四角形に残し、両端を断面円形の棒状に削り出している。中央部の仕口は1.8cm四方で、真ん中に直径0.7cmの軸孔をあけている。

割り抜き箱 (196~198) 196・198は角材を削り抜いて製作された木箱の身である。内面および外面ともに直線的に仕上げているが、磨滅が著しいため調整痕を確認することはできない。198の法量は、幅が内法2.8cm、外法4.5cmで、長側板の厚さは0.9cmである。このように外法の幅が狭く、なおかつ長側板の厚さが薄い特徴は、8世紀前葉の例によくみられるものとされている¹⁰⁾。なお、欠損しているため、長さおよび身の高さは不明である。197は、これらと同様に、細長い矩形を呈する。欠損部分が多いため確定はできないが、木箱の可能性はある。

物差 (199) 幅1.5cm、厚さ0.5cmの細長い板状を呈する。上半部は欠損しているが、下端はまっすぐ切断している。目盛りは一寸および五分ごとに付けられており、一寸の目盛りは墨線で表現され、五分の目盛りは短い刻線であらわされている。ただし、一寸の目盛りをよく観察してみると、墨線と重複するように短い刻線が認められる。すなわち、五分ごとにすべて刻線を入れたうえで、一寸ごとの目盛りにはさらに墨で線を加えたものと考えられる。五分ごとの目盛りの長さを下端から列挙すると、1.703cm、1.396cm、1.700cm、1.675cm、1.586cm、1.629cm、1.614cm、1.707cm、上半部が欠損しているので正確な距離ではないが1.719cmとなる。したがって、寸長は3.099cm、3.375cm、3.215cm、3.311cmとなる。平城宮跡出土例の寸長の平均が2.952cmであり、これと比較すると本例の寸長はやや長いようである。また、五分の目盛りは正確に一寸を等分しているわけではない。とりわけ、下端の五分目盛りはそれが顕著である。現存長14.8cm。

算木 (200) 長辺5.6cmで、断面1.5cm四方の角柱状を呈する。両小口を除く、4面には3本、4本、5本、6本の刻み目が認められる。これと類似する遺物は内山昭氏によって算木とみなされているが、これまで出土しているものは1・2・3・4本あるいは1・2・3・6本の刻み目をもつ資料である。本例と同じパターンの刻み目をもつ事例は確認されていないため、算木とする確証は得られないが、このような形態では賽子としては機能しないだろう。



図90 物差 199

iii 工具 (図版134・135)

錐の柄 (203) 残存長13.3cmで、柄尻を欠損する。断面方形を呈し、丁寧に面取りされている。また、柄元にも丁寧に面取りを施し、小口面いっばいに茎孔をあける。ただし、小口面付近の孔の拡がりは茎を抜き取った際に生じた二次的な変形と考えられる。

工具の柄 (201・202) 断面円形の棒状を呈し、まっすぐ切断された柄元には直径5 mm程度の茎孔をあける。柄尻を丸く仕上げる。柄元の斜めの切断痕は茎を抜き取る際の痕跡と判断できる。完形品。201は柄尻を太く残し、小口面を丁寧に面取りする。さらに、幅9 mmで細かく削り、断面形を楕円形に仕上げる。握部にも丁寧に縦方向のケズリを加えている。206は工具の膝柄であろうか。柄部は直径2.0cmの丸棒状を呈し、彎曲する。上端はやや幅広につくり、中央部を突出させた台状部をなす。この部分に鉄製工具を装着すると思われるが、こうした構造をもつ膝柄の類例が少なく、装着する鉄製工具の形態や機能を特定することは難しい。

工具の柄

刷毛の柄 (204) 平刷毛の柄であり、毛は欠損しているが、柄の部分は完形である。全長41.0cm。断面円形の長い棒状の柄を有し、柄元は扁平かつ幅広につくる。毛を植えるために、下端小口から柄元を半分に分り裂き、加えて柄元の両側面にそれぞれ半円形の切り込みを3箇所ずつ入れて紐で緊縛するための工夫とする。柄元にはこの緊縛の圧痕が残っており、幅0.7cmの带状を呈していたことがわかる。この帯紐は表面では平行に走り、裏面で交差するように巻かれている。

刷毛の柄

篋 (205) 全長23.4cmである。全体を丁寧に削るが、上端から10.0cm付近を境にしてその上下でケズリの様相が異なることから、上半部を柄部、下半部を身部として区分していたのであろう。柄部は断面台形に整形され、丁寧に面取りも施されている。上端小口面も角を残さないように面取りがおこなわれている。いっぽう、下半部は断面蒲鋒形になるように細かく削って調整しており、下端部は丸く仕上げている。



木針 (207~210) 一端を尖らせた棒製品で、なおかつ、針孔をもつ資料を木針とする。木針は糸や紐を通して布や皮革などを綴り合わせる縫針や、藁仕事や薦編みなどに用いられたものと考えられる。207・208は薄く平たい形態を呈しており、厚さが0.1~0.2cmと非常に薄いので檜扇の橋の可能性もある。210は断面蒲鋒形、209は断面方形をなす。

図91 刷毛の柄204(左)と工具の柄206(右)の細部

iv 服飾具・武器 (図版135)

服飾具 **留針** (211~217) 一端を尖らす棒製品で針孔をもたない資料を、木針とは区別して、留針とする。服飾具として、被りものを鬻に留める、あるいは髪を結う機能などが考えられるが、必ずしも機能を特定できるわけではない。211~217が留針であり、いずれも丁寧に削って仕上げる。211・212・214~216は下端を薄く尖らせている。さらに上半部の断面形態をもとに、棒状を呈する211・212・214と、扁平な215・216に分けることができる。211は全長13.1cm、212は全長13.8cm、214は全長14.6cm、215は全長17.0cmである。いっぽう、217は断面方形を呈し、下端は尖らせず、頭部を鉤頭状につくりだす。全長18.3cm。213は全長6.4cmと著しく小さいが、下端を尖らす形状を呈しており、留針の可能性はある。

檜扇 (224) 残存長10.3cm、厚さ0.1cm。下端部の側縁に切り込みを入れて、幅を減じている。要孔は1孔確認できる。半分欠損しているため孔数は不確定だが、残存幅を考慮すると、おそらく元来1孔だったと考えられる。

横櫛 (218・219) 板材の一側縁から齒を挽き出し、表面を平滑に仕上げる横櫛。2点出土している。いずれも破片資料であるが、ともに平面形が脊の上縁がゆるい弧を描き、肩部に丸味をもたす型式である。齒の切通し線はどちらも脊の上縁に平行して曲線を呈する。脊の断面形は、218が半円形をなし、219は隅丸方形である。法量は、218が残存幅2.5cm、高さ2.5cm、219が残存幅2.8cm、高さ4.2cm。

黒漆塗 **方頭大刀** (220) 柄頭と柄間の一部が遺存する。柄頭は方頭を呈し、長さ9.0cmで最大幅は5.6cmとなる。全面に黒漆を塗っており、中央には直径0.7cmの円孔をもつ。柄間との境目には縁取りのような段差がある。柄間は幅3.7cmで、残存長11.1cmである。刀身の茎を差し込んで目釘で留める構造である。

v 食事具 (図版135)

箸 (222・223) 2点を図示した。222は完形で全長16.7cmで、断面は方形を呈する。223はやや太く、断面は方形である。

杓子 (221・225) 221は小型の杓子。身部は細長い形状を呈し、肩部をもつため柄との境界は明瞭である。先端部の形状は欠損しているため、不明である。身部はわずかに内彎しており、断面形は半月状をなす。柄部は断面方形を呈する。残存長15.0cm。225は身が長方形で、柄との境界は明瞭である。身部の先端は表裏両面から削ることで、やや尖らしている。残存長16.8cm。

vi 容器 (図版136・137)

漆器 (226) 黒漆塗り容器の蓋のつまみ部分である。つまみは平面円形を呈し、上面は平坦である。直径3.4cm、高さ1.2cmである。ほかに、漆器碗の破片(227)が出土している。

容器蓋 (228・229) 229は円形の板状を呈し、周縁を斜めに切り落として端部を鋭角に仕上げる。中央につまみを取り付けるための孔などはない。228は片面に側板が接していたような痕跡があることから、蓋の可能性はある。

円形曲物 (230~239) 10点を図示しており、いずれも底板である。230~232・234・236・238は底板の外縁に側板を巻いて木釘で結合する。234は完形品で、3本の木釘で側板を結合していたようである。235・237は底板の上に側板を載せて樺皮紐で結合する。ともに上面に側板の圧痕が残り、樺皮紐が1箇所確認できる。各個体の直径は、232は復原径17.4cm、233は復原径16.0cm、234は長径16.4cm、短径14.4cm、236は復原径15.8cm、237は復原径19.0cm、238は復原径23.0cmである。

木釘で結合

折敷 (240・241) 折敷の底板と思われる。240は外縁部がもっとも厚くつくられており、1.4cmである。外縁部は斜めに切り落とされており、側板を結合するための樺皮紐や木釘は認められない。したがって、容器の蓋の可能性もある。241には、樺皮紐を通すための2孔一対の孔がある。

vii その他・用途不明品 (図版137~139)

付札 (242~255) 14点が出土しており、長方形の板材の一端の左右に切り込みをもつ。いずれも破片資料であるため、全形は不明である。039型式である。なお、墨書された文字は確認できない。

付札

題箋軸 (257) 残存長6.6cm。題箋部は先端がややすぼまる台形状をなし、長さ3.5cm、最大幅2.6cmである。断面形は題箋部および軸部ともに厚さ0.3cmであり、軸部は幅1.0cmの扁平な隅丸長方形を呈する。北條朝彦氏の集成¹³⁾によると、本例は題箋部の長さをもっとも短い一群に属するようである。なお、題箋部に文字は認められない。

不明工具の柄 (259・260) 断面円形の棒状を呈する。ただし、259はケズリの稜線が残るため、断面は多角形に近い。上半部が欠損しているため、茎孔の有無は不明であるが、おそらく工具の柄と思われる。柄尻は、どちらも真一文字に切り落としており、260はさらに面取りを加える。

工具の柄

燃えさし SD3825からは総数800点を超える燃えさしが出土している。SD3825AとSD3825Cが多くともに約400点出土しているのに対し、SD3825Bが少なく約20点の出土にとどまる。割り裂いたままの棒状品が多く、一端に焼けた痕跡がある。

用途不明品 (256・261・263~281) 256は欠損しているため全形は不明であるが、おそらく円形の板と思われる。外縁を斜めに削る。厚さは1.1cmである。小型容器の蓋の可能性もある。261・263~266は角棒状を呈し、細かく縦方向にケズリを施している。261・263は上端を真一文字に切断したのちに、面取りを施す。264・265は上端付近を溝状に削り込むことで瘤状の頭部をつくりだす。265は下半部を欠損しているため形態は不明であるが、264は下端面を斜めに削ってやや尖らしていることがわかる。267は断面方形の棒状品で、上端部に柄孔をもち、下端部には木釘孔を確認できる。木釘孔は断面円形で、木釘が残存する。この木釘孔の上には貫通しない小孔が認められる。なお、上下両端は斜めに加工している。268~271は下端を尖らす角棒である。269を除いて、頭部にはそれぞれ面取りを施す。

272・274は長方形の板である。274の下端小口面の両端に凹みが認められ、下端部には漆が付着する。275は断面方形の棒製品で、上下端を切り落とす。このような角棒は多数出土している。279は板状を呈し、下端を左右から削り落して尖らす。斎串あるいは付札の下半部である可能性が高い。273は断面方形の角材で、上部に仕口をもつ。276・277・280・281は角材で、手斧のような工具による加工痕を明瞭に残す。

C 大極殿院西辺整地土下層木屑層・炭層出土の木製品 (図版140～148)

第一次大極殿院西辺整地土の下位の茶褐色木屑層・炭層からは2,500点におよぶ木製品が出土している。全体の傾向としては、箸・匙・杓子といった食事具が多く(図版142・143)、祭祀具は少ない。興味深い遺物としては、建築部材の模型(雛形)が2点出土しており(364・365)、いずれも未成品である。

i 祭祀具・楽器(図版140)

人形(286) 断面方形の角棒状を呈し、下端は幅広くなっている。上半部が欠損しているため、穿孔の有無は不明であるが、組み合せ人形の脚部となる可能性がある。

墨書のある
馬形

馬形(282) 全長15.6cm、厚さ0.4cmの板状を呈する。背の中央には切り込みによって鞍を表現する。尻部は背側に丸味をもたせ、腹側を斜め上方に切り上げる表現とする。頭部は丸く仕上げ、鈍角の「V」字状の切り込みを入れている。腹側の中央部は直線状を呈し、長方形の板材から製作されたことをうかがわせる。なお、両面に墨書が認められる(木簡44)。

鳥形(285) 全長10.7cmで、厚さは1.0cmとやや厚い。四角形の頭部をもち、切り込みを入れることで頭部と胸部を画する。胸部がもっとも幅広く、緩やかな円弧を描きながら尾部に至る。すべての面に丁寧にケズリを施している。

齋串

齋串(293～297) 5点を図示した。293・294は黒崎直氏による分類の齋串A¹⁴⁾2に相当する。すなわち、尖った下端をもち、上端は一方向から斜めに大きく切り落とす。ただし、上端部は先端を切断している。293は残存長22.5cm、294は全長20.6cmである。295～297は両側辺に「V」字状の切り欠きをもつもので、黒崎分類の齋串Eにあたる。295は片側しか残存しないが、3箇所切り欠きをもち、頭部は方形を呈する。残存長16.7cm。296は左側辺に12箇所、右側辺に9箇所切り欠きを確認できる。切り欠きの大きさにはばらつきがあるが、とりわけ上端のそれはひときわ大きく、なおかつ左右対称の位置にある。おそらく頭部との境になるのであろう。残存長15.9cm。297は右側辺のみが遺存しており、3箇所切り欠き認められる。残存長11.7cm。

琴柱(283・284) 2点出土している。283は台形状を呈し、下辺の両角を斜めに切り落とす。下辺中央には三角形の切り込みを入れて双脚とする。頂部には断面「V」字状の弦受けを刻んでいる。最大幅3.0cm、高さ2.1cm、厚さ0.3cmである。284は上半部を欠損しているが、三角形を呈し、下辺の両角を斜めに切り落とす。下辺には通有の挟りが認められない。ただし、側縁は丁寧に面取りしているため未成品とは考えにくく、西楼SB18500出土例(図版128-110)と同様に、下辺に挟りがない事例とみなしておく。最大幅4.3cm、残存高1.2cm、厚さ0.6cmである。

ii 服飾具・工具・農具(図版140・141)

留針

留針(287～291) 287は頭部を鋌頭状につくりだす留針。断面は円形を呈し、現存長10.4cmである。291は全体に扁平で、下端を尖らす形態の留針。全長16.7cm。288～290は断面方形

あるいは円形の棒製品で、下端を尖らす。290は頭部を四角錐状に加工している。いずれも留針の可能性はある。288・289は小型で、それぞれ全長が8.4cmと9.6cmである。290は全長14.1cmである。

横櫛 (292) 挽歯式の横櫛で、平面形は長方形である。肩部の形状は不明だが、脊の上縁は非常にゆるやかな弧を描いている。脊の断面形は圭頭状を呈する。歯の切り通し線は脊の上縁に平行して弧状をなす。歯の数は3cmあたり25枚で、残存幅3.4cm、高さ4.7cmである。

木針 (298) 厚さ0.3cmの薄い板状を呈し、全長14.4cmである。上端付近に針孔が認められ、全体を丁寧に削る。

墨刺し (299) 断面長方形の棒状を呈し、残存長17.8cm。両側辺は割り裂きのまま未調整であるが、表裏面は丁寧にケズリを施す。下端小口はまっすぐ切り落とし、1面のみ面取りのように削り落とす。この小口の平坦部にのみ墨が付着している。また、先端部付近には沈線が認められる。本例は先端が尖っておらず、また切り込みがないが、墨の付着を重視して、墨刺しと考える。

漆篋 (300) 厚さ0.3cm、幅1.3cmの棒状品。全面にケズリを施し、下端小口面には両面から面取り加工をおこなう。この小口面周辺に漆が付着している。漆の付着量は決して多くはないが、漆塗布用の篋と理解しておく。残存長10.0cm。

漆 篋

楔 (301~304) 301は断面隅丸方形の棒状を呈する。縦方向にケズリを施して角をなくし、先端部は細くやや尖らせる。上端には複数回ケズリを施すことで、頭部をかたちづくる。全長14.0cm。302・303は断面方形の角棒状を呈し、先端付近を薄く仕上げる。302は全面割り裂いたままの状態、303はケズリを施す。302は全長14.4cm、303は全長20.2cmである。304は断面円形の棒状をなす。上端は折り取った後に、小口面に面取りを施して頭部をつくりだす。刃部は2面からケズリを加えることで細く仕上げる。先端部は欠損している。残存長18.8cm。

横槌 (305) 柄の上半部は欠損しているが、身は完存する。残存長18.6cm。全体に縦方向にケズリを施しており、柄の部分は細かく削ることによって断面円形に仕上げている。身の中央部には凹みが認められ、敲打痕と考えられる。

iii 食器具 (図版142・143)

箸 (321~327) 多数出土しており、そのうち完形の7点を図示した。321~326は調整による稜線が残るものの、断面円形を志向している。324・326は一方を細く仕上げることで、また322は下端部を斜めに切り落とすことで、元末の区別をしているようである。いっぽう、327は断面方形を呈し、元末の区別はない。321がもっとも長い個体で全長21.4cm、327はもっとも短い個体で17.5cmである。

杓子 (306~312) 板材から製作された杓子と匙との区分は明確ではないが、ここでは『木器集成図録 近畿古代篇』にしたがって法量によって区分しておく。ただし、その根拠となるデータが提示されていないため、漠然とした大きさの違いによる分類にならざるを得ない。

杓 子

307・308は細長い身部をもち、その先端を半円形につくる。また身部と柄の境目は明瞭であり、柄は長い。308は柄と身部いずれも面取りを施すなど、丁寧に加工されている。307は残存長21.0cm、身部の長さ11.1cm、308は全長32.9cm、身部の長さ17.0cmと、大きさは異なる。なお、

307・308ともに、柄よりも身部の方が薄く仕上げられている。306は先端部の形態は不明であるが、細長い身部をもつ。柄は太く、柄と身部の境目は明瞭である。残存長23.8cm、柄の厚さ0.7cm、身部の厚さ0.5cmである。309は太くどっしりとした形態をしており、現在の「しゃもじ」によく似る。身部は横幅が広く、先端部は丸く加工する。その加工は粗く、加工痕を明瞭にとどめる。身部の表裏面には細い刃物傷のような痕跡が多々認められる。身部と柄の境界は明確であり、柄は太く、全体的に面取りをおこなうなど調整は丁寧である。全長20.6cm、身部の長さ9.9cm、柄の長さ11.7cmで、厚さは柄と身部ともに0.5cmである。310は下端が直線を呈する羽子板状の身部をもつ。身部と柄の境目ははっきりしている。全長20.3cm、身部の長さ6.8cm、柄の長さ13.5cmである。身部の最大幅は3.3cmで、厚さは0.3cmと柄よりも薄くつくられている。311・312は柄のみが残る。破片資料のため確証はもてないが、小型の杓子としておく。

匙 (313~317) 5点が認められる。313は細長い身部をもつ。先端は欠損しているが、おそらくやや尖る形態と考えられる。身部と柄との境は不明瞭であり、漸移的に幅を減じて柄となる。残存長16.3cmで、厚さは柄と身部ともに0.3cmである。314・316は下端が直線を呈する羽子板状の身部をもつ。いずれも身部は0.2cmと薄くつくられており、314は身部の幅1.9cm、316は2.4cmである。314は断面方形で厚さ0.7cmの柄をもつ。314は残存長17.8cm、316は残存長7.4cm。315は方形の身部をもつ。身部の長さは1.5cmで幅が2.2cmである。身部と柄との境界は明瞭である。残存長6.8cm。317は長楕円形の身部をもち、柄は非常に細い。柄は厚さ0.3cmで、身部の厚さは0.2cmと薄く仕上げられている。加工は粗く、身部を丸く仕上げる際の加工痕が明瞭に残る。残存長7.5cm。

iv 容器 (図版143~145)

割物 (328~330) 328は皿。破片資料であるため、全形は不明である。側面が分厚く、内側の割り抜き方も粗く、全体的に粗雑な印象を与える。内面は腐食が激しいが、外面には加工痕がよく残る。底面は平坦に仕上げている。329は片口鉢であろうか。破片資料であるため全形は不明であるが、現状では三日月形を呈する。三日月の中心部を深さ1.5cmほど割り抜く。三日月の先端部から穿孔をあげ、割り抜いた部分と貫通させることで注口となっている。ただし、左半部が欠損しているため、厳密には注口の数は不明といわざるを得ない。調整をみると、外面は非常に丁寧に削っており、面取りもおこなう。いっぽう、内面は割り抜いた際の痕跡をそのまま残し、平滑に仕上げるなどの工夫が認められないため、やや粗雑に感じる。330は平底の容器の身。復原した口縁部の直径は17.5cmである。内面には横方向のケズリが認められ、外面では上半部は縦方向のケズリ、下半部には細かなケズリが施されている。口縁部の破断箇所には、方孔が2箇所あけられている。

漆器 (331~334) 331は蓋。破片資料であるが、内外面の黒漆面はよく遺存している。直径12.0cmである。口縁部内面の内寄りに反りをつける。中心部が欠損しているため、頂部につまみがつくかは不明である。外面には段差をもち、中心部側を一段高くして平坦に仕上げる。

漆碗 332~334は漆器碗。いずれも小片のため、詳細は不明である。

容器蓋 (335・336) 印籠式の蓋。容器の身に嵌め込む部分は、段差をつけて高く製作する。

335はややいびつな横長の平面形で、長径7.0cm、短径5.4cmである。身に嵌め込む部分は平面楕円形で、長径4.9cm、短径4.3cm。全体を丁寧に削り、内面には段差をつくる際に生じた刃物傷が多く認められる。蓋の高さは0.7cm。336は半分が欠損しているため正確な形態は不明だが、外寸で横幅5.2cm、内寸で横幅4.6cmである。全体に丁寧なケズリを施しており、上面は外縁部が傾斜するように縁に沿うようなかたちでケズリを加える。蓋の高さは1.0cm。いずれも小型であることから、合子の蓋と考えられる。

合子の蓋

338は円形の板状を呈し、外縁を斜めに切り落とす。340は直径14.0cmの円形板で、右半部のみ外縁部を斜めに削る。

円形曲物 (337・339) 底板を2点図示した。337は側板と底板を4箇所の樺皮紐で結合する。部分的に側板も遺存しており、また底板上面には側板の圧痕が認められる。裏面には鋭利な刃物による「×」状の刻線が認められる。復原径20.2cm。339は木釘で側板と底板を4本の木釘で結合する。復原径11.3cmである。

折敷 (341) 341は折敷の底板。一辺0.3cmの方孔が2つ並んで確認される。また上面には外縁に沿って圧痕が認められることから、底板上に側板を載せて樺皮紐で結合していたことがわかる。右端は弧状に切断されており、これは折敷として使用した後、何かに転用したことを示していよう。そこで裏面をみても、多数の刃物傷が認められることから、組板に転用された可能性が考えられる。

組板に転用

栓 (318・319) ともに円柱状を呈する。318は長径3.7cm、短径3.4cmで、高さ2.7cm。319は長径3.7cm、短径3.5cmで、高さ3.0cmである。

v その他 (図版143・146・147)

糸 杵 (320) 320は組み合せ式糸杵の杵木。残存長23.2cmで、断面形はカマボコ形を呈する。横木を結合するための円形の柄孔が2箇所にあり、直径1.0cm、深さ1.3cmで貫通しない。柄孔の心々間距離は11.6cmである。端部から柄孔までの距離が等しいならば、復原長は23.9cmとなる。柄孔から端部までを斜めに削り、さらに端部付近を急角度で削り落している。

籌 木 (359~361) 359は平たい棒状を呈し、上下端を圭頭状に加工する。表裏面ともに丁寧にケズリを施す。全長17.0cm、厚さ0.3cmである。360は断面蒲鋒形をなす棒製品である。上端は一部欠損しているが丸く仕上げ、下端は尖らず。裏面は割り裂いたままの状態であるが、表面および側面は丁寧に調整している。現存長17.6cm。361は厚さ0.3cmの平たい棒製品で、割り裂いたままで調整していないようである。全長17.8cm。このように形態はさまざまではあるが、いずれも籌木の可能性がある。

付 札 (342~358) 17点を図示している。342・343は長方形の板状を呈し、上端の両側辺に切り込みを入れる。下端に向けて緩やかに幅を減じていき、下端小口はまっすぐ切り落とす。032型式。342は全長19.5cm、343は全長19.3cmである。344・345は長方形の板材で、上下両端ともに切り込みを入れる。031型式。344は2片が接合するわけではないが、形態と木取りが類似しており、なおかつ出土層位が同じであることから、同一個体と判断した。345は全長16.6cmである。346~358は一端を欠損しているため全形が不明である。039型式。349は焼け焦げている。

ミニチュア建築部材 (362・363) 362は巻斗のミニチュア。平面形は略正方形で、大きさは3.2～3.7cm×3.8～3.9cmで、高さは2.9cm。含みの加工は角の部分にやや粗さが残る。斗繰の加工もおこなわれており、外面は丁寧に調整している。ただし、肘木と組み合わせるための太柄穴がつくられていないので、未成品と考えられる。なお、外面には含みの下辺や斗尻の上辺など各部位に沿うようなかたちで墨線が3箇所認められることから、正確な設計のもとに製作された建築模型（雛形）であることがうかがえる。

建築模型

363は斗の未成品。半分が欠損しているが、平面形は正方形であろう。一辺の長さは3.9cmで、高さは2.8cmである。外面の調整は丁寧であるものの、含みや太柄穴は認められず、また斗繰の加工も直線的で粗雑な印象を与えるため、未成品と判断できる。含みが製作されていないため、斗の種類を明らかにすることは難しいが、362と法量が一致することから、巻斗の可能性が高いと考えられる。また、362と同じく建築模型（雛形）と考えて支障はないであろう。

なお、平城宮・京ではこれまでに第一次大極殿院東楼SB7802（『平城報告XI』）、内裏東方基幹排水路SD2700、東院園池SG5800（『平城報告IV』）、二条大路北側溝SD1250（『昭和56年度平城概報』）、二条大路上の南濠状遺構SD5100（『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』）から斗の模型（雛形）が出土している。

火鑽板

火鑽板 (364) 残存長7.5cm、幅2.0cm、厚さ1.0cmの板状を呈し、両面合わせて6箇所の火鑽白をもつ。火鑽白の直径は0.6cm程度であり、貫通しているものと貫通していないものがある。

燃えさし (372) 約100点が出土している。372は全長22.5cmの丸棒で、もっとも大きい。下端にのみ焼けた痕跡がある。上端付近には挟りが認められるので、何らかの製品を燃えさしに転用したことがわかる。そのほかの燃えさしには、一端のみに焼け焦げをもつ棒状品が多い。また、372のような明らかに転用品とわかるものは少なく、割り裂いただけの粗雑な棒状品がほとんどである。

vi 用途不明品 (図版147・148)

365～367は小型の板状品である。367は小さな円孔を2箇所にあけている。それぞれ何かを模倣した形代の可能性もあるが、詳細は不明である。369は上端を仕口のように四角く加工する。下端に向かって徐々に厚さを減じていく。373は平面杏仁形を呈する。上面および側面ともに丁寧にケズリを施している。全長12.1cm、最大幅5.9cmである。

374は断面方形の角材で、下端を削って突起状にする。上端小口面の2辺には墨線が残る。375は断面方形をなし、下端を突起状に削り出す。376は直径0.7cmの円孔を2箇所にもつ板材で、377は方形の柄孔をもつ。378には断面方形の木釘孔が3箇所で確認でき、いずれにも木釘が遺存する。380は幅4.5cm、厚さ0.4cmの板材に先端が尖った突起をもつ。全長18.2cm。379は厚さ0.8cmの板材の片側小口を円弧状に切り落として幅を減じ、反対の小口を斜めに切り落とす。その結果、中央部がもっとも幅広くなる。『木器集成図録 近畿古代篇』では、類似品を鳥形としている。379は上から順に頭部、胸部、尾部とみることもできるが、ここでは鳥形の可能性も考慮しつつ、類例の増加を待ちたい。

鳥形

D その他の遺構および包含層出土の木製品（図版149～153）

ここでは、前記以外の遺構・包含層から出土した木製品について述べる。

i 祭祀具（図版149）

齋串 (381～389) 9点を図示しており、381～388はすべて黒崎直氏による分類の齋串A¹⁵⁾である。すなわち、上端を一方向から斜めに切り落とし、下端を尖らす。387のみ上端の先端部を切り落としている。また、386は下端を一方向からの切断によって尖らす。389は上半部を欠損しているが、齋串の下半部と判断した。

齋串

人形 (391) 細長い角棒状を呈し、下端を方形状に幅広くする。上端が折損しているため確定できないが、組合せ人形の脚部の可能性がある。

刀子形 (390) 板状を呈し、上端を左右から削ることによって、切先を表現する。残存長20.7cm、厚さ0.4cmである。

ii 工具・服飾具ほか（図版149・150）

木針 (392) 全長14.0cmの扁平な棒状を呈し、上端付近に方形の針孔をもつ。上端は波形に加工し、下端は幅を減じてやや尖らす。上端付近で厚さ0.5cm、下端付近で厚さ0.2cmである。

壺金具 (398) 円環状の頭部をもち、円環部の復原内径は直径0.9cmである。従来、環頭釘と呼称されていた。茎部は一回り細く製作されており、断面方形である。頸部は面取りを施しているため、断面が六角形を呈する。残存長8.3cm。

壺金具

鉄製・銅製の壺金具が多数出土しており（『平城報告Ⅸ』ほか）、本例はそれらの「様」である可能性がある。ただし、鉄製・銅製壺金具の多数は、茎部と頸部に段差はなく、頸部の面取りなどもおこなわれていない簡素なものであることと比較すると、本例は丁寧に加工されている。

下駄 (397) 残存長21.0cm、残存幅7.6cmの連歯下駄で、平面形は小判形となる。前壺および後壺が一つ確認できる。前壺は楕円形であるが、これは鼻緒擦れの痕跡であろう。前壺は左右に偏らず中央に、後壺は後歯の内側に位置する。これらの位置関係から復原できる台の幅は7.6cm程度である。歯の幅は台の幅に等しく、断面形は台形をなす。全体的に腐食が激しい。

鼻緒擦れ

iii 食事具・容器（図版150・151）

匙 (393・394) 393は丸い身部と細長い柄をもち、整った形態をしている。身部は表面をやや内彎させ、裏面を削り丸く仕上げる。柄には面取りをおこなう。全長23.6cm、柄の厚さ0.5cm、身部の厚さ0.3cmである。394は下端部を欠損しているが、細長い身部をもつ匙であろう。柄は上端を斜めに切り落とす。残存長20.3cm。

杓子 (395・396) 395は下端部を丸く仕上げる細長い身部と短い柄をもつ。完形品で、全長29.2cmである。柄は厚さ0.9cmと分厚く、身部は先端に向かって薄くつくられている。396は羽子板状の身部をもつ杓子。ただし、身部の下端が斜めであるため、ややいびつな形状となる。身部は肩部がはっきりしているため柄との境目は明瞭であり、さらに身部を表裏両面から削ることで柄よりも薄く仕上げている。残存長15.5cm。

栓 (399) 全長6.8cmの円柱状を呈する。上半部は細かく縦方向に削ることで断面円形に仕上げ、下半部はさらにケズリを加えることで、若干細く仕上げる。下半部のケズリは幅広のため断面が多角形となる。壺や瓶など容器の栓であろう。

容器蓋 (400~402・406・407) 400~402は円形板で、外縁部を斜めに削る。400・401は片面から削って端部を鋭角に仕上げ、402は両面からケズリを加える。402は復原径21.8cmである。406・407は同じく円形板であるが、外縁部を斜めに切り落とさない。曲物底板の可能性はあるが、側面に釘孔はなく、また樺皮綴の孔も認められないことから、ここでは容器の蓋としておく。407は直径24.1cmである。

円形曲物 (403~405) 底板を3点図示した。403は側板と底板を木釘で結合する。404・405は残存部が少なく木釘孔をとどめないものの、底板上面に側板の圧痕が確認できないので、おそらく木釘で結合したと考えられる。復原径は403が19.2cm、404が14.4cm、405が17.6cmである。

iv その他・用途不明品 (図版152・153)

付札 (408~418) 長方形の板状を呈し、一端に左右からの切り込みをもつ。409・417は下端へ向かって幅を減じていき、417は下端を尖らす。409は下端が欠損しているが、残存部から判断すると、同様に下端を尖らすのであろう。414は下端小口を左右から斜めに切り落とすことで、尖らしている。これら3点は033型式に属する。410・412・416は下端を真一文字に切り落としており、032型式に属する。418は上下両端に切り込みをもつ031型式である。408・411・413・415は他端が欠損しており、全形が不明である。039型式。

轆轤挽き
残材

轆轤挽き残材 (421) 直径4.5cm、高さ6.4cmの円柱状をなす。側面は粗いケズリを施し、下端周辺は強く削ることによって細くすぼめている。上端小口面は轆轤挽きし、中央部には直径0.5cm、高さ0.5cm程度の乳頭状小突起が残る。小突起の頂部は折り取られたような痕跡をとどめる。下端小口面は平坦で、轆轤装着の圧痕跡や爪痕は確認できない。百万塔相輪部の製作にともなう轆轤挽き残材の可能性が指摘されている¹⁶⁾。

燃えさし SD12965から27点、SD12966から2点、SK12969から10点出土している。いずれも棒状を呈し、一端に焼け焦げをもつものが多い。

用途不明品

用途不明品 (419・420・422~432) 419は長方形の板状を呈し、下端に向かって厚さを減じる。上面には多数の加工痕が残る。420は外形が弧状をなし、外縁部を表裏両面から削って端部を鋭角にする。容器の蓋としては分厚すぎ、つくりも粗雑である。

422は長径2.1cmの円柱状で、下端を複数回斜めに削る。424は角棒品で、下半部を上面および左右の側面から削り込む。下面は上から下まで同じ平面である。425は全長13.2cmの板材で、直径0.8cmの孔を2箇所にあける。426は厚さ1.0cmの板材で、上端に仕口あるいは方孔をもち、下端は左右から削り込んで先端を尖らす。427は方形の孔をもつ板材である。428は断面方形の軸部の上端に、幅広い平面長方形の部分をもつ。上端に近い軸部にはわずかに切り込みがあり、そこだけ若干幅が狭くなっている。下端は折り取ったような痕跡を残す。残存長26.2cm。429~432は棒製品であり、432は下端を尖らす。

- 1) 黒崎 直1977「斎申考」(『古代研究』第10号(財)元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室)。
- 2) 國下多美樹ほか1993「長岡京跡左京第248次(7 ANESH-3 地区)～左京二条三坊三・四町(二条三坊一・二町)・東二坊大路・二条条間南小路(二条第一路)交差点、鶏冠井遺跡～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第37集(財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会。
- 3) 黒崎 直1998(奈良国立文化財研究所『トイレ遺構の総合的研究—発掘された古代・中世トイレ遺構の検討—』平成7年～9年度科学研究費補助金(基盤研究A)研究成果報告)。
- 4) 金子裕之1980「古代の木製模造品」(奈良国立文化財研究所『研究論集VI』奈良国立文化財研究所学報第38冊)。
- 5) 藤枝市教育委員会1981『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』。
- 6) 内山 昭1983『計算機歴史物語』岩波新書(黄版)233 岩波書店。
- 7) 山中章・清水みき1981「長岡京跡左京第51次(7 ANESH-4 地区)～左京二条二坊六町～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書第7集』向日市教育委員会)。
- 8) 金子裕之・肥塚隆保1995「長岡京発見の琴形」(奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報1995』)。
- 9) 注1を参照。
- 10) 小池伸彦1989「木箱と文書」(『木簡研究』第11号 木簡学会)。
- 11) 井上和人2007「物差」(『歴史考古学大辞典』吉川弘文館)。
- 12) 注6を参照。
- 13) 北條朝彦1998「古代の題箋軸—正倉院伝世品と地方官衙関連遺跡出土品—」(『古代中世史料学研究』上巻 吉川弘文館)。
- 14) 注1を参照。
- 15) 注1を参照。
- 16) 井上和人2001「木製小塔の製作残材—百万塔製作工房の在処について—」(奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要2001』)。

表 14 出土木製品一覧

番号	遺物名	遺構・層位	次数	大地区	小地区	備考
1	斎串	SB18500・二一抜取	337	6ABR	EE49	
2	斎串	SB18500・八一抜取	337	6ABR	ED48	
3	斎串	SB18500・ハ六抜取	337	6ABR	ED -	SX18512
4	斎串	SB18500・ロ六抜取	337	6ABR	EC57	
5	斎串	SB18500・ロ六抜取	337	6ABR	EC57	
6	斎串	SB18500・ハ六抜取	337	6ABR	ED -	SX18512
7	斎串	SB18500・イ四抜取	337	6ABR	EB54	
8	斎串	SB18500・八一抜取	337	6ABR	ED49	
9	斎串	SB18500・二四抜取	337	6ABR	EE54	
10	斎串	SB18500・二六抜取	337	6ABR	EE56	
11	斎串	SB18500・イ五抜取	337	6ABR	EB55	
12	斎串	SB18500・二一抜取	337	6ABR	EE48	
13	斎串	SB18500・二二抜取	337	6ABR	EE50	
14	斎串	SB18500・イ四抜取	337	6ABR	EB54	
15	斎串	SB18500・イ四抜取	337	6ABR	EA54	
16	斎串	SB18500・ハ六抜取	337	6ABR	ED56	
17	斎串	SB18500・イ二北外	337	6ABR	EB50	
18	斎串	SB18500・イ四掘方	337	6ABR	EB54	
19	斎串	SB18500・イ六掘方	337	6ABR	EA56	
20	斎串	SB18500・イ二抜取	337	6ABR	EB50	
21	斎串	SB18500・ハ六抜取	337	6ABR	ED56	
22	斎串	SB18500・二六抜取	337	6ABR	EE56	
23	斎串	SB18500・二四抜取	337	6ABR	EE54	
24	斎串	SB18500・二五抜取	337	6ABR	EE55	
25	斎串	SB18500・イ二抜取	337	6ABR	EB50	
26	斎串	SB18500・イ二抜取	337	6ABR	EB50	
27	斎串	SB18500・イ二抜取	337	6ABR	EB60	
28	斎串	SB18500・イ四抜取	337	6ABR	EB54	
29	斎串	SB18500・イ一抜取	337	6ABR	EA49	
30	斎串	SB18500・ハ六抜取	337	6ABR	ED56	
31	斎串	SB18500・イ四抜取	337	6ABR	EA54	
32	斎串	SB18500・イ四抜取	337	6ABR	EA54	
33	斎串	SB18500・ハ六抜取	337	6ABR	ED56	
34	斎串	SB18500・イ三抜取	337	6ABR	EA54	
35	斎串	SB18500・二二抜取	337	6ABR	EE50	
36	斎串	SB18500・二二抜取	337	6ABR	EE50	
37	斎串	SB18500・ハ六抜取	337	6ABR	ED56	
38	斎串	SB18500・二二抜取	337	6ABR	EB50	
39	斎串	SB18500・八一抜取	337	6ABR	ED49	
40	斎串	SB18500・二三抜取	337	6ABR	FE51	
41	斎串	SB18500・二三抜取	337	6ABR	EE52	
42	斎串	SB18500・二五抜取	337	6ABR	ED56	
43	斎串	SB18500・二一抜取	337	6ABR	EE49	
44	斎串	SB18500・ハ六抜取	337	6ABR	ED57	
45	斎串	SB18500・イ六掘方	337	6ABR	EB57	
46	斎串	SB18500・二四抜取	337	6ABR	EE54	
47	斎串	SB18500・二六抜取	337	6ABR	EE57	
48	斎串	SB18500・二一抜取	337	6ABR	EE49	

番号	遺物名	遺構・層位	次数	大地区	小地区	備考
49	斎串	SB18500・ニ二抜取	337	6ABR	EE50	
50	斎串	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
51	斎串	SB18500・イ二抜取	337	6ABR	EB50	
52	斎串	SB18500・イ二抜取	337	6ABR	ED50	
53	箸	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
54	箸	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
55	箸	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
56	箸	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE48	
57	箸	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE48	
58	箸	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
59	箸	SB18500・ニ二抜取	337	6ABR	EE51	
60	箸	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
61	箸	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
62	箸	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
63	箸	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
64	箸	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
65	箸	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
66	箸	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
67	箸	SB18500・イ二抜取	337	6ABR	EA50	
68	箸	SB18500・イ二抜取	337	6ABR	EA50	
69	箸	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
70	箸	SB18500・ニ二抜取	337	6ABR	EE51	
71	箸	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
72	箸	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
73	箸	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
74	箸	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
75	箸	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
76	箸	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
77	箸	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE48	
78	杓子	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	焼け焦げ
79	杓子	SB18500・ニ二抜取	337	6ABR	EE51	ベンガラ付着
80	曲物底板	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
81	曲物底板	SB18500・イ二抜取	337	6ABR	EB50	
82	曲物蓋板	SB18500・ニ四抜取	337	6ABR	EE53	柿渋塗付
83	折敷底板	SB18500・ニ二抜取	337	6ABR	EE51	
84	曲物底板	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
85	折敷底板	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
86	籌木	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
87	籌木	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
88	籌木	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
89	籌木	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
90	籌木	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
91	籌木	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
92	籌木	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
93	籌木	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
94	籌木	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
95	籌木	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
96	籌木	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	

第IV章 遺物

番号	遺物名	遺構・層位	次数	大地区	小地区	備考
97	籌木	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
98	籌木	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
99	籌木	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
100	籌木	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED48	
101	付札	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	EO49	
102	付札	SB18500・イ五抜取	337	6ABR	EA56	
103	付札	SB18500・イ四抜取	337	6ABR	EB54	
104	付札	SB18500・イ四抜取	337	6ABR	EB54	
105	付札	SB18500・イ五抜取	337	6ABR	EA55	
106	付札	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	EO49	
107	付札	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
108	付札	SB18500・イ五抜取	337	6ABR	EB55	
109	付札	SB18500・イ五抜取	337	6ABR	EA56	
110	琴柱	SB18500・イ二抜取	337	6ABR	EA50	
111	糸杵	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
112	不明	SB18500・イ六抜取	337	6ABR	EA56	
113	算木	SB18500・ニ二抜取	337	6ABR	EE51	
114	不明	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
115	不明	SB18500・イ六抜取	337	6ABR	EA57	
116	不明	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
117	不明	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE48	
118	不明	SB18500・イ四抜取	337	6ABR	EA54	
119	不明	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
120	不明	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
121	不明	SB18500・ニ五抜取	337	6ABR	EE55	
122	木錘	SB18500・ニ二抜取	337	6ABR	EE51	
123	木錘	SB18500・ニ三抜取	337	6ABR	EE52	
124	櫛巻き棒	SB18500・イ二抜取	337	6ABR	EB55	
125	刀子形	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
126	刀子形	SB18500・イ三抜取	337	6ABR	EB52	
127	刀形	SB18500・イ二抜取	337	6ABR	EA50	
128	不明	SB18500・イ一抜取	337	6ABR	EA48	
129	不明	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
130	不明	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
131	不明	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
132	不明	SB18500・ニ四抜取	337	6ABR	EE53	
133	不明	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE48	
134	不明	SB18500・イ六抜取	337	6ABR	EA57	
135	不明	SB18500・ハ六抜取	337	6ABR	ED56	
136	不明	SB18500・イ四掘方	337	6ABR	EA54	切断痕
137	不明	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
138	不明	SB18500・イ三掘方	337	6ABR	EB52	
139	不明	SB18500・ニ二抜取	337	6ABR	EE51	
140	不明	SB18500・ハ六抜取	337	6ABR	ED56	
141	不明	SB18500・イ三抜取	337	6ABR	EB52	
142	不明	SB18500・ニ四抜取	337	6ABR	EE53	
143	不明	SB18500・ニ二抜取	337	6ABR	EE51	切断痕
144	不明	SB18500・ニ二抜取	337	6ABR	EE51	切断痕

番号	遺物名	遺構・層位	次数	大地区	小地区	備考
145	不明	SB18500・ニ二抜取	337	6ABR	EE51	切断痕
146	不明	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
147	不明	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
148	不明	SB18500・ニ四抜取	337	6ABR	EE53	
149	不明	SB18500・ニ四抜取	337	6ABR	EE53	
150	不明	SB18500・イ一抜取	337	6ABR	EA49	
151	不明	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
152	不明	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
153	不明	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
154	不明	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED48	
155	不明	SB18500・ニ二抜取	337	6ABR	EA50	
156	不明	SB18500・イ二抜取	337	6ABR	EB51	158 と同一個体か
157	不明	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
158	不明	SB18500・イ二抜取	337	6ABR	EB50	156 と同一個体か
159	不明	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE48	
160	不明	SB18500・ニ三抜取	337	6ABR	EE52	
161	不明	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
162	不明	SB18500・ロ六抜取	337	6ABR	EC57	
163	不明	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
164	不明	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
165	不明	SB18500・イ二抜取	337	6ABR	EA51	
166	不明	SB18500・ハ一抜取	337	6ABR	ED49	
167	不明	SB18500・ニ一抜取	337	6ABR	EE49	
168	不明	SB18500・ニ五掘方	337	6ABR	EE55	
169	不明	SB18500・イ一抜取	337	6ABR	EA49	ベンガラ付着
170	不明	SB18500・イ四抜取	337	6ABR	EA54	
171	不明	SB18500・ニ五抜取	337	6ABR	EF55	
172	不明	SB18500・イ六抜取	337	6ABR	EA57	コウヤマキ
173	不明	SB18500・ニ四抜取	337	6ABR	EE53	ヒノキ
174	不明	SB18500・イ二抜取	337	6ABR	EB50	
175	杭	SB18500・ニ四抜取	337	6ABR	EE54	
176	杭	SB18500・ロ一抜取	337	6ABR	EC49	177 と同一個体か
177	杭	SB18500・ロ一抜取	337	6ABR	EC49	切断痕
178	杭	SB18500・ニ二抜取	337	6ABR	EE51	サカキ、切断痕
179	杭	SB18500・ニ二抜取	337	6ABR	EE51	サカキ
180	杭	SB18500・イ一抜取	337	6ABR	EA49	サカキ、切断痕
181	杭	SB18500・イ一抜取	337	6ABR	EA49	ツバキ
182	杭	SB18500・イ一抜取	337	6ABR	EA49	サカキ
183	馬形	SD3825C	315	6ACD	LS18-2	
184	鳥形	SD3825A	28	6ACC	FC22	
185	人形	SD3825C	316	6ACC	NH18	
186	鎌形	SD3825A	28	6ACC	FM22	
187	刀形	SD3825A	28	6ACC	FM22	
188	刀形	SD3825C	315	6ACD	LS18-5	
189	刀子形	SD3825BorC	28	6ACC	FG22	
190	斎串	SD3825A	316	6ACC	NI18	
191	百万塔	SD3825	28	6ACC	FE22	
192	琴柱	SD3825B	315	6ACD	LS18-3	

第IV章 遺物

番号	遺物名	遺構・層位	次数	大地区	小地区	備考
193	琴形	SD3825C	315	6ACD	LR18-1	墨書
194	簞子	SD3825C	316	6ACC	NH18	
195	糸杵	SD3825C	316	6ACC	NG18	
196	箱	SD3825A	315	6ACD	LQ18	
197	箱	SD3825C	315	6ACD	LR18-5	
198	箱	SD3825C	315	6ACD	LQ18-4	
199	物差	SD3825C	315	6ACD	LQ18-2	墨線
200	算木	SD3825A?	315	6ACD	LQ18	
201	工具の柄	SD3825C	316	6ACC	FM22	
202	工具の柄	SD3825BorC	28	6ACC	NG18	
203	錐の柄	SD3825C	315	6ACD	LT18-4	
204	刷毛の柄	SD3825A	315	6ACD	LS18-2	
205	篋	SD3825BorC	28	6ACC	FE22	
206	工具の柄	SD3825B	315	6ACD	LT18-3	
207	木針	SD3825C	316	6ACC	NJ18	
208	木針?	SD3825A	315	6ACD	LR18-3	
209	木針	SD3825B	315	6ACC	LS18-2	
210	木針	SD3825A	28	6ACD	FN22	
211	留針	SD3825BorC	28	6ACC	FG22	
212	留針	SD3825BorC	28	6ACC	FG22	
213	留針	SD3825	316	6ACC	NI18	
214	留針	SD3825A	28	6ACC	FO22	
215	留針	SD3825B	315	6ACD	LS18-3	
216	留針	SD3825	28	6ACC	FO22	
217	留針	SD3825A	28	6ACC	FC22	
218	横櫛	SD3825A	28	6ACC	NC49	黒漆塗り
219	横櫛	SD3825	28	6ACC	NC49	黒漆塗り
220	方頭大刀	SD3825A	28	6ACC	FM22	黒漆塗り
221	杓子	SD3825C	315	6ACD	LS18-1	
222	箸	SD3825B	315	6ACD	LS18-1	
223	箸	SD3825C	315	6ACD	LR18-2	
224	檜扇	SD3825BorC	28	6ACC	FG22	
225	杓子	SD3825A	316	6ACC	NH18	
226	漆器の蓋つまみ	SD3825B	315	6ACD	LQ18-3	黒漆塗り
227	漆器椀	SD3825BorC	28	6ACC	FL22	
228	容器蓋	SD3825B	315	6ACD	LS18-3	
229	容器蓋	SD3825C	316	6ACC	NI18	
230	曲物底板	SD3825C	315	6ACD	LS18-5	
231	曲物底板	SD3825BorC	28	6ACC	FG22	
232	曲物底板	SD3825A	316	6ACC	NI18	
233	曲物底板	SD3825A	316	6ACC	NI18	
234	曲物底板	SD3825A	28	6ACC	FG22	
235	曲物底板	SD3825B	315	6ACD	LQ18-3	
236	曲物底板	SD3825C	316	6ACC	NG18	
237	曲物底板	SD3825C	316	6ACC	NG18	
238	曲物底板	SD3825C	316	6ACC	NH18	
239	曲物底板	SD3825B	315	6ACD	LR18-6	
240	折敷底板	SD3825	28	6ACC	FK22	包含層の可能性

番号	遺物名	遺構・層位	次数	大地区	小地区	備考
241	折敷底板	SD3825C	315	6ACD	LR18	
242	付札	SD3825A	28	6ACC	FM22	
243	付札	SD3825C	316	6ACC	NG18	
244	付札	SD3825B	315	6ACD	LR18-4	
245	付札	SD3825B	315	6ACD	LS18-1	
246	付札	SD3825A	28	6ACC	FN22	
247	付札	SD3825C	315	6ACD	LS18-2	
248	付札	SD3825A	28	6ACC	FE22	
249	付札	SD3825C	316	6ACC	NH18	
250	付札	SD3825	28	6ACC	FF22	
251	付札	SD3825BorC	28	6ACC	FM22	
252	付札	SD3825BorC	28	6ACC	FM22	
253	付札	SD3825BorC	28	6ACC	FJ22	
254	付札	SD3825B	315	6ACD	LS18-1	
255	付札	SD3825C	315	6ACD	LT18-3	
256	不明	SD3825BorC	28	6ACC	FM22	
257	題箋軸	SD3825A	28	6ACC	FM22	
258	不明	SD3825C	316	6ACC	NG18	
259	工具の柄?	SD3825A	28	6ACC	FM22	
260	工具の柄?	SD3825B	315	6ACD	LR18-1	
261	不明	SD3825A	28	6ACC	FM22	
262	不明	SD3825A	28	6ACC	FH22	
263	不明	SD3825A	28	6ACC	FN22	
264	不明	SD3825A	28	6ACC	FN22	
265	不明	SD3825A	28	6ACC	FH22	
266	不明	SD3825C	28	6ACC	FF22	
267	不明	SD3825	28	6ACC	FF22	
268	不明	SD3825BorC	28	6ACC	FG22	
269	不明	SD3825BorC	28	6ACC	FG22	
270	不明	SD3825	28	6ACC	FE22	
271	不明	SD3825	28	6ACC	FE22	
272	不明	SD3825A?	315	6ACD	LT18	
273	不明	SD3825BorC	28	6ACC	FM22	
274	不明	SD3825C	316	6ACC	NG18	黒漆付着
275	不明	SD3825B	315	6ACD	LR18-3	
276	不明	SD3825B	315	6ACD	LS18-3	
277	不明	SD3825B	315	6ACD	LS18-1	
278	不明	SD3825A	28	6ACC	FH22	
279	斎串?	SD3825BorC	28	6ACC	FO22	
280	不明	SD3825C	315	6ACD	LT17-7	
281	不明	SD3825B	315	6ACD	LT18-1	
282	馬形	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐色屑層、墨書
283	琴柱	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	茶褐色粘質土
284	琴柱未製品	大極殿院西辺整地土下位	316	6ACC	NG11	木屑層
285	鳥形	大極殿院西辺整地土下位	316	6ACC	NK20	木屑層
286	組合せ人形	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐色屑層
287	留針	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色屑層
288	留針	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐色屑層

第IV章 遺物

番号	遺物名	遺構・層位	次数	大地区	小地区	備考
289	留針	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	茶褐粘質土
290	留針	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐粘質土
291	留針	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐粘質土
292	横櫛	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐粘質土、黒漆
293	斎串	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
294	斎串	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
295	斎串	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DL28	暗茶褐粘質土
296	斎串	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層
297	斎串	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐木屑層
298	木針	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層
299	墨刺し	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	灰褐粘質土、墨
300	漆篋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層、黒漆
301	楔	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	ZZ	不明
302	楔	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	炭層
303	楔	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	N28	茶褐木屑層
304	楔	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層
305	横槌	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
306	杓子	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層
307	杓子	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層
308	杓子	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
309	杓子	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐粘質土
310	杓子	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐木屑層
311	杓子	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層
312	杓子	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐木屑層
313	匙	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層
314	匙	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層
315	匙	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
316	匙	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層
317	匙	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	茶褐木屑層
318	栓	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
319	栓	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
320	糸梓梓木	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層
321	箸	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
322	箸	大極殿院西辺整地土下位	316	6ACC	NG11	木屑層
323	箸	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	茶褐粘質土
324	箸	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
325	箸	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	茶褐粘質土
326	箸	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	茶褐木屑層
327	箸	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	茶褐木屑層
328	刳物皿	大極殿院西辺整地土下位	316	6ACC	NG12	木屑層
329	刳物片口鉢	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
330	刳物椀	大極殿院西辺整地土下位	316	6ACC	NG12	暗褐灰粘土
331	漆器蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐木屑層、黒漆
332	漆器椀	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層、黒漆
333	漆器椀	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層、黒漆
334	漆器椀	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層、黒漆
335	容器蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
336	容器蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層

番号	遺物名	遺構・層位	次数	大地区	小地区	備考
337	曲物底板	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層
338	蓋	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	茶褐粘質土
339	曲物底板	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
340	曲物底板	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	炭層
341	折敷底板	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐木屑層
342	付札	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層
343	付札	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	炭層
344	付札	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
345	付札	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐木屑層
346	付札	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層
347	付札	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	茶褐粘質土、焦げ
348	付札	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
349	付札	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	炭層
350	付札	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層
351	付札	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
352	付札	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
353	付札	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
354	付札	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
355	付札	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
356	付札	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
357	付札	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐木屑層
358	付札	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層
359	籌木	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
360	籌木	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
361	籌木	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層
362	卷斗雛型	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
363	卷斗雛型	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層、墨線
364	火鑽板	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐粘質土、焦げ
365	不明	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	ZZ	不明
366	不明	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
367	不明	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	炭層
368	不明	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層
369	不明	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐粘質土
370	不明	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐粘質土
371	不明	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層
372	燃えさし	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐粘質土、焦げ
373	不明	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DL27	暗茶褐粘質土
374	不明	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層、墨線
375	不明	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐粘質土
376	不明	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN27	茶褐木屑層
377	不明	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DN28	茶褐木屑層
378	不明	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM27	茶褐粘質土
379	鳥形?	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	DM28	茶褐木屑層
380	鳥形?	大極殿院西辺整地土下位	177	6ACC	SN27	茶褐木屑層
381	斎串	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP22	SG8190の可能性あり
382	斎串	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP25	SG8190の可能性あり
383	斎串	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP22	SG8190の可能性あり
384	斎串	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP22	SG8190の可能性あり

第IV章 遺物

番号	遺物名	遺構・層位	次数	大地区	小地区	備考
385	斎串	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP20	SG8190の可能性あり
386	斎串	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DO22	SG8190の可能性あり
387	斎串	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP22	SG8190の可能性あり
388	斎串	東西溝 SD12968	177	6ACC	DN27	
389	斎串?	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP22	SG8190の可能性あり
390	刀子形	東西溝 SD3839	28	6ACC	FF35	
391	組合せ人形	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP25	SG8190の可能性あり
392	木針	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP22	SG8190の可能性あり
393	匙	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP25	
394	匙	土坑 SK3821	28	6ACC	FG22	
395	杓子	土坑 SK3833	28	6ACC	FF27	
396	杓子	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DN22	SG8190の可能性あり
397	下駄	包含層	28	6ACC	FK21	SD3825の可能性あり
398	壺金具の様	東西溝 SD12965	316	6ACC	NI20	
399	栓	東西溝 SD12966A	177	6ACC	DM28	
400	容器蓋	東西溝 SD12968	177	6ACC	DN28	
401	容器蓋	包含層	316	6ACC	NH23	
402	容器蓋	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP25	SG8190の可能性あり
403	曲物底板	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DO20	SG8190の可能性あり
404	曲物底板	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP22	SG8190の可能性あり
405	曲物底板	土坑 SK12969	177	6ACC	DN28	
406	曲物底板	土坑 SK3821	28	6ACC	FF23	
407	容器蓋	土坑 SK12969	177	6ACC	DN28	
408	付札	土坑 SK12969	177	6ACC	DN28	
409	付札	東西溝 SD12965	316	6ACC	NJ20	
410	付札	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP25	SG8190の可能性あり
411	付札	土坑 SK12969	177	6ACC	DN27	
412	付札	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP22	SG8190の可能性あり
413	付札	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP22	SG8190の可能性あり
414	付札	包含層	316	6ACC	NK18	
415	付札	土坑 SK12969	177	6ACC	DN28	
416	付札	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP25	SG8190の可能性あり
417	付札	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP22	SG8190の可能性あり
418	付札	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP25	SG8190の可能性あり
419	不明	土坑 SK3833	28	6ACC	FF27	
420	不明	包含層	28	6ACC	FG22	
421	轆轤挽き残材	南北溝 SD18220	315	6ACC	LR22	
422	不明	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP22	SG8190の可能性あり
423	不明	土坑 SK3821	28	6ACC	FG22	
424	不明	包含層	316	6ACC	NL17	
425	不明	包含層	316	6ACC	NO13	
426	不明	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP22	SG8190の可能性あり
427	不明	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP22	SG8190の可能性あり
428	不明	大極殿院西辺整地土下位	92	6ACC	DP22	SG8190の可能性あり
429	不明	東西溝 3839	28	6ACC	FF37	
430	不明	東西溝 3839	28	6ACC	FF37	
431	不明	東西溝 3839	28	6ACC	FF37	
432	不明	土坑 SK3833	28	6ACC	FF28	

5 金属製品・石製品・銭貨

A 金属製品 (図版154・155)

i 銅製品 (図版154)

人形 1。ほぼ完形で、全長11.9cm、幅0.6cmである。厚さ0.2mmの薄い銅板を細長く裁断して製作している。上端から1.9cmと6.6cmの2箇所それぞれ両側縁に、「V」字形の切り込みを入れて頭部・胴部・脚部を表現する。また、下端にも同様の切り込みを入れることによって足を表現している。これらの切り込みには、「V」字の片側の切断痕が表裏両面に強く残る。つまり鑿で切り込みを入れたのではなく、鋏などの鉄製工具によって切断している。なお、顔の表現はない。第28次調査のSD3825A出土。無腕式に属する¹⁾。

銅製人形

笠鞋 2。舟形でわずかに反りをもつ。一部に鍍金が残る。

ii 鉄製品 (図版154・155)

扉軸受金具 3。円筒状を呈する鋳造品。上端へ向かってやや直径が狭まるようである。外面には縦位の突帯が認められ、その横には円形の小孔がつけられている。下端の復原径は、内法で9.8cmである。第316次調査のNI22地区出土。

扉軸受金具

当資料の類例は、本例を含めて、平城宮・京で8例が確認されている(表15、図92)。いずれも円筒状を呈し、縦位の突帯を有する。完形品がないため、この突帯の数は不明であるが、図92-8のように残存率2分の1程度で突帯が1箇所しか認められないこと、円筒形という対称的な形状を考慮すると、突帯が対称の位置に2箇所あるとする復原が妥当であろう。また、内法で直径を計測すると(表15)、いずれも破片資料であるため復原値ではあるが、上端が7.9~9.7cm、下端が8.3~9.8cmである。ほとんどの資料では上端の直径の方がわずかに小さくなっている。高さは、5.2~6.1cmの範囲内におさまる。

従来、明確な根拠が示されないまま、車軸受金具と想定されてきたが(奈文研1974)、その後、扉の軸孔を補強する扉軸受金具の可能性も新たに指摘されていた。近年では、扉板・闕・唐居

表15 平城宮・京出土の扉軸受金具一覧

番号	次数	出土遺構	出土層位	内法径 (cm)		高さ (cm)	厚さ (cm)	小孔
				上端	下端			
1	32		溝2砂	8.4	9.0	5.2	0.8~0.9	
2	274	SD4951	灰褐砂	8.7	9.0	5.8	0.7~1.0	
3	133	東西大溝	灰色粘土	7.9	8.5	5.4	0.8~0.9	
4	316		褐灰砂質土	不明	9.8	5.4+	0.7	有
5	149	SD920	—	8.2	8.3	5.7	0.8~1.0	
6	57	SD650	溝砂	8.6	9.0	5.5	0.6~0.9	有
7	57		溝粗砂	9.2	9.6	6.1	0.7~0.8	
8	57	SD650	溝2砂	9.7	9.4	5.9	0.6~1.1	
9	37	東西溝	—	—	—	7.1+	0.5	
10	57	SD650	溝1砂	—	—	4.8+	0.6	有

(番号は図92に対応)

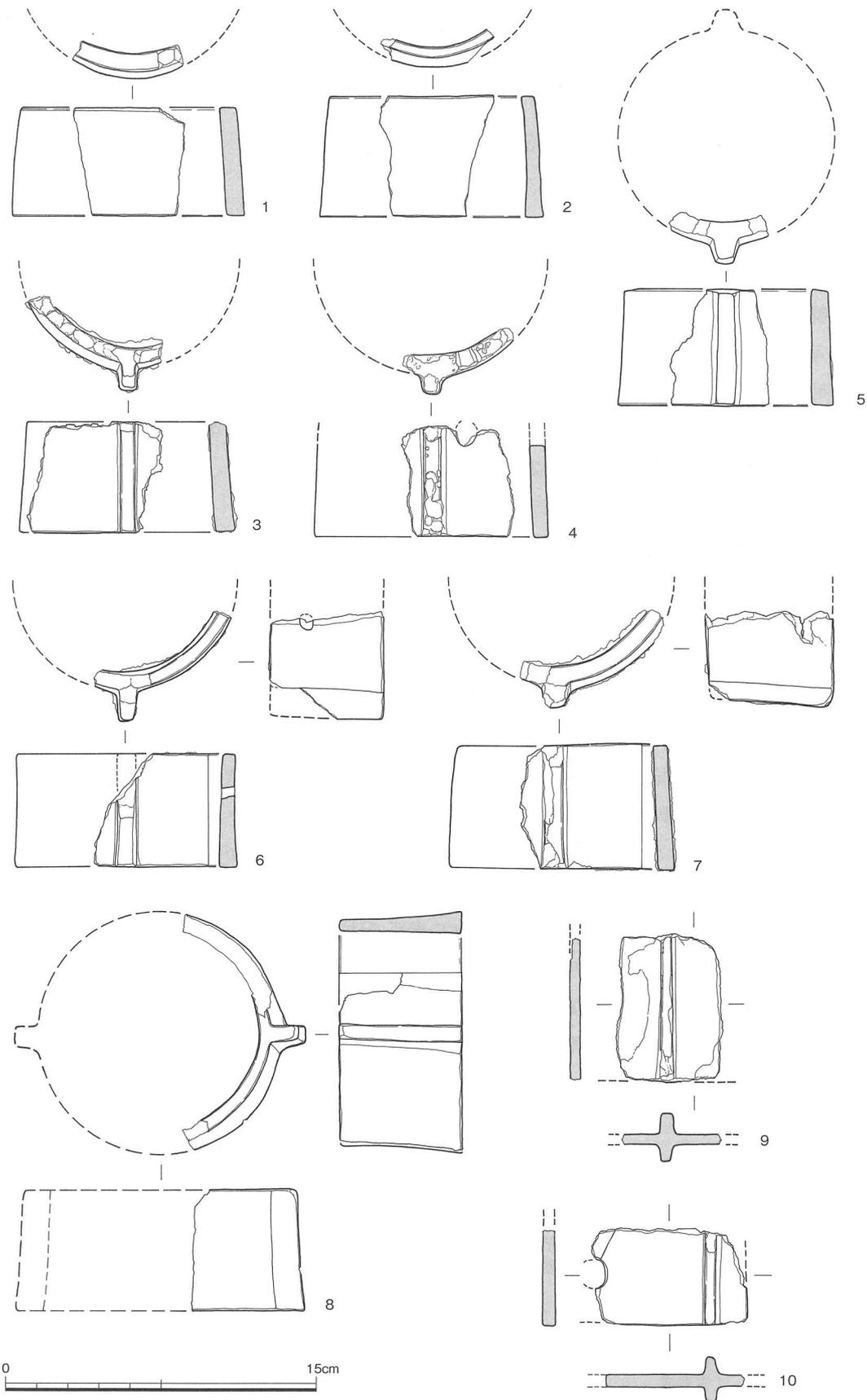


図92 平城宮・京出土の扉軸受金具と関連鉄製品

敷といった建築部材の出土事例や中国・韓国における建築部材との共伴事例などから、扉軸受金具の可能性が高いとされている²⁾。

そうであれば、3に認められる縦位の突帯は、金具が回転しないように固定を補強する機能をもつとも考えられる。ただし、出土した闕や唐居敷には円形の軸孔が存在することから、縦位の突帯をもたない個体も確実に存在していただろう。金具の直径(内径)は最大径が9 cm前後となるが、藤原京から出土した扉板軸や闕の軸孔の直径と比較して、この数値は大きい。すなわち、このことは扉板の軸の直径に差異があることを示しており、扉の大きさの違いを反映している可能性がある。さらにいえば、この差異が時期もしくは都城内の位置に起因しているかもしれない。なお、すでに指摘されているように³⁾、闕や唐居敷に嵌め込む機能を想定すれば、直径の大きな方が上にあたると考えるのが妥当であろう。

また、図92-9・10のような資料も一括して、同様の金具とされることもあった。しかしながら、図92-9・10は板状を呈していること、突帯が表裏両面に認められることなど、いずれの機能を想定するにせよ、上述の遺物との差異は大きい。

服飾具・調度具 4は鉄製帯留金具の裏板。5は鉄製の引き手金具。

釘・鋳 6は青銅飾付き鉄釘。半球形の饅頭金物と8 mm角の鑄鉄の足をつける。7は1.2 cm角の脚部に2.2 cm角の頭部をもつ同一規格の釘が8本束状に固着したもの。8は円頭鉄釘。9～12は折頭鉄釘。13～18は方頭釘。19は鉄釘の脚部。20～21は鉄鋳。

B 鍛冶・鑄造関連土製品 (図版156・157)

鞆羽口(1～11)は出土点数が少なく、また明確な遺構にとまなう例も少ないが、炉覆(12～18)と埴塙(19)が平安時代の炉SX14207から出土している(詳細はp.98を参照)。

鞆羽口 13点出土しており、そのうち12点を図化した(1～11)。包含層からの出土品も含まれており、なおかつ出土地点も異なるので帰属時期の特定は難しく、一律に扱うことはできないが、ここではいくつかの特徴や製作技法を確認する(図93)。外形の判明する個体は、すべて直線的で先端部に向かって幾分細くなる円筒形を呈する。通風孔の内面は一様に平滑で、その直径は2.4～3.3 cmであり1個体内での変化はほとんどない。くわえて、11の内面に長軸方向

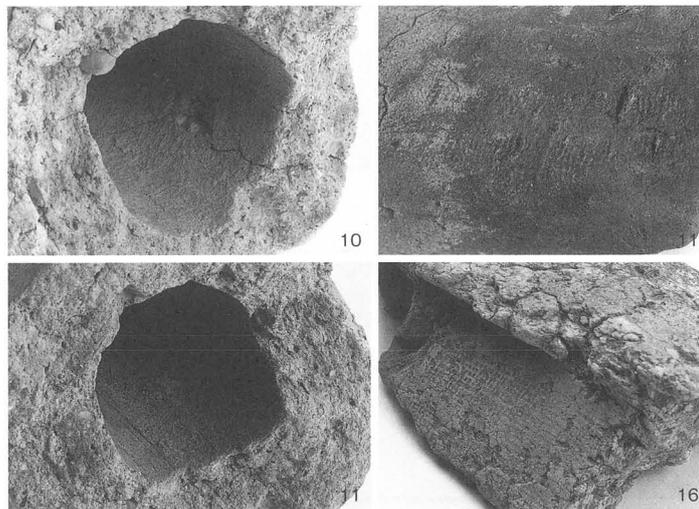


図93 鞆羽口・炉覆の細部写真

の擦痕が認められることや内面に粘土の接合痕がみられないことから、芯棒に粘土を巻きつけて製作したのではなく、むしろ粘土塊を棒で刺し貫いて通風孔をあけたようにも観察される。外面調整は長軸方向にナデをおこない平滑に仕上げる個体(10)、長軸方向にナデをおこなうが稜線を残す個体(11)、長軸方向に細い条線をもつ個体(8)があ

羽口の製作技法

る。8の痕跡は、簀状に細い棒を連ねたもので、外表を包んだ際に生じたものと理解されている（『藤原宮報告IV』）。11の外面には布圧痕が認められ、作業台の上に布を敷いていたと考えられる。また、被熱の範囲から装着角度が推定できる。

胎土には砂粒を多く含み、スサを混入する個体（2・4～6・11）と含まない個体（1・3・7・～10）とがある。なお、先端部に付着している鋳滓はすべて鉄滓のようである。

出土地点と層位は、1が第315次調査のIQ22地区南北溝、2が第315次調査のLR17地区包含層、3が第177次調査のDM28地区包含層、4が第177次調査のDN27地区炭層、5が第295次調査のIG66地区包含層、6が第295次調査のIG67地区包含層、7・8が第316次調査のNG20地区包含層、9が第177次調査のDN27地区茶褐色木屑層、10が第177次調査DN28区茶褐色粘質土、11が316次調査のNL18地区包含層である。

炉覆 第217次調査・HH62地区の炉SX14207から出土しており、図化可能な破片は7点である（12～18）。いずれもスサ混じりの胎土で、内外面ともにナデ調整が認められる。破片であるため外形を復原することは困難であるが、円筒状の本体に板状部が取り付けようである。この板状部が被熱していることから、炉内の熱を遮蔽する炉覆のような構造物と推測できよう。なお、製作時の痕跡として、16には布圧痕が認められる（図93）。

埴 埴 19は、QH62地区（第217次調査）の炉SX14207から出土。残存率4分の1程度の破片で、直径15.9cmに復原できる。注口の有無は不明であるが、外形は椀形を呈し底は平らである。器壁は底部が1.2cmと薄く、口縁部付近は2.3cmとかなり厚い。胎土はスサ混じりで、砂粒を多く含む。内面には薄く鉄滓が付着し、口縁部ではそれが一部外面にまでおよんでいる。

鉄 滓 20は、6 ACC地区のNK18地区から出土した椀形鉄滓。2分の1程度が残存しており、長軸径10cm・短軸径8cmの楕円形に復原できる。底部が平坦な椀形を呈する。一部に木炭が付着している。このほか、炉SX14207の周辺からもごく少量出土している。

C 石製品（図版158）

確実に奈良時代のものといえる石製品は用途不明の2点（7・8）だけである。砥石は包含層から出土したものが多く、時期比定が困難である。打製石鏃（図94-1～3）は縄文～弥生時代に属する資料であろう。

砥 石 砥石 1～6。1は泥岩製。第217次調査の包含層出土。2は流紋岩製。第295次調査IG66地区の南北溝出土。3は流紋岩製。第315次調査LT18地区のSD3825C出土。4は平面長方形で、板状を呈する。小口面には線状痕が認められる。泥岩製。第92次調査のDP22地区の西辺整地土下位もしくは佐紀池SG8190出土。5は断面方形の棒状をなす。黒母雲片岩製。第92次調査・DP24地区の西辺整地土下位もしくは佐紀池SG8190出土。6は流紋岩製。第295次調査のⅢ期バラス出土。

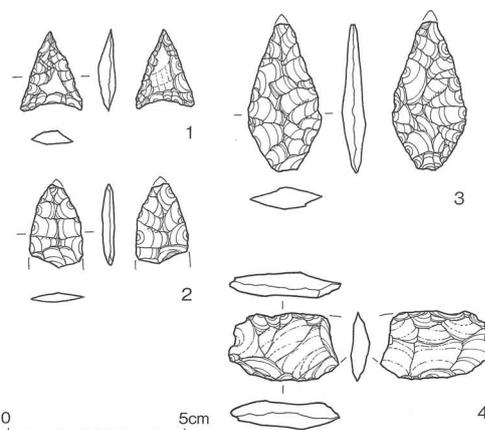


図94 第一次大極殿院地区出土石器

不明石製品 7および8は平滑な面をもつが、用途不明の石製品。いずれも西楼SB18500の掘立柱抜取穴に打ち割られて捨て込まれていた。7は流紋岩製。第337次調査・EC49地区の柱抜取穴ロー出土。8は安山岩製。EB49地区の抜取穴ロー出土。

楔形石器 図94-4。ほぼ矩形の器形をみせ、両端に潰れ痕をとどめている。サヌカイト製。第295次調査のIO51地区橙色粘土出土。

打製石鏃 図94の1～3。いずれもサヌカイト製の打製石鏃。1は凹基式。第217次調査・HP11地区東西溝1出土。2は石鏃の先端部。第337次調査・EC55地区の整地土出土。3は凸基式。第296次調査・DE77地区の黄緑色土出土。縄文時代～弥生時代に属するものであろう。

D 銭貨 (図版159)

銭貨は合計20点出土した(表16)。このうち、奈良時代のものは和同開珎A1点と神功開寶F1点のみである。ともにSD3825から出土した。それ以外は中・近世のものである。

和同開珎
神功開寶

表 16 第一次大極殿院地区出土銭貨一覧

番号	銭種	重量 W (g)	外縁外径 G (mm)	外縁内径 N (mm)	内郭外径 g (mm)	内郭内径 n (mm)	外縁厚 T (mm)	文字面厚 t (mm)
1	和同開珎	2.44	24.645	20.785	7.700	6.570	1.180	0.445
2	神功開寶	3.02	24.875	19.210	7.690	6.150	2.013	1.013
3	祥符元寶	3.39	25.300	18.090	7.180	5.550	1.395	0.980
4	元祐通寶	3.77	23.980	19.135	8.805	6.180	1.375	1.215
5	景祐元寶	2.35	24.450	17.700	7.190	6.090	1.408	0.995
6	皇宋通寶	3.07	24.035			6.015	1.035	0.988
7	熙寧元寶	3.48	24.425	19.950		6.950	1.603	0.890
8	元豊通寶	1.77					1.210	0.760
9	元豊通寶	1.43					1.460	1.103
10	元豊通寶	3.10	23.540	18.115	7.840	6.265	1.408	0.683
11	元豊通寶	2.04	23.015	18.060	8.365	6.445	1.180	1.218
12	聖宋元寶	2.43	24.250	19.260	7.630	6.210	1.253	1.045
13	宣和通寶	3.39	24.135	19.465	6.690	5.880	1.285	0.840
14	永樂通寶	1.55	25.480	20.250	6.860	5.220	1.420	0.447
15	寛永通寶	1.76	25.070	19.000	7.370	5.645	1.260	0.638
16	寛永通寶	2.24	24.125	19.135	7.005	5.480	1.105	0.813
17	寛永通寶	2.03	24.640	19.210	7.530	5.695	1.130	0.940
18	寛永通寶	1.70	23.280	18.125	7.325	6.075	1.238	0.738
19	寛永通寶	1.53	24.380	19.100	6.780	5.490	1.188	0.705
20	不明銭	1.40					1.300	1.250

※銭貨の各部測点については下のとおりである。

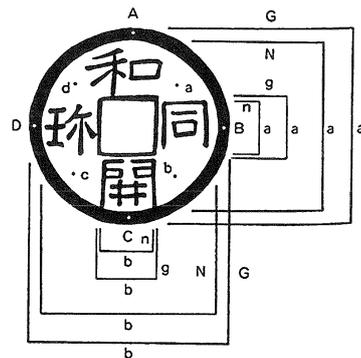
$$\text{外縁外径 } G = \frac{Ga+Gb}{2}, \quad \text{外縁内径 } N = \frac{Na+Nb}{2},$$

$$\text{内郭外径 } g = \frac{ga+gb}{2}, \quad \text{内郭内径 } n = \frac{na+nb}{2},$$

$$\text{外縁厚 } T = \frac{A+B+C+D}{4}, \quad \text{文字面厚 } t = \frac{a+b+c+d}{4},$$

空欄：破損のため計測不能

- 1) 臼杵 勲1997「金属製人形について」(奈良国立文化財研究所『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』)。
- 2) 山田隆文編2010『奈良時代の匠たち—大寺建立の考古学—』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館。
- 3) 注2を参照。



6 植物遺体

植物遺体は、西楼SB18500と基幹排水路SD3825から多く出土した(表17)。

SB18500柱抜取穴出土の植物遺体のうちでは、点数が多いのはクリの果皮(20点)、ウリ類の種子(53点)、カキノキの種子(13点)、ヒョウタン類の果皮(99点)、ウメ核(28点)、モモ核(25点)である。これ以外の可食種子にはオニグルミ核、ヒメグルミ核、チョウセンゴヨウの種子、食物残渣 ナツメ核などがあり、いずれも食物残渣とみられる。SD3825では、可食種子としてクリ堅果、ウリ類、ウメ核、モモ核、スモモ核、カキノキ種子、オニグルミ核などが出土しており、とくにウリ類の種子が多い。これらもやはり食物残渣であろう。一方、奈良時代における周辺の植生を反映する種実類としては、カシの果皮および堅果などや、マツなどが出土している。

表 17 第一次大極殿院地区出土植物遺体一覧

遺構番号	和名	部位	個数	遺構番号	和名	部位	個数
SB18500	モミ属	雄花	1	SB18500	クリ	堅果	1
SB18500	ゴキツル	種子	1	SB18500	シイ属	堅果	2
SB18500	ノブドウ	種子	7	SB18500	ウリ類	種子	8
SB18500	ムクノキ	核	1	SB18500	オニグルミ	核	3
SB18500	トウガン	種子	3	SB18500	センダン	種子	1
SB18500	クリ	果皮	20	SB18500	ウメ	核	2
SB18500	スイカ	種子	1	SB18500	モモ	核	1
SB18500	アオツツラフジ	果皮	2	SD3825A	ウリ類	種子	10
SB18500	ハシバミ	果皮	1	SD3825A	ヒョウタン類	果皮	2
SB18500	ハシバミ	堅果	2	SD3825A	ナシ	種子	2
SB18500	ウリ類	種子	53	SD3825B	ツブラジイ	果皮	4
SB18500	カキノキ	種子	13	SD3825B	ウリ類	種子	10
SB18500	ブナ科	果皮	1	SD3825B	ブナ科	果皮	4
SB18500	モチノキ属	果実	2	SD3825B	センダン	種子	2
SB18500	モチノキ属	種子	2	SD3825B	センダン	核	12
SB18500	オニグルミ	核	5	SD3825B	マツ属複雑管束亜属	毬果	1
SB18500	ヒメグルミ	核	4	SD3825B	ウメ	核	2
SB18500	ヒョウタン類	果皮	99	SD3825B	モモ	核	1
SB18500	ヒョウタン類	種子	1	SD3825B	スモモ	核	2
SB18500	センダン	核	1	SD3825B	ナシ	種子	2
SB18500	ヤマモモ	核	3	SD3825B	コナラ属	果皮	2
SB18500	イネ	穎	1	SD3825B	イチイガシ	堅果	1
SB18500	チョウセンゴヨウ	種子	1	SD3825B	アラカシ	堅果	3
SB18500	マツ属複雑管束亜属	雄花	2	SD3825B	コナラ属アカガシ亜属	果皮	5
SB18500	マツ属複雑管束亜属	鱗片	1	SD3825B	コナラ属コナラ亜属	幼果	1
SB18500	マツ属複雑管束亜属	毬果	4	SD3825B	キカラスウリ	種子	1
SB18500	タデ属サナエタデ節	果実	1	SD3825B	ガマズミ属	核	2
SB18500	ウメ	核	28	SD3825C	ハシバミ	堅果	1
SB18500	モモ	核	25	SD3825C	ウリ類	種子	11
SB18500	スモモ	核	2	SD3825C	カキノキ	種子	1
SB18500	サクラ属サクラ節	核	3	SD3825C	オニグルミ	核	3
SB18500	ナシ	種子	3	SD3825C	センダン	種子	8
SB18500	コナラ属	果皮	2	SD3825C	センダン	核	5
SB18500	クスギ	幼果	1	SD3825C	マツ属複雑管束亜属	鱗片	2
SB18500	イチイガシ	堅果	1	SD3825C	マツ属複雑管束亜属	毬果	3
SB18500	アラカシ	果皮	1	SD3825C	マツ属複雑管束亜属	毬果	1
SB18500	コナラ属アカガシ亜属	幼果	2	SD3825C	モモ	核	4
SB18500	キンボウゲ科	果実	2	SD3825C	モモ	核	3
SB18500	カラスザンショウ	種子	1	SD3825C	アラカシ	堅果	1
SB18500	サンショウ	種子	3	SD3825C	コナラ属アカガシ亜属	果皮	1
SB18500	ナツメ	核	2	SD3825C	コナラ属アカガシ亜属	殻斗	5
SB18500	ムクノキ	核	1				

7 木 樋

I期の築地回廊基壇に埋設されている木樋は、東面回廊で検出した24本についてすでに『平城報告Ⅺ』で報告しており、掘立柱塀の柱を転用し、内部を削り抜いて木樋としていたことが判明している。今回の報告対象範囲では、西面回廊中央部と西南隅部（第192・296次調査）で東面回廊にはほぼ対応する位置で同様の木樋を確認した。

木樋を確認した遺構は、SD17960、SD17961B、SD17962、SD17962B、SD17963Bで、検出した木樋は合計12本である（表18）。樹種はすべてコウヤマキである。そのうち3本は取り上げず現地で保存した。ここでは、調査区の外側まで延長していた2本（5・10）と、取り上げたが保存状態の悪い1本（2）を除いた9本について報告する。

コウヤマキ

木樋は、断面形状が丸形のものと同角形のものがある。角形の木樋は、SD17960出土の2本（3・4）である。3は、長さ500cm、幅32cm、高さ14cm、底面の厚さは5cm。中央付近に2箇所、2箇所の穴が認められるが、腐蝕が著しく仕口穴かどうかは明確ではない。2穴の心々距離は48cm。4は、長さ501cm、幅34cm、高さ20cm、底面の厚さ5cm。同じく仕口穴は確認できなかった。以上の2本は、外部側面に手斧による加工痕が残る。使用する手斧は蛤刃で、木目方向に対して直角に打つ。

仕 口 穴

断面が丸形の木樋は、SD13403、SD17961B、SD17962、およびSD17963Bから出土した。そのうち、1・8・9・11・12の5本は同種の仕口が残存する。仕口穴は、上端より全長の3分の2程度まで合計7箇所ある。下から2つ目以外は、心々で3尺等間で並び、下から2つ目の穴は、一番下の仕口穴から心々距離で約20cmの位置にあげられている。仕口穴の寸法は、幅8～11cm、成10～14cm。下から6つ目と7つ目の仕口穴の間に、これらと直交する方向の貫穴があげられている。貫穴の寸法は、残存状態の良いもので幅約13cm、成40cm。一番下の仕口穴より下方は材の表面が腐食によりやせていることから、掘立柱として地中に入っていた部分と考えられる。下端には運搬時に使用したと思われる棧穴が2つある。1は、SD13403出土。長さ664cm、幅40cm。保存状態があまりよくなく、一番下の仕口穴と貫穴は欠損する。現地保存。8・9はSD17962出土。8は、長さ644cm、幅35～39cm。下から2つの仕口穴と貫穴は欠損。9は、長さ674cm、幅31～41cm。下2つの仕口穴はつながっている。11・12はSD17963B出土。この2本は他の材と比べて保存状態が良い。11はほぼ全長をとどめていると思われ、長さ716cm、直径40～45cm。他が一方の仕口穴の面を底面とするのと異なり、この材では貫穴の面を底面とするため、両側面に仕口穴が位置する。両面とも同位置に仕口が設けられていることから、開口部にあたらぬ、壁面の柱であったと考えられる。

棧 穴

以上の5本は、『平城報告Ⅺ』で報告した木樋と同様の特徴をもっており、本来同じ施設で使用されていた柱材であろう。ただし、『平城報告Ⅺ』で報告した木樋のうち2点には番付と思われる文字が刻まれていたが、今回調査した木樋には刻書や墨書などの文字は確認できなかった。

断面が丸形のものうち、上記以外の2本（6・7）はこれらと異なる特徴をもつ。いずれもSD17961Bで使用していた木樋である。6は、長さ494cm、直径28～32cmで、中央より下

に合計4つの仕口穴が残存する。仕口穴は成17~23cm、幅7~9cmで、下から1・2番目と3・4番目の心々距離は2尺、2・3番目の心々距離は4尺である。仕口穴の内部にはノミによる加工痕が残る。7は、長さ608cm、直径34~36cmで、下端に2つの棧穴と上部3分の2に合計5つの仕口穴がある。仕口穴の寸法は幅13cm、成27~33cm、各穴の心々距離は80~87cmで、ほぼ等間である。

これらの部材の節の多少をみると、6・7は無節ないしはほぼ無節である。3・4は数個程度の節がある。それ以外は節が多く見受けられ、特に9と11はその中でもきわめて多い。これらの部材が仮に一連の柱列に位置していたとすると、材としての品質差が柱によって顕著であったといえる。

以上の木樋には、柱として使用していたときの痕跡のほか、木樋として転用されたときの痕跡も多数残る。仕口穴が残る部分は埋木でふさいでおり、残存状態の良い2本(11・12)では、埋木がそのまま残存していた。また、この2本には、上面に乗る板状の蓋を受ける棧のあたり痕跡が残存するほか、木樋どうしを連結するための相欠き状の仕口が造り出されている。すなわち、連結する一方の外側を細く削り、他方は内側を広く削りはめ込むように加工している。連結の向きを見ると、東側の部材が内側になるように連結しており、木樋を通る排水は東から西、すなわち大極殿院の内から外に排水するように造られていたことがわかる。木樋上部をふさぐ蓋は、9や12など一部木樋の内部に落ち込んでいるものが確認できた程度であった。木樋への二次加工にあたっては、角形も丸形も底面の材厚が大きく、上面にむけて厚みを小さくしており、木樋としての耐久性を考慮していたと考えられる。

蓋

耐久性

表 18 第一次大極殿院地区西半出土木樋一覧

番号	調査回数	遺構番号	検出位置	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	断面形状	備考	図版
1	192	SD13403		664	40	28	丸形	現地保存	
2	296	SD17960B	東から1	248				保存状態不良、3つに割れ	
3	296		東から2	500	32	14	角形		160
4	296		東から3	501	34	32	角形		160
5	296		東から4						現地保存
6	296	SD17961B	北から1	494	28~32	22	丸形		160
7	296		北から2	608	34~36	32	丸形		161
8	296	SD17962	東から1	644	35~39	21	丸形		161
9	296		東から2	674	31~41	15~31	丸形		161
10	296		東から3					現地保存	
11	296	SD17963B	東から1	756	40~45	32~40	丸形		162
12	296		東から2	695	32~37	30~40	丸形		162